



オクトーバーレイン



アリスブルーⅡ

にしのまさみ

October Rain (オクトーバーレイン)

”Alice Blue II ” (アリスブルー)
— 第二部 —

文 にしのまさみ

最初の寄港地ロックウェルは、まだテラ・リーズの領内で銀河の中心域方面の辺境惑星の衛星都市だ。と言っても惑星の軌道上にある人工衛星ではなく惑星プリスの五つ有る月の一つで直径が一万一千八十キロメートルとテラ型の惑星より幾分小さい星だ。

この為に、テラ・リーズの主要な星系の一つとは数えられていないが、約八百万人が暮らしている。

また、この星には他の辺境星域国との貿易のために大きな宇宙港と共和国軍の駐屯基地が存在する。その為か、出入国のチェックは厳重である。特に不審な点が有れば軌道上のステーションに係留と為る。

そして、普通ならこのノルマンディーもロックウェルの宇宙ドックに係留されるはずなのだが、今回のミュラの一件でロックウェルの軌道上にある宇宙ステーションの外部に係留されている。

それも初めの予定より四日長い六日停泊となった。その間、船内では、もう一度不審物の検閲がなされた、特に貨物関係が厳重に。おかげで幾つかの貨物が没収され四人ほどの人間が逮捕されたそうだ。

この度の、ノルマンディーの航海は大幅に変更を余儀なくされた。というよりキャンセルされたと言うのが正しかったのだろう。ミュラの事件で船の船体にかかなりの内部構造的ダメージを受けたのだった。詳しくは聞かなかったが、電源ラインの断絶が十二カ所、換気ダクトの損傷五カ所、使用不能になった客室二十三室使えそうだが修理の必要な部屋十四室、破損隔壁二十七カ所、船体に破孔が一カ所に使用不能のエレベーター二機、警備員の死傷者数四十三名、他乗客二十名死亡負傷者三名という惨憺たる惨状で母港に戻るようになったのだった。

破損隔壁の多さは、船内で対艦ビームを発射したためである。

ただこの事件で、デュパルク船長の懲罰動議委員会は設けられるだろうが、処罰は不問か軽いだらうと提督は話していた。

それから、ランカスター公爵への暗殺計画は変更を余儀なくされるだろう、当事者にとってはミュラの暴走は想定外だったに違いない。それから、多くの乗客がロックウェルから別の船に乗り換えて目的地に向かう手筈を船会社と旅行会社が整えたのだから、帰りの航行は定期便扱いとなると聞かされていた。

ホルスト達は、会社が新たに用意したチャーター便で目的地に向かうことになった。

そして、彼アビンと教授達も別便で目的地に向かうこととなった。

ただ、それぞれの船便が到着まで五日程は、このノルマンディーをホテル代わりに滞在することになっていた。それは、時間とともにこの船での人の数は減って行くことになる。それに応じて、暗殺者達が事を起こそうとまだ画策しているのであれば、その間であるに違いない。

そういえば、ホルストが人が一番減る五日目が一番危険だと言っていた。

だから、船を変わるまでは気を抜くなとも言ってくれた。

そして、最終的な手続きが終わったのか船のブルーデッキから哨戒艇が離れていくのを見て取れた。

「アビンさん」。

とデッキロビーの長椅子に腰掛けていたシオンが彼に声を掛けてきた。

アビンはその声に釣られてシオンの方に振り返ると、その娘はミュラの幼獣を膝元に乗せて頭を撫でていた。

「俺に何か」。

「はい。ミッチェルさんはどうなりました」。
「ああ、手続きには少し手間取ったが、明後日にはテラン行きの船で家族の元に帰れる
そうさ。でも、しばらくは様子を見る為に入院が必要と言うことでシュナイダーさんが
手続きを取ってくれたよ」。

「シュナイダーさんもご一緒してくれたんですか」。
このように尋ねるのは、シオンはミュラの幼獣の手続きの為にミッチェルさんの見送
りに行けなかったのだ。

「ああ、そうでないと色々聞かれても何と応えて良いか解らないからね」。
「そうですね。いったん死亡報告のなされた人物が、生きて下船するとなると、色々
聞かれかねませんから」。

と言いながらシオンは少し含み笑いをしていた。
アビンは、何となくそれが気になったが、聞く気にはなれずあえてこう言った。
「それにしても、手続きは、驚くほど手短にすんだのが信じられないくらいだった。こ
っちは何を聞かれるか冷や冷や物だっただけだからな」。
「それは大変でしたね。でも、伯父様の報告書が加えられていましたから問題ないとわ
たしは思っていました」。

「えっ？もしかして提督の」。
アビンは、驚いてシオンに聞き返した。
「はい、昨日アンが、伯父様に呼ばれてミッチェルさん書類を作っていましたから、
心配ないと思いました。アビンさんは伯父様から何もお聞きしなかったんですか」。

「ああ、」
と答えながら、あの提督が気を回してくれたんだとアビンは思って感謝した。

「そう、何も仰らなかつたのですね」。
とシオンは、話しながら少し考える素振りをしてからアビンに告げた。
「この事で、気を悪くされないでくださいねアビンさん。伯父様としては気恥ずかしか
かつたんでしょう。たぶん．．．」。

「そうかな」。
「きっとそうだと思います」。
とシオンは微笑みながらアビンに確約するように言った。
アビンとしては、そんな事はどうでもよかった。彼自身あの状況下で助かったのが不
思議に思えて仕方がなかつたし、一時期の正義感だけで突っ走ってしまった自分の未熟
さを今回の事で痛感させられていたからだ。次からは慎重に行動しようと思っただけ
かせながら、事が順調に運んだ事に満足を感じている自分に気が付き気恥ずかしさと落
胆が彼を襲って、思わずため息を付く。

そんなアビンを見つめながらシオンは、何故かその様子を察する素振りを見せない。

しばらくして、シオンが口を開く。
「アビンさん、人には決められた境界があります」。
その言葉にアビンは、自分の様子を見て慰めてくれているのかと、応えた。

「それは、どういう意味なんだい。シオン」。
シオンは表情を変えずに、かといってアビンの言葉に答えるわけでもない話を続ける

。「それは、物理的な境界と、真の意味での境界とがあります。たとえばです。人は宇宙
服や宇宙船無しでは、宇宙空間にはいられません。もっと厳密に言えば、人はテラタイ
プの星の地上でしか生きてゆけません。しかし、人の思いは、今日のどんな速い宇宙船
よりも速く飛びます。人の寿命は、限られています。思いは遙かに、過去と未来を行
き交います。その思いが、本来の人間の境界を物理的にですが、広げました。でも本
質は、遠い昔から何も変わっていません。生きるための境界は、定められたままです」

。「何が言いたいんだ。シオン？」。
「アビンさんが、探している物が、その思いをむやみに実体化させる物でしたらどう
でしょうか。人の限界を超える物となりませんか。それも際限なく」。

「人を越える物ある意味で夢だな」。
「夢で片づくのでしょうか。本来その物が持っている限界を超えると普通は壊れてしま
います。人の場合は．．．」。

「人の場合は？」。
「その物の滅びか。または、もう人では有りません」。

「神と云うことか」。

とアビンは、何故か皮肉っぽくシオンに尋ねた。

「神ですか。そう呼ぶ人もいるかも知れませんが、単なる怪物または悪魔にしか成らないでしょう」。

「どうしてそう言える」。

とアビンは強く言い張った。

「人の限界を超えているからです。際限なく実体化する思いを制御するには、心が限界を越えるのに耐えうるかと言うことです。限界をわきまえない思いと心が、心を潰してしまい制御が効かなくなり、最後には、その両方とも崩壊してしまいます。残念ですが、真の意味での限界をわきまえていないと、自滅するだけです」。

「自滅か、とするとアリスブルーの話が本当だとしても、世に出ない方がいい物だと言うことか」。

「そうです。やはり人は、定まった限界に留まった方が十分機能するように出来ていますから」。

「その物言い、何か人間は作られた物という言い方だな」。

とアビンは、少し窘めるような言い方で話した。

その言葉に対して、シオンは、至って真面目な表情で応えた。

「はい。わたしはそう信じてます」。

アビンは、シオンの答えを聞いて思った。彼女はいくら頭がいいと言っても、世間知らずのお嬢さんじゃないか、この歳になっても神様がいると言わんばかりの言動からしてそうだ。ただ自分の都合で神を持ち出す胡散臭い奴らと比べて見れば、遙かにまともだと。

それでアビンは、シオンに尋ねた。

「すると、シオン、君は神の存在を信じているんだね」。

「はい」。

とシオンは答える。

その答えにアビンは、そんなところかと思いつつあえて尋ねた。

「ところで、真の意味での限界とはどういうことか聞かせてくれないか」。

すると、シオンは、少し目を閉じて考えをまとめてから話し始めた。

「アビンさん。わたしは、人の真の意味での限界について知る人は限られていると思っています。なぜなら、失敗や間違いが起こるのは、それを知らないからではないでしょうか。そして、失敗や間違いを犯したことの無い人をアビンさんご存知ですか」。

「いや、知らない」。

アビンはそう答えるしか無かった。

その言葉を聞いてシオンは

「アビンさん、簡単な話として私たちの知る物事には、ほぼ何でも限界があります。違いますか」

と尋ねる。

「まあ、だいたいな」。

「ですが、思いだけは限界がない程に膨らみます。それが間違った物であってもです。際限なく、たとえば今から一億年後とか簡単に言葉で出てきます。しかし、実際問題として私たちの誰もその時まで生きていてその時の出来事を見ることは出来ません。そうですよね」。

「そうだな」。

とアビンは何となく答えた。

「そして、過去についても同様に、恐竜が闊歩していた時代のことに、思いをはせることが出来ます」。

「そうだね」。

アビンは尋ねられもしないのに答える。

「この様に際限なく思いを馳せるものを、実体化されるならどうでしょう。どれ程のエネルギーと計算が必要でしょうか」。

とシオンは彼に尋ねた。

「オーバーフロー」

とアビンは即答した。

「そうです。そこなんです。普通科学では、天文学的に低い確率や量の結果が出た場合

「それはあり得ないと判断します」
とシヨンはアビンに詰め寄りながら言う。
「ということは」
とアビンはできの悪い学生のように尋ねた。
その言葉を聞いて、シヨンは一瞬、目を丸くしてこのできの悪い学生に、さらに教えなければならぬ事を知った先生のような顔をしてから
「ですから、もともと思いを实体化させるのは無理なのです。夢物語なのです。ですが、それに掛けた努力には敬服いたします。それに、その誘いの言葉が、本来の目的を隠す隠れ蓑であり、協力者を集めるのに役だったのかも知れません」
と彼に論説するのだった。
「いや、そこまではするのかな」
とアビンは迂闊に口を挟んだ。
「目的のためには、手段を選ばない人はいくらでもいます。自分の保身のために、無関係の人を巻き込むことさえ平気なひともいますから、分かりません。ましてその首謀者も一緒に消えてしまったのですから、今は憶測でしかありませんが」。
その様に言ってから
「本来の目的は何だったのかももう誰も知りません。もし記録があるとしたらセシリアの中にあるかも知れません」
とシヨンは少し残念そうに言った。
そこでアビンは尋ねてみた。
「なら、セシリアに聞いてみればいいのでは、君の質問には答える様になっているのだろう」。
「情報があるのなら答えるでしょう」。
「と言うことは無いのか」。
「そうみたいです」。
「それなら、この件はそこまでだと言うことだな。他を当たった方がいい事になるな」
。そうアビンは言葉を締めくくりこの、荒唐無稽な話を終わりにした。
「ところで、保護したり処分したりという言葉からやはり誰か人物の呼称かもしれないな」。
「それを探すととなるとかなり大変です。元々色を表す言葉ですし」。
「まあ、気長に考えることにするよ。こうなっては、向こうも期待してないようだし」
とアビンは開き直って言った。
「随分な言い方ですね」
とシヨンはあきれて言った。
「だって、そうだろうこの混乱の状況にどう探せばいいんだ。それに主な目的は公爵の安全、それ以外は二次的な物だ」。
そう言ってアビンは自己弁護をするのであった。
「そこまで仰るのなら、もう言いませんが、知ってます」。
シヨンが含みを持たせながら言った。
「何をだ」。
アビンは気になって尋ねる。
「この船が、帰港しなければならなくなった原因です」。
「それは、ミュラのせいで甚大な被害を受けたんだらう」。
その言葉を聞いてシヨンは少し落胆するように言った。
「あのですね。ミュラの被害もさることながら、誰かさんが撃ったスマート弾がメイン配線ダクトを粉碎したのが決め手だったと、ホルストさんが話していましたが、聞かれていますか？」。
その話はアビンには初耳だった。というのもホルスト達が彼の活躍で事態の收拾が出来たのに、彼の労に水を差さないようこの件は知らせなかったのだ。
そして、彼は告げられた言葉に自分のミスの大きさを悟って愕然とするのであった。
シヨンは、そんな彼の様子を見て哀れに思い、彼の顔をのぞき込み励ますのであった
。「大丈夫ですよ。成功したんですから多少の被害は保険で何とかかなりますし、アビンさんの責任は問われなと思います。事が露見すると面子がつぶれる管理職が多いですから。今回の件はミュラの被害で決着するのですから」。

アビンは彼女が励ましてくれるのはありがたかったが、失態は失態で良心が咎めていたのだった。

するとシヨンはそっと彼の手を握って励ます、そのためシヨンの頭が彼の肩に近づいて来て、ほのかなラベンダーの香りがした。それは疲れた彼に眠りに誘うように彼の感覚を麻痺させるのだった。

その時、彼はシヨンが目を閉じて、彼の肩に寄りかかっていることに気がついた。そして彼女の膝ではスターンが、これまた幸せそうに寝ているのだった。

それは、ほほえましい光景であったが、同時にこの様子を提督に見られたならただでは済まないだろう、そこでアビンは言った。

「なあ、シヨン。眠いのだったら部屋に戻ったらいいぞ、この状態を提督に見られたなら何と言いつついたらいいか困るんだが」。

しかし、シヨンは依然寄りかかったまま、彼の言葉に気を止めた様子はない感じの響きの言葉を返してきた。

「そうですね、伯父様が、ご覧になられたならただでは、済まないでしょうね」。

「それなら、」。

と短く言ってから、知り合いの誰かに見られていないか、辺りを見回しながら、この状態を何とかしなければと思った。

すると、そんな二人に声を掛けてきた人物がいた。

「よっ！お二人さん。デートのところ悪いが、野暮用に付き合ってくれないか」。

その声の主は、ホルストだった。彼は、二人が居るブルーデッキのロビーの入り口辺りに、彼の部下と判る二人を従えて立っていた。

その声に反応するようにシヨンは、顔を上げて彼らの方を見て言った。

「ホルストさん。どうかされましたか」。

「いや、ちょっと来てもらいたいんだ。お嬢さん達と提督も来て居るんでね」。

「伯父様達も？それと？」。

「そう、美緒お嬢さんとアンとも来ている。提督だけでよかったんだが、付いて来てしまったんでね」。

とホルストは、如何にもウンザリとばかりの素振りをして見せながら話した。

「でも、俺達に何のようなんだ」。

とアビンは思い当たる節がないために尋ねた。

「君には、直接は関係ないが、シヨンには関係あるんでね。ただ、君には立ち会い人に成ってもらいたくて提督がお呼びだ」。

「何の立ち会いなんです」。

「来れば解る」。

とホルストは素っ気なく答えた。

「そうですか。解りました行きましょう」。

とアビンが応えるとシヨンが彼に合わせるように言った。

「仕方がありませんね。ホルストさん私たちが案内して下さいますか」。

「ああ、来てくれ」。

とホルストは手招きをして二人を誘った。

後部格納デッキ

後部格納デッキ

アビンとシヨンがホルストに連れて来られたのは後部格納デッキだった。そして二人は、その中の大きなコンテナの所まで案内された。すると、そこには、すでに何人かの人物が集まっていた。

アビン達が近付くのが分かると直ぐこちらを振り返ったのは、ホルストの部下のヘンツェだった。

彼は、こちらに気が付くなり直ぐに近づいて来て「お待ちしていました。チーフ。それからファーナビー博士」と言った。

アビンは、彼の言葉の後が気になった。博士とはどういう意味だ。シヨンのことを指して言っているのかと考えていると当の本人が、彼の疑問をうち消すように言った。「ヘンツェさん。わたしの事をその様には、お呼びにならないで下さい。あまり気持ちが悪いものではありませんから、いつものように言っていただいた方が、まだましです」。

「いや、そうもいかないんだ。今日はお目付役がいるもんでさ」。

とヘンツェは答えながら提督の方に目配せをした。

「そうね、仕方がないようですね。お嬢さんでかまいませんからそうして頂けますか」

とシヨンは、仕方がなさそうな素振りで彼に、言った。

「いいのかい？」。

ヘンツェは少し躊躇しながら聞き返した。

「今日のところは」。

とシヨンは、念を押すように彼に言った。

「分かった。お嬢さん、こちらに来てもらえませんか」。

とヘンツェは、妙に丁寧にシヨンに言った。

「どの様なご用件ですか。ミスターヘンツェ」。

「チーフ！まだお嬢さんには話してなかったんですか」。

ヘンツェが困った様子でアビンの傍らにいたホルストに尋ねる。

「やあ、悪いつい忘れてしまった」。

「どういう事なんですか、ホルストさん」。

とシヨンが後ろを振り返りながら尋ねた。

「コンテナのキーロックを解除してもらおうと思ってね。一応、会社には今回の事件のことを報告して、キーロックの解除の許可を取ってあるから好きにしてくださいよ」

「本当によろしいのですか」。

「ああ」。

「それでは、どのコンテナから始めますか」。

「いや、やって欲しいのはあのでかいコンテナだけだ」。

と言いながらホルストは、格納デッキのほぼ中央にある巨大なコンテナを指し示す。

その指す方を見ると、まるで、この格納デッキを二分する壁のような巨大なコンテナがそびえ立っていた。そして、その下に幾人かの人だけが出ていた。その中にはこれから起きようとする事柄に期待を弾ませている者達も居た、早い話が野次馬である。

その人数は、ざっと十人ほどだった。

「これはこれは、ギャラリーの多いこと」。

と、シヨンは少し皮肉混じりに言った。

「そう言いなさんな。船長としては確かめておきたいらしいそうさ」。

ホルストの言葉を聞いて初めて船長のデュパルクが、同席している事に気が付いた。

「早速だが初めてもらえないかな」。

とデュパルクは、苛立たしげに言う。

その催促に、顔色一つ変えずにホルストはシヨンに

「済まないが、始めてもらえないかな」

と言った。

「解りました。ホルストさん。やってみましょう」。

と言うとシオンは、コンテナの方に歩み寄って行った。その途中でアンにスターンを預ける。

そして、人混みをかき分けてコンテナのコントロールパネル前に立ってみんなの方に振り返って言った。

「ホルストさん。これは、ベンツ博士のコンテナですね。と言うことは、ハードウェアプロテクトが、かっかっていますよね。これから先には、進めないのですよ」。

「解っている。だからこれを使ってくれ」。

と言って手に持っていた小さなケースをシオンに向かって放り投げた。

それを受け取ると、シオンは、直ぐにケースを開けて言った。

「これは、ブロックボードではありませんか。どうしてこれが此処に有るんですか」。

「よく見てくれ、それは、会社の許可を取って、データを送ってもらってさっき作ったばかりの物だ」。

「俺にかかれば、そんな物はチョロイ物さ」。

と得意げにメシアンが言った。

「解りました。使用させていただきます」。

と言うなりシオンは、直ちにコントロールパネルを開けて、ブロックボードを開いているブロックに差ししてから、コントロールパネルを閉じてキーボードを操作し始めた。

そして、しばらく操作するとシオンの手が止まり、彼らの方を振り向いて言った。

「きおつけて下さい。今コンテナが開きます」。

その言葉が終わるか終わらないうちに、コンテナの扉が手前に、ゆっくりと倒れる様に降り始めた。

次第にあきらかに、なってゆく内部の様子に、居合わせる人々から、驚きの声が漏れ始めた。そして遂に、扉が完全に降りると、突然パツと明るく内部が照らされその全容が明らかになった。

すると、提督が「これは何と」と言葉を漏らした。

それと同時に、中に入ろうとヘンツェが、小走りに駆け上って行ったが、それは直ぐにシオンの言葉で止められた。

「ストップ！！ミスターヘンツェ！中に入ると自爆しますよ」。

「どういう事なんだ」。

とホルストがシオンに近づきながら尋ねる。

「最後の部分に、サブセットウイルスが仕込まれているからです」。

シオンはホルストが近づくのを確認するように眺めながら行った。

「サブセットウイルスか、厄介だな」。

「はい」。

と応えながらシオンはコントロールパネルのディスプレイの表示をホルストに指し示した。

そこには、起爆装置が作動する警告の表示が現れていた。

「脅しではないかな」。

とホルストが尋ねるとシオンは、すかさずこう答えた。

「それはないと思います。中に有るのは、軍用実験用に改造されたりトウル3ですから、まず、最悪の場合の対処設定がなされているはずですから」。

「そうか、そうするとこのまま閉じるしかないと言う訳か、まあ、此方としては中が確認できただけで良しと出来ると思うんだが、お偉いさんはどうかな」。

と言いながらホルストは、シオンの顔色をうかがった。

「わたしは、解除できませんが」。

とそれとなくシオンはホルストに答えた。

それを聞いてから、ホルストは、ギャラリーに向かってと、いうよりもたぶん提督と船長に向かって「この後どうします。続けますか」と叫んだ。

すると、提督も船長も続けてくれるよう答えてきた。

そこで、ホルストはシオンに「仕方がない。お偉いさんの御希望だ。続けてくれ」と指示を出した。

「解りました。ホルストさん」。

と言うとシオンは再び操作を開始した。

そして、しばらくすると突然コントロールパネルから音声が発せられた。
「やあ！お嬢さん。元気してるかな？」。
その声がすると同時に、シヨンが握り拳を振り上げた。とっさにホルストが、腕を掴んでそれを制して言った。
「おっと、その条件反射は、止してもらおうまだそのコントローラには用が有るからな」。
それに応えるように、コントローラから声がした。
「いや、この前は悪かった。つい出来心だ。でも、可愛い胸だったな、儂は久しぶりに良い思いをさせてもらった」。
その言葉を聞いたアビンは、ベンツ博士と言う人物はセクハラ親父かとの思いが浮かんでいた。
すると美緒が、傍らに来て、まるで彼の考えを知っているかの様に「ベンツ博士って無類のロリコンだと言う話なの、そして、シヨンに初めて会ったときに、最初にした事が、胸を触った事だそうなの。当然、シヨンもビックリして博士をぶったらしいんだけど、そのとき博士は、顎を骨折したそうよ。自業自得というところかしら。でも、ぶっしたのはホルストさんという話も有るんですけど、どちらにしても優秀な方だそうですが、困った性格な人だそうですね」と話してくれた。
ところで、コントローラからの声は続いていた。
「儂の作ったプロテクトを解除できるのは、そう沢山は居ないから、たぶんアリスちゃんかやるんじゃないかと思っていたんだが、どう？楽しんでくれたかな」。
アビンがシヨンを見ると握り拳を振り上げたまま動かないのが見えた。
「さて、もうプロテクトを解除されたことだし、後は儂がチュウニングしたりトリトル3については、テキストを見てくれ、それではまた、会うときまで.....おっと忘れる処だった。この機に愛称を付けておいたスティングレーだ。良い名だろう、儂は気にいっとる」。
と言って音声は途絶えた。
するとホルストは、やれやれとシヨンの腕から手を離して言った。
「まったく。何を考えているんだ、人騒がせな親父め」。
彼の声を聞いてからシヨンは、ホルストにスティングレーにつてひとこと言った。
「これは、わたしが一ヶ月前に、最終テストをしました」。
「えっ、そんな話は、聞いてないぞ」。
と彼が、話すとシヨンは「それは極秘でしたから、メンテナンスもベンツ博士と彼の助手達で行いましたから」と答える。
「すると、これについて知っているのは、どの位いるんだ？」。
「そうですね。開発者とわたしとテストに立ち会ったパルミラ軍の高官の方たち、それとグラント将軍と彼の側近達です」。
「どうも胡散臭い代物だな」。
「確かに、そういえると思います」。
「だとすると、どうした物かな」。
「開けてしまった物は、拝見させていただきますよう」。
「相変わらずだな」。
「どういたしまして」。
とシヨンとホルストは二人だけしか聞き取れない声で話し合っていたので、他の者達は何かあったのかと気をやんでいた。
そんな者達の気持ちを察してかホルストは振り向いて伝えた。
「もう大丈夫だ、コンテナの中に入っても心配はいらない」。
その言葉を聞くや彼の部下数人がコンテナの中に駆け上がった。
すると彼らは口々に「これは凄い」と驚嘆の声を上げた。中でもメシアンは「これは、大気圏内の使用となっているが、宇宙空間でも大丈夫なように強化してある。基本は大気圏内だが、装備は両方が準備してある」と観察できたことを口走っていた。
そこへ、ヘンツェが仲間を呼び寄せるように言った。
「おい、これは、普通の装備じゃないぞ。浮遊砲台ブランカじゃないか」。
その声にコンテナの中に入っていた者達はヘンツェのいる処に集まって口々に「何でこんなやばい物を」と言う。
その騒ぎに取り残されている人たちは、何のことか理解できず、美緒などはまた、マニアックな連中が騒いでいると思っていた。

そんな騒ぎを余所に、デュパルクは提督に「箱の中身は解ったから儂はこれで失礼する。詳しいことは、後で知らせてもらえまいか」

と言う。

すると提督は

「船長は大変だな。分かったからお前は、自分の仕事に励んでくれ」

と応じた。

「じゃな、よろしく」。

と言ってデュパルクは後部格納デッキを出て行った。

そんなデュパルクを提督は、見送りながら言った。

「とんだ荷物を背負い込んだものだ、儂があいつの立場だったらとっくにこんな物は外に放り出していただろうに」。

その言葉をアビンは確かにその方が危険は回避される率が高いかも知れないが、時と場合による、それで、提督は本当にそう思っているのだろうか。いや、たぶん船長の立場で言ったにすぎないと思った。

そんな風にアビンが考えていると提督が彼に何か言っていた。ハツとして何とか思い出そうと務めながら隣を見ると、くすくす笑う美緒が、目に入った。そこで、自分について何やら冗談めいたことが言われたのだろうと判断して応えた。

「それについては、よく分かりません」。

とどうにでも取れる答えを試してみた。

すると、提督は笑いながら「そうだな、確かに、君には、この機体の美しさが理解できないようだ。まあ、覚えておくといい、高い性能の兵器ほど美しいと言うことを」

。「そうですか」。

とアビンは、何とか辻褄が合ってホツとして応えた。

その時

「おい。アビン君ちょっと来てくれ」。

とホルストが彼を呼んだ。

「何ですか。ホルストさん」。

彼は、そう答えながらホルストとシヨンが立っている処に向かった。

「すまんアビン君。シヨンを見ていてくれ」。

と彼が二人のもとに着くとホルストが言った。

「良いですけど、提督がどう見なすでしょうか」。

とアビンが応えると「気にするな。じゃ、頼む」と言うなりコンテナの中に入っていた。

そんな風に置いてけぼりを食ってしまったアビンは、横目でチラッとシヨンを見てからどうしたものかと、考えあぐねる。すると、シヨンが口を開いて言った。

「アビンさん。わたしの側がご不満ですか」。

凶星である。アビンはそう思ったが、口には出せずに

「こんな可愛い娘の側に、俺の様な野暮な奴がいて良いのかなと思っただけだ」

と言って誤魔化した。まんざら嘘ではなかった。

「それは、ご冗談を止していただいただけませんか。可愛い娘は、そこの提督の側に立っているアンや、美緒さんのことを指して使う物ですよ。わたしなどは.....」。

と言ったところでシヨンは、口を閉じて顔を背けてしまった。

その閉じられていた口は、一瞬だが唇を噛み締めているように見えたが、今となつては、向こうに向いてしまつてアビンには確認出来そうもなかった。それに、無理に確認しよう物なら有らぬ疑いを掛けられそうで、気が引けていた。

そこで、彼は「気を悪くしたのなら謝る。すまん」とシヨンに謝罪する。

ところが、シヨンは

「そんなことで、謝罪する必要は有りませんから。ただ、.....」

と彼を気遣って応える。

しかし、アビンは、シヨンの言葉を濁したことが気になって「ただ？」と尋ねるように繰り返す。

「何でもありませんから」

と応えてシヨンは彼の方に笑みをたたえながら振り返る。

そして「何でもありませんから」と言葉を付け加えて彼の疑問をうち消そうとする。

それが、アビンにとってはやはり不自然に感じられたが、それ以上尋ねる気にはならなかった。それは、どことなく苦痛で引きつっているかに見えたションの笑顔を見てしまったからだ。

「いや、すまん」と言いながらアビンは、自分が何を言っているんだと、自分に腹が立っていた。そして、同時に、シヨンには人に言いたくても言えない事情が有るのではとの思いが過ぎっていた。

それ以上アビンには、話す事が出来なくなってしまった。

少しの間、気まずい雰囲気は二人の間に流れたが、ドシン！という鈍い音でそれは破られた。

アビンは、音がした方を見ると、コンテナの中で何かが倒れたのだろう二人の男が、何かを起こそうと屈み込んでいた。だが、すぐに二人とも首を振りながら立ち上がった。どうも、二人では起き上がることができないのだろう、側にいた二人を手真似して呼んで、再び起き上がらそうと、その物に手を掛けていた。

その様子を彼が、見ていると、いつの間にかホルストは、側に戻ったのか口を開いてシヨンに言った。

「シヨン、すまん。ヘンツェがどじった。対艦爆雷を倒してしまった。安全装置が外れていないか、確認してくれ」。

「解りました。少しお待ちを」。

と言うとシヨンは、コントローラのキーボードを操作して確認を始めた。そして、直ぐに答えが出たのか、微笑みながら言う。

「大丈夫ですよ。ホルストさん。安全装置は解除されていません」。

「そうか、良かった」。

ホルストは、そう答えながらポンとシヨンの肩を軽くたたいてアビンの方を見てから言葉を続ける。

「後は、もう大丈夫だ。手間を掛けたなシヨン」。

そう言い終えるとホルストは、コンテナ方に駆けていった。

シヨンは、それを目で追いながらアビンに言う。

「アビンさん、此処での用は終わったようです。宜しければ、お茶をご一緒しては頂けませんか」。

「俺とかい？」。

「ご不満でしょうか」。

アビンは、突然のシヨンからの誘いに戸惑っていた。それは、近くに提督もいて此方の話は筒抜け状態で、此処で彼が申し出を受ければ心証を悪くするのは確実だったからだ。そこで、提案を持ち出した。

「シヨン、お誘いを受けるのは嬉しいが俺一人じゃ都合の悪い事があるんで、他の誰かを加えてもいいかい」。

「でしたら、美緒さんにご一緒して貰いましょう」。

と、すかさず彼の提案に答える。

「ああ、彼女が良ければ・・・」。

あまりの即答に、アビンは面食らって答える。

すると、シヨンはすかさず行動を起こして美緒の側に行くとなにやら話を始める。短い説明で事足りたのだろうかシヨンは、直ぐに戻ってきてアビンに伝えた。

「アビンさん。美緒さんは、是非ご一緒したいそうです」。

「ああ、そう」。

アビンは、気のない返事をしながら一抹の不安を覚えるのだった。

「わたしのおごりと話しましたら、二つ返事で承して頂けました」。

「そうなんだ」。

と答えながらもアビンは、なにやら不安だった。

そうしている内に、美緒が近づいてきて二人にあいさつをしてから、随分丁寧にこの度のお誘いを感謝していると述べる。アビンはそれに答えてから、提督の機嫌を窺う様に、あいさつをしてから二人を連れてお茶に行った。相も変わらずその時に提督から圧力を掛けられたのは言うまでもない。

それから、アビンは二人を伴って格納庫を出てティールームで小一時間過ごしてから分かれたのだった。

アビンは、彼女達二人に別れを告げて自分の部屋に急いだ。それも、結局は美緒にた

かられて自腹を切ってしまうって散々な目に遭っての退散という構図だった。つくづく自分の甘さに嫌気のさす状況だ、ただ幸いなのは教授に見られてなかったのが救いと言え
ば救いだった。

こんな状況を見とがめられたら、情けないとの小言を小一時間聞かされる羽目になる
からだ。

それで、アビンは、そんな屈辱を振り払う様に急ぎ自分の部屋に急ぐのだった。

アビンは、今までのことを振り返りながら彼の部屋の前まで来た。そして、カード
を使って部屋の鍵を開けて中に入る。

彼は、部屋に入るなりデスクの上にメモが有るのが目に入った。

こんな所にメモを置いたかどうかと、手に取るとそこには「この度はご苦労さん。君
の献身的努力に敬意を表して良い話をしてあげよう。22時に公園に一人で来たまえ。
ベリア」と書かれていた。

彼は、知らない人物からのメモを受け取り当惑した。それは、この部屋には鍵がかか
っていたのだし、それに、この前の不審者が侵入したこともあり、シオンはセキュ
リティーで警報装置を付けてくれていたが、それも動作していないのだった。どうやっ
て入ったのか、それにベリアとは誰か。

まあ、考えても仕方が無い、指定された時間に公園に行けば分かることだろうと、彼
は何となく思った。これは、そう決心したというのでは無くただ、この場は流されてみ
ようとの考えからそう思ったのであった。

こんな彼の行動が、時には教授から警戒心が薄いと評価される原因でもある。

そうだとしても彼らが事を起こすのは、まだ先で、今はその準備と時期を見計らっ
ている段階だろうと、思えたのも手伝ってのんきに構えてる次第だった。

それに、セシリアに見せられたミッチェルの記憶から、どうやら警備員の幾人かが、
この件に絡んでいるのではと疑っていた。だから、今回の事件で彼らは少なからず犠牲
を出したか体制を立て直す必要になって、直ぐには事を構えないだろうとの思いもあっ
たのだった。

たしかに、上からの命令でかなりの人員の入れ替えあったこともその一因だろうと。

アビンは、今日のところは大丈夫だと思えたので、教授から預かっていた書類を整理
し始めた。それは、考えても始まらないし、船が変わるのだからその準備もしておかね
ばならなかったからだ。

「ええと、これは項目がいつの間にかばらばらになっている」

と呟きながら散らばった項目を整理し始めた。なぜこんなに、ばらけているのだろう
と思いつつ書類の山を探し始めた。

ブリッジにて

ミュラーは、手にした書類を根拠に船長に話をしていた。
「どうしたね。ミュラー君問題でもあったのかね」。
デュパルクと話しているミュラーにランカスターは声を掛けた。
「これは、教授。どうしてここに」。
ミュラーは彼の問いに尋ね返す。
「悪いかね。乗客が船の中を歩き回るのが」。
「そうでは、ありませんが、此処は乗員通路ですから、わざわざ教授が来られるとは思いませんでしたから」。
「そうかね。君こそ船長と何を話しているのかね」。
ランカスターはいかにも不審そうに尋ねた。
「分かりました。お答えします」。
ミュラーは直ぐに折れた。此処で、言い争ってもしょうが無いことだから話すことに決めた。それに、教授にも意見を聞いておきたかったのでちよつと良かったとも言えるからだった。
「この度の、ミュラの事件に関して不審な点が多々あるのはご存じかでは無いでしょうか。あのシヨンという少女が皆の前で話したことは、あなた自身に企てられている暗殺計画の核心部分が含まれているように感じておられるのでは。あの子が、なぜかその時にトレッカーを含めなかったという理由もすでにお分かりではないでしょうか。確かに、彼が警察官だから事後処理に忙しく時間が取れなかったため招かなかつたと、あの子は言っていました。話し方から、そうは考えられなかったはず。彼も警護に加わっている人物なのだから重要な連絡事項には参加するのでは無いでしょうか。それに、あの集まりは提督の指示によるものだった点も核心的な事実を得た故になされた、解釈するのが当を得ていると考えるのが自然です。そして、公爵、あなた自身この件について既に、提督と話し合われてから、あの集まりを招集なされたのではありませんか。それで、このノルマンディーの乗船名簿と搬入貨物記録を確認させていただきたいとお願いしていたのです」。
ランカスターはミュラーの言葉を聞いてから、黙つてうなずいてから静かに口を開く。
「ミュラー君。あのひよつこが、ここまで成長したこと嬉しく思うぞ。確かに、シヨンはこの度の事件で会社の搬入貨物のチェックをやり直した時に妙な記録を幾つか見つけたそう。まず、ミュラの入っていたコンテナは建設機材としてのメタルフィギュアの部品だったそう。送り主はヘックストラストで送り先はアストレイリアのリボック社だ、これがどういうことか分かるか」。
「いいえ。それだけでは分かりません」。
「当然だな。だが、この両方の会社の大株主が同一人物だとしたらどうだ」。
「それだけでは、ただの偶然とか荷物が間違っていたとか言い逃れが出来るのではありませんか」。
「さすがに慎重だな」。
公爵は右手であごを摩りながら言葉を続けた。
「ところで、リボック社が電子出版社だとしたら、送られる荷物はということだろうね。それに大株主が誰だったと思う。あのベストラン公擁立派のボックス公爵だ。これをどう見るかね」。
「確かに、シェフィールド公の即位阻止のために皇帝に進言できるあなたを葬り去りたい、との画策だと考えた方が筋が通りますね」。
「まあそうなんだが、儂との格式の違いも妬んでいることも事実なんだが」。
公爵は自分の事にたいしてなのだが、平気な素振りで告げるので、ミュラーは自分がからかわれているのではと勘ぐりたくなつたのを押さえて、尋ねた。
「普通、帝位継承権の順位に異論を挟むものは多いのですが、既に確定しているものを

差置いて事に及ぶと、自分たちの立場まで危うくなるのにどうして顧みないのか不思議です」。

「それか」。

公爵は、彼の考えを諭すように言葉を続けた。

「まず、シェフィールド公が第二順位、ベストラン公が第四順位だ、そしてこの私が、第三順位だという事になっておる。分かるだろう」。

その答えにミュラーはハツとした。今回のことで仮に公爵が亡くなればベストラン公は、順位が一つ上がるし、シェフィールド公はまだ若いそうだと万が一公爵が亡くなれば悪くても若い皇帝の補佐役に収まる事が出来る。ほぼ実権をものに出来る可能性が高いし、若い皇帝を操ることも出来るだろうと。

そして、ふと疑問が浮かんで口にした。

「ところで、継承権第一位は誰なんですか」。

その問いに、公爵は少し顔を曇らせて言った。

「いることはいるんだが、放棄しとるんだ」。

その言葉に彼は信じられないという気持ちでいっぱいになった。

それを察してか公爵は、言葉を続けた。

「まあ、色々刺客が送り込まれたからな、身を守るために放棄したと考えてもおかしくは無いのではないかと考えられるがな」。

その言葉に、ミュラーは真実さが微塵も感じられなかったが、公爵に聞いても答えて貰えそうも無かったので、あえて問わなかった。

「ところで、君はシヨンの話をどう思った」。

公爵は当事者を集めてなされた報告の話を持ち出した。

ミュラーは公爵がこの件についての黒幕の話は、これまでにしようとの腹づもりだと判断して答えた。

「彼女の話では、警備員に幾人かの刺客が紛れていること、ミッチェルという女性はそれに雇われた。それも事情を知らされてはいなかったようだとすること。軍隊経験がありその時トレッカーと接点があること。トレッカーが軍隊上がりだったということが記録から抹消されている不審さ、貨物の半分が記録と異なること、これは、覆おうにありがちだが多すぎる。その中には対艦ビーム砲も含まれており、ミュラー撃退に直ぐに用いられたのは、不信感を増し加えるものとなった。今回、武器の持ち込みも多すぎる。それに、乗客名簿に偽名それもそれと直ぐ分からないように工作された名前が十数名存在することも、誰かが大がかりな手引きをしているとしか考えられないと思います」。

「まあ、そんなところだな」。

公爵はミュラーの答えを短く評した。

「そういえば、あれからトレッカーに会ってませんね」。

ミュラーが、トレッカーにあったのが密輸業者の逮捕に立ち会っていたのを目撃したのが、最後だったのを思い出して言った。

「そうだったな」。

公爵はうなずくように答える。

この二人の会話に取り残されてデュパルクは少し不機嫌になって言った。

「帝国のお家騒動でこっちがとぼちりを受けて散々なんだが、保証はしてくれるのかね」。

その言葉に公爵は慰めるように言う。

「この件が、片付けば儂が、話を付けよう」。

デュパルクはその言葉に満足しなかったが、ランカスターのを信用することにした。

「では、先ほどの話しの件だが此方でも調べておこう」。

「やっぱり、安易に情報は渡して貰えないということですか」。

「そうだ、信用問題となるからな」。

「分かった」。

「だが、一緒に調べるなら構わんがな」。

その言葉を聞いてランカスターは、やれやれ意見は同じかと思ひ提案する。

「では、ブリッジに招いては貰えないかね」。

「どうぞ公爵。歓迎しますでさ」。

デュパルクは舞台劇の海賊船長よろしく戯けて歓迎の意を表した。

ミュラーはそんな二人の後をブリッジに向かって歩き出しながら考えをまとめていたが、あることを思い出した。

「公爵」。

と彼は、ランカスターの後ろから呼び止めた。

「何かね、ミュラー君」。

公爵は向き直り、少しいだちを見せた。

「お尋ねしたいことが、一つありまして」。

「どういうことだね」。

「帝位第一順位者は、なんと呼ばれているんですか」。

彼は、不敬とも取られるかもしれないと思いながらも尋ねた。答えは期待しないで。

「アリスとよばれていたな」。

公爵は、これといって感心が無いような素振りで、素っ気なく答えてくれたのは、ミュラーにとって驚きだった。そして、

「それって、呼称ですよね」。

と尋ねたが、公爵は何も答えず、ただ口元が少し緩んだのが目にとまった。そして、くるりと向きを変えるとブリッジに向かってデュパルクとともに歩き出した。

ミュラーは、二人の後に続きながら考えた。

「呼称か本当の名前ではないな。という事はよく使われるのは保護対象の少女に対して使われる暗号か隠語だ。つまりは、帝位第一順位者は幼いか未成年ということになる。それなら、自分を保護する手段を持たないため放棄するとも考えられるし、周りの圧力に屈したとも考えられる。どちらにしても、身の安全ははかられたという事か。まあ、公爵達の権力闘争に巻き込まれるよりは、早々に放棄して、身の安全と生活保護を取った方が利口かもしれない。自分で判断したのか、周りの大人達が判断させたのかは分からないが、良いようにされたと言えるかもしれない。しかし、ここで疑問が残る。それは、この仮定が成立するには、その子が独り身であることだ。普通両親のことが、まず取りざたされるはずだからすると、二親は死亡していることになるが、どこかの公爵家の両親が子供を残して亡くなった話は聞いたことが無い。とすると、全くノーマークの家族があるということなのか。それも、孤児ということだ。まったく、憂鬱なブルーな話だ。昔の児童小説にあるような話が、今でもあるのかは興味は無いが、差し詰め、それを呼称するならアリスブルーというところか」。

そう考えをまとめてから、ブリッジに向かうエレベーターに二人の後に続いて乗り込んだ。

彼らが、ブリッジに入ると既に、ホルストが中に入っていて当直のオペレーターや航宇士、エンジニアと話し込んでいた。

「これは皆さん、お待ちしていました」。

ホルストは、彼らを見るなり歓迎した。

「これは、どういうことなんだ」。

ランカスターは怪訝そうに尋ねた。

「先ずは、この船が安全に帰れるように調整してしてましたが、それだけでなく、シヨンの話からついでに調べておきたいことが出てきて、彼らに手伝って貰ってる」。

ホルストは、普段道理の業務とばかりに答えてから、言葉が続けた。

「皆さんも、気になってきたんでしょう。名簿に貨物記録。違いますか」。

その言葉に、彼らは無言で肯いた。

「そうですね。まあ、ここにいる連中は、船長、あなたの部下であると同時に、俺のかつての部下だった者達です。だから、しばらくは内密の調査をしても外に漏れない。

時間制限はありますが」。

ホルストは、悪戯っぽく答えた。

「どのくらいあるんだ」。

ランカスターは直ぐさま尋ねた。

「だいたい、半当直。四時間ってところでしょうか」。

「なら、十分だな」。

「だといいんですがね。調べ物って意外と時間がかかるんですよ。これがね」。

「なら、今の状況を説明したまえ」。

「分かりました。教授」。

ホルストがランカスターに教授と言ったことで、今少し高圧的に話していたことをランカスターは、気がつき改めることにした。

「それで、チーフ。今どのくらい調べががついているのかな」。

その言葉に、ホルストはオペレーターに「お尋ねだ」と短く伝えた。

「今、全乗客名簿の記録をもう一度スキャンしてあります。偽証では無く、その記録から3深度まで、過去の経歴、出生、交友、旅行、居住、職歴、学歴、までの経緯を七十パーセントまで調べました。後はこの記録と、貨物の記録とのすりあわせです。接点があればそれに問題があるかどうかアップします」。

彼は、手短かに事務的に答えた。

「プライバシーはどうなんだ、後で訴えられると事ではないか」。

ランカスターは腕を組みながら難しい表情で尋ねた。

「それなら、ご心配なく公文書記録ですから外に漏らさなければ問題ありません」。

ホルストが代わりに答えてから、こう付け加えた。

「情報局の公文書ですがね」。

その言葉に、ランカスターとミュラーは啞然とした。

「どうやって、アクセス権を」。

ミュラーは眩くように言う。しかし、ランカスターには、思い当たる事があるらしくホルストを睨むようにして言った。

「シヨンにやらせたな」。

するとホルストは、素っ気ない素振りをして見せてから、「喜んでましたし」と言っ

てのけた。その言葉を聞いて、ランカスターは額に手を当てて深いため息をついて思った。「またやったのか、今度は何を餌に頼まれたのか、困ったものだ」。

そんな素振りを見て、ホルストは付け加えるように言う。

「本人も、今回のことで調べたいことがあったみたいで無条件で協力してくれましたよ」。

「何を調べた」。

ランカスターは詰め寄るように言う。

「本人に聞いてください。尋ねれば答えてくれると思いますよ。俺の口から話すべき事ではないように思いますし、その方が、彼女も喜ぶますよ」。

その言葉に「そうか」とだけ口にした。

そんなやりとりで、少し気まぎれになったとはいえ時間は少ないので、手分けして事に当たった。

そしてデュパルクとしては、自分の城が、取られてしまったような複雑な気持ちで事に当たるのだった。

ランカスターは、少しいらだち気味に見えるデュパルクにねぎらいの言葉を掛けることにした。

「まあ、悪くおもわんでくれ君の部下が信用できない、というわけでは無いのだが事は内密にしておく必要があるわけだし、隠蔽するにしても知った奴らの方がたしかだしそれに、手際も良い。それから、悪いがもう一人付け加えても良いかな」。

デュパルクはランカスターの言葉に、反感は持てども納得していた。

「それで、もう一人と仰いますが、誰を呼ぶんですか。まあ、確かに人では多いほど良いですが」。

彼は、これ以上他人が踏み込んでくるのに苛立ちを覚えながら言った。

「君が、知っている人物で私の助手だ。彼にも手伝って貰う」。

「ああ、あの青年か。あれはあなたの小間使いか何かですか」。

デュパルクは、少し苛立ちながら答えた。

「まあ、そんなところだ」。

さらりと答えるランカスターに、苛立ちながらも彼の助手には同情を禁じ得なかった

。「それなら、お好きなように」。

「ありがとう。感謝する」。

そう答えてからランカスターは、ホルストに「アビン君にここに来て貰ってくれるように伝えてくれ」と指示をした。

暫くすると、アビンがブリッジに現れた。

彼が、ブリッジに入ってくるなりランカスターは「アビン君。彼らを手伝ってくれたまえ」と指示をした。

アビンは状況を理解できないまま、ホルストに近づき「何をすれば良いのですか」と尋ねた。

「ああ、君か、そのコンソールについて、今から乗客及び乗員

「そこで、赤いマーカーが付けられている貨物が青く変わるかどうか見てくれ。そして、変わったら、そこに表示される名前をマーキングしてくれ。やり方は分かるな」。

「はい。分かります」。

そう答えてアビンはコンソールの席に着いた。すると、ホルストは周りを見渡すようにしてから、こう言った。

「では、これから過去の経歴を3深度で十年間のスキャンをする。みんな準備は良いかな」。

すると、その言葉に応えるように「レベル1了解」。「レベル2了解」。「レベル3了解」。「レベル4了解」と言葉が続けられて、最後にホルストは「アビン君、いいかな」と尋ねた。

「了解」。

どうゆうことかよく理解しないまま、その場の雰囲気にも飲まれて不安な面持ちでアビンは答えた。

彼は突然の教授からの呼び出しを告げられ、ブリッジまで急いできた。実際彼の部屋からブリッジまでは、かなりの距離があるのだけれど教えられた乗員通路を走って来たのだった。そのため他の乗員や乗客には殆ど会うこと無くこれたのだけれど、その疲れも癒やすこと無く指示を受け、状況を知らないままこの場に飲まれて、周りに従うように答えてコンソールモニターを見ているのだった。

彼の見ているモニターには左側に貨物の種別と発送元が42件並んでおり、その右横では、目で追うことも不可能な勢いで氏名と日付、所在地などが高速で流れていた。いったん何処まで調べているのだろう、ここまでする必要があるのだろうかとの思いもよぎったが、多くの人命が失われていることを考えれば、反対することも出来ない。それに考え方を考えてみれば、実地で3深度とはいえ人の経歴調査に立ち会えるのはまたとない機会でもあった。それは、法律上よほどのことが無い限り許可が下りない行為でもあったからだ。

当然、この船の今の事実上の法律上責任者は、デュパルク船長だ。その船長立ち会いの下で、公に経歴調査がなされていると考えれば納得の行く話だが、雰囲気はどうやらそうでも無いらしい。それは、船長の様子から察するに、彼は苛立っており不満の顔を覗かせている。それに、陣頭指揮に立っているのは、ホルストだ、この船との関係は、単なる乗客のはずだが、その彼が、船長を差し置いて事に当たっているのは、不審感を拭えないからだ。

その事を聞けば話してくれるだろうか、教授もいることだろうしミュラーもいると考えたときに何か引がかかった。

そうだ、ミュラーも教授もどちらも帝国の人間だ、それも軍属だといえる。このことは、今回のことがテロで当事者の選定を今まさにやっているのではないかとアビンは思った。

その時、彼の見ていたモニターに反応があった。CLB209という貨物が青く変化してその横で氏名を表示して止まっていた。

その名前は、ヘルベルト・ヘスだった。

彼は、その名前をマーキングしてから先を進めた。

コンソールを見ること一時間で、どうやら検索は終わったようだった。

この検索で上がった人数は24人で、そのうち警備員が14人ただすでにミュラーの件でその内8人死亡3人重傷そして、搭乗記録の無い人物一人を含んでいたのだった。

その記録を見ながらミュラーはホルストに言った。

「この名簿で気になる名前はありますか」。

「俺に聞いてどうする」。

「おまえの感を聞いてみただけだ」。

「そりゃどうも」。

ホルストは、肩をすくめながら素っ気なく答えながら考えた。リーダー格の人物は誰か。そして言った。

「この中の人物の経歴を調べてくれ」。

彼の言葉に、オペレーターの一部が反応してコンソールを操作する。

それから暫くして、興味深い結果が出た。

その結果とは、対象者全員、過去に帝国軍警察の経歴があることだった。

「ビンゴか」。

そうホルストは呟いた。

「そうとも限らん。偶然という可能性も捨て切れん」。

「それはあるな。では、その所属部隊で検索」。

暫くして、答えが返ってきた。その記録を見てミュラーは吐き捨てるように言った。「なんてこった。全員同じ部隊、それもあの公爵の息の掛かった部隊じゃないか」。

「かなりまずいって事かな」。

というふうにはランカスターが、いかにも関係無さそうな口ぶりで割り込んできた物だからミュラーは、少し苛立ち気味に答えた。

「あなたのことですが」。

ホルストは二人の反目を横目で見ながら指示を追加した。

「トップとなるやつが分からん。その部隊の隊長または指揮者は誰だか検索してくれ」。

すでに、途中から検索深度3を超えて4に入り他の衛星回線やプラネットエリアのパスやラインを通過するコードの手続きで時間を要し次第に接続時間が長くなってきはじめていた。それはリモート接続が出来ないため承認コードを送信してから回線接続を手動でなされるためだからだ。コード送信に時間が掛かればハッキングと判断され接続はなされない。

そして、答えが返ってきた。

その部隊長の欄に第三小隊長の名前に目がとまった。

「マックス・トレッカー」。

ホルストは驚きながらその名を読み上げた。

「何だって」。

ミュラーは、その名前を聞いて答えながら、ホルストの脇に寄って表示を確認した。

二人は、要注意人物が、自分たちの直ぐそばでのほほんと、様子を見たいのかもしれないと気づいたのだった。しかし、ランカスターとトレッカーが二人だけの時もあったはずなのに行動を起こさなかったのは、当初の予定が事故を装う事で、今回の出来事は予想外だったにちがいない。

しかし、これだけでは可能性だけで確たる証拠が無い。もっと深く探り出さなければならぬが、深度5は彼らには出来なかった。それには、司法パスと行政パスが必要だからだ。これは、事実上ほぼ不可能なので、此処までであきらめるしか無かった。

では、これからどうするかだった。ミュラーは大人しく座っている学生ことアビン・ホーンブロワーが目にとまった。

彼はそれとなくホルストを促して、アビン・ホーンブロワーに目を向けさせて提案をする。

「彼は、どうかな。適任と思うか」。

「ずいぶん乱暴だな」。

「そう答える当たり、分かっているようだな」。

「民間人に向かって、その発言はどうかと思うが」。

「だが、この場合は素人の発言の方が信用度大だと思うが、違うか」。

「多分な」。

「では、決まりだ。おまえが彼に話してくれ」。

「何をだね」。

その言葉にミュラーはホルストにそっと耳打ちする。

「分かった。やってみよう。それにしても俺に悪役を押しつけやがって、後のフォローはおまえがしろよ」。

「分かった。分かった。早く行け」。

ホルストはミュラーに急かされながら、アビンにそれとなく後ろから近づいて言った

。「アビン君、この結果をどう思う」。

その言葉にアビンは、コンソールの表示を見ながら答える。

「そうですね。怪しいと言えるかもしれませんが、いや、十分に疑う根拠があるかもしれません。ですが、白の可能性も捨てきれません」。

「確かにそうだ。ところで、トレッカーはまだ、発掘の同行に行くことになっているのかな」。

ホルストは既に答えを知っていたが、あえてそれを隠して尋ねる。

「そうです。まだ同行することになっています」。

アビンは、即答した。

「なら。白黒つかなくても、計測器操作方法を覚えて貰った方が良くも、しれんな。白

「なら当然だし黒だとしても計器の操作をして貰うことにより監視がしやすいだろ。発掘の計器操作はそのまま下に降りるんだろ」。

「そうですね。出来るだけ近くで計測した方が正確ですから」。

「なら、あとで教えてやると良い。どのみち彼も、従わないと疑われるからな」。

「そうなんですか」。

アビンは少し疑うように答える。

「ああそうだ。それにこれは教授の指示でもある」。

「そうですか。後で連絡してそうします」。

「その時にでも彼の警察での経験を聞くと良い。きっとためになる。それから、船長からの伝言として伝えてほしいことがあるんだ」。

「何ですか」。

「ペリエ産ワインケースの発送人の名前がトレッカーの名前になっていたが、本当にあなたのですかと」。

「分かりました。伝えておきます」。

それから、ホルストは少しもったいぶってから伝えた。

「ああ、それから彼が何か答えたなら。それは、船長に伝えるように言ってくれ。そうすれば、その通りに此方で処理をするから」。

「分かりました。そうします」。

「じゃ、頼んだぞ。これで貨物の処理が少し片づく」。

ホルストはいかにも安堵したような口ぶりで言うのであった。

その言葉を聞いて、アビンは労をねぎらうように「たいへんなんですね」と言った。

その言葉を聞いてから、ミュラーは立ち上がりアビンに近づいて「ご苦労さん。これで大方の調べ物はついた。後は、もう大丈夫だからかえって良いよ」と彼を席から立たせながら言う。

その言葉に、アビンは少し気恥ずかしそうに応える。

「これで、お役に立てたのかな」。

「ああ、十分に、ありがとう」。

ミュラーはアビンに握手を求めてから彼をブリッジから解放するような素振りをする。それに、合わせるようにホルストも握手を求めて、さらに彼の解放を印象付ける行動をする。

それで、アビンは自分が体良くブリッジから追い出されたことを気づくことも無く、開放感に浸りながらエレベーターに向かった。

それからブリッジではアビンが下に降りたのを確認してから、ミュラーとホルストは教授と船長に事情を説明した。

アリスという暗号

船長のデュパルクは、自分の意に沿わない形で事が進められているのを快く思えなかったが、事がここに及んでは、任せるしか無いと承知するのであった。

ランカスター教授は、それは一つの方法だと納得したが、自分をさしおいて事を決めたのに面白く無い事を二人に、皮肉たっぷりに告げた。

そんな遣り取りをブリッジで行っていると、ドア口の方から冷ややかな声があった

。「相変わらず、みんなで人を貶めているのですね」。

その声の主はシオンであった。

ミュラーは彼女を確認したときに、いつの間に入って来たのかと思うのであった。彼には、その気配すら感じられなかったからだ。

しかし、ランカスターとホルストはまたかと思っていた。今まで何度かシオンに驚かされて頭を抱えた経験があるからだった。

だから、ホルストはこう言った。

。「おまえさ、入るときはノック位するもんだ」。

。「ごめんなさい。皆さん忙しそうなので邪魔しちゃ悪と思って」。

。「なら、此方に来ることを知らせてくれ。突然現れてビックリさせられては年配者に悪いだろう」。

その言葉が気に入らなかったのか、ランカスターが素っ気なく付け足した。

。「私のことは気にしなくて良い」。

ホルストはその言葉に気に止める事無く続けた。

。「さて、お嬢さんはどのような用件で、来られたのでしょうか」。

その言葉に誘われるように、シオンは彼の前に近づいてきて忠告し始めた。

。「皆さんが調べておられることは、補充された警備員も含んでされてはいないでしょう。彼らはどうするんですか。まだ、記録も無いでしょうに」。

ホルストとミュラーは自分たちの落ち度に直ぐに気がついた。それは、補充された警備員の記録はまだ、届いていなかったため調べようが無かったのだった。

二人が沈黙しているのをシオンは見て取りながら、彼らの前にボードを差し出してニコリとしてから言った。

。「その記録が此処にあります。中継局の遣り取りをモニターして送られてきたリストです。該当者となる方は深度4ではありません。全て、ここの基地の警備員で緊急に編成されたようです。これでよろしいでしょうか」。

ホルストはボードを受け取りながら言う。

。「相変わらず手際が良いな、此方は脱帽だ」。

。「どういたしまして。でも、私の知り合いのエド君はもっとすごいですよ。まあ、これも、彼に連絡して手伝って貰ったのですが、深度4のパス貰うために」。

。「おまえに、そういう知り合いがいたのか」。

ホルストは半分投げやり気味に言った。

。「私の知り合いというより、美緒さんのフィアンセですから」。

笑顔で答えるシオンの顔を見ながらホルストは頭が痛くなった。彼自身は美緒のフィアンセには面識がなかった。話だけは、それとなく副社長から聞いたことがある。ワガママ娘に頭が上がらない、悲哀に満ちた愚痴を出張の報告時に、延々と聞かされたのは、つい一ヶ月前だった。

どうでも良いが、こっちに飛び火してほしくは無い話ではある。

。「それで、すんなりパスを貰えたのか」。

ホルストは、適当に話を合わせることに決め込んで答えた。

。「それから、ボードの裏にはアリスブルーの今回の換装報告書を付けておきました。次いでだと、プロジェクトナインの報告書も送って来てくれました。後で、目を通してお

いてください。それから、彩さんからの通信物も入ってます」。

シオンは少し悪戯っぽく報告した。

その言葉にミュラーが反応して言う。

「彩ってだれだ」。

「ホルストさんの奥さんです」。

シオンは素っ気なく答えた。

「ほう、結婚してたのか。いや、おめでとう。身を固めちや辞めるのも分かる」。

ミュラーは茶化すように言った。

「まあな」。

ホルストは気乗りしない答えをする。

それで、ミュラーは不審に思いシオンにあえて尋ねた。

「こいつ、本当に結婚したのか」。

それに対して、

「まあ、責任を取らないと男じゃありませんからね」。

あきれ顔でシオンは、意味深な答えをした。

「責任か」。

ミュラーは短く、それも意地悪そうな含みを持たせながら言った。

すると、ホルストは投げやり気味に言い放った。

「ああ、そうだよ。俺のせいで、家を出なければならなくなったからな、その責任だ」

。

「悪党」。

「五月蠅い」。

「かわいそうに、その子の将来をこいつは踏みにじったのか」。

ミュラーはこの時ばかりとホルストをからかった。

それを見て、シオンが意外なことを言った。

「まあ、家を出なければならなかったのは事実ですが、他に行く当てが無かったわけではありません。そうでは無く。なんと申しましょうか。向こうが気に入って押しかけ女房となってしまったんです。そのまま居着いちゃったんですね。これが。それを伯父様に見られて、責任を取るべきだと詰め寄せられ、半年前に結婚したんです」。

そう言いながらシオンは笑っていた。

ホルストは言い返せなく、ただただ頭を抱えるばかりの様子だった。それを見てミュラーは、これは良い弱点を見つけた、と心の中でほくそ笑んでいた。

そんな彼らの様子をランカスターは見るに付け、未だ未だ青いなと思ってはいたが、シオンの突拍子も無い行動には何時も驚かされている。そのせいかたびたび保護者の立場をやらされているのは、頭が痛い問題ではあった。だがなぜか嬉しくもあった。それに、注意したことは必ず聞き入れる素直さもあるので、可愛がりがいもあって殆どは大目に見ている。

そこで、助け船を出すことにした。

「シオン。人の家庭のことを簡単に話してはいけないぞ。ホルスト君が困ってるではないか」。

すると、シオンは何かはっとして「ごめんなさい。ホルストさん。勝手に話をしてしまって」と謝るのであった。

その言葉を聞いて、彼ら二人はシオンを見ながら、互いに言葉を濁した。

「まあ、何だな。おめでとう」と言ったのはミュラー。

「あのさあ、気にしなくて良い本当の事なんだから」と言ってから「ありがとう」とホルスト。

そんな二人の反応を確認してからランカスターは告げる。

「さて、これからどうするのかね。君たちの意見を聞きたい」。

この言葉は、この件に彼らを直接関わって貰うとの勧告を暗に示していた。

それはミュラーに取っては当然のことではあったが、ホルストにとっては予定外のことではあったが、このまま放り出したのでは目覚めが悪い。この件で部下を使うのは出来れば避けたいが、この状況ではそうは言っていられない。このことがいつ此方に飛び火して巻き添えを食うか分からない。出来ればそのような要因は排除したいのが正直な話だった。

ホルストは、先ず考えた。向こうの人数をどうやって減らすかだ。事は穏便に此方の動きを悟られないようにする必要がある。一番早めに事務的に削れるのは警備員だなど

考え口にする。

「そうですね。まずは警備員に下船していただきましょう。これなら事務的に済ませられるのではありませんか。ミュラの件もありますから何かと理由を付けて降りて貰いましょう」。

「そうだな、だがどうやって手続きする。デュパルク船長の権限でそれをすることが出来ますか」。

ミュラーはデュパルクに話を振る。

「それは無理だな、警備の編成や交代は本社の運行警備管理が行うから、本社からの指示が無い限りは出来ない」。

デュパルクは自分の権限ではないことを伝えながら、何か方策は無いかと腕組みをして考える。

「それなら、方法があります」。

彼らの中に割ってシヨンが入ってきて言った。それで、一同の目が彼女に向けられた。

それから突拍子の無い事を言い始めた。

「運行管理システムに入り込めますよ。此方からは無理ですけど、テラリーズにいるエド君なら足跡を残さずに変更できます」。

「それは、ハッキングによる行為か」。

ホルストは尋ねた。

「半分は、ですが彼は管理コードを持っていますので、正規の手続きを踏まえて出来ます。そうですね。伯父様の要望と言うことで話を付けてみましょう。そうすれば、書き換えるのは少しですみますから。いかがでしょう」。

ホルストはあきれて言葉が出なかった。そこで、ミュラーが尋ねた。

「それは、直ぐ出来るのか」。

「ええ、伯父様の許可は、後で取りますから。事情が分かれば大丈夫です。かりに、だめでも大丈夫です」。

「ダメでも大丈夫って事あるのか」。

ミュラーは焦るように尋ねる。

「そうですね、事が露見するまで二日は掛かるでしょう。それを訂正するのに三日、エド君が工作すればさらに三日時間が稼げます」。

その言葉を聞いて、ミュラーは頭の中が真っ白になったような気がした。

そんなミュラーの様子を横目で見ながら、ホルストは尋ねた。

「そのエドと言う人物はどうゆうやつなんだ。管理コードを持ってるようだし」。

その問いに、シyonは少し考える素振りをしてから、答えた。

「彼は、星間運行管理局でセキュリティーアルバイトしています。主にプログラムメンテ、防壁の構築など。私が言うのもなんですが、凄腕のハッカーで一度補導経歴があります。わたしと同じ年です。伯父様の口利きで今のアルバイトを趣味と実益を兼ねて行っています。まあ、監視もしやすいですから。そうそう、うちで最近導入した防護障壁も彼の作です」。

ホルストは最後の言葉を聞いて、今まで気付いていなかった事に落胆した。

「なら、早速やって貰えないかな」。

少し冷ややかな言葉でミュラーは注文を付けた。

「分かりました。メジャー。早速連絡いたします」。

シyonは悪戯っぽく答えて通信回線の使い始めた。

その様子をホルストは、複雑な面持ちで眺めながらミュラーに言う。

「後でどうなっても責任はおまえが取れよ」。

「分かった」。

ミュラーは短く答えた。

そんな彼らの横に来てランカスターが尋ねてきた。

「まずは警備員の方々に、舞台を降りていただいてそれから、どうするのだ。下手に拘束するなら他のメンバーに悟られてしまうが」。

その問いにホルストが答えた。

「そうですね。警備員に降りて貰う、と同時に二人ほど拘束しましょう」。

「それは、危険ではないか」。

ミュラーは警戒した。

「どうするんだね」。

警戒心を表したミュラーを横目にランカスターは尋ねる。
「それはですね。我々が拘束するのでは無く、ここの警察に拘束して貰います。例の荷物です。不審な荷物を解いて不法な物があれば此方から通報、警察に来て貰い逮捕という具合です」。
「それ程簡単には行かないだろう」。

ミュラーは不服そうに言う。
「いや、此方にはリストがある。倉庫は事実上此方が押さえている。そして、中の物もおおた見当がついているので、手頃な荷を解き、いや事故で壊して中身を確認して通報して来て貰います。手続きかなんかで度々警察に来て貰ってますから向こうも怪しまれることはない。このようにして二人ほど舞台を降りて頂きます。いかがですか」。
ランカスターはホルストの話聞いて、実行可能と判断したのか了承してこう言った

。「なら、良いだろう。先ずはそれでよろしく」。
話を聞いてミュラーは、納得したようだが、こう尋ねた。

「後の残りはどうする」。
「さて、どうしたものかな」。

ホルストは冷ややかに答えながら、ミュラーの出方を覗いた。
「確か、荷物と一致する人物の名前のリストが、出来上がっているからそれを使えるかもしれない。それぞれ、名目上のビジネスをうたっているはずだし、その商談または、荷物の問い合わせとか出来るのではないか。そうやって一人ずつそれとなく降りて貰いましょう」。

ホルストの態度に反発して、ミュラーは彼なりの考えを提示する。
「まあ、合格点だ」。

二人を賞賛するようにランカスターは褒めた。
それから、こう付け加えるのであった。
「彼らばかりを呼び出したのでは気付かれてしまう、そこで、他の乗客も含める必要があるな。どうせ、この船を降りて他の船に乗り換える者もいることだし、それを利用して荷物の確認と言えば、話は通るだろう」。

その提案に二人は同意した。
そこへ連絡がついたのかジョンが彼らの中に入ってきて言った。
「警備員の交代についてですが、直ぐにでも発行されるそうです。それから、この二つの荷物とこの二人の方を最初に出て行ってもらいましょう」。

彼女はそのリストが乗っているボードをホルストに手渡し、それから、ミュラーの方を見つめて「血のにおいは嫌いですから」と静かに、そして冷たく言い放つとブリッジから出て行った。

ミュラーは語られて言葉の真意を測りかねていた。その言葉は如何にも自分が対象者を傷つけるような言い方だったからだ。確かに彼としては、最終的にはそれも覚悟してはいたが、それは、事と次第によって変わるものだ。けれど彼自身がきな臭さを漂わせていることは、否定できなかった。

このとき、ミュラーはジョンのことを気の抜けない相手だと確信した。行動は突飛だがどこか計算し尽くされているところがあたりなかつたりで妙につかみ所が無い。

そして、もしあの娘が、対象リストに載るとしたらやはりアリスと呼ぶのかもしれない。それも、ごく淡い灰色がかった水色を基調とした服装をしていたから、仮に他と区別するためにアリスブルーとなる可能性もあるなど思えた。

それから、彼はホルストに手渡せたボードに記載された内容を確認して言った。
「これから始めるか。おまえならどうする」

とホルストに問いかけると返事はこうであった。
「先ずは、デッキで片付けをするか」。

消失

ボードに書かれた書類の項目を見てアビンは頭が痛かった。それはいくつかの書類が抜けていて持ってきたファイルが、何処にも見当たらないからだ。確かに荷物と一緒に入れてきたはずなのに、いくら思い返しても心当たりが無い。誰かが持って行ったかとも考えたが、こう言っちゃなんだがあんな物に興味を抱くやつはいないはずだ、発掘地点の過去二十年の気象記録など取っていったって何の役に立つ、まあ予報ぐらいにはと思った。

なかなか物事がはかどらないなか、ふと時計を見て呟く。「そろそろ、待ち合わせの時間か」。

彼は、トレッカーと発掘調査の機器の扱い方を説明するために、約束を取り付けていたのだった。待ち合わせ場所は、格納デッキ入り口だった。

それで、整理のつかないことは後回しにすることにして、彼は自室を後にすることにした。

彼は急ぎ、格納デッキ入り口に行ったところ既にトレッカーが、待ち合わせ時間五分前というのに立っていた。どうやら几帳面な性格らしいとアビンには思えた。

そこで彼はこう挨拶をすることにした。「トレッカーさんお待たせいたしました」。

「いや、今来たところでそんなに待ってはいない」。

トレッカーの答えを聞いてアビンは、自分の事を気遣ってそう言っているのだと思った。なぜなら、この通路に来るエレベーターの運行状況の表示板では殆ど動いてなかったし、止まることがなかったからだ。それで、彼がエレベーターを待つ時間と此処まで来る時間を考えて、少なくとも二十分は早く来ていると考えられた。

「では、行きましょうか」。

アビンは挨拶もそこそこに、トレッカーを案内し始めた。既に、計測器の置かれている場所はホルストから知らされていた。それに、分からなければ格納庫内で搬送の準備をしているホルストの部下に聞けば、教えて貰えることになっていた。

二人は格納デッキの中に入った。そこでは、ホルストの部下達によって搬出準備の作業が始まっていた。入り口からは真っ直ぐに通路が開けられているのが見てとれた。それは、これから数日間この船から降ろされる貨物の搬出を行いやすくするための準備である事が分かる、おかげで発掘に使う測定器の置かれている場所まで簡単に行けた。確かに知らせを受けたとおりだったので、どうやら何かの準備が為されているような気がしたアビンだった。

そして、目的の場所に着くと持ってきていたカードを確認しながら箱の数と荷札を確認した。

「これがそうです」。

アビンは確認を終えると一番大きなボックスの手を掛けて言った。

「ずいぶん大きいな」。

少し驚くようにトレッカーが言う。

「それ程でもありません。二人いれば運べる物ですよ」。

「見た目だけという事か」。

「そうですね。あまり重いと遺跡を傷つけることもありますから」。

「そういうものか」。

「そういうものです」。

そう言ってアビンはカードを使って電子キーロックを外した。

測定器の箱はカチャリと音を立てて箱の両端のロックが外れた。

「これで、箱の蓋を外せます」。

そう言いながらアビンは、トレッカーに手本を見せるかのように蓋を外して他の荷物の横に立てかける。それから、箱の手前右側の端に手を掛けてから、

「此処にあるピンをトに引き上げて抜きます。こんな風に」

と言ってピンを引き抜いて見せてそれから、トレッカーに勧めた。

「同じように、そちらの左端のピンを抜いてみてください」。

「分かった」。

トレッカーは答えてから、勧められたとおりに行った。

「では、これで正面の板が動きます。倒れますので、下がってください」。

そう言ってからアビンは手を放すと、正面の板はゆっくりと倒れ始めた。

「油圧シリンダーが付いているのか」。

「まあ、そんなところです」。

感心するように言うトレッカーの言葉にアビンは肯定する。

暫くすると正面の板が床に完全に倒れ込んだ。それを確認するようにアビンは、かがみ込んで板の端を触る。確かに完全に倒れていることを確認すると、そのまま、板に乗って計器を操作し始めた。

「トレッカーさん。これが起動スイッチです」。

アビンはそう言ってから電源を入れて説明を始めた。

「この計測器はこの下にある物を探す機械です。金属とか岩盤とか、早い話堅い物や空洞が無いか一ミリ単位で計測します。遺跡ではこれが重要なんです。むやみに掘ってもしようが無いですし、地下十メートルも掘らないと何も出てこないのに、スコップで掘るのは効率が悪いですからね」。

アビンは計器の動作を確認しながら話す。

「それに、今回はまだ発掘されてない遺跡の部分の最初ですから、殆どがこの機械が活躍することになります。まあ、細かい作業はまた後ほどで、今回はおおざっぱに、遺跡の規模を探るのが主だと思って構いません。ですから、これの操作を覚えていただかなくてはなりません。発掘に同行されるんでしょう」。

トレッカーはアビンが説明しながら質問してきたので、答えを用意する間が無くとっさに「ああ」と肯定だけした。

「そうですよね、教授の身辺警護ですから、それなりの端から見て不審がられることの無い振る舞いが必要なんです。教授も期待しておられました」。

アビンのすらすら出る言葉に、トレッカーはおしゃべりな学生が、と思っていた。彼は、このような手合いが嫌いだった。だが、この際そのような素振りも得策で無いと考えていた

「それで、トレッカーさん。先ず起動したら、このつまみとこの赤いつまみを調整して、水平と重力の同期を取ります。こうやってね。試しにやってみてください。このゲージがゼロになるようにするんです。此処は船ですから水平と重力は簡単に合わせられます。人工の水平と重力ですから」。

アビンはそう言ってトレッカーに操作を任せる。

「どうです」。

「ああ、簡単にあったな」。

トレッカーは驚くほど簡単だったので拍子抜けして答えた。

「まあ、実際には、地形は平面じゃ無いですし、重力もまちまちですから意外に時間を食うですよこれが」。

アビンは普段の苦労を噛みしめるように言いながら次に進めた。

それでは、深度五メートルくらいで仮計測してみましよう。私がこれから説明するとおりに操作してみてください」。

「ああ、分かった」。

「先ず、左にある表示板の横にあるダイヤルを回して、一番上の数値を五メートルにしてください」。

トレッカーはその言葉道理にする、それから現在の位置や調べる物質、金属などのデータ入力、気温、振動数、などの入力で三十分の説明打ち込みを行った。一度聞いてとても覚えられる物では無かった。その事はアビンもわきまえていたのか、繰り返し三度行った。繰り返すたびに操作時間は短くなっていった。一通り終わるとアビンはトレッカーに手を差し伸べて言った。

「お疲れ様でした。さすがに飲み込みが早いですね。これなら疑われません。これからもよろしく願います」。

「此方こそ、勉強になったよ」。

トレッカーにとってこの言葉は意外にも本心であった。

「ところで、トレッカーさん」。

「何だね」。

少し不審を感じてトレッカーは答える。

「船長からの言付けなんです、ペリエ産のワインケースの送り主があなたになっているそうなんです、本当はあなたのかどうか知らせてほしいとのことでした。回線の寸断であなたの部屋に連絡が取れないそうなので、言付かってきたんですが、ブリッジにいるそうなので後で連絡してください」。

アビンの言葉にトレッカーは身に覚えが無かったが、

「ああ、分かった船長には連絡することにする」。

そうトレッカーが答えた後直ぐに、ガッシャンと奥の方で大きな音がして、

「何やってるんだよおまえ」。

と怒鳴る声がした。

アビンは、その音は気になったが、計測器の片付けを黙々と始めるのだった。それを見て、

トレッカーは彼を勤勉なおしゃべりと評価した。荷物が片づいても騒ぎが収まっていないので、アビンとトレッカーはその場に行ってみた。

するとそこでは、荷物の箱が崩れていて、その中身を床にぶちまけていた。

「どうしたんです」。

アビンは、いきり立つようにしていたヘンツェに尋ねた。

すると彼はアビン達の方を振り向いて、肩をすくめてどうしようも無い素振りをして見せながら答える。

「いや、驚かせてすまん。メイソンがキャリアをぶつけてしまってね。この通りさ」。

その言葉を聞いてメイソンがキャリアの上から反論する。

「違うだろ。エナの誘導が悪い。俺からは貨物で前方の下は見えない。よく確認して貰わないと困る」。

その言葉と起きたことで、意気消沈しているプロックフェルをかばうようにヘンツェは冷たく言い放つ。

「それは、おまえが通路の間隔を見間違いたせいだろう。俺が見るところにエナはちゃんと誘導していたぞ」。

するとメイソンはキャリアから飛び降りてきてヘンツェの胸ぐらをつかんで拳を上げた。しかし、それは降りなかった。それは、彼の腕をしっかりとプロックフェルが掴んでいたからだった。

それを振りほどこうと思えば、彼にとっては容易に振りほどけるのだったが、女性を邪険に扱うのは彼の主義では無いので仕方なく手を下ろすのだった。

そんなごたごたを見てアビンは、二人をなだめるようと中に割って入る。

「事故だとしても怪我人が出なくて良かったではありませんか。それとも、これからわざわざ怪我人を作るのですか」。

彼らは、アビンの言葉をもっともだと思いながらもこの若者に、指摘されたことには苛立ちを覚えた。それは、彼が部外者だからだった。しかし、ここは知らない仲間でもないの二人は大人に振る舞って見せることにした。

「いや、アビン君。君の意見はごもっともだ。なあ、お堅いヘンツェ」。

「ああ、そうだな。まずは、損害報告と行こうじゃないか」。

どうやら、大人の対応にはならず互いに皮肉を言い合ったのだった。

そして、さっきまでのことは無かったように互いの肩を叩いて、損傷した貨物を調べ始めた。

「ずいぶん派手にぶつけたな」。

「おもいっきりが、良いんでね」。

「どうせなら木っ端微塵にすれば片付けも楽なのだが」。

「うるせい、勝手に言ってる」。

「しかし、これは」。

そう言ってヘンツェが散らばって物を拾い上げる。

「おいそれって、軍用の爆薬じゃないか」。

「そのようだな」。

慌てふためくメイソンにヘンツェは冷静に答える。

そして、彼は周りを見渡すようにしてから、

「あっちの、貨物もなにやら物騒なものを出してるぞ」

と如何にも他人事のように話す。

「その言葉に、メイソンは確かめるために、その貨物に近づいて物を取り上げて言う。「これは、PG-41軍用ライフルだ」。

それを確認するやヘンツェは、強い調子で言い放つ。「エナは、周りの者を集めてくれ、メイソンは貨物のラベルの確認を俺はチーフに連絡する」。

その言葉を聞いて、二人は直ぐに行動に移った。それは、まるで軍の演習のようだとアビンに思わせるものだった。

その様子を見てアビンはヘンツェに近づいて尋ねた。「ヘンツェさん。どうゆうことなんですか」。

自分に語りかけてくる無神経な人物に、一喝しようと振り向くとアビンであったのを確認してヘンツェは、ため息交じりに告げた。

「ああ、アビン君か。いや、まだ登録外の密輸品が紛れていたのさ。今それを偶然の事故で発見して誰の物か確認をしているところさ」。

そう話しているうちにプロックフェルに呼び集められたホルストの部下達が数名駆けつけてきた。

するとヘンツェは集まって来た者達を見回してから言った。

「先ほどの事故で、一部の貨物から不審な物が見つかった。これからそれを全員で回収して貰いたい。回収した物は、そうだな、そこの空いたスペースに集めてくれ、では始めてくれ」。

皆は彼の言葉に機敏に行動して、物騒な物品を回収して集積し始めた。その手際の良さに、アビンは感心ながら眺めていたが、いつの間にかトレッカーが自分のそばを離れて出口に向かって歩いているのに気がついた。

「待ってください。トレッカーさん」。

アビンは引き留めようと声を掛けてみたが、まるで無視するかのよう出口向かい、そして出て行ってしまった。

すると後ろの方で、ヘンツェが何か呟くようにこう言った。

「どうやら、奴さん焦り始めたかな」。

アビンはその言葉の意味を理解できなかったが、何かあるに違いなど感じてはいたもののそれを問い尋ねる暇も無く、トレッカーの後を追って出口に向かった。

ヘンツェはそんなアビンを見送るように見ながらプロックフェルを呼び寄せた。それから、予め決められていた手順を彼女に伝えてから、こう言った。

「B班に連絡、対象を確保」。

その言葉に、彼女は復唱してインカムで連絡を始めた。

アビンは完全にトレッカーを見失っていた。

途方に暮れていると、彼を呼び止める女性の声で後ろを振り返った。するとそこにはマクレガーが立っていた。アビンは妙なところに一般の女性がいるのが気に掛かったが、彼女の言葉がそれを消した。

「ねえ、アビン君だけ、トレッカー、見なかった。あの唐変木、わたしとの約束をすっぽかして、どっかに雲隠れしたのよ」。

その言葉にアビンは応えるようにこう言った。

「さっきまで、格納庫で一緒でしたが」。

「何をしていたの」。

「ああ、機械の扱い方の説明ですよ。一応隊員ですから」。

「そうなんだ、何の機械なの」。

「地中の仲にある物を計る機械ですよ」。

「そう、ところでトレッカー何か言ってなかった」。

「いいえ、何も」。

「そう」。

そう言うとマクレガーは、少し考える素振りを見せてから時計を見ていった。

「ありがとう。呼び止めてごめんなさい」。

「いいえ、どういたしまして」。

そして彼女はアビンが来た反対方向の通路を歩いて去って行った。

アビンはマクレガーの後ろ姿を見送りながら、トレッカーを探すのをあきらめようと

考え始めていた。実際に見失っているのだから何処に行けば良いのか分からないのだし、それに、同じ船にまだ乗っているのだからそのうちまた、会えるに違いなかった。最悪、この船を下りるときには一緒なのだからと。
そこで、彼は目的を変更していったん自分の部屋に戻り、それから、約束の時間に公園へ行こうと考え、そうすることにした

夜の自然公園

夜の自然公園

アビンは足早に通路を歩いていた。既に、船内時間はテラリーズ標準時間で午後二十二時五分前になっていた。そのためか、通路の灯りも少し暗く、壁にある風景のスクリーンも夜景に変わっていた。その中を歩く彼の足音だけが、軽く響く。この様なとき誰かが、彼を呼び止めてしまうなら、自然と身構えてしまうそんな感覚を受けるほど静かだった。これが、数日前には出航の騒ぎとそれに続く、ミュラの騒動を考えれば嘘のような状況でもあった。かえって無人の船内を闊歩しているのでは、との感覚すら覚えてしまうのだった。

そして、自然公園の入り口に到着した。すると最初のドアが開いて彼は続く通路を進む。こうして最後のドアが後ろで閉じられると直径七十メートルもある巨大な密閉空間となる。それで彼は数歩歩みを進めると、目の前に天空に渡り廊下を駆けた静寂な森の空間が広がっていた。見上げれば満天の星に渡る人工の廊下が星の瞬きの間に浮かび上がっていた。

そんな情景を見て、此処が船の中であることを一瞬忘れそうになる感覚が、非常に心地よかった。

彼は階段を降りて行き噴水のある広場まで来た。

ここまで来てほぼ二十二時であった。

そこで彼は立ち止まり周りを見渡した。人の気配が無かった。それもそのはずである、イベントもあるわけも無いし、既に時間も周りミュラの騒動も手伝って夜時間に部屋の外に出ようとする乗客は殆どいない。

たぶんこの時間でも活動しているのは、当直の乗務員か警備員、それにホルスト達だろうとアビンは思った。

すると彼の後ろから声を掛けてくる人物がいた。

「お待たせいたしました、騎士様」。

アビンは声のする方へ振り返る、とそこにはブラックが立っていた。

「驚きのようですね」

と話すブラックにアビンは警戒した。

「あなたがベリアですか」

とアビンは不信感をあらわにして言った。

「いかにも。騎士様」

とブラックは事も無げに答えた。それからアビンを品定めするように見ながら言った。

。「それにしても、あの公爵にベツタリ付いているのが、貴方のような諜報員とは彼も中々窮屈な生活をしているようですね」。

その言葉にアビンは、ブラックが自分の事や教授のことを知っているのを警戒した。

するとブラックは彼が、不審がっているのを解く様に話し始めた。

「まずは、わたしが此処にお呼びしたことを先ず言っておきましょう。それは、貴方が自分の身を顧みず英雄的な行動と、姫を守るナイトとして十分な活躍をされた事への讃辞としてのなのです。ご苦労様でした」。

その様に話されることをアビンは、まるで狐に摘まれるような面持ちで聞いていた。

。「おや、その様に言われるのが、納得いかないような様子ですね。それでいい、貴方のような方なら、これから先も面識を持っていても良さそうだ」。

アビンは語られる言葉一つ一つが理解できなかった。

「どうやら、合点がいかないようですね。先ずは、こう言えばいいでしょうか。ベリアエンジェル。いかがですか」。

ブラックは少し笑みを湛えながら言った。

その言葉に、アビンの警戒心は一気に上がった。

「そうそう。その反応です。ベリアエンジェルつまり悪魔の使いは、いろいろな組織の

仕事を請け負ってしましました。暗殺をね。貴方の上司からの依頼も受けたことがあります。そしてその依頼が納得し、エルの依頼主はそちらだつたり、他の組織だつたり、有耶無耶にされるので、わたしの手が後ろに回ったことはありません。ギブアンドテイクの関係を各々の客と培っています。そこで、この度は将来有望そうなるあなた様に、まずは面識を造っておきたかったのが正直な話です」。

その語られる言葉をアビンは驚きと苛立ちの混じった気持ちで聞いていた。それは、各機関が依頼主であるなら、容易に証拠はもみ消されるし、正体を不明とすることで話を有耶無耶にするのも簡単だからだ。そして、自分もその片棒をかつがされる事に将来な

するとブラックは彼の表情を見て言った。「そうです。貴方のような真面目な方は当方としても、顧客で会ってほしいのです。わたしの個人的な意見ですがね。そうで無くても殆どが腹の探り合いをしているのです。だから、此方も慎重にならざるおえません。ですが、貴方のような方は、暗殺の依頼などは出されないでしょう。その様な方とは、是非とも情報の交換と行きたいのです」。

その語られる話の内容をアビンは信じ切れなかった。そこでこう言った。「どうして、そう言い切れる」。するとブラックは少し微笑んでから言った。

「あなたは、まだ駆け出しですが、上の方達は高く評価していますし、利害に関係なく正しいことに突っ走れる方はそうそういません。ですから、情報交換の相手としては願っても無い方です。とくに彼方此方と発掘で飛び回る方は様々な事を見聞きします。その時にいろいろな情報を得るでしょう。それが此方では欲しいのです。ですから、此方から依頼することもあるかも知れませんが、話を伺いに参上するかも知れません。貿易商として、それから言っておきますが、この関係は貴方が暗殺の依頼をした時点で解消と

言うことにもなります。いかがですか。悪い話では無いはずですが」。ここまで話されたことを聞いてアビンは、悪い話では無い事は感じた。だが、このブラックをそこまで信頼できるか、それは彼が自信の秘密を先ず明かすことで、此方に断れないように仕向けているのと、たぶん断れれば自分は口封じされることは確実のように感じた。そこで、彼はこう答えた。

「分かった。その提案をのみます。それで、俺はどうすればいい」。

するとブラックは言った。「商談成立ですね。この度は此方から何もありません。ただ、お近づきの印として一つ情報をお知らせいたします」。

「どのような情報ですか」。

するとブラックは少しもったいぶった素振りをしてから言った。「そうですね、今回の暗殺のリーダーはトレッカーですが、彼も操り人形だと言うことです。意外な人物が紛れていますよ。いつも自分の後ろに気をつけてください。新しい関係が不意になるのはいやですからね」。

語られた言葉を、アビンは警告と理解した。そこで、彼は

「ありがとう。背中に目でも付けるよう努力する」

と言葉を返した。

するとブラックは笑みを湛えながら言った。

「これは頼もしい。冗句で返してくれるとは、よろしくお願ひしますねミスターアビン」。

そう言って彼は立ち去ろうとして背を向けてから、何かを思い出したのか最後のこう言った。

「そうそう、ギャラクシープリンセスって知ってますか。貴方ならその方のナイトになれますよ。わたしが保証します。では、これにて失礼」。

そう言ってブラックは立ち去っていった。そして、取り残されたアビンは、彼が最後に残した言葉に当惑していた。それは、身分不相応な話だったからだし、ギャラクシープリンセスは今亡くなって空席となっていることは、帝国の人間なら誰でも知っていることだった。

その様に彼が当惑している間に、ブラックは彼の視界から消えていた。そのことを知って、アビンは最後の言葉は自分をけむに巻くための言葉だったに違いないと思った。それから、ベリアエンジェルの側から接触してこようとは夢にも思わないことが起きたことと、彼からの商談で情報の共有者にされたことを考えて、向こうにいいようにリードされてしまっ、向こうの駒にされてしまったことが悔しかった。

けれど、今の彼の能力では殺されなかつただけでもベストだ、と考えなければならない事も理解した。

そう考えると、自分の上司も彼の顧客であり、他の諜報機関も同様だということからして、今回の申し出はどのような立ち位置になるのか、分からなかつた、中立なのか傍観者なのかそれとも、その先は考えたくなかつた。

そう考えている内に、今日は気苦労が多い一日だったと思ひだし、近くのベンチに座つた。そして、彼は暫くそのまま淡いライトに照らされた噴水を見ていた。

それから、どの位経つたのか、たぶん数分だったに違いない。誰かが後ろの階段を降りてくるのに気がつた。

こんな夜更けに一人で出歩く勇氣ある人物か不用心な者もいた者だとアビンが考えていると、その足音は彼の側まで来て、言つた。

「今晚は、アビンさん。こんな夜更けに此処で何をされているのですか」

とアンが彼に声を掛けてきた。

彼はどうして彼女が此処に、と思ひながらもこう言つた。

「さっきまで、忙しなく働いてたんで、ここで少し休んでいたのさ、此処は広いし、上を見れば星空も広がっている、狭い船の中とは思えないここで暫く星でも眺めていようと思つたのさ」。

すると彼女は彼の横に座り、彼がして見せたように星空を眺めて言つた。

「本当にそうですね。船の中とは思えません」。

そこでアビンは、そのまま上を見ながら言つた。

「遠い昔は、人は海を渡る目印として星を使ったそうだ。星を測り船の位置や進んでいる方角を見定めたそうだ、今は科学が進歩して全てがほぼ自動で行われ海だけで無く、今乗っている宇宙船ですらそうなのだから、楽になったというか寂しくなつたような感覚を受けてしまう」。

そう言つたのは、彼が幼年学校時代に訓練で経験したことの意味を教官が語つたのを思い出しながらだつた。

するとアンは、

「昔の人は苦勞したのですね。でもこんなすてきな光景を眺めなくなつてしまつたのはもつたないと思います」

と言つたのだつた。

その言葉にアビンは同意しながら尋ねた。

「そうですね、もつたないかも知れません。だからなんですか、こんな夜更けに一人で公園に来られたのは。それで無くても、不用心ですよ」。

するとアンはこう言つた。

「そうですね。では、アビンさんが守ってくださいますか」。

「俺で良ければ」。

「じつは眠れなかつたのです。それで、ここに来てみたんです。スクリーンに映された映像だとしても、本来なら見ることでできる景色でしょう。それなら夜空を見てみたいと思つたのです」。

その様に話すアンの横顔を見てどことなく寂しそうだと感じて、

「静かな夜空は人を詩人にするらしい」

と呟くように言つた。

「そうなんですか。では、詩ってもらえますか」。

アビンは突然の申し出に慌てて

「俺には、無理なんです。そういった事は苦手で」

と自分の情けなさを痛感しながら断る。

するとアンはいかにも残念そうに

「それは残念です。遺跡とか発掘して古代のロマンを思いに馳せておられる方なので、その方面でもロマンチックに語られるのでは、と思つてしまいました」

と言つた。

その言葉にアビンは返す言葉が無かつた。こんなところを教授に見つかつたのなら、

不甲斐ないその様には教育してないとか言われそうだった。
その様に考えているアビンをアンは励まそうと
「先日はありがとうございます。体調が悪くなったときに運んで頂いて、重くは無かったでしょうか」
と彼女なりの気遣いを述べた。
「いいえ、軽かったです」。
この言葉は気遣いからでは無く、本心からだった。
するとアンは
「他に感じたことはありませんか」
と彼に尋ねるのだった。
そう言われる意味をアビンは不自然さを感じるのだった。それは、彼女が何か別のことを気にしている、と言わんばかりだったからだ。
そこでアビンは言った。
「何もありませんが、何か心に掛かっていることでもあるのですか」。
するとアンは意を決したように真剣な表情で
「わたしを抱えたときに、お分かりだと思います。わたしの体が作り物だということを」
と言った。
その言葉にアビンは驚き迷った。どう言ったものか、彼は確かに思ったより非常に軽いと感じたのは確かだったが、アンのお話すようには感じられなかった。
そこで、こう答えたのだった。
「いや、その様には感じなかった。本当に、ただ軽いなどは思ったが」。
アビンは少し歯切れ悪く言ってしまった。
するとその事は、アンに分かってしまったのか
「そうですか。ですが、言葉を濁さないでください」
と言うのだった。
此処でようやくアビンは、彼女が自分の体のことが知られて恥ずかしく、その訳を彼に知ってもらいたく、訪れたのを。そして、自分の鈍感さを呪った。それは、たぶん彼女はアビンを探して今の時間まで、彼のいそうなところを探し回っていたのだろう。彼女の額や首筋に、汗が光っているのを目にして思った。
そこでアビンはアンの手をそっと取ってから、手の甲に右手を乗せてから言った。
「アン。心配しなくてもいいさ、作り物とは君が話さなければ分からなかったし、いまでもすら、その様には見えない。大丈夫、心配は要らない。俺が保証する」。
すると、二人の後ろから声がして言った。
「そうですね。その保証を態度で示してもらいましょうか」。
その言葉に、驚いて二人が声のする方を振り返ると、シオンが立っていた。
「まあ、いい雰囲気だったので、そのまま見過ごそうと思いましたが、保証されると仰ったようなので、ここは、伯父様に報告する必要もあるのではないかと確認させて頂きました」
とシオンは言葉を続けるのだった。
その言葉にアビンは、お節介にも首を突っ込んできたのでは、と思うのであった。しかし、彼の横でアンが恥ずかしそうに俯いているのを確認して、どうしたものかと迷うのであった。
するとシオンは二人の様子を見て言った。
「アビンさん、ここは仰ったことの釈明をお聞きしたいですね」。
どうやら、シオンの表情からして、おもしろがっているようにも見えた。
「俺に、どう釈明しろと」
とアビンは開き直って返した。
すると、シオンは笑みを湛えながら尋ねるのだった。
「アビンさんは、特定の女性とつきあっていますか」。
「いや」。
「では、アビンさんはアンのお事をどう思いますか」。
「可愛い娘だなと」。
「では、彼女の体が作り物だと聞いた今の気持ちは」。
「どうして、そうなのかなと」。
「彼女に対する気持ちは変わりましたか」。

「いや、変わらない」。

「だそうですね。アン」。

そう言うとシヨンは、彼ら二人の前に歩いて来て言った。

「アビンさん。彼女は事故で体の大半が作り物になってしまっています。でも、分からないでしょう。それは、亡くなられた彼女のご両親の苦心の作なんです。彼女がいかにご両親に愛されていたことが分かります。この船旅が終わると、アンは手術を受けることになっていきます。体を蘇生させた物と今の作り物を入れ替えるのです。全部ではないのですが、それでも先日のような問題が起こらなくなります。まあ、セシリアが色々手筈や努力してくれた成果なのですが、普通の人と変わらなくなります。アンが普通より軽いのはそのためで、その事でアンは自分の体のことを気づかれた勘違いしてたん

です。それから、男の人に抱きかかえられたのも初めてでしたし、アビンさんに好意を持ってしまったみたいなのです。そのことも了承して頂けませんか」。その話にはアンの体のことを説明しながら、ちゃっかりアンの気持ちをアビンに伝えるのだった。その話は、親切心からのものだろうが、アビンとしては重かった。彼自身、女性に好意を持たれた経験がなかったし、仮に提督の養女だとしても相手がまだ十五なのだからとの思いもあった。彼自身は十九なのだが、そんな思いもあり、アンの気持ちは理解したと言うことで、自分の意見は保留と言うことで決着を付けたかった。

そこで、こう言った。

「返事は、今しなければダメか」。

するとシヨンは当然とだと茶化すような素振りをしたのだが、アンが助け船を出してくれた。

「アビンさん。大丈夫ですから、答えて頂かなくても」

と言うのであった。

けれどその言葉を聞いて、アビンは

「そうだね。ランカスター教授の考古学教室に来てくれると助かる。こんどノースハイに行くんだらう。入学すれば、大学の教室にも希望すればいけるから、俺のいないときも多いが、発掘がなければ、他の学生と一緒にそこにいるから、アンが良ければ来るといい」。

と答えた。

「いいんですか」。

アンは飛び上がるように言った。

「ああ」。

アビンは少し照れながら言った。

するとシヨンは残念そうに言った。

「もう少しシャキッと云えないかな、そんなんじゃ、また、教授のぼやきが聞こえて来そうですね」。

そのことばに、アビンはごもつともを思った。

そして結果という、アビンはアンの好意を受けたのだが、甲斐性がなく保留または友達から始めよう、という事になったようだった。それは、彼が自身の帝国諜報員であることを知らせるべきか、迷っていたこともあったからだった。それに、アンとの関係を隠れ蓑にしよう、と毛頭考えていなかったからでもある。

どうやらまだ、彼には人を利用して物事を運ぶ、という考え方は出来ないようだった。性格にもよるのだが、元来人を利用して何かをなす、と言う考え方に抵抗感があるようで、それなら自分が行動しようという気質だ、それでもどうにも成らないときには、助けを探すか頼むのだった。

その様なわけで、彼の諜報員としての適正は低いと言わざるおえないが、逆に彼の気質が人に信頼に足る人物と映るという良い面もあるようだった。

だから、彼に対する上司の評価は、可もなく不可もなくというものだったのである。

その様なわけで、アンとアビンの関係はこの時から始まるのだった。

画策したのはシヨンである。

さて、夜もかなり更けてきていたので、三人は公園を出ることにした。当然のごとく二人を部屋まで送り届けたのはアビンである。

退場者

アビン達が公園で話をしている間に、ホルスト達に計画は進行していた。

既に、シヨンが手配した警備員の交代手筈は功を奏し二名の下船が決まりその事が通達されていた。そして、それら二人の警備員は、乗船を伸ばすのは得策でないと判断したのか、通達を受けると一時間後には下船の旨をデュパルク船長に報告、迎えの船を待つために乗降デッキで待機していた。

この二人は、今回のことを不審がることもなく、互いの無事を冗談交じりに話していた。

そんな二人をトレッカーは乗降デッキの横にあるインフォメーションセンターのカウンターで、事後処理の報告書に目を通しながら見ていた。

暫くすると、シャトルが到着し隔壁のドアが開くと、新任の警備員が二人現れて、前任の二人に挨拶をして交代の旨を告げた。

彼らはそれを復唱してから、互いの健闘を願いながら、新任は船内へ前任はシャトルへと向かった。

そのおりに、交代となった二人の警備員は、それとなくトレッカーを見て敬礼をして通路に消えて隔壁ドアが閉じられた。この光景は、新任の警備員に対する物と周りには映っていた。

その様子を確認すると、トレッカーはカウンターの中にいる警察官に書類を返して、感謝を述べてそこを立ち去るのだった。

その頃、ホルストの部下と警察官が違法な武器を搬入していたそれぞれの人物に面会していた。

その一人は帝国の商社マン。彼はテラリーズでの仕事を終え貨物と一緒に帰路についていたようだったが、その貨物には軍用爆薬といくつかの火器が入っていた。

じつは彼は帝国の軍警察の一人でトレッカーと行動を共にしていた人物だったが、その事は問われても一言も答えなかった。このことは彼が一味であることをホルスト達に確信させるものとなり、惑星に連行される事となり下船と決まった。

そしてもう一人、郷里に帰る為に荷物と共に乗船していた画家だが、彼の荷物から多くの火器、弾薬、エネルギーパックが発見された。

そして、彼も帝国の軍警察の一人でトレッカーの行動をサポートする役割を担っていた。彼も、問われることでトレッカーとの関係を臭わすことは、一言も話さなかった。当然のこととして家財が武器であった事からして、別のテロの関係者として疑われ、逮捕、下船となった。

これで計四人、下船となった訳だが、ホルストとしてはまだ始まりに過ぎなかった。このことでトレッカーがどう動くかは把握していなかったからだ。それに疑いがあるだけで、彼の仲間とおぼしき人物を拘束できるわけでもなく、返って残った者達の一人でも、明確な理由もなしに事を起こせば、警戒され此方の対処が難しくなる。それに、リストに上った者以外にも仲間が潜んでいる可能性は捨てきれない。さらに言えることとして、ホルスト達にはこの件に関しての行動の権利は低い、それも荷物の安全が確保されるなら目を瞑ってしまっても構わないレベルだ。非難されても通報の義務は、果たしているのだからとやかく言われる筋合いはない。かえって手を出すことにより荷物の安全が脅かされることの方が、此方としては、と言うより会社の上の方としては支障があるのだった。

そう考えると彼としては後は、ミュラーに一任してお手並み拝見と行きたかった。

しかし、どうもそうは行かないらしかった。それは、爆発物が発見された事からして、船を公爵諸共爆破という最終手段を取ることが考えられる、となれば此方も黙って見てるわけにはゆかない事になるからだ。

そこで、此処は先ず四人減らすことが出来たこととし、次に後のリストに上がったメンバーをどうやって減らすか、考えなければならない。

さしあたっては、ミュラーと話さなければならない。

そこでホルストは、既に深夜の時間に入っていたが、ヘンツェを呼んだ。

「ヘンツェ、不審人物のリストを持っているか」。

すると、彼のもとにヘンツェが飛んできて言った。

「はい、チーフ。此処にあります」。

そこで、ホルストは彼からリストのボードを取って確認してから、ヘンツェに言った

。「悪いが、少しつきあってもらおうぞ」。

「なんなりと」。

とヘンツェは答える。

「では、付いてこい。話を詰める必要が出た」。

そうホルストは言いつつミュラーとの打ち合わせに移動した。

彼らが移動した先は船長室だった。

それは、当直が変わり他の者達が、ブリッジに付いていたからだった。そこで、打ち合わせの場所を船長室にしたのだった。これには二つの理由があった。先ず一つは、ホルストやミュラーが彼のところに訪れても、不審がられないからだ、ホルストの場合は船の修理や荷物の管理を一任された都合上、報告をしばしばするために訪れるからだ。ミュラーに関しては公爵の伝令として船長室に出入りするため、今回の事件の為に、帝国からの圧力緩和として取られた事で、デュパルクには心外な取り決めだったが、不審事件のため帝国の調査が入る、つまりミュラーはその調査を任される形になり公爵の下で働くことになった。当然のこととして、ミュラーの身分は明らかになったが、公爵付きの武官と言う形で体裁を取った。

二番目の理由は、寸断されたい通信機能と、船の全体を把握できるサブシステムが此処にあるためだった。逆にトレッカー達に此処を占拠と此方の分がかなり悪くなる。ついでにここから直接各セクションに連絡できるのも利点だった。

と言うことで、デュパルクの浮かない顔をよそに、此処を会場場所を選んだのだった。船長にはいい迷惑なのだろうが、母港に着くまではこれ以上の損害を出したくもなく、利害上協力することを承諾したのだった。当然、アビンも連絡時は此処に顔を出す事になっていた。

そして彼らはデュパルクの浮かない顔をよそに、話を始める。

「先ずは、予定通り4人に退場してもらった。これは確認できてるか」。

とホルストが言いつつミュラーは、確認したことを伝えた。

「さて、残る人数だが予想でトレッカーを含めて残り約九人ということになる。記録を信じればだが、これについてはどう思う」

とホルストが言った。

するとミュラーは

「約九人と言うのは、調べられる限界でだ、今回引っかかってない人物もいるかも知れないと考えた方がいい」

と付け加える。

それについては、ホルストも同意見だった。

「ところで、あの若いのはどうする」。

ミュラーがアビンをさしてそれとなく言った。

すると、ホルストは素っ気なく答える。

「彼には、少しそのまま単独行動してもらおう。彼からの情報は定期的に伝えてもらうことになっているが、此方の情報は、必要最小限の事だけにしておこう」。

この答えは、ホルストが彼をそれなりに買っていることと、公爵の意向も彼には独自で動いてもらうことにしていたためだ。ただ、このことはミュラーには内緒だった。だから、如何にも気にとめていない素振りを見せて見せたのだった。

「それでいいのか、かれも仲間なのだから、それとも頼りにならないのか」

とミュラーは少し不服そうに言った。

その言葉を聞いてホルストは、彼には暫くはそう考えてもらうことにした。

それで、まったく気にとめていないような素振りで、

「経験の無い者には、少し大人しくして見て学んでもらうことにする」

と少し冷たく言った。

これには、ホルスト自身に考えがあった、事の成り行きは公爵から一任されていたから、ミュラーがこの言葉でどうするか様子を見たかった。彼の行動で、此方の選択肢を増やそうとの考えもあったからだ。

するとミュラーの表情が変わるのをホルストは確認した。それからミュラーは

「その方が、初心者にはいいかもしれない」と言っ
とて納得したようだった。だが、ホルストは彼がすんなり
は納得していないことは承知していた。それは、それで良
かった。ホルストはミュラーの思考パターンをある程度知
っていたから、此方の出方でどうするかある程度把握でき
た。そして、ミュラーが此方の情報の肝心な部分も、アビ
ンにそれとなく伝えるだろうと思った。これで、小難し
い話をする相手を一人減らすことが出来たのは確かだ
った。なにせ、経験がそれぞれ違いすぎるので、話され
たことを理解するのに時間差があると事を進めにくい。つ
まり、ミュラーをアビンへの指示や説明の解説者に、それ
となく仕向けることに成功したとホルストは感じていた。
後は、実際そう機能しているかはそれとなく確認すれば
いいことだ。質問を用いて。さて、ホルストは本題に入る
ことにした。「残った九人プラスアルファだが、此処は便
宜上十人としておこう。常に影なる他の人物を想定して事
を進めることにする。これは、いいかな」。そうホルスト
は、船長室に集まっている者に確認を取った。すると、そ
の場の全員が肯いた。此処に経験不足の者がいるとこ
うはいかない。質問してきたり、その言葉を理解せず
に話しに加わり後ほど足を引っ張りかねない、そうして、
話が長引いたり時機を逸したり、作戦での損失者を出し
てしまいかねない。そして、続けた。「これからは、大
変だ。最初に四人退場してもらった。ほぼ正規の手続き
をしてだ。けれど勘のいいやつは気がつき警戒するだ
ろう。此方の次の一手は、その警戒心を削ぐ形で退場
してもらわなければならない。たとえば、偶発的な事故
や喧嘩での負傷などが起これば望ましい、死亡者は出
したくない。かえって警戒を強くする。重傷でなく
ても構わない。この船を早く降りる必要になればいい。
案はあるかな」。その言葉に、ミュラーは口を挟む。
「重傷でない怪我で船を降りる必要がある程度って、
難しいのではないか」。 「いや、喧嘩による負傷の
場合はそうなる、警察のお世話にはなるがな」。すると
ミュラーは軽蔑したようにホルストを見た。けれど、
そんなことはお構いなしに話を続ける。「この場合、
此方が手持ちの人員最高二人を失う形で向こう側の
一人を巻き添えに出る。下手なことをしなければだ
がな」。こう話しながらホルストは既に誰を当てるか
考えていた。その言葉にミュラーは尋ねる。「喧嘩を
演出するつもりか」。するとホルストは口元に笑みを
湛えながら言った。「まあな」。その言葉にデュパルク
の顔は険しさをいっそう増したが、他の者はそれに
気を止めること無く手筈を伝えた。そして、この度は
相手の警戒心を削ぐ為にミュラーは加わらないこと
となった。かえってミュラーの役目は、トレッカー
との今後の打ち合わせをする事で、関係を外す事に
努める事となった。その様なわけで、アビン達
が公園で話をしている間に、ホルスト達の演出が
始まるのだった。ただ、シヨン曰く寸劇との評価。

寸劇

翌朝とは言っても宇宙で朝をどう判断するかは
難しいところだ。ある者は惑星の影からその
星系の太陽が現れるのを朝という者もいるし、
その星系での標準時間でそうとも言う者も
いる。そして、この場面ではテラリーズ
標準時間で朝として始まる。つまりこの
船での朝である。「お早うございます。チーフ」。
少し眠そうな感じで話す、エリザベト・ブル
ッフは、ホルストが返事もそこそこに、黙
々とインフォメイションブースで書類の整
理をしているのに気付く、慌てるように、
「チーフそれは、わたしがしますから。少し
休んでいてください。昨日も遅かったでし

ように」
と言った。
するとホルストは、構わないで欲しいとの素振りをしながら、奥の方を指した。
その促された方を見たブルッフは、デュパルク船長が乗員と共に各所を点検している
ようだった。そこで、彼女もブースの中に入って貨物のチェックを始めた。
ところで、彼らが船のインフォメーションブースを使えるように成ったかという
ミユラの事件後に搬入されたコンテナを調べる事や他に移さなければならなくなった
為に、ホルスト達がかり出され過剰勤務との見返りに、船の設備の幾らかを自由に使用
できる許可をもらったのだった。これを機に、移送先の手続きも此処で済ましてしま
おうとの魂胆もあって承諾、超過勤務手当プラス面倒な手続きを船会社経由で押しつける
事が可能になったので、諸手を挙げて承諾したのだった。
とはいえ何もかも自由とは行かない当然監視が付くわけで、それが副長のマティエ
リだったが、これが如何せん役不足でありホルストに丸め込まれるや、ほぼ彼の言いな
りなのだった。だから今のように船長の見回りが来るのだ。
そして、デュパルクとしても自分の船で、これ以上やりたい放題を頼っておくわけに
もゆかず、時々見回りに来るのであった。
その様な彼の心境を知ってか知らずか、無視しているのか分からないが、彼の面目だ
けは保つように事を運んでいるのだった。
「お早うございます。デュパルク船長、ご機嫌はいかがですか」。
だから、というわけではないが、軽く朝のご機嫌取りを女性に任せてホルストは、
軽く挨拶をしただけで後はブルッフに任せ、書類に目を通していた。
「ああ、お早う。忙しそうだな」。
船長は女性の挨拶を無下には扱えず、苛立ちを押さえながら平静に答える。
「お気遣いありがとうございます。発送し直す貨物が多くて苦労しています」
とブルッフは答えながら、苦労してるのは一部だけどと思っていた。
「いや、仕事の手を止めさせてすまない。続けてくれ」。
その言葉に船長としてもまんざらではなく、優しく答えるのだった。
「ありがとうございます」。
そう言うと、ブルッフはホルストの横で書類の整理を始めるのだった。
その様子を見て、デュパルクは如何にも満足そうにしながら通り過ぎていった。
これで先ずは朝の顔見せは終わった、と思いながらホルストはアビン達が来るのを待
つことにした。
それは、既に始まっている計画にアビンがどう反応するか、どう振る舞うか見てから
彼が、使えるか判断しようと考えていたからだった。当然のことながら、シヨンがくっ
ついて来るのは承知していた。ただ、その他プラスアルファは予想外だった。
それは、彼がアビンと約束した時間に訪れたが、シヨンとそれからアンが居たことは
予想外だった。それは、目撃者が多いほど効果があるとはいえ、アンが居ると話が直ぐ
にでも提督に伝わることになる可能性が出てくる。そうすると事の成り行きの説明を求
められることになり、余計に時間を取られることになる。今回のような、人を引っかけ
るのに計画的に女性を関係させる場合は、何かと五月蠅いからだった。
「お早うございます。ホルストさん、此方で良かったですか」。
アビンは挨拶も早々に確認を取るのだった。
「ああ、ここで待ち合わせだ。今、書類を整えるから少し待ってくれ」。
ホルストは予め伝えていた用件の準備を始めながら、答えるのだった。すでに彼に伝
えていることは、コンテナの確認の手伝いなのだが、実際にはこれから行う、計画に一
役買ってもらうために招いたのだった。
そして、彼が書類を整えていると、シヨンが彼の様子を覗くように見ているのが、
分かった。それは、勘のいい娘なので既に、此方の計画に感づいているゆえの仕草なの
かも知れないとホルストは思った。
ただ、シヨンは挨拶だけしかしていないので、どうやら此方のことに口出しはするつ
もりは無いようである。
それで、書類が整ったのでホルストは立ち上がりながらアビンに声を掛けた。
「では、アビン君これが君にお願いする貨物の書類だ。それから確認が出来たら、そう
だな午後にでもここに来て書類を返してくれ。俺が居なかったらうちのメンバーは知っ
てるだろう。誰かは此処に居ることになっているからその者に渡してくれ」。
そう言ってアビンに書類を手渡した。

「分かる。アビンは受け取りました。午後一に、まだ確認を。最終は、確認を。遅れないように頼む」。そうだな、両手に花で浮ついで、遅れないように頼む」。その言葉はアビンにとっては、言い返したい気分でもあったが、アンの事を考えるとその言葉を飲み込んだ。

その時、奥の方から言い合いをしながら近づいてくる声があった。そして、現れた人物は、ナターシャ・イワノビッチとジャン・ルクレールにフランツ・ティスという人物だった。彼らの争いはコンテナの取り違えが原因だった。その理由はこうだった。ルクレールが書類の指示をイワノビッチに渡したが、そのページが一つ違っていたのであった。それで、請求書を受け取ったティスが記載内容が違い、多くの料金が請求されていたことに苦情を申し入れたのだった。その事を確認したところ、書類が間違っていたことが確認できたので、ルクレールが二人に謝罪したままでは良かった。ところが、当のコンテナが無くなっていたのだった。確認を取ろうにも、すでに運び去られていてシャトル内でステーションに移動中とのことだった。それを、直ぐに戻せと言うことになったのだが、移動中とゆうこともあり直ぐには引き返せない、との返事が返ってきた。そのため二日待つて欲しいと伝え、ティスは渋々了承したのはいいが、イワノビッチがそのために仕事が遅れることにルクレールにくっついてかかったのだった。その場に居たティスは仕方なくその場の調停役にさせられたのだった。

このティスという人物はアビンが確認した、トレッカーと繋がりが疑われている人物だった。そして、此処までの内容を聞くに及んで、当然、不利益を被った彼自身も苦言や訴えを持ち出してもいいくらいなものだが、それを持ち出さず低姿勢のまま、事を穏便に済ませようとする辺りかなりで来た人物に見て取れる。

それでも、手続きとして貨物の別移送手続きを取らないのが不思議だった。記録上では、かれも数日後別の船で目的地に向かう手筈になっていたからで、その方が効率的だし、今回のトラブルにしても此方のミスとして、此方の費用持ちで処理を出来たはずで、本来なら彼のような商社マンは当然そうする。

つまり彼としては、そうできない理由があることになる。この時点でトレッカーの一味であることの確証が上がった。そうで無いにしても、そのコンテナを自分の身近に置きたい理由がある事の証拠である。当然、戻すときにそれを此方は確認できるわけだが、ホルストはそうする気は無いようだ。アビンは思った。

そして三人は、ホルストの居るブースに来て経緯を述べてから書類の訂正を求めるのだった。当然のごとく、ホルストは全てのことを承知していて慌てた素振りを見せること無く、まるで事務屋の仕事よろしく淡々と事を進めるのだった。ところが、それを見ていたイワノビッチが我慢できず書類を引ったくって自分で処理しようとし出した。此処に及んでルクレールとティスがその止めに入ったが、次の瞬間、彼女のパンチがティスの顔面を捉えた。

するとティスとルクレールは床に倒れ込んだ。直ちに、ホルストは警備員を呼んだ。起きた出来事で驚いているアンをションに任せて、アビンは二人のもとに行って助け起こそうとしたが、ティスの方は起き上がれない程に打ちのめされていた。たった一発なのにアビンは思ってたが、彼女の腕っ節をちらりと見て納得した。どうやら彼女は軍隊上がり、それもかなりハードな部隊にいたのだろう、と思わずにはいられない太さをしていて。

少しすると、警備隊員が二人来た。アビンが随分早く来たものだと思ったが、その時にこれは計画的ではと思えた。これは、ある程度裏の事を知らされている者だからそう判断できるのだが、アンの様子からはこの出来事は、偶発的な事故と目に映っているようだった。

到着した警備員は、一人は起きた経緯について質問していたが、もう一人はティスの様子を見ていた。どうやらティスは起き上がれない程に打ちのめされてしまったらしい。

この状況を作り出した者達は、如何にも突然の出来事に当惑したように話をする。そして関わった者達は、起こしてしまったことに意気消沈しているように振る舞っていた。特に彼女は、手で顔を覆って起こしたことを詫げるのだった。ただ、当の犠牲者には聞こえてないようだった。

ところでションは、その光景をアンを庇いながら不満そうに眺めているのだった。どうやらかなり気に入らない状況なのだろう、とアビンは思った。

そこへ押っ取り刀で、この船常駐となったロックウエルの警察官が一人現れた。すると警備員達は先程まで聴取していた事柄を彼に伝えながら、互いに話しあったり状況の確認をしあったりし始めた。

それから暫く、一通りの検証を済ませてから結論が出たのか、イワノビッチは障害の廉で拘束、本星で簡易裁判を受けることとなりシャトルで降りることとなった。ティスは、軽い脳しんとうだろうが精密検査をする必要があると、彼も本星に降り一週間ほど入院との手続きがなされたのだった。ルクレールはとゆうと止めに入った側なので、詳しい事情を招集するため今日一日は、任意同行と、裁判時の証人として出廷を言い渡された。

この状況でのトラブルとして、ホルストの人為的損失は一人半とゆうことのようにアビンは判断した。この時点で、彼らの振る舞いからこれは計画的に当事者の排除を執行したようだと思った。

そして、自分とシヨンとアンを関係の無い目撃者として、扱うために今日の打ち合わせを此処でする事に決めたのだと分かり、気を引き締めないと何時また利用され、シヨンやアンを危険な目に遭わせかねないと判断した。

そんな彼の様子をホルストは、それとなく感じて分かった。それ故に過大評価する訳では無いが、アビンをそれなりに使える人物と判断した。

それで結果として三人がこの場から退場したのだった。ただ一人は担架で運ばれていたのだが、それをシヨンは辛そうに見ているのだった。

彼らが去ってからシヨンはホルストに言った。

「随分乱暴な寸劇ですね」。

その言葉にホルストは、

「分かるか」

と短く答える。

「ええ、他に方法は無かったのですか」。

シヨンは冷静な口調で尋ねる。

「俺は、演技が下手なのだ。大根で悪かった」。

茶化すようにホルストが答えると、

「演技だけでなく、シナリオもです」

とシヨンは言っただけで済ませた。

するとホルストはいかにも残念そうに、

「それは、申し訳ない。次に期待して欲しい」

とさらに何かあることを臭わす発言をした。

「それで、あと何人ですか」。

シヨンは彼の言葉に気を止めず、静かに尋ねる。

「予想は八人」。

ホルストは散らかった書類を片付けながら言った。

「まだ、多いですね」。

「まあな」。

ホルストはシヨンにそう答えてからアビンにこう言った。

「コンテナのチェックが終わったら、ここに来てくれ後で伝えたいことがあるから」。

その言葉にアビンは

「分かりました。終了後伺います。それでは、チェックに向かいます」

と言って、シヨンとアンを連れて格納デッキに向かった。

その後ろ姿を見送りながら、ホルストは鍛えがいのあるやつだと思っていると、ブルツフが、

「チーフは、彼を気に入られたようですね」

と彼の気持ちを言い当てたのだった。

「まあな、そうで無くては困るが」

と言ってからホルストは

「さて、残りの仕事を済ましてしまおう」

とブルツフに促した。

コンテナチェック

アビンとシヨンそれからアンは、ホルストから受け取った書類に基づいて格納デッキに来ていた。既にホルストの部下達が来ていて、コンテナの移動や固定の作業を行っていた。

その様子を見ながらアビン達が中に入ると、それに気がついたのかヘンツェが声を掛けてきた。

「お早うアビン君、今日は両手に花かい」。

その言葉にアビンは返事に困り、アンは顔を赤らめて俯く、そしてシヨンは、

「そこ、無駄口叩かず仕事する」

とわざと苛立っているふりをして言った。

するとヘンツェは、如何にも上官に対する挨拶をして、

「これは失礼しました。アリス殿」

と此方も少し茶目っ気を示して答えるのだった。

その応対にアビンは、何となく気が滅入ったが尋ねた。

「シヨン。何時も君たちはこんな風に仕事をしてのかい」。

すると、彼女は少し考えたような素振りをしてから、

「そうですね。そうかも知れません」

と笑顔で答えた。

アビンは付き合ってもらえないと思い、コンテナの確認の仕事始める為に、指定された場所に急いだ。

そのアビンを追っかけるようにシヨンとアンが付いて歩きながら、冗談だからと詫びを入れるのだった。

するとアンがアビンの横に並びながら言った。

「アビンさんはヘンツェさんがシヨンのことをアリス殿と言った意味、分かりますか」

。「それは、この前に聞いたよ、劇をやったときの時のキャラの名前だろう」。

「そうでは無くて、何で殿と言ったたのでしょうか」。

するとアビンは少し考えてみたが分からず、目的の場所に来て足を止めてから言った

。「どういう理由でなんだ」。

その時、シヨンは二人の会話に気がつき、

「その話は、関係ないでしょう。確認を早く始めましょう」

と言った。

するとアンが彼の耳元でこっそり言った。

「じつはね、シヨンは艇長さんなの、シャトルでは機長さんってところみたい。どうやら皆さんの話では、その資格を持ってるらしいのだから、殿またはサーを付けて呼ぶこともあるらしいの、でも、あの性格でしょう嫌がるらしいの、だから、さっきのように冷やかに使うくらいだそうよ」。

アビンはその話を聞いて、これは随分若い艇長さんだ、マスコットの間違いじゃ無いのか、と思ったが提督の家族であることを考えると、まんざらあったとしても不思議にも納得してしまいそうな話ではあった。

その様に考えながらアビンは、アンに、

「教えてくれてありがとう」

と言ってから、目的のコンテナを見上げ、書類の用紙をめくり番号を確認する。

それから、シヨンに言った。

「DF24RWA91だ、スキャンしてくれ」。

するとシヨンは手に持っていたハンドスキャナーでコードマーカールを読み取る。それから、表示されているデータを読み上げた。

「テラリーズ、トウキョウ、中央、C142、ハイバードビル5F、ファルステックカンパニー、ハインツバッハ発。クリーブル、デファイム、SD、FJ46、ハルネットカンパニー。シシルエ着。貨物工作機械。アンリツTH3P2パーツ。質量2.4k

となっ

「問題は無さそうだな、書類と合っているし、追調査でも同じ結果だ」。

「そのようですね」。

「ところで、随分重いな」。

「中古工作機械部品ですから、重い嵩張る、けれど丈夫とゆう代物です」。

「そうゆうものか」。

「そうなんです」。

最後にシオンは当然とばかりの口調で会話を終える。

その言葉を聞いて、アビンは暫くはこんな会話が續くのかと気が重かった。

けれど、ことはどうあれ請け負った仕事は、こなすのが彼の主義でもあり、隣にアンが書類のチェック項目の記録と、メモを記載する助けをしてくれているので、投げ出すわけにも行かなかった。

これは、何かのことでアビンがこの仕事の手を休めることが無いように、シオンが取りはからったことでもあった。それはアンの気持ちを利用するようなことになり、後ろめたく申し訳なく思っていたが、彼女を一人にするのは危ないような気がしていたからでもあったからだだった。

さてこの様な感じで、アビン達がコンテナをチェックしていると、十七個目のコンテナの前でマクレガーに出会った。

「これは、マクレガーさんこの様なところでお会いするなんて、どうされたんですか」

と言ったのはアビンだった。

彼女はアビンが声を掛けるまでは気がつかなかったのか、ビックリしたような様子で

「これは、アビン君にシオンちゃんにアンちゃん。お早う。あなたたちこそどうしたの」

と言葉を返してきた。

「私たちは、頼まれ事でコンテナのチェックの手伝いです。マクレガーさんは」。

アビンは答えを返して尋ねる。

「ああ、わたしは取材班の機材のチェックでさっきまでスタッフとそこで仕事してたの」。

そうやっていったん言葉を切ってから、思い返したように、

「聞いてくれる。提督とランカスター公爵の単独インタビューが可能となったの。それぞれの都合もあるから、別々の時間だけど、提督は二日後で公爵は四日後なの、今日から明日までは準備で忙しくなりそう、局との内容の打ち合わせも詰める必要のあるし、場所の準備もあるし、もう大変なの」

と言うのであった。

その言葉を聞いて、動くなら四日後かも知れないと思った。

それを察するようにシオンが尋ねるのだった。

「よく、了承を取り付けられましたね」。

すると、彼女はウンザリするように言った。

「そこなのよ。顔見知りのトレッカーに、この前から単独インタビューのをお願いしてたの、ところが聞いてよ。昨日確認をしたらすっかり忘れていたのよあの唐変木、提督や公爵はこの船を降りるじゃない、この機会を逃したら何時出来るのよと食い下がってやったわ。すると今から話すからと言って、三時間待たされたのよ三時間も、まったく。まあそれでも許可が出たのだからよしとしなきゃね。それで此方は打ち合わせや機材の準備で大わらわなのよね、とこうしては居られない。うちのスタッフを見なかった。大きなカメラを担いでるから目立つんだけど」。

お言葉にアビン達は互いを見合ってから、

「いいえ。見かけてませんが」

と答えた。

するとマクレガーは、慌てて、

「ごめんなさい。急ぐから」

と言って格納デッキの外へ出て行った。

その様子を見送りながら、シオンがアンに尋ねるのだった。

「伯父様のインタビューの話し聞いている」。

「いいえ。わたしは何っていません」。

「そう。ありがとう」。

確認をした。このことは終わったのか短く会話をシヨンは終わった。
その会話がアビンには気になりシヨンに尋ねる。
「何か気になることもあったのか」。
するとシヨンは肩を竦めて「いいえ」と答えるだけだった。
しかし、アビンはその様子から何かありそうだと感じた。
「次に、行きましょう」。
シヨンはアビンの思考を遮るように促すのだった。
その言葉に、アビンは仕方が無いかとコンテナのチェックを続ける。
暫くして、リストにあるコンテナのチェックを全て終わると、シヨンはアビンにリストの用紙を見せてくれるように求めるのだった。何故その様に求めるのか、気になったが尋ねること無く渡した。
「ありがとうございます」。
そう言ってから暫くリストを確認してから言った。
「このリストは、予め問題ないと判断したもののリストです。つまりこれは、私たちがあの場所に呼び出すための口実で、その後、ここに来るように仕向けるためのもののようなのです。アビンさんも気付いてませんでしたか、今朝の寸劇。そして私たちを此処に暫くと止めておきたかったようですね」。
その言葉にアビンは答えた。
「たしかに、今朝の出来事はわざとらしいかった。といっても、ホルストさんたちの事を知らない人なら、偶発の出来事にしか見えないと思うけど違うかい」。
「それは、確かにそうですね。私たちは彼らを知っている。アンはどのように見えたの」。
シヨンは話をアンに振った。
その言葉にアンはビックリしてオドオドしたけれど、質問には答えるのだった。
「は、はい。わたしにはお二人が、手違いで喧嘩される方とは思えませんが」。
その言葉にシヨンは、
「そうね、知ってる人には不自然に見えるけど、知らない人には偶発的に見える。アビンさんはそれ程親しく知ってるわけでは無いはずですが、どうしてそう見えました」と彼に尋ねるのだった。
その言葉にアビンはそれとなく自分の考えを聞き出そうとしている、と思えるのだった。しかし、不信感が無かったので正直に答える。
「それは、彼のトラブルでの処理の仕方と警備員の到着が早すぎた。どちらも偶然と言えればそれで通るかも知れない。けれど商社マンなら当然の事として自分に有利に事を運べる機会だし、そうで無くてもルクレールさんも相手に有利な条件を提示することで事を収めることが出来た。それくらいの融通や判断が出来る方のように見えます。それにイワノビッチさんもそう話すことが出来る方では無いでしょうか、この前、部屋で集まった時に話をする機会がありましたが、その様な方と見えましたから、だから、わざわざ事を大きくしてあそこに現れること自体不自然だから」。
シヨンはアビンの答えを聞いて、少し肯きながら言った。
「ほんの少しの時間で、いろいろ観察されたんですね。そうでないと教授の助手は務まらないかも知れませんね」。
その言葉には感心と少しの褒め言葉が含まれていた。
ただ、アビンはその言葉の意味するところを理解しなかったのか、意に介さなかったのか、こう言うのだった。
「教授からは余所見が多すぎると良く言われるよ」。
そう言いながら笑ったが、自身の残念さを曝すことになったのを後悔していた。
するとシヨンは、少し彼のつかみ所のなさをどう判断すべきか思案しながら言った。
「そうだとすると、注意深いと取れますから、あの教授には丁度いいのかも知れませんね」。
この言葉は本心であり、同じようにつかみ所なさを持っている教授といい勝負だとの結論を出していた。それゆえに彼を自分の助手に選んだのだ、とゆうことも理解した。
それからシヨンはアビンに言った。
「では、アビンさん、戻りましょうか」。
その言葉にアビンは自分がいつの間にか、良いようにリードされていることに気がついた。そして、シヨンもそうしていることを心得ており、それに気がつかないようでは困るとも思っていたのだった。

打ち合わせ

アビン達がコンテナをチェックしていた頃、ミュラーはトレッカーとビットンブルーと提督のインタビュー件で打ち合わせをしていた。この時点で彼らの立場は微妙なものとなっていた。

たとえば、ミュラー自身は、始めは教授の助手として来たが実際には、教授の護衛として内務省から派遣されていた。しかし、事がここまで進んでは、今の彼はテロ対策のため公爵付きの武官という肩書きとなっていた。そしてトレッカーは同じく教授の助手で来ていたのだが、今は警官だが教授の助手として同行してることとなっている。最後に、ビットンブルーは提督の現在秘書としてこの場に居る公的秘書だ、けれど提督にはもう一人秘書がおり、それは私設秘書でアンである。このことは一部の者しか知らないことであり、ビットンブルー自身は知らされているが、此処に居るあとの二人は知らない。

さて議題として提督のインタビューでの流れと警護に関して話がなされることになった。

最初に話し始めたのはビットンブルーで、当然、提督側の要望を先ず伝えるのだった。

。「先ずは、提督からの要望ですが、インタビューの時間は午後にさせていただきます。それから、場所は広い場所を用意してください。親族が同席の事とありますが、これは必ずしも一緒に座ってインタビューを受けると言うことではないようです。見える所でインタビューとの事のように。それと、テーブルは木製のグロスウッド、メーカーはハーベルに用意する飲み物は」

と言ったところで、ミュラーが言葉を遮って言った。

「ちょっと待って、何処まで続くのだ。警備と関係ないじゃ無いか」。

するとビットンブルーは平然と言ったのけた。

「だから、要望と言ったじゃありませんか」。

それを聞いてトレッカーは笑みを浮かべながら尋ねた。

「あなた、秘書になってまだ、日が浅いでしょう」。

「ええ、そうですけど」。

彼女は正直に認めながら、襟を正すような素振りをする。

「そうでしょうね、提督の話した事をそのまま全部メモしてるような要望をしてる、メモの棒読み。普通は肝心な点だけ要点を抑えて外せないことだけ伝える。後は予定まで詰める。可能かどうかと、今の貴方は資格を取れたばかりの新人が犯すような事をします。間違いでは無いが正しくは無い」

とトレッカーは指摘するのだった。そうしなければ、打ち合わせは長くなるし、記録書面も長くなる。今は時間が惜しいし、要望も多すぎるとインタビューアも苦勞するので此処は最小限にとどめたかったのもある。

ところで、ミュラーは彼の言葉を聞いて今までトレッカーに対して持っていた考えを改めることにした。たしかに、気に入らない相手ではあるし、現に敵でもあるのだが、悪いやつでは無いらしい。気むずかしいが、相手を気遣える人物でも有る。そうで無ければ、下手をすればかなり分の悪い暗殺計画に、自分の部下が付いてくるわけでも無い。もし違った状況で会っていたのなら、気に入らないが頼りになる相手であると思えた。

そこでミュラーは要点を先ず絞ることにして言った。

「先ずは、要望の中の必要事項を聞きましょう」。

するとビットンブルーはメモを確認しながら言った。

その答えとは、先ずは場所として広い場所を使う、インタビューには親族が立ち会うただし見てるだけということ。インタビュー用に用意する椅子とテーブルは丈夫な物で出来ればテーブルの暑さは五十ミリは欲しいとのこと、警備の配置は要所のみで、トレッカーとミュラーが立ち会うこと、と短くまとめることが出来た。

「すみません。慣れていなくて」

と彼女は告げると、トレッカーはその労をねぎらう言葉を言った。

「いいえ。大丈夫です。始めは張り切りすぎて。誰でも犯すことですから良くも悪くも

です。これから経験を積みば大丈夫です」。

これでようやく話が前に進むとミュラーは思った。

先ずは場所からだ、広い場所というところの前パーティーを催した会場が思い当たった。それからインフォメーションロビーに、自然公園などが上げられるが、ここは提督の希望を聞きたいものだ。そこでミュラーは言った。

「広い所といいますが、どの位の広さを希望されておられるのですか」。

すると彼女はメモを見ながら答えた。

「そうですね。提督が話されていた事には、ギャラリーや入り口から二十歩以上離れた場所に椅子とテーブルを遅れくらいな広さとか仰ってました」。

その答えを聞いて、彼らはさっきの要望でも、まとめられていたうちだったのか、と思うのだった。

「そうしますと、物陰や人混みから少なくとも十メートル以上は話して欲しいということになりますか」

とミュラーが尋ねる。

するとビットンブルーは、自信無さそうに

「そうかもしれません」

と答えるのだった。

その言葉にトレッカーは、補足するように言う。

「そうしますとインタビュアーと提督から周囲十メートル以内には物は椅子とテーブル以外は置かない事としてますか」。

「たぶん、向こうのプレスが何か要望を出すかも知れませんが、基本それで行きましょう」。

ミュラーはトレッカーの言葉に別の要因について加えた。

「では、今の配置が出来る所だと、やはりパーティー会場となったイベントホールと言うことになりますか」。

「そうだな、インフォメーションロビーは物陰が多すぎだし、要望の広さも取れない、物が無ければ格納デッキでも良いんだが、バックにシャトルなんか置いて如何にもという感じのセットが出来るが」。

その言葉にトレッカーは、

「それは、やり過ぎでは無いか。プレスは喜ぶだろうが、そこまでお膳立てする義理は無い」。

と言うのだった。

それには、ミュラーも同意して、自分の軽率さを詫びた。

「そうだな、今のは戯言だと思ってくれ」。

「それなら、イベントホールで行うとする。これでいいかな」。

トレッカーは早々に場所を特定する。この意見にはミュラーも依存は無かったが提督側はどう判断するか、要望通りと納得するだろうか、ビットンブルーの答えを待った。

すると彼女は該当する答えをメモの中から見つけたのか

「そこは十分広いので、当方としても了承できます」

と答えるのだった。

その様子を見てミュラーは、予めどのような答えが出るか分かっていたのか、提督は幾つかの候補を上げていたに違いないと思った。

「それでは、各配置についての検討に移りますかな」。

彼は話を進める。

「まずは、提督達の場所だが会場のセンターというわけには、いかないだろうな、壇上では後ろのスペースが少ない。センターから少し壇上よりとするのはどうだろう。トレッカーはどうだ」。

「その意見には賛成だ。それで、壇上から五メートルくらい離れた処にテーブルを置いてはどうだ」。

その言葉にミュラーは手を顎に当てて考えながら、

「そうだな、その辺りにするとしよう。それで周り十メートル以内には物を置かないようにするか」

と提案すると、それに対してマクレガーが意見を言った。

「それでは、殺風景過ぎます。何か観葉植物でも置く事は出来ないのですか」。

その言葉にトレッカーが、

「それなら、視界を遮ることの無い高さの植物なら構わないし、生い茂った物で無け

れば、高さ一メートル半くらいなら大丈夫だろう」と提案を後押しするように言った。

そこで、ミユラーは提案を考慮に入れて、「それなら、そのくらいの観葉植物を幾つか用意して、現場にて確認してから使うことにしよう。これで、良いかなミスビットンブルー」と意見をまとめるのだった。

すると、トレッカーとビットンブルーは納得して、現場あわせで行うことを納得した。ただ、その観葉植物の手配はミユラーが行うこととなったのは、彼にとって不満だったが、決まった時点でホルストか船長に押しつけることを決めていた。

そして、ギャラリーやプレスのクルーの位置についての話に進んだ。「さて、これはどうする、やはり十メートル以上は離れてもらうことになると思うのだが、異論はあるか」とミユラーが二人に尋ねると、それには異論が無いようだったので話を続けた。

「それなら、提督達の正面に待機してもらうことにするが良いかな」。

その言葉に彼女は、口を挟んだ。「私としては、提督の威厳を重んじたいので、姿勢とか服装、身だしなみなどもチェックしたいので横からの様子も見たいのです」。

その言葉にトレッカーが答えた。「それは無理だ。いらぬ死角を作りかねないので辞めてもらいたい。此方の警備に割ける人数も少ないので、今回は特にそれは辞めてもらいたい」。

そう彼が答えたのは正論だった。ミユラの事件で彼の部下もかなり犠牲になっていた。それは、本来の警備の部下以外にも暗殺計画の要員も犠牲になっていた。だから、どちらにしても人手が掛かる要因は出来るだけ排除したいのが本心だった。

その言葉を指示するように、ミユラーは言葉を加える。「確かに、目の前でうろちょろされたのでは、此方の気が散るし要員にも負荷が掛かる。それに、インタビューはこれで終わりじゃないのだ。公爵のも後に控えているし、それは是非とも避けてもらいたい」。

その様に二人の専門家から告げられるのに及んで、ビットンブルーは渋々自分の意見を取り下げるのだった。「分かりました。正面で大人しくしてます」。

その言葉を聞いてからミユラーは尋ねた。「それで、そちらの親族の方と言いますか、ギャラリーの方々の人数はどれ位でしょう。分かれば教えて下さい」。

すると彼女はメモを見ながら答えるのだった。「私を含めて、六人です。後ほど名簿をお渡しできます」。

「分かりました。よろしくお願ひします。ミス、ビットンブルー」。

ミユラーはそう答えて後でメモを受け取ることにした。続けてトレッカーが付け加えた。「後、ギャラリーの場所に器財を置くテーブルに椅子も準備しなければならないが、どうする」。

「それは、その専門家にお願ひすることになっている」。

「それならいい」。

そう二人の間でギャラリーの場所に関する細かなことは、ホルスト達に一任することで事足りる、との判断を短い会話で確認し合った。

その会話は彼女にとっては、まったく見当の付かないものでは有ったが、よく知ろうと尋ねると怒られそうなので黙っていた。

それから、ミユラーは時間に関して話を切り出す。「さて、提督のご要望は午後の時間と言うことだが、具体的には聞いていますか、ミス、ビットンブルー」。

言葉を振られたのに驚いて彼女は答えるのだった。どうやら予期してはいなかったような感じを彼らは受けた。

「あ、はい。具体的には伺っていませんが、食事後少し時間を空けてから始めて欲しいとの事でした」。

その言葉を聞いてトレッカーは言った。「すると二時位と言うことになりますか。食事後少し間がありますし、丁度良いのではありませんか。ただ、提督の食事時間が遅いとか、一時間以上も掛ける食事をされるの

で無ければですが、いかがです」。

「それは、無いです」。

彼女は短く答えるのだった。

「それでは、二時以降に始めるということによろしいでしょうか。その様に提督に伝えていただけますか。ミス、ビットンブルー」。

この様に時間をまとめたトレッカーは、ミュラーにそれとなく意見を求める仕草をして見せたが、それに対してミュラーもそれで構わない、というふうに身振りでした。

。それでこの場をまとめるようにミュラーは、決まった事を提督に伝えてもらうようビットンブルーにお願いし、後の細々したことの詰めはトレッカーと二人でする事を告げて、彼女にはこれで退散してもらうことにして、その事を告げた。

「以上でよろしいですか。ミス、ビットンブルー」。

「はい。提督には伝えて置きます」。

「ではよろしく」。

そして、ビットンブルーは話し合いを持った乗客が降りて空いた部屋を出た。

それを見送ってから二人は、テーブルに三次元の船の設計図を浮かび上がらせてから、イベントホールの部分をピックアップして、実際の配置などを確認し始めた。

「では、今使える人員はどの位だ」。

ミュラーは素っ気なく尋ねる。

「そんなに使えん。正直かなり心許ない。ざっと八人が限度だ、それ以上は望めない。ミュラの件で此方が用意した警備要員の残りは4人だ。私を含めての人数でだ」。

トレッカーはいかにも残念そうに答えるのだった。

それを聞いてミュラーは、尋ねた。

「最初は何人の予定だったんだ」。

「わたしを含めて十二人で、後はこの船の警備を頼ることになっていたのだが、今は過去の話だ」。

そうトレッカーは答えながら、配置に印を付けるのだった。

「そうだな、気が重いな。ところでその口ぶりは、今回のプレスのインタビューは、予定に入っていたことになりそうだな」。

ミュラーは気に止めた様子を示さないように言った。

「ああ、うちの上司発案だ。ただ、予定は目的の星に着いたときに、船上で行うことになっていたのだが、今となっては予定のプレス以外でする事になった。予定どおりに向こうで待っているプレスは怒り心頭だろうけど、今は仕方が無い」。

トレッカーは引き続き印を付けながら話すのだった。

「今からどうこう言ってもしょうが無いさ」。

そう慰めるミュラー。

「そうだな、後で報告書どうするかだ」。

トレッカーは手を止めて言った。

「まっ、続けよう」。

疑惑

格納デッキからアビン達がホルストの居るインフォメイションブースに戻ってきたのは、正午少し前だった。

「ホルストさん。書類に記されたコンテナのチェックは全て終わりました。これがその書類です」。

そう言って、何か待ちくたびれた様子のホルストに書類を手渡した。

そして、浮かぬ顔で書類を受け取るホルストにシヨンが

「一体どうしたんです。その表情は、まるでボーナスが不意になるような事故を起こしたようですよ」

と言うのであった。

するとホルストが、それが当然とばかりに、

「お前の勘は良く当たるな。事故では無いが特別残業の話だ。それもただ働きだ」

といかにも嫌そうに、それも彼女も含まれるような言い回しで言った。

するとシヨンは少し不機嫌そうに言った。

「だれが、そんな用件を出したんですか」。

「船長とミユラーだ。俺に、文句言っても無理だぞ」。

ホルストは答えると同時に、予防線を張った。あとで質問攻めは辞めて欲しかったからだ。道理や理屈に合わないとな納得するまで質問をしていくのがいやだった。いや、答えるのが面倒だった。シヨンは事の次第を把握するのは早い、気になると質問してくる。それも此方が答えにくい質問を必ずといってしてくるのだ。それを、ホルストは苦手だった。後で理解してくれるのは分かっているのだが、此方の不備を認めるまでは続く。此方に落ち度が無ければ不思議と質問はしてこないのも知っている。

だから早々に原因の出所を言ったのだった。

そして、ホルストはシヨンの表情を見て納得してはいないと思ったが、どうやら此方に言っても仕方が無いのを理解したのか、用件を尋ねてきた。

「それで、何をしますのです」。

その言葉にホルストはホット胸をなで下ろして答える。

「提督のインタビューのセットの設営だ」。

「テントでも立てるのですか」。

「いや、会場の準備だ。ギャラリーの席も用意してな」。

ホルストは少し嫌みっぽく答えた。

「配置図とか頂いたんですか」。

シヨンは用件を変えた。

「まだ、草案しかもらってない」。

その言葉にシヨンは少し首をかしげて尋ねる。

「と言いますと、どの様なことなのでしょう」。

「まだ、打ち合わせ中さ」。

するとシヨンは不機嫌そうにして言った。

「仕事は決まっているけど、具体的には何をしますのかまでは決まっていないということですね」。

「まあ、そういうことだ、残業しろと言われただけで、具体的には何をということなのさ」。

「相変わらずの、行き当たりばったりですね。誰の発案ですか」。

「大元はしらん、今船長から連絡があった」。

そう言いながらホルストはお手上げだとう素振りをして見せた。

この二人の会話と様子を見てアビンは、この二人は同僚だと思った。

するとホルストはアビンを見て言った。

「なあ、若いの奉仕の精神は持ち合わせているか」。

その言葉にアビンは、いったいどうゆう事なのか理解出来ずにいたのだが、そこは何時もの教授への対応で慣れていたのか、

「お手を仮す必要な方でもいらっしゃるのですか、それとも何方かご病気とかそれなら

喜んで。それで何方ですか」

と答えたのだった。

するとホルストは膝を叩いて、笑いながら言った。

「これはいい。ずいぶん鍛えられてるな」。

それからアビンに近づいてきて、肩を抱くようにしてから言うのだった。

「君なら使えそう。卒業したらうちに来ないか考えておいてくれ」。

そう言ってから次にこう言ったのだった。

「これから警備を考えた、会場の設営を行う予定だ。後学のため立ち会って勉強するが
良い。当然、手伝ってもらおうが、要所の説明をしてやるから、どうだやらないか」。

それは、まるで悪魔のささやきのような、良い経験をさせてやるから仕事を手伝えと
いうホルストの身勝手な、そして自分たちの残業を少しでも減らそうとのもくろみで
もあつた。その事に、アビンはそれとなく気が付いていたが、経験の少ない彼にとって
後学の為にもという言葉は殺し文句であつた。

それで、彼は

「よろしく願います」

と言ってしまったのであつた。

その様子を見ていたシオンは、すっかりホルストの術中に填まってしまっているアビ
ンを哀れんでいた。

その様なやりとりの中、アンは何が成されているのか理解出来ず、自分だけ取り残さ
れているようで寂しい思いをしていた。

その事に気が付いたのか、シオンが近づいてきて

「心配しなくても良いの、伯父様の仕事の準備の話をしていただけだから、そのうち伯父
様から話が来るとでしょう。その時は、あなたが大変かもね。原稿を作らなければなら
なくなるから」

と静かに話すのだった。

その言葉にアンはシオンに尋ねた。

「それは、提督が何か話をされるか、インタビューを受けると言うことなの」。

「そのようね、コンテナのチェックをしていたときに、マクレガーという人が言ってい
たでしょう。覚えてる」。

「そういえば、そう言っていました」。

その言葉はアンが忘れていたというのでは無く、彼女が書類のチェックをしていたた
めに、マクレガーの話をそれほど注意深く聞いてはいなかったからだった。

二人の会話を聞いていたアビンは、アンに尋ねるのだった。

「アン、少し質問をしてもいいかい」。

その言葉に彼女は、目を伏せながら

「はい、何なりと」。

と答えた。

その答え方に、彼は一瞬ドキッとさせられたが、気を取り直してから尋ねた。

「アン、君は提督の話の原稿の手伝いをしているのかい」。

「はい、それが私の仕事ですから」。

そう答えるアンにシオンが、訂正するように言った。

「原稿の手伝いだけじゃないわ、身の回りの世話もしてるでしょう。まるでお爺さんの
せわをする孫娘のように」。

どうやらその言葉の響きには、なにがしかの不満が有るようだったが、表情は少し笑
みをたたえているので、怒っているわけでは無いようだと言ったアビンは思った。

そして彼なりの結論を出して尋ねる。

「するとアンは提督の私設秘書みたいなことをしてるのかな」。

「そうなりますか」。

アンは、かえって問いを用いて返してきた。

その言葉は、どうやらそうだと認めているようだが、自信が無いのかもしれない

その事は当然のようにシオンが指摘して言った。

「そうそう、実質は私設秘書なのよ、ただ身の回りのせわをするメイドの仕事込み」。

するとアンは、その言葉を訂正するように言うのだった。

「いいえ、それは私が提督と奥様をお願いして行ってることなのですから、シオンはそ
の様に仰らないで」。

するとシヨンは、微笑みながら言う。

「あれほど敬語で話さないでと言っても守ってくれなかったのに、ようやく普通に私を呼んでくれましたね」。

その言葉を聞いてアンは、カアツと顔を赤らめて下を向いてしまった。

その様に話しているアビン達を見て、ホルストはニヤニヤしながら言った。

「お前達、三人ともそこのソファーに座ってろ。そばでトリオ漫才で盛り上がっては五月蠅くてかなわん。続きはそこでやってろ」。

その言葉でアビン達が、気を悪くするかも知れないのは、お構いなしに言っただけのだった。それは午後の時間にもなれば、それなりに人の往来も増え知らない人物も、荷物の搬出や移動でこのブースに来るのだからアビン達が話で盛り上がっていると、それなりに迷惑なのだった。

そしてアビンが、そそくさに離れようとしたときに、ホルストは小声で、

「いやあ、アビン君、両手に花で嬉しいだろう」

と言うのだった。

それに対してアビンは、

「じゃあ、替わりましょうか」

と返した。

するとホルストは

「いや、おれはいい、胃に穴が開く」

と短く答えた。

それからアビン達にこう言った。

「待っている間に簡単な食事でもいかがかなお嬢さん達。まだ、昼食は済ませてないのだろう」。

するとシヨンが答えていった。

「その様に仰るホルストさん達もまだなのではありませんか」。

その言葉を返すようにホルストは言う。

「子供は大人の心配をするんじゃない。大人しく言うことを聞いて甘えてれば良い。そのうち嫌でも出来なくなるからな。今は甘えててもいいのさ。けれど、贅沢は聞かんぞ」。

そう言いながらホルストは権威を振るうようしてみせるのだった。これは、彼なりの気遣いであって、今は余裕がある事をこの様にしてみせる。

この事はシヨンは既に承知しているのだったが、アビンとアンは初めてのことで気の抜けた返事をしていただけのだった。

その様なわけでアビン達はブースから少し離れたソファーに席を取って座る。それを確認してからホルストは、プロックフェルに指示を出して軽い食事を運ばせるのだった。この時の彼らの座った配置は、アビンを挟んでアンが左にシヨンが右に座った。これはアビンが意識したのでは無く、シヨンが先導してその様に座ったのだ。

当然、この様子を見てホルストは、本当に両手に花だと思ったが、絶対シヨンの横には座りたくは無かった。それは過去その様なケースで酷い目に遭っているからだ。この点についてシヨンは、無意識でよかれと思っているのだ。

特に提督が近くにいなような場合は、要注意なのである。

その様に考えながらホルストが、アビン達を見ていると、そこへビットンブルーが現れた。

そこで彼女が最初に発した言葉は、こうだった。

「あら、ずいぶん暇そうじゃない」。

その言葉にホルストは、そうでも無いとの口調で答えた。

「そう見えるか。さっきまで色々と手続きで、大忙しだったんだが、お前さんは冷やかに来たのか」。

「分かっているじゃない。まっ、お嬢さん達に誰か手を出していないか確認に来たのよ」

。「相も変わらず、嫌なことを言う」。

すると彼女は平気な顔をして、

「そんなこと言われたって、慣れてるでしょう」

と小馬鹿にしたような口調で、言っただけのだった。

すると彼も、慣れた物で、

「お目付役がいなくても此方はちゃんとやってる」

と言り返す。

それからホルストはブースのカウンターテーブルに手を掛けながら言った。

「それで、打ち合わせはどうだった。上手く決まったか」。

すると彼女は、アビン達の方を見ながらため息を付いて言った。

「それなりにね。細かいところは今、ミュラーとトレッカーが打ち合わせしてるわ。できれば私もあっちの方に座りたいわ。技量を値踏みされるなんてまっぴら」。

「ずいぶん、しおらしいじゃ無いか」。

「そう言いたくもなるわよ。私は秘書として初心者ということがハッキリわかっただけよ。いくら公的秘書だと言っても、あの娘には敵わない」。

その言葉はアビン達の中のアンに充てられたものだった。

「まっ、誰しも初めは皆、初心者さ。気にするな後は慣れと経験が物を言うてくる」。

ホルストは彼女を励ますように言う。すると、ビットンブルーは少し微笑みを返しながら言った。

「彼らに、同じようなことを言われたわ」。

「それはそれは、大変で」。

ホルストはその場の話をこれで終わりにしよう、とあやふやな言葉を口にした。

「相変わらずね。奥さんにもそうしてるの」。

ビットンブルーは仕返しとばかりに言った。

するとホルストは、いたって真面目そうな表情で、

「それは無い。ハッキリ話さないと納得しないから」

と少し弱々しく言うのだった。

その言葉は聞いた彼女が、彼は奥さんに頭が上がらないのでは、と想像してしまうのに十分すぎるものだった。

「分かったわ。奥さんによろしく。私はお嬢さん達の席の方に行くわ。出来たら私にも食事いただける」。

少し機嫌を直したビットンブルーはそう言ってアビン達の方へ行った。

その事はホルストにとっては、疫病神の退散ということに心の中で手を振って喜んだのだった。そして、彼はプロックフェルにビットンブルーへの食事を運ばせた。

さて、アビン達の所に来たビットンブルーは、少し含み笑いを浮かべながら言った。

「ここ、いいかしら」。

そう言ってアビン達の前に来て目の前に立った。

その仕草は、アビン達に対して威圧的に構えているように見えるのだった。

けれど彼女はこう言った。

「三人とも仲がよろしいのかな。この様子を提督に見られたら何と釈明するつもりかしら」。

その話し方には嫌みは無く、かえってからかっているようにも聞こえる。

それに答えるようにシヨンが言った。

「あまり物事が上手くいかなかったからといって、私達を冷やかしに来なくても良いのに」。

するとビットンブルーは、少しため息を付いて

「まったく、あなたの勘の良さには、頭が下がります」

と答えるのだった。

そこへプロックフェルが食事をのせたトレイを持って来て、彼女に渡した。

ビットンブルーはそれを感謝して受け取ると、アビン達の前にあるテーブルに置いて、カップに注がれたコーヒーを一口飲んでから続けるように言った。

「ところで、貴方たちはどうして、その様に座ってるの」。

するとシヨンが事も無げに答える。

「休憩で何となく」。

「何となくね。提督が見たら彼は、ただでは済まないと思わないの」。

「いいえ、説明しますから」。

「どのように」。

ビットンブルーはどんな釈明が飛び出すか、聞いてみたくなり尋ねる。

するとシヨンは説明を始めた。

「先ずは、わたしとアビンさんは、彼がわたしの護衛をするようにとの命令を受けています。そして、アンとアビンさんはお付き合いを始めました」。

短い説明であるが、ビットンブルーを驚かせるに十分であったし、アビンに改めてアンを意識させるのにも成功した。当然、アビンの釈明は無視されたのだが、提督には次に会うときには、胸ぐらを捕まれて殴られても、文句の言えない状況に彼を追い込むのに十分の言葉であった。

当然のごとくビットンブルーが、彼を見る目には哀れみのまなざしが湛えられているのだった。

その様子から、自分が酷い目に遭うのは決まったのだろう、と人ごとみたいに考えた。これは、彼のある種の特技で、自分の不幸な状況が決まったとしても、それを客観的に見ることができ、時には対象法を見つけ出すこともある。

そう考えながらアビンはアンが、自分の腕を必死に掴んでいることに今、気がついた。

「どうしたんだい」。

アビンはアンにそっと尋ねた。

「わたしのせいで、すみません」。

そう謝るアンを見て、彼は自分が提督に酷い目に遭わされそうなのを気遣っての行動なのだろうと思った。そこで、こう答えた。

「気にしなくていいさ、逃げるのは得意でね」。

彼はそう答えながら、まったく慰めにも成らない答えだと思った。

アビンとアンがその様に遣り取りをしているうちに、シオンは驚いているビットンブルーに質問をしていた。

「この度のインタビューの話は、どうして決まったのですか。あれほど、今回はお忍びだ、と強調されていたのではありませんか」。

すると彼女は渋るように言った。

「それは、あのね、つまり、押し切れちゃったの」。

「だれにですか」。

「マクレガーというジャーナリストの方がプレスの方と一緒に、事件後に頻繁に來られて、つい承知してしまったの」。

その言葉を聞いてシオンはさらに尋ねる。

「エレナさんにしては、あっさり落ちてしまいましたね。何か訳でもあるのでしょうか」。

シオンにビットンブルーは顔を覗き込むようにされて、気後れしたのかカップに残っていたコーヒーを一気に飲み干して言った。

「同級生よ。ハイスクール時代の、それに」、

と彼女の言葉が止まる。

するとシオンは追い立てるように、

「それに」

と問いかける。

すると彼女は観念したのか、

「ああん、分かったわよ。言います。言いますから、シオンそんな眼でみないで」

と言った。

「では、話して頂けますか」。

シオンはあえて彼女を促す。

「同級生で、以前同じ仕事をしていたの。星間医療委員会、知ってるでしょう」。

そう話すビットンブルーにアビンは答えていった。

「ええ、確か紛争地域や大きな災害があった星系や星域に医療関係者を派遣したり組織したりする星間条約組織だったかな」。

「そう、その組織で、わたしは医療関係者で、彼女は事務員だったわ。スフrintの第四次紛争で私たちはある町に派遣されたの、その場所も地名も知らされなかった。けれど、そこで医療を必要としている人たちが待つと言うことで出かけたわ。総勢三十人のグループだった。そして、着いてみると現場は壮絶な物だった。何かの化学兵器が使われたらしく、既に住民の半数以上は無くなっていたわ。残っていた人たちも、症状はかなり悪く、主任ドクターの話では何かの神経毒の様だ、との話で急場しのぎで中和剤を打つのが、精一杯でした。到着の三日後、突然の砲撃で町は壊滅し、一緒に来ていた兵士と医療班の殆どが亡くなったわ。命からがら何とか脱出出来たのは、兵士一人にわたしと彼女マクレガーなの、その時、砲撃で負傷したわたしを引っ張って運んでくれたのが、彼女と残った兵士十人だったの。だから、彼女に頼まれると無下には出来な

「ごめんなさいね」。

そういい終わるとビットンブルーは、空になったカップにコーヒーをついでくれるようにとアビンに差し出すのだった。

その行為に彼は仕方がないと思いながら受け取ると、おもむろに尋ねた。

「その生き残りの兵士って誰ですか」。

するとビットンブルーは首をひねりながら考え込んだ。アビンはその様子を見てから、カップを持ってお代わりをもらいに行った。

当然のごとくコーヒーのお代わりを貰うときに、ホルストに冷やかされたのはいうまでもなかったが、彼が戻ってきたときも、まだ考えていたのだった。

そこでアビンはカップを手渡して、

「思い出さなければいいですよ。ミス、ビットンブルー」

と言った。

すると、彼女は突然叫ぶように言った。

「あっ、あの人ってどっかで会ったような気がしてならなかったけど、彼よ。彼だわ、雰囲気が変わっているから気がつかなかったわ」。

その言葉に周りはビックリしてアビン達の方に振り向いたが、彼が透かさず立ち上がって申し訳なさそうにして謝ると、その視線は次第に離れていった。

そして、彼は静かに尋ねた。

「誰なんですか。ミス、ビットンブルー」。

「トレッカーよ。彼よ。その時の生き残りの兵士って。今よりはもっと明るかったわ。冗談も言える人だったけど、今は違うわ。あれから六年以上も立つのだから、何か身の上になれば変わるかも知れないけど、どうなのかな分からない。けど、あの時の兵士よ彼はその時は少尉だったかしら」。

その答えに、アビンは妙な繋がりを感じて仕方がなかった。たしか、トレッカーとマクレガーが知り合いであることは承知していたが、ビットンブルーとの繋がりには検索では出てきていなかった。

そしてアビンは、シヨンの様子を見たが、別段変わったようには感じられなかった。彼女が、この事を承知していたと考えることが出来ると思った。

当然のごとくアビンは事の次第を知っているわけでは無いので、ビットンブルーの辛い経験談に感じ入っているようだった。

そう考えていると、彼の服の袖をシヨンは引っ張って、小声で言った。

「アビンさん。何時までも立っていないで、座ってください」。

そのとき、彼は自分が呆然と突っ立っていた、ことに気がつき決まり悪そうに座ることとなった。

「失礼しました」。

そう言葉を付け加えながら、彼は考えていた。この話には、今回のことに関係があるのか、あればどのように関わるのかと。

アビンは、何かに引っかかるような感じがしてならなかったが、それが何かを見つけられずのいた。その時、シヨンがビットンブルーに尋ねるのだった。

「あのう、分からなかったと仰いますと、それだけ容姿が変わっていたのですか。それとも、何時もの無関心で眼中に無かったとかでしょうか」。

その言葉にビットンブルーは少し険しい表情をして答える。

「随分な言い方ね。シヨン、あなたはわたしがいい男しか見ないと決めつけているような言い方何とかして欲しいわ」。

「事実です。何でしたら証拠を挙げてさしあげましょうか」。

シヨンは挑戦的に言うのであった。

「どうやら、数日前のドレスの仕返しで言ってくれてるのね」。

ビットンブルーは気を取り直して大人の対応を見せる。

するとシヨンは、頭を下げて、

「言い過ぎました。ごめんなさい」

と謝罪するのだった。

その言葉にアビンはホッとして胸をなで下ろした、それはこの先、壮絶な言い合いに成りはしないか、と心配したからだった。

その時、アビンは気になる言葉に引っかかって尋ねた。

「ミス、ビットンブルー。お訪ねしても宜しいですか」。

「ええ。どうぞ」。

「トレッカーさんに、会っても以前の彼と気がつかなかったのは、それ程容姿が変わっていたからですか」。

すると彼女は少し考えてから、
「そうね。六年以上も過ぎてることだしハッキリは言えないのだけど、以前の彼はあれほど痩せてはいなかったわ。それに、顔つきも面影はあるけどあんなに無表情では無かったと思うの。それがどうしたの」

と答えてくれた。
アビンはあえて尋ねられたことには、
「いえ、気にしないでください。以前会われたのに思い出せなかったようなので、すっかり変わってしまっていたのかな、と思ったしだいです」

とはぐらかすように答えた。
すると彼女はアビンの言葉に、
「そういえば、聞かれなかったら気にもとめなかったわ。どこかあった事あるけど、たいしたことでは無いしいかな、と思ってたのだけどね」

と気がつかなかったことを不思議に思っていた。
それは、極限状態で互いに助け合いながら、生き延びた同僚を思い出せないのはある意味、情けない話ではあるし、彼女の評価も落ちるが、別の考え方をすれば、違った答えが見つかるような気がしたアビンだった。

「彼に最初に会ったのは医療グループが編成されたときですか」。

アビンは答えを期待せずに尋ねた。
するとビットンブルーは少し考えてから妙なことを言った。
「そういえば、彼はグループには居なかったわ。そう、会ったのは行った先の町で、彼、何してたのかな、よく思い出せないのだけど幾人かの兵士と一緒に居たの、そして、私たちを迎えに来たとか言ってた、そのあとグループのリーダーと話しがあると行って、暫く、離れた所で何か話してた。それから、ちよくちよく私たちの医療施設に来ていたわ。これ以上はよく思い出せないの。ごめんなさいね」。

「ありがとうございます。無理を言いましてすみません」。

アビンは感謝の言葉を忘れなかった。

「役にたてたかしら」。

彼女は心許なげに言うのだった。

その後はホルストに再び呼び出されるまで、四人でたわいの無い話をした。

暫くして、ビットンブルーが用があると席を離れると、直ぐにホルストからお呼びが、掛かった。

「何でしょうかホルストさん」。

アビンは彼に尋ねた。

「提督のインタビューの設営場所と大まかな配置、及び機材が決まった。これから準備するのだけれど、先ずは機材なので君にはまた後で手伝って貰うことになる。その時にはよろしく。それからお嬢さん方は、まあ、邪魔にならなければ自由にしてくれ」。

とのように言ったのはアビンにくっついてシオンは何かするだろうし、アンはアンである程度の身の振り方を知ってるからそれに、任せることにした。

それは彼らが、此方の知らない情報を得て調べるに任せることにしたのだった。今、アビンが話さないのは、まだ確信が無いからだろうとホルストは思った。彼の表情を見て何か引っかかることを見つけたようだと感じて、この様にしたのだった。

すると、アビン達は改めて呼ばれるまでは自由に行動しようと、ホルストの居るブースを後にした。

過去の繋がり

長く続く通路をアビン達は、歩いていた。
彼の横にはアンとションがいて、対抗者にはさぞや邪魔な存在だろうと思っていたのだが、まだ、誰にも出会ってはいなかった。
アビンは、アンにしがみつかれた、左腕の重さを気にしながらションに尋ねた。
「少し調べ物に付き合っただけで貰いたいのだが、どこか制限無く自由に使える端末の場所を知らないか」。
するとションは少し考えてから答えた。
「船長室やブリッジ、通信室の出入りは無理ですし、他の方がいても大丈夫なら船長に掛け合ってみましょうか」。
「いや、出来れば他人には見られたくない」。
「そうですか。では此方に来てください」。
そう言うとションはアビンを先導するように歩き出した。
そして、暫く歩いて行き着いたのは、メディカルセンターだった。
アビンはこの場所に着いて
「ここですか。もうあの先生は下船してるはずだし、知ってる者もいないか無理じゃ無いか」
と言った。
するとションは、笑みを浮かべて言うのであった。
「たぶん私の勘だけど、交代の先生が助けてくれるはずです」。
「どういう事だ」。
そう尋ねるアビンを余所に、受付の看護師に尋ね始めるのだった。
「失礼ですが、交代に来られた先生はおられますか」。
すると受付の二人は互いに顔を見合わせて、言った。
「先生、冗談は止めてください」。
その返してくる言葉に、アビンは驚いたが、ションは至って冷静に続けた。
「すると、セシリアが来てるのですね。双子の姉妹が来ていると伝えて頂けませんか」
。その言葉は、受付の二人を納得させるには十分なものであったし、アビンも事の成り行きを何となく想像出来た。
暫くすると、許可が出たのか奥に通された。つまり診療室なのだが、やはりアビンは居心地の悪い印象は否めなかった。
ションはセシリアに会うと最初に、
「またですか、今度は誰になったの」
と落胆したように言った。

その言葉にセシリアは椅子の腰掛けたまま、
「こんにちは、お姉様。いやだな何時ものドクターセシリア・ゴールドベルグですよ」
と笑いながら答えるのだった。
「どうやらそれがお気に入りなんですね」。
「まあ、そうですね。趣味と実益もかねられるし」。
その言葉にアビンはションにそっと尋ねた。
「趣味と実益って何のことだ」。
するとションは嫌そうな表情で、
「医者。それもマッドな方の。そして。医者とか看護師のコスプレ好き」

と答えるのだった。
それに気がついたのかセシリアが、
「そこ、こそこそ話さない」
と強い調子で言っただけのけりだった。
するとシヨンは、敬意を払うようにして話した。
「それでは、ドクターお願いがありますが、この端末を使用させて頂けませんか」。
するとセシリアは不適な笑みを浮かべて言った。
「いやだ、と言ったら」。
その言葉を聞いてシヨンは、関心が無さそうな振りをしながら言う。
「別に構わないですよ。転送端末壊すから、戻ってくるのに十分は掛かりますよね」。
この言葉にセシリアは、少し引きつった笑みを浮かべて、
「冗談ですよね」
と伺いを立てるように言う。
けれどシヨンは至って真面目そうな表情で、
「不審物の撤去で、殺人ではありませんから、正当な行為です。何か問題でも」
と言っただけのけり。
ここにきてセシリアは折れた。
「お姉様、自由に使ってください」。
「ありがとう。セシリア」。
シヨンは満面の笑みで感謝を示した。
その様子を見てアビンは敵には回したくないなと思うのだった。
そして、シヨンは端末の前の椅子に座り、アビンの方を見て言った。
「さて、まずは、何から調べますか」。
アビンは側にセシリアが居るのが気になったが、現在のこの部屋の実質上の主なので、
無下には出来ないと思いながら言った。
「では、始めに星系間安全保障機構の医療委員会について、ミス・ビットンブルーのス
プリント第四次紛争での活動の記録を」。
「分かりました」。
そうシヨンは答えると、ディスプレイにその時の活動内容を表示させた。
「では、彼女の派遣された町での状況記録を」。
するとシヨンが残念そうに言った。
「アクセス拒否です。珍しいですねこの委員会組織では情報は常に開示なのに」。
アビンは少し考えてから言った。
「では、第四次紛争の起きた地域範囲の町で委員会が派遣された記録のあるものは」。
その言葉にシヨンは直ぐに操作して言った。
「派遣された町は全部で八あります」。
「では、派遣された人員名簿の中にビットンブルーの名前があるグループは」。
「ありました。フィゴの南部の町テビュルです」。
「そこでの活動は」。
「子供達の伝染病予防接種活動と医薬品の配給です」。
その答えにアビンは不信感を募らせた。そして、尋ねる。
「その記録をどう見る」。
シヨンは頬杖をつきながら言う。
「嘘ですね。エレナさんの話が本当ならですが、この記録では兵士は含まれてませ
んし、人数の規模が違います。この記録だと五十四名となっています。いくら何でも数
え間違いというわけではないはずですよ」。
その答えを聞いてアビンは言った。
「彼女が、第四次紛争に行ったことは確かなようだな。けれど、記憶と記録の違いはど
うだろうか、どう思う」。
「そうですね。違いがある場合その利害の大きさと、損失の大きさを考えてみるとどち
らの方が、より正確かまたは、何かを隠蔽しているかの判断が着くかも知れません。判断材
料としてですが」。
その様に答えながら、シヨンは何か考えているようだとアビンにも分かった。
その言葉にアビンは考古学調査での経験や教授の教えから言った。
「そうだな。考古学で調査していると、古代の記録では、その国の不利なことは記録さ

れることは滅多に無く、返って自国の英雄談や栄光を書き連ねるのが常だ。それから、ペテンの場合は、真実の中に巧妙な嘘を混ぜるのが相手を信じ込ませるのに効果的だ。今までの歴史でもそうだった。国民の目を欺くために、真実の中に巧妙に少量の嘘を、それも支配者の意図した行動を、国民が取るように仕向ける為の嘘を混ぜる。するとどうだろう、殆どの人がそれにだまされるのだ」。

シオンはアビンの言葉を聞いてから、少し考えて言った。

「ということは、真実の部分は、紛争、医療委員派遣、町に出向く、医療活動を行った辺りまでですか」。

「そうなるな。そして、行った町が違ふかもしれない、そして人数の違い。これはもしかしたらだが、二つのグループが在ったということかも知れない。なぜなら、ミス・ビットンブルーのグループの前に、トレッカーのグループが来ていたような発言をしている。この点の記憶が曖昧だけど、彼女の負傷記録などは有るかな」。

するとシオンは、コンソールを操作しながら言った。

「以外と鋭い所を突いてきますね」。

それから、結果が出たのかこう言った。

「ありました。自動車事故で一週間程の入院と有ります。その時の同乗者はマクレガーです。それから、面白いことが出てきました」。

アビンは最後の言葉が気になって尋ねる。

「なにが、あるんだい」。

「医療委員会の派遣メンバーのリストが有りましたが、エレナさんと一緒の人たちなんです。他は全員死亡となっています。その殆どが、車で移動中に爆撃で亡くなっています」。

「彼女の話通り。彼女とマクレガー、そしてトレッカー以外は、生きて返ってきていないと言うことか」。

「そうですね。最終的な帳尻だけは合わせてあるようですね」。

「いやな、言い方するな」。

「申し訳ありません。記録上では殆どが、始めと結果だけ見ますから、そうしますと冷たい言い方ですが、最終的な数だけは合わせてあるとゆうことになります」。

アビンはシオンの説明を聞きながら、妙な寒気を感じた。それは、彼女の対応が、気に入らなかつたのでは無く、この記録から推測できる事柄に嫌悪感を覚えたからだった。

では、この記録から何が分かるのだろうか、何かが隠されていることは分かるが、それが、今彼の置かれている状況と、同関係があるのかはまだ分からなかつた。そこで、アビンは思いついたことを言ってみた。

「この紛争で壊滅した町は、幾つあるか分かるか」。

するとシオンはコンソールを操作して言った。

「一つです」。

その答えは期待しなかつたが、当たりのようだった。

「町の名前と経過記録は残ってるか」。

すると、シオンは少し戸惑ってる様な素振りをしてから答えた。

「町の名前はガレアでやはりフィゴの南部に位置しますが、かなり外れています。国境近くですね。人口は七千人ほどの小さな町です。何でも無差別爆撃が有ったと記録されています」。

「生き残りは」。

その言葉は辛い響きが有るので、努めて平静に尋ねる。

「ありません」。

その言葉を聞いてアビンは驚いた。いくら無差別と言っても生き残りはいるはずだ、たとえばその辺一帯を焼き尽くすか、一帯が巨大なクレーターになるようなものを使わなければ、その様な事態にはならない。たぶん後者はあり得ない。なぜならその様な規模になると、事を隠蔽することは出来ないからだ、星系間安全保障機構が軍事介入の動きを取るからだ。

アビンは少し落胆気味に尋ねた。

「他に、何か記録されていないか。たとえば化学兵器の使用が有ったとか」。

「有りませんね。でも、派遣部隊に特殊化学班が有りますね」。

「それって、プラントが攻撃されて科学薬品の流失でも有ったのか」。

「その記録は有りません。何で派遣されたんでしょうね」。

シオンは派遣された部隊が気になっているようだったが、アビンはその部隊が何処に所属していたかが気になった。そこで、尋ねてみた。

「何処の部隊となっている。何時から派遣されているか分かるか」。

シオンはアビンに尋ねられたことを調べ始めたが、突然その手を止めた。

「パスコードが必要です」。

その言葉にアビンは落胆するように言った。

「無理か」。

するとシオンがこう言った。

「少しお待ちください。破ってみます」。

「大丈夫か。此方のことを知られはしないか」。

そう尋ねると、シオンは、

「大丈夫です。そんなへまはしませんから。暫くお待ちを」

と言った。

そして、待つこと五分、

「結果が分かりました」

とシオンは嬉しそうに言った。

「それで、どうなんだ」。

アビンが尋ねるとシオンは、驚くべき事を口にした。

「部隊は帝国軍特殊化学作戦部三三六部隊第三小隊です。それからこの小隊は紛争が起る二週間前に来て、監視団に配属されています。それとこの部隊はベストラン公爵が以前居た部隊です」。

その言葉に、アビンは嫌なところで話が繋がったなど思った。そこでこう尋ねる。

「では、派遣された人員名簿は有るか、平和維持監視なら正規の閲覧名簿が有るはずだ。いくら何でもそこまで、嘘は記載できないはずだ、国と部隊の面子も有るからな」。

するとシオンは言った。

「正解です。トレッカーが居ます」。

アビンはシオンの答えに、自分の考えの中で何かの記憶を探り始めていた。それは、どこかで読んだことの有る資料だが、何時のことかは思い出せない。

そこで、こう尋ねてみた。

「では、シオン。トレッカーの居た部隊は何をしていたのか。紛争が起きる前に、停戦監視とかありきたりのことでは無くだ」。

その様に話すアビンの言葉に、少し考えてたぶん意図しているであろう事を検索した

。「トレッカーの居た部隊は、化学兵器の処理を行っていたようです。人員は二十四名、指揮官はベングロード大尉で副官がファーレン中尉です。トレッカーは第三班の責任者だったようです。それから、これが処理日程の行程表です」。

そう言ってシオンは、地図上に行程が記されているのを指さすのだった。

その地図はフィゴ南部一帯が表示されており、移動順路と日付が記載されていた。そして、その日付は、紛争の数日前から紛争が始まってから二週間に及んでいた。このことは、部隊が化学兵器の処分を行っている最中に紛争が始まったことを示している。

そしてアビンの目にとまったのはガレアの日付だった。それは、紛争開始十日後だった。

「この日付が、そのまま当てはまると思うかい」。

アビンは地図の日付を見ながら聞いた。

するとシオンは少し考えてから答える。

「一概には、そうとは言えません。途中で紛争が始まって居ますから、切り上げたのかも知れませんし。処理を急いで行程を早めたかも知れません。ただ言えるのは、ガレアでトラブルがあったということです。それは、エレナさんの話にあった。化学兵器が使われたらしいとの話です。どう思いますかアビンさん」。

問われたアビンは、有る記事を思い出していた。

「そうだな、化学兵器が使用されたかどうかは、ハッキリしないが、この南部の地方のは、過去の紛争の時に使われた化学兵器が残っていると、報告書を読んだことがある。そして、その事についてのグローバルプラネットニュースの記事でも残存する化学兵器の処理の継続が検討されていると有った。たぶん、憶測の範疇を出ないものの、トレッカーの居た部隊はその調査と処理を行っていたのかも知れない。それも、出来れ

ば処理するというものだったのかも知れない。もしかしたら、調査しながらかき集めていたとも考えられる。仮定だけどね」。

そうアビンが話すとションは言った。

「その考えは、当たらずとも遠からずかもしれません。善意に見てですが、処理できないので集めて最終的にどこかで処理しようと、集めながら移動したが、ガレアで何かのトラブル、紛争の勃発、または事故。前者は調査回収のため時間が大幅に超過して行程が遅れて、後者は順調だったがガス漏れ事故が発生して足止めを食らった。とか考えることが出来ます」。

その話を聞いてアビンは薄ら寒い思いが走った。その事を彼は戸惑いながらも口にした。

「此処までのことは、記録を公開しても特に叩かれることは少ないが、その後成されたと考えられる事が有ったとすると隠蔽するしか無い事になる。それは超高熱爆弾でガスを焼却するため、住民、医療班、科学部隊ごと焼き払った。無差別爆撃による壊滅。そして、このことに対する非難声明が一切成されていないことは、暗にその事を物語っているのではないか」。

この様に言い切ってしまうからアビンは後悔した。それは、自分の傍らにアンが居たことをすっかり忘れていたのだから、そして、彼は、そっとアンの様子を見た。すると彼女は二人の会話を熱心にメモをしているのだった。

この時、アビンは彼女は秘書としての仕事をしているのだ、と思った。

けれど、彼女が熱心に仕事をしているのに少し心配して尋ねる。

「アン。確か君は、提督の私設秘書だったよね」。

「はい、そうです」。

アンは顔を上げて答える。

「では、何故俺たちの会話をメモする。たしかに助かるけれど、君の仕事では無いはずだが、どうなんだい」。

するとアンは笑顔で答えた。

「随分、話が込み入っているようなので、後で確認のためと、こうやって何時も練習してるんです。いつでも提督のお役に立てるようにと」。

その言葉にアビンは、頭が下がる思いがして、この後どう話したら良いやら迷うのだった。その様子を観察して、ションは言った。

「ほんと、何時も助かるわ。伯父様って考えているときは、あれやこれやと思いつきで、並べ立ててから、ところで今、話した事はどれに当てはまるかな、とか言い出すときがあるから」。

その言葉を聞いて、アビンはその様な話は振られたくないと思うのであった。

さて、ここまで調べて分かった事なのだが、六年前に起きた出来事がトレッカーの立場を変えたのでは無いかと、考えることが出来る。これは憶測の域は出ないが、彼に何かの心境の変化、強いては人格を変えるほどの経験をさせたかもしれない。その経緯についてはビットンブルーの記憶は曖昧と言うよりも殆ど覚えていないようだ。記録に入院とあったのは、その時の彼女の状態を如実に語っている。ではマクレガーはどうか、彼女の方はかなり顔見知りだと言うことが、言葉や行動から分かる。では、彼女に話を聞くのはどうか、答えてくれるだろうか。彼女もトレッカーの一味と考えることも出来るが、あからさまに繋がりが分かっていると、どうなのだろうと考えてからアビンは言った。

「ション。あのプレスのインタビュアーのマクレガーに話を聞いてみてはどうだろうか。君の考えを聞かせてくれないか」。

するとションは、彼の言葉を予期したように言った。

「マクレガーさんですか。あの方は、トレッカーとの繋がりに関して、コンテナの履歴と共に調べたときに、何一つ当たりませんでした。知り合いなのにです。当たっても不思議では無いはずですが。それに、先程調べたことからして、記録がアクセスできないようになっていたことから、情報の隠蔽が成されていて、彼女の場合は他言無用とされているのでは、何かと引き替え、もしくは記憶操作、これは無いかも知れませんが、それに近い彼女自身が記憶をしまい込んでいるのかも知れませんが。そうで無ければプレスなのに、それも特ダネを狙っているような人が、自分の体験を記事にしないわけがありません」。

アビンはションの話しに何となく納得したが、その言葉に裏には仮に、マクレガーに

質問した所で、はぐらかされるのが落ちと言うことを暗に示していた。

そう、証拠はビットンブルの曖昧な記憶と状況証拠、公式記録はアビン達がたどり着いた結論を否定するのであった。

たぶん誰かの考えで、物事が隠蔽されていることは確かであった。そこで、彼は納得したように答えることにした。

「分かった、これ以上は無理ということか」。

するとシオンはこう言った。

「そうではありません。この際ですから、出来るだけ外堀を埋めてみましょう」。

その言葉にアビンはビクリしながら尋ねる。

「後、何を調べて見る」。

「ベストラン候です。彼が以前居た部隊での評価、評判、活動なのです」。

その提案は、何か背景を見つけることが出来るかも知れないと、彼に思わせる言葉だった。

そう言ってシオンは、コンソールを操作し始め、暫くするとそれは終えて、結果が表示される。それを見て、王位継承権の争奪の話を知っていると悪役にしか思えない人物の別の面を目にしたのだった。

「結構良いやつじゃ無いか」。

アビンは思わずそう口走った。

「そうですね。爵位を持つ人物にしては、下の人を無下にはしていませんね」。

シオンはそう話しながら、感情を殺しているようにも感じられた。

それにしても、この記録からは比較的温厚な人物との印象を受ける。けれどそれは表面的なものかも知れない。記録上は爵位を有する人物の批判を乗せる訳にはいかないからだ。特に公式となれば、感情的な事を廃し、正確な情報が求められるに違いないが、上位の人物となれば記録官もその点は、柵に捕らわれていることも考えられる。

それを考慮しても、この記録は面白いとアビンには思えた。

それはベストラン候が居た帝国軍特殊化学作戦部、その実質的な責任者だったが、化学兵器の製造に反対を唱えて上層部と揉め軍を退いたとなっている。

この記録自体は公爵にとっては意に反するものだろう。それが公然と記録されていることは、上層部の指示に違いない。それから、アビンは記録を読み進めると、事故について記されており、そのために数人の死者を出したようだった。その中には彼の息子が含まれていた。これが原因かも知れない、とアビンは思ったが、この記録の指示が、当時の軍務大臣によるものであることも記されていた。たしか、この人物は三年前に不慮の事故で無くなったと記憶してる。その当時は暗殺では無いかと噂され、様々なニュースが出回ったが、結局、もともと心臓に持病があった事のゆえの単純な事故であるとされた。

そして、化学兵器の事故については、腐食性の強いガスであった為に起きた事故として、以後の製造や実験が禁止され全て処分された様だ。この指示をしたのがベストラン公だった。あれの本意では無いが、息子の犠牲により自分の信念を通すことが出来たようだが、その後、上層部と揉め軍を退く。

此処までの記録では、息子の犠牲に端を発した行動とも取られかねないが、良い仕事をしている。

ここまで記録を読んでアビンは言った。

「シオン。この記録で繋がるのは、トレッカーの居た部隊と化学兵器ということになるが、それだけだろうか」。

するとシオンは、素っ気なく

「分かりません」

と答えるだけだった。

「そうか、けどこれだけでは、動機は薄く。隠されている記録が何を示しているのかわからない。そうして、危険を冒してまで継承権順位を上げたいのだろう。この様な人物が帝国の実権を何故、欲しがるのかわからない。それとも欲望でも出来たのか」

アビンはシオンの答えを期待せずに話した。

しかし、シオンは無言のままだった。そこで、アビンはこう提案する。

「悪いが、ベストラン公の家族構成を調べてくれるか」。

するとシオンは無言のままコンソールを操作する。

暫くして、公爵の記録が出た。相母はまだ健在のようだ。亡くなった長男の下に二人

の息子と一人の娘がいる。妻には八年前に先立たれているようだ。

蛇足だが、一番下の息子は勘当されて行方知れずとの記録だ。

一瞬これが原因かと、思えそうな事だったが、素行不良の為と記載されているのに気を削がれるのだった。

ここまで来ると、やはりマクレガーの話が聞きたい。それは、容易でないことは分かっている。今は、生え抜きのジャーナリストとなれば、アビンには手に余る相手である。

ふと気がつきアビンはシヨンに言った。

「マクレガーの情報を出してくれないか」。

その言葉にシヨンは、

「あのプレスの方ですか」。

「そうだ、話を聞くのが難しいかも知れないが、記録を調べるのは構わないだろう。それに、公爵の私設軍隊の情報は出しても黒ばかりだし」。

「黒ばかりですか、良く言いますね。分かりました両方調べます。私設軍隊の方は近年の行動とします」。

そう言うとシヨンは、まるで早業を披露しているように、コンソールを操作し始めるのだった。

アビンは、暫くあつけに取られたようにその様子を眺めていて、突然動きがぴたりと止まって、

「出ました。アビンさん」

とシヨンが答えた。

アビンはその記録を見て思った。いろいろなところの取材をしている、それもかなり危ない取材も含まれている様だった。まさか六年前の経験から何か思う所でもあったのか、事件や事故の関係者で確信となる人物のインタビューがかなり多い事に気がついた。このことで彼女のことを良く思わない人物もかなり居るようだった。

過去、そのことで四回ほどトラブルになっている。一回は係争問題までに発展している。結果は、双方の痛み分けというか、訴訟の取り下げで収まったようだった。それらの記録を見ても、トレッカーやベストラン候との繋がりを示すものはこの記録には見当たらない。確かに一般の記録じゃ此処までかと、思った。

さて、私設軍隊の記録は、確かに真っ黒けのベツタリだ、ただ、トレッカーが公爵の私設軍隊に入ったのが六年前の様で中尉の階級となっている。このことは、何かを暗示している。日付を確認すると紛争が起きて一ヶ月後だ。

それでアビンはシヨンに言った。

「ビットンブルーの退院の日付は記されていたか分かるか」。

その言葉にシヨンはアビンの顔を少し眺めるようにしてから、コンソールを操作して答えた。

「五月十二日に退院となっております」。

「トレッカーが公爵の私設軍隊に入ったのがその三日後だ。これは何を物語っていると思う。まず、隠蔽された出来事の後に入隊、その後の二年後に警察に入ってる。それまでは、警察も公爵の私設軍隊とも関係を持っていなかった。実際には彼の居た部隊は公爵の古巣だから、それなりの面識はあったかも知れないが、この前後に直接的な関係になったのかも知れない。どうかな」。

シヨンはアビンの推測を真面目に聞いてから答えた。

「それは、推測ですよ。事実は違うかも知れない。けれど、そう考えることが出来る。でも、確信となる証拠不足で、状況からそう取ることも出来る。その方が話が通りやすい。けれど、説得力はありませんね」。

その言葉に、アビンは少し凹みそうに成りながら言った。

「随分手厳しい指摘だな。確かにそうなんだが、シヨンはどうなんだい」。

するとシヨンは少し微笑みながら

「わたしも同じようなものです。情報不足です。ですが、過去の出来事が、今のトレッカーを造ったといっても過言では無いとは言えます」

と答えるのだった。

そして、彼女は言葉を続ける。

「そして、この時以降ですが、ベストラン公の政府への政策批判が目立って増えていると言うことです。それも、軍や内務省のやり方への批判ですが、かなり正論で見識のあるものです。これを見ると、暗殺とか反乱とかを考えるような人では無いようです。こ

の様な人が、伯父様の暗殺を企てるのは何故との疑問が浮かびます。アビンさんはどうですか」。

アビンは彼女に返された質問に

「確かに、そうだ」

と答えるしか無かった。

それは、疑いがあっても明確な罪状が無いゆえに、拘束も逮捕も出来ないようなもので、ただ成り行きと調査の経過だけを、ただ見守っているような焦れっさがあった。

。「さて、ここで欠落しているピースは何だと思う」。

アビンは自分に問いかけるように言った。」

「ハッキリ言いますと、本人達の証言、いえ、考えかも知れません。それが一番手っ取り早いと思います。発端は最初の事故だった可能性は捨てきれません。でも、ここからでは調べようが無いですね。この端末の容量も足りませんし。ハッキングの腕にしても私はまだまだ子供です」。

シオンはアビンの問いに答えるように言う。そしてこう提案するのだった。

「アビンさん、今はここまでとしましょう。もっと詳しい事、つまり欠けているピースは他の人に頼むのはいかがですか。それも信頼できる人物に、どうでしょうか」。

その提案にアビンは少し躊躇した。というのは彼自身は、シオンとアンを巻き込むことに躊躇があったからだ。けれど此処は、

「その様な信頼できる人物は居るのかい」

と尋ねながら二人の表情を確認するんだった。

「ええ、保証できます。美緒さんのフィアンセのエド君に頼みます。彼なら大丈夫でしょう。それに彼ならアンも知っていますし、提督もその技量は認めています。まあ、掛かった労苦の代価は請求されますが、大丈夫です。おなかを満たしてあげれば満足するようですから」。

シオンはアビンの問いに笑みを湛えながら答える。

「なら、よろしく頼む」。

彼としては確信が無かったが、ここは依頼することにした。

するとシオンはコンソールを操作して依頼のメールを行った。そして振り返りながら言うのだった。

「今、依頼しました。調べた内容も一緒に送りました。暗号メールなので、読まれてもたわいの無いお喋りにしか見えませんが、ただ、添付ファイルには不審さがありますが、開くのにキーコード無しでは最低でも二年はかかりますから今のところそれで大丈夫でしょう」。

そして、シオンは立ち上がりながら

「セシリア、貸してくれてありがとう。それと黙って見ていてくれたことも感謝します」

と言う。

するとセシリアは、逸見を湛えながら言った。

「いいえ、お役に立てて光栄です。フィア」。

その言葉にアビンは妙な引っかかりを感じるのだったが、シオンとアンの後について部屋を出るのだった。

そして、彼はメディカルセンターを出ながら尋ねた。

「おなかを満たしてあげれば、とはどういう事なんだ」。

するとアンが答えた。

「シオンの料理の腕はシェフ並だからですよ」。

「そうなのか」。

アビンは少し心配そうに尋ねるのであった。

設営準備と調査

アビン達がブースを離れて少し立ってからホルスト達は班ごとに、設営準備を始めた。まずは機材の調達で、一部の班がプレス機材の関係もあり、その設置用の機材をディレクターと打ち合わせしながら調達するのだった。

この時既にホルスト達は、不審物の傾向から爆発物に警戒し始めていた。

そこで、機材調達を名目に、客室や警備室を念入りに調べはじめた。

だが、さすがにまだ利用されている客室は念入りに調べるわけもゆかず、不審な点が無いか確認するにとどめて、使える物があつたときは、乗客に了承を得て運び出すのであつた。

そして、ヘンツェの班がティスの部屋で機材の調達で物色していた。

彼は各班に渡された指示の書類を見ながら椅子の調達で来ていた。

「どうだ、使えそうか」。

ヘンツェはステラ・ラッセンに尋ねる。

すると彼女は不安そうに答える。

「どうでしょう。この椅子何か重い物を乗せたのか、変な歪みがあります」。

「歪みって」。

彼が尋ねると、ラッセンは絨毯の敷いてない床に、椅子を置いて軽く端を押さえるとカタカタ僅かだがバランスが悪くなっている。この手の調度品は、たとえ三等室でもしっかりした物が備えられているはずで、そうで無ければこの船の運航会社のプライドに傷が付く。

「これって、不良品とは違うと思いますが、納品時に全数検査されるはずですので、よほど重い物か人物が座らなければこうはなりません」。

「この部屋に泊まっていたのは、ティスというひよろつとした商社マンだったな」。

「なら、この上でアクロバット運動でもしたのでしょうか」。

するとヘンツェはラッセンも顔に指さして言った。

「その考察貫った」。

「どういう事でしょう」。

ラッセンが不思議な面持ちで尋ねると、ヘンツェは一緒に来ていた三人を自分の周りに呼んで言った。

「いいか、膝より上の場所で、物を隠せるかしまい込める場所を探せ。こじ開けることが出来るか、またはねじを外せば開けられるところも含めて全部だ。いいな」。

その言葉に集まった三人は、そろって

「分かりました」

と答えて搜索を始めた。

探し始めた各人員を暫く眺めていたヘンツェは言った。

「俺だと、こういう場合、椅子を使って隠す所といえば天井裏だと相場は決まってるのだが」。

そう言うってから、その椅子を取り天井を入念に見渡してから、

「この部屋には、緊急用の点検口があるな、その入り口の端の天井だ」

と言うと彼はその下に椅子を持って行って、その上に乗り、点検口の止め金具を外し始めた。その様子に他の三人もその下に集まった。

暫くすると、カタンという音とともに天井の蓋が開く、彼はその蓋を、下にいるもの到手渡してから、ハンドライトを取り出し口に啣えて、中に頭を入れた。

そこで彼が見た物は、軍用爆薬が多量に置かれていた。しかし、まだ起爆装置とかは付いておらず、幾つか配線がつながれている程度だった。

「まだ、準備段階だったか」。

彼は思わずそう呟いた。

それから、椅子から降りて一緒に来ていた者の一人に、ホルストへの報告に走らせた

。それから、ヘンツェはラッセンに言った。

「爆薬の撤去の経験はあるか」。

その言葉に彼女は驚きの表情で答える。

「ありません」。

「だろうな、今回が初めての経験になるな。普通は経験しなくても良いことなんだが、この際、人員も足りないことだし、俺が教えるからその通りにしろ、いいな」。

「わかりました」。

そう答えるラッセンだったが、彼には顔が強ばっているのが見て取れた。

そこで彼はラッセンに、安心を与えようと言った。

「なあに。起爆装置が付いてないから一個づつ、天井から下ろせば良いのさ。そうそう床に叩きつけなければ爆発しないから」。

そう言うとヘンツェは一個ずつ配線を取り外しては、爆薬をラッセンに手渡すのだった。そして彼女はそれを、床に跪いている者に渡していった。

それから数個取り外しが終わった所で、彼女は思いついたことを口にする。

「あのう、これを私が床に落とすとどうなりますか」。

するとヘンツェは即座に

「ドッカン。だろ」

と答えて彼女をからかった。その怯えようと来たら、手に持った爆薬でお手玉をし始めるほどだった。

すると彼は直ぐさま謝った。

「悪い。嘘だ。よほどのことが無いと爆発しないから、安心してくれ」。

その言葉に彼女は、ホッと安心してから、

「知らないことをいいことに、からかわないでください」

とヘンツェに怒鳴った。

「悪いな、これで緊張がほぐれただろう」。

彼は悪びれることも無く、そう言ってのけてから撤去を黙々と始めるのだった。そんな彼の様子を見ながら、ラッセンは気を回してくれたヘンツェに感謝したが、もっと他の方法があったのでは、と思ってもいたのだった。

そうして、ほぼ全部の爆薬を天井から下ろしたときに、ホルストが労をねぎらうように訪れた。

「様子はどうだ」。

ホルストは部屋に入るなり、そう尋ねるのだった。

するとヘンツェは確認を終えたのか、椅子から飛び降りて言った。

「ご苦労様です、チーフ。今、全部下ろした所です。確認した所ではこれ以上何も無いようです。奴さんも予定に従って行動していたんでしよう。急いで据え付けていたという風には見えません。たぶん、この調子では実行は数日後を予定していたようですね」

その言葉にホルストは、顔を曇らせて言う。

「どうやら、今回のことは想定内だったということか。それに、公爵のインタビューが四日後というのも、向こうには知られているようだな。それとも、いやなんでもない」

ホルストは最後の言葉をごまかした。それは要らぬ憶測を生みたくなかったからだ。

それから彼は床に置かれた爆発物を見て、ため息交じりに言った。

「いったい、どのようにすればこれ程の爆発物を持ち込めるんだ、ご自慢のセキュリティは、おねんねだったのか。責任者は厳罰だな」。

するとヘンツェが答えるように言った。

「それは、可哀想ですよチーフ。星系間航行の船に何が運び込まれたとしても不思議ではありませんから、許可さえ通れば何でもござれ、ということをしてチーフ自身も知ってるでしょう」。

「まあ、そうなんだが、これは少し酷すぎるな、自沈でもする気かと思えてしまう」。

「それは、大げさでしょう」。

そう言って互いに笑い飛ばした。この豪快さにはラッセンはついて行けず軽い目眩がした。

なにせ彼女は、ホルストの部署に来てまだ一年も経っていなかったから、仕事と雰囲気慣れるのに精一杯だった。ただ、何となくこの部署の噂や、それとなく年齢の近い同僚から忠告は受けていたのだが、今回の経験で、始めて実感する事に成り、早くも気分が無くなりそうだった。

「どうやら、その事に気がついたのかホルストが、声を掛けてきた。
「ラッセン。顔色が悪いようだな。此処はいいから少し休め。後はこいつらで済ませるから」。

その言葉に彼女は、感謝すれども引き下がるわけにはゆかず、
「大丈夫です。やれますから」。

といったが、どう見ても顔が青かった。
そこで、ホルストは言った。
「これは、命令だ今から四時間与える。しっかり休んでおけ、まだ仕事が終わったわけでは無いからな。それに、女性陣でなければつとまらん仕事もあるしな」。

その言葉に彼女は背筋を伸ばして、
「分かりました、チーフ」
と言って敬礼を仕掛けた。これだからこの部署は軍隊だと言われるんだ、とホルストは思いながらも、様子を見て来て良かったと胸をなで下ろした。
このまま彼女を仕事について貰うと、たぶん精神的に参ってしまうだろう。まだ慣れたとは言えない新人を潰したくは無かった。
それに、今回のような危ない仕事を彼女の様な新人に任せるのは、気に入らなかったもので、丁度良かった。
すこし躊躇けるように出て行くラッセンを見送ってから、ホルストは言った。
「ヘンツェ。後は何時ものようによろしく」。

すると、彼はビシッと敬礼して、
「分かりました。チーフ」
と言って残りの者達で、爆発物の梱包と運搬の準備を始めた。
ところで、何時ものこととは、使えそうな物は手数料として頂き、そうで無い物は早々に危険物として廃棄する。べつにゴミ捨てるわけでも無い。航行中の船なら安全を確認後、船外で爆破処理するのだ。
そして現在はステーションに停泊、惑星上空でも有るので、下の軍施設に渡すのだ。ただ、時には売ることもある。交渉次第であるが。
さて、ホルストとしては処理はヘンツェに任せることとし、彼は貰ったメモを見ながら爆発物の搬入経緯を調べておこうと思ったのである。そこで、アビン達を呼ぶことにした。
彼はブースに戻ると、シヨンに渡しておいたインカムに連絡を入れた。
「俺だ、今どこにいる」。

すると直ぐに応答があった。
「今、アビンさん達とメディカルセンターを出た所です」。

その返事にホルストは少し考えてから言った。
「では、皆で此方に戻ってきてくれ、やって貰いたい仕事が出来た」。

「分かりました。直ぐ向かいます」。

そう応答があって直ぐに回線は切れた。
ホルストは回線の切れたのを確認すると、ブルッフに指示を出して、携帯端末を準備させた。それは、彼のプロジェクトで何時も使っている物なので、シヨンにも扱いやすいはずだ。とは言っても、どんな物でも数分で使えるように成る特技を持つ彼女には、何を準備しても構わないのだが、やはり情報の漏れは注意しなければならない。だから、医療機器の端末か、プロジェクトの端末以外殆ど触ろうとしないのも事実だ。特に携帯端末は通信として使うのは良いが、それ以外で使うときには、此方の端末の情報を全部抜かれ、新たに間違った情報を入れられかねない。だから、特別仕様の端末を用意する。軍も警察も同じなのだが、此方は造ってる方なので、クラスは上である。
それから、ホルストは各班からの情報を集め、シヨンが到着するまでには、準備を整えておいたのだった。
そして、彼が準備を整えたのと同時にアビン達は現れた。
「丁度良かった。準備が今できたところだ」。

そう言って、彼らを迎える。
「遅くなりました」
と言ったのはアビンだった。シヨンは、
「どんな用件ですか」
と仕事優先の口調で、
「遅れました。ごめんなさい」

と謝るのにはアンだったのである。
するとホルストは早速、今の状況を説明した。
「現在、設営の準備に資材をかき集めているが、その過程で、八カ所に爆発物が仕掛けられていたことを確認した。すでに、それは撤去させられているが、各班からの連絡によるとそのどれとも、軍が使う高性能爆薬だそうだ。このことの意味は分かると思うが、どうやら爆破テロを考えていたようだ。それで、これから君たちにはしばらくの間、設営資材の確認と移動の手続きと称し、この船に持ち込まれたであろう爆発物の総量を概算して貰いたい。出来るなシヨン」。

その言葉にシヨンは黙って肯く。
それを確認してホルストは話を続ける。
「さて、君たちも今の時間まで、ノンビリしていたのではあるまい。だが、今は此方の方に専念して貰いたい。あちら側が自暴自棄になったときに船諸共自沈を考えているのなら、その手を阻んでおかなければ、此方の苦労も水の泡になる。いくら何でも宇宙空間なのだから水に飛び込み泳いで逃げれないのだからな」。

すると突然、ホルストの話の腰を折るようにアンが、
「すみません。私は泳げません」
と言った。
その言葉にブルッフや、アビンとシヨンもクスクス笑ったのだが、ホルストは至って真面目そうに言った。
「浮き輪でも、仕え」。

「はい」。
そのアンの答えを聞いてから、ホルストは気を取り直して言った。
「それから、悪いが同時に移動する物品のリストも作成してくれ、お偉いさんの首を縦に振らすために」。

するとシヨンが言った。
「それって、ホルストさんの仕事じゃありませんか」。
その言葉にホルストは笑みを浮かべながら言う。
「超過勤務一割増しだそうだけど。ここで加わってみる気は無いかなお嬢さん」。
けれどシヨンは浮かない顔で言う。
「そんな、下心見え見えな話なんかに乗りません」。

するとホルストは素っ気ない言い方で、
「これを行うと、申請項目に業務時間を加えることが出来るんだけどな」
と空々しく言うのだった。
するとシヨンは、勢いよく言った。
「やります。やらせてくださいチーフ。業務時間加算を」。

その言葉にホルストは為て遣ったりとの表情をした。その様子を見てアンは、シヨンの弱点を突いた誘いに彼女が負けたことを認めるのだった。アビンはそれが何を意味するのか理解できなかった。

するとアビンの袖をアンは引っ張って、彼を自分の方に向かせてから小声で言うのだった。

「あのですね、アビンさん。シヨンは船の船長の資格を目指しているんです。そのための受験資格のために、業務実績を積みなければいけないのです。だから、その時間を稼ぐために、今のようにホルストさんの無理な話にも受けるんです」。

その言葉にアビンは、まだ若いのに船の船長か、目標のあるやつは強いからな、と思ったのだが何故そうなのかは聞く気が持てなかった。

この様に二人がこそこそと話をしていると、ホルストが言った。
「仲の良いことは、構わないが見せつけるのだけは止めてくれないか、提督が現れたときに何と言いついて良いのか分からないからな」。

その言葉にアンは黙ってしまったが、アビンとしてはそのつもりが無いので、弁明をしようとしたが、シヨンが身振りで話さないようにと促していたので、言葉を飲み込んだ。

それから、アビンはシヨンのもとに行って、書類を読むような素振りをしながら言った。

「なんで、言い訳してはいけないのか」。
すると、シヨンは少し残念そうな顔をして

「そんなことをしたら、アズが可哀想です。彼女の立場はどうなるのですか」

とそれとなく話すのであった。

その言葉にアビンは自分の考えの至らなさに、頭が下がるのだった。

さて、シヨンの横にアビンとアンが付いて書類を互いに読み、比べ合った。

そして最初に分かった事は、今まで発見された爆発物に総量は二トンになることが分かった。この量では残念ながらこの船で自沈するのはいささか無理という物だった。確かに、機関部の重要部に仕掛けるのなら可能かも知れないが、かといってそこに仕掛けるには機関室や制御室を制圧しなければならないため、リスクが大きすぎその間に、シャトルなどで船を離れられては、無駄になってしまう。それにそこまでの人員を割いてしまうと、他はどうするのかと言う問題も出てくるだろう。

では、他の目的があるのでは、との考えも出てくる。それについては、シヨンの腕に掛かっている。本来の総量が本当にそれだけなのか、それとも種別により使い方が違うため、別の何かの目的で持ち込まれたかがそのうちハッキリするに違いない。

そうアビンは思った。

それと同時に設営の機材リストも手元にあり、それを交互に扱うのは結構骨が折れる仕事だったので、途中から、機材はアンに爆発物はアビンが扱うことにした。ただ、整理調査するのはシヨン一人ではあったが。

そして、時間が経つと共に順調に進んで行くのは機材のリストで、アビンの持っているリストは一向に進まなかった。

元々からして、不確かな物が大半なのにその関連性を調べるのは至難の業だ。だいたい全部が同じ用途の為とは限らない、単なる密輸の可能性もあり、誤配だってあり得る。

そう考えながらアビンは、機材リストがだんだん整っていくので、このまま手詰まりで終わるのだろうと思いつつアンが、リストの区分けをしているのが目に止まる。

「どうして、区分けをするんだい」。

それとなくアビンは尋ねてみた。

「この方が、後ではかどるでしょう」。

その答えはごく簡単なものだったが、ふとアビンは考えてみた。目的別で分けてみたらどうだろうと、そしてその事をシヨンに告げて見つかった爆発物の用途ごとの分類をして貰う。

するとその用途は、五つほどに分かれた。先ず軍用として破壊工作に使われる高性能爆薬と、対装甲車両用爆弾に実装爆弾、これは多種だった。それに土木用の爆発物に液体爆薬だ。この分類から考えられる事は、何か、先ずは土木用は実際の搬入物だろう。液体爆薬は取り扱いが危険で一般には使用しづらいが、科学部対なら可能。実装された爆弾は密輸品の可能性が高い。対装甲車両用も同じ理由で対象から外せる。残るは、高性能爆薬と液体爆薬だ。客室や警備待機室で見つかった爆薬は、今のところ全て高性能爆薬だ。

そのことを考えれば、高性能爆薬に絞って調べればいい。けれど液体爆薬にアビンは何か引っかかる思いがした。それが何かは、思い浮かばなかった。

けれど一応は、記録照合をする。

「シヨン、今上がっている爆発物で用途別に五種になると思うけど、正解か」。

「はい。五種です」。

さすがだ、直ぐに答えが返ってきた、とアビンは感心した。

それでは、どの位の出てるのか楽しみに思いながら尋ねる。

「では、その分類でそれぞれ発見分と、記録上を合わせるとどうなる」。

すると少し間が開いて答えが返ってきた。

「高性能爆薬千五百キロ、対装甲車両爆弾二百キロ、実装爆弾二百キロ、土木用爆発物二百キロ、液体爆薬十トンです」。

その答えを聞いてアビンは耳を疑った。

「計算が合わないじゃ無いか。それに液体爆薬の量はなんなんだ」。

するとシヨンが平静に答える。

「最初から期待できない書類が多いですから、この位の誤差は仕方有りません。それに、」。

とシヨンの言葉が止まった。それに合わせるようにアビンは、

「それに」

と尋ねる。

すると躊躇うようにシオンが話す。
「それに、液体爆薬は、見つかった物は十キロほどなんですが、混合すると爆発物になるのが十トン以上有ります。二液混合でそうなる物が十トン、そして三液や薬物を混ぜてそうなる物が八百トンはあると推定出来ます。記録上正しければ、これなら自沈は可能です」。

その話を聞いてアビンは目の前が暗くなるのを感じた。そして言った。
「すると、発見された爆発物はデコイということか」。
「そうかも知れませんが、そうで無いかも知りません。というのは、元々の計画が事故による公爵暗殺であるのなら、大量の爆発物は必要無く、ポイントを押さえて公爵を閉じ込めミュラに襲わせるものだったんですが。今現時点では、それは出来ません。するとトレッカーの以前居た部隊が鍵になります。科学部隊でしたよね」。
「そうすると、その部隊での知識が、この船に積み込まれている薬品でまたは燃料で爆発物を大量に制作出来る事になるということか」。
「ご名答です。しかし、大量の混合物を造るには、また薬品や液体を移動混合するには人員が沢山必要になります。短時間で使用と考えるほどです」。

そういうシオンの顔には緊張の色は見えなかった。
そこでアビンは、尋ねてみた。
「シオン、なぜ安堵した様な顔をしてるのかな」。
すると、その指摘に驚いて両手を頬に付けて、
「そんな、顔をしてました」
と尋ね返してきた。

「ああ」。
そう答えるアビンに、シオンは考えたことを話した。
「いま、向こうの予想人員が八人ほどになってしまっています。その人員では、大量の移動混合を行うには時間的に無理がありますし、誰にも見つからずにそれを行うことは出来ません。量が多すぎますから」。

その言葉にアビンはさらに尋ねる。
「まったく可能性が無くなったと言うことか」。
するとシオンは真面目に言った。
「いいえ、この船の全員を拘束すればそれは可能です」。

そしてもう一度尋ねる。
「可能性は低いと言うことか」。
「向こうの出方次第と、何か特別な装備で、たとえば化学兵器で全員を眠らすとか」。
「それなら、いっそう毒ガスで良いじゃ無いか」。
すると少し考えてからシオンは言った。
「それは、無いと思います。向こうは事故か個別テロで目的のため不特定多数を犠牲にしても構わない、というような行動は取ってないからです。ミュラの件でも被害を食い止めるためにビーム砲まで持ち出して止めようとしていましたから。どうやらベストランは目的のためなら手段を選ばず、という方では無いようですね」。

その言葉にアビンは、どこかホッとしている自分が情けなかった。
この様にアビンとシオンが会話、調査している間にアンは、自分の仕事を一通り終え、ブルッフの使っている端末で結果を確認していた。

そこへホルストが近づいてきて、
「どうだ、準備は整いそうか」
と言った。
その言葉にアンは、直ぐに答えて、
「はい。この資料を見てください」
と言ってブルッフの端末を示すのだった。

それを目にしてホルストは、こう言った。
「さすが、提督の私設秘書。手早く良いできだ。後から提督にお礼を言っておこう。ところで、君たちはどうなんだい。アビン君」。

そのふられた言葉にアビンは即答できななかった。すると、シオンが彼に代わって言った。
「先ずは、この記録を見てください」。

ホルストはその言葉に反応して、シオンの端末の表示を見た。確かに興味深い結果だっ

たし、此方の盲点となっている事も分かる。そして、早めに向こうの人員を出来るだけ減らしたのが、功を奏して選択肢を狭めた結果になった事も理解できる。

「わかった。ご苦労だった。後は休んでくれ。ただし、アビン君はこれから設営の仕事に取りかかって貰う。機材のリストも出来たことだし、それを搬送するのにも手を貸して貰う。いいかな」。

その言葉にアビンはこれで良かったのかと思いつつ、

「分かりました。ホルストさん」

と答える。その後ろでシヨンがアンに、何かを小声で話していたが、アビンには聞き取れなかった。

設営

そこは、改めてきてみると何も無い区間のようなようだった。
このイベントホールは、船長の歓迎会の時には人が、大勢入っていたし、沢山のテーブルや椅子が置かれていたが、今来てみると、それは全て片付けられている。それは、多くの調度品がミユラの事件後、事後処理との名目で運び出されたからだ。
アビンは中に入って上を見上げてみると、天井もかなりの高さがあるが、そして周りには二階三階通路が、周りをぐるっと囲むようにしてある。
彼が如何にも始めて来たような様子で、キョロキョロしているとヘンツェが横に来て言った。
「あまり周りを見ていると、持っている機材を床にぶちまけてしまうぞ」。
その言葉に対して如何にも、やる気の無い学生みたいに
「わかりました。ヘンツェさん」
と言うのであったが、この返事に彼は気にせず、持って行く場所をアビンに指示した。
アビンは言われたとおりに運んで、既に運び込まれていたテーブルの上に置くと、ルクレールが不機嫌そうに言う。
「おい、それはその上に置くな。邪魔になるから」。
そう言われてアビンは渋々、テーブルの横に機材を置いた。
アビンの運んできたのは、ボックスに詰め込まれたケーブルやコネクターだった。それは、如何にも投げ入れたといわんばかりにゴチャゴチャに入っていた。
アビンはこれを後で、使うとき探さなければならないのは、大変だなと思いながらも、自分の仕事では無いからそれ以上は気にとめなかった。
それに、ここにいる人員はホルストさんの部下とプレスの人間に警備員と自分たちだった。自分たちとはシヨンとアンも含まれる。なぜか来なくてもいいと話されていたのに、ついてきのことだった。
この設営で最初に決められていたのは、インタビューの場所であった。それは、イベントホールの中央よりイベントステージに近い位置で、ステージから十メートル離れた場所だった。そこに、かなり丈夫そうな木製テーブルで、対物ライフルで無ければ貫通は難しい厚みと密度の高い材質の物だった。おかげでその重量は大人四人がかりの物だった。同様に座る椅子もデザインはしゃれた物だったが、使われている素材は同じもので、その上に防弾用にも使われる特殊繊維のカバーやクッションが張られていた。それは見た目はシックなデザインなのだが、その実は装甲車を思わせる使用なのだった。
アビンはそれを見て少しやり過ぎではと思えたのだが、周りの雰囲気からして冗談では無さそうだった。
そして、そのインタビューの席を基準にして、観葉植物の鉢が据えられていった。その席から離れること十五メートルの位置にプレスの機材を置く場所を確保した。そこにはテーブル二つに、椅子五脚、それから電源パネルにネットワークの集中端末中継機などが置かれた。どうやらリアルタイムのインタビューを企画しているようだった。その後ろに幾つかの照明があり、その少し後ろにギャラリーの席か、椅子が十二脚ほど置かれていた。いった誰が座るのか分からないが、ウンザリするような政治の話は聞きたくないので、その席に座るよう決められた人物には同情した。
さて他にも幾つかの照明が、両サイドに設置されることになっていた。
それぞれの機材を搬入し設置、配線して試験してとの作業が黙々と続いた。
暫くすると、休憩との言葉が掛けられて、二つの簡易テーブルに、飲み物とサンドイッチが準備されていた。この事には忙しさに気がつかなかったが、さらにそれを準備したのはシヨンとアンだった。どうやら彼女たちのお手製らしい。
この件についてホルストさんは、仕事の時に時々こうゆうことをしてくれるので、助かっているとも言っていた。ただ、支払いが自分に廻ってくる事以外は、だそうだ。
だから、この食事は当然のこととして、ホルストの差し入れだ、という事になっているらしいのだが、

この食事の時に、アビンは物事を一つ進めておこうと考えていた。そこの今いるメンバーを見渡して当人を確認して、近づいた。

「マクレガーさんも準備に来られたんですね」。

アビンはそれとなく声を掛けた。

すると彼女は少し不機嫌そうに答える。

「その話し方だと、如何にも私は手伝いに来ないように感じるんだけど、気のせいかしら」。

「これは失礼しました。肉体労働ですから女性陣はお休みかと」。

そうアビンが答える、と彼女は少し軽蔑したように言う。

「それって女性蔑視じゃない。向こうを見なさい、女性も混じってるじゃない。それに観葉植物の鉢やプランターを設置するのは女性の方が向いていると思うけど。ただ、重い物はそちらにお願いするけどね」。

アビンはその言葉に失言だと気がついたが後の祭りだった。当然、彼女は気分を害しているようだった。このまま、尋ねても良いのだろうかと思っていると、彼女の方から話を振ってきた。

「貴方も災難ね。この件では部外者なんでしょう。というかお客さん、いえ、付添人の立場よね。公爵の助手さんでしょう」。

その言葉にアビンは少し安堵しながら答える。

「まあ、そうなんですが、殆ど小間使い並みの扱いですが」。

その答えに彼女は口元が笑った。

「それは、大変ね」。

アビンはマクレガーの表情が和らいだのを、見逃さずに尋ねた。

「すこし伺ったんですが、ミス・ビットンブルーと以前同じ職場だったそうですね」。

その言葉に彼女はさり気なく返してきた。

「それは少し違うわ、働いた場所が同じだったと言うことなの、彼女は医者で、わたしは事務員だから現場は違ったのよ」。

「ですが、ミス・ビットンブルーは貴方が命の恩人だとも言っていました」。

「ああ、その事。砲撃で気絶した彼女を壊れた車から引きずり出しただけよ。担いで逃げてくれたのはトレッカーなのよ。あれ以来の顔見知りなんだけどね」。

その答えは、確信が持てなかった一つのピースがはまったような気がした。

それから、もう少し踏み込んでみた。

「そういえば、ミス・ビットンブルーが言っていたんですが、昔会ったときと、今とでは随分印象が変わっていて、ついさっきまで気がつかないと言っていました、何かあったんですか。わたしもトレッカーさんにお目に掛かった時、随分痩せていたのでどこか悪いのかと思ったほどなんです」。

と探りを入れるため、アビンは会ったときの印象を誇張して話して見たのだった。

するとマクレガーは少し考えてからこう言った。

「そう言われてみればそうね。始め会ったときはもっとガッシリした体格だったわ。わたしは仕事の都合よく彼と会うことがあるの、どのような事でもかは企業秘密で言えないけど、色々面白い話を聞かせて貰ってるの。警察関係者にパイプを造っとくと他社を出し抜けるのよ」。

そう言ってから、彼女は彼にコーヒーを勧めて言った。

「まだ仕事があるんだから、これでも飲んでこの後も頑張っただけね」。

そしてアビンにカップを渡すとスタッフの集まっている方に歩いて行った。

このように、アビンが探りを入れようと近づいた結果は、これで終わりとなった。だが収穫もあった。マクレガーとトレッカーは頻りに会っているということだ。それに、ビットンブルーの臆気な記憶と一致する証言も得た。

だが彼は妙な感じではぐらかされていた事も確かだった。

それにしてもベストラン公がランカスター公爵の命を狙う理由が、いまいち漠然としてならなかった。確かに自分より順位の高い者を亡き者にしたいと考えるのは、宮廷闘争内では別段不思議なことではないが、ここ最近の話では、それはスツカリ影を潜めているとのことだった。それは、現皇帝が自分が退いたときの後継者をハッキリ決めた事により、誰も口出しが出来なくなっただけだ。普通は周りの取り巻き連中が、色々口を挟むのが常なのだが、この度は何かのことで、そうはならなかったのだ。その理由は外には漏れ聞こえてこない。

誰もがその事を口外しようとしならしい。そのためその後の後継者候補を有利に推し

たい、どの意図で自分の順位を上げたいとも考えられるのだが、その事が露見すると身の破滅ともなりかねない事になるらしい。どうやらその点に関しても現皇帝が、強力な拘束力を持つ取り決めを造ったらしい。

それでもベストラン公は、その冒険を犯しているようだ、証拠は状況証拠のみだが、事が起これば、その時、今の資料を提示すれば審問は免れない。

アビンにはそこまでの意味があるのだろうかと思問だった。

そんな風に彼が考えていると、誰か背中を押すのであった。振り返るとそこには、ホルストが立っていて言った。

「いつまで悩んでもしょうが無い。少し体を動かしてくれないか、まだ仕事は残ってるのだから。さあ、行った行った」。

そう言われるままアビンは、先程の続きで照明の配線の手伝いを始めるのだった。

そんな様子を見ながらホルストとしては、アビンが悩んでいる事は見て取れていたのだった。だからこそ考えすぎないように、それから別の見方が出来るように違ったことをさせて気分転換をさせてみたのだったが、それが功を奏するかどうかは本人次第だ、とも思っていた。

さて、彼はふと目に止まった人物がいた。ミュラーである。ホルストの記憶が正しければ、さっきまで彼はこの場にいなかったはずだ。何時ここに来たのだろうか、と思っていると向こうの方から近づいてくるのだった。

そして、ホルストにこう言った。

「いや、悪いね。さっきまで此処の警備の打ち合わせで、話し込んでいたものでね」。

その言葉にホルストは返すように言った。

「では、今から手伝ってくれるのかな」。

するとミュラーは申し訳なさそうに言った。

「いや、これから警備の下見と打ち合わせだ。実際に場所を確認しながら人員配置と要項を決めようと思っただけ」。

「随分余裕だな」。

「そうでもないさ。ほらあそこでトレッカーが待ってるし、他の連中もいるだろう。地元の警察のお偉いさんも来てしまっただけ」。

「それは、大変だな。そこんところはよろしく頼むわ」。

「ああ、そうする。ところで、船からちまちま不審者を降ろさないでくれと、お偉いさんが言ってるんだが、どうにもならんかな」。

その言葉にホルストはムツとして言い返した。

「それは、俺に言っても無駄だ。入管に真面目に働けと言ってくれ」。

その言葉にミュラーは、

「相変わらずだな」

と言ってから、その場を離れてトレッカー達の方に歩いて行った。

その彼らのいる方角は、丁度ステージの反対側の出入り口だった。そこは唯一、一階だけに出入り口のあるところだった。そして、その場所がインタビュー席から一番遠い場所でもあったし、当日はギャラリーの影で見えにくい場所でもあった。

それからは、ホルストは警備の打ち合わせで、見え隠れするミュラー達を確認するのに努めながら、ヘンツェやメシアンにそれとなく確認指示を出していた。

何故彼がそうしたのかというと、警備の手際を確認したかったのと、地元のお偉いさんが来ているとの言葉が気になっていたからだった。

だが、ミュラーの側からすると、イベントホールの通路が三階あり、一階を除けば二三階はホールの半分しか回っていなかった。つまり一階通路はホールを一週しているのだった。一階のホールへの出入り口は七カ所で、二三階は四カ所でそれぞれ階段の近くにあった。エレベーターはホールの左右に一つずつとステージの後ろの一つだ。

そして今彼のいる二階の右後ろの入り口は、さっき一階から二階に上がった階段の直ぐ横にある。ここからは今ステージでの観葉植物のプランターを並べている様子がよく分かる。少ない数で効率よく生い茂る庭園をイメージしているのだろうか手前は緻密に、後ろに行くほど間隔が広くなる様に配置させてある。

よく考えられていると、ミュラーは感心した、と同時にこれなら後ろから近寄ると、ここからは直ぐに分かるし横からは丸見えの配置が成されていた。

それはセキュリティ上の配慮と撮影時の見た目も考慮してのことだろう。たぶん前からは生い茂る植物で後ろの様子がよく見えないのは、ある意味欠点かも知れないが

、後ろで事を処理しても前から見えぬ。ただ横からは丸見えなのだから、横に警備を配置すれば処理も楽だということか。たぶんホルストのことだから、後ろから忍び寄るとトラップに引っかかる様になっているに違いないとミュラーは思った。本当に事を起こすなら直ぐ側に近づいたとき以外にはないだろう。相手の油断しているとき以外に、そうなるとうとうやって近づいて来るかだ。

そう考えながら彼はトレッカーが下の警察のお偉いさんへの説明に、余念がない様子を目にしていた。当の警察としても、いくら上空の船での出来事といえ要人の暗殺が、起これば信用問題に発展。または怠慢を追求されかねないから、わざわざこの船に乗り込んで来たのは頭が下がるが、素人に手を出されて問題を大きくすることにも成りかねないので、そうそうにお引き取り願いたい所ではある。

それにしてもトレッカーの勤勉さには頭が下がる思いがした。

結局のところ、このホールの下見で決まったことは、一階以外の全ての通路と出入り口は封鎖することだ。それは当を得たことで人員不足に時間的制約、それから警備員の経験不足、それに警察も同様とのことで決まった。

ただし、閉鎖と言っても人員は、それぞれの階ごとに二人配置することにした。ドアを破ってまで事を構える輩とも限らないと判断してのことだった。

それで、一階の各出入り口にそれぞれ二人に巡回員四人と決まった。それから内部の人員はトレッカーとミュラーを除いて四人だ。これに必要な人員は、船の警備から八名とトレッカーの部下を合わせても足りないのです、下の星の警察から応援を呼ぶということを決着が付いた。

そんな苦勞に気を止めることなくホルストは、二人の行動に不信を募らせていた。とは言っても、彼自身は自分の仕事に支障がない限りは、他国の事情には手を出さない主義だった。

たとえ、先程の警備の打ち合わせで、何か折り合う接点を見だしランカスターの暗殺を決め込んだとしても、それはそれ、仕事に支障が来さなければ万事は成り行きだ。ランカスターには気の毒だと思うが、火の粉が降りかからなければ、彼としてはそれで良かった。

それは、英雄気取りで被害を出しては仕事にならないが、少しは良心は痛むが、彼一人で済むのならそれでいい。返って他に被害が出るのなら、行動を起こす用意だけはしてあるからだった。このことは一部の者にしか伝えてはいなかったが、アビンにはどうするかはまだ判断できていなかった。

黙々と働くアビンを見て、ランカスターが亡くなったら引き取ろうと考えてはいたが、シヨンが側に居るとそれはそれでやっかいだった。

何せ彼女は勘が鋭い、ちょっとしたことで此方の動きを察知する、ある程度此方の素性も知っているの把握も早い。そう考えると、やっかいなことは背負い込みたくはないので、ここはそれなりに協力する事で、ご機嫌取りをする事に決めていた。

だから、こうやって協力をしている。

そして、どうやら設営の準備は、殆ど終わることが出来たようだ。後は、照明の試験とプレスの機材試験だった。

それゆえに、ホルストは疲れ切っている女性達には此処で引き下がって貰うことにして、ブルッフを呼んだ。

「何でしょうか」。

と言って彼女はホルストの傍らに来た。

そこでスケジュールの用紙を見ながら言った。

「だいぶ終わったみたいだから、疲れている君たちは引き上げて構わない。後は男手だけでも大丈夫なので、部屋で休んでいてくれ。用があればまた呼ぶ」。

そう告げるとブルッフは、

「分かりました。チーフ、では休ませて頂きます」

と言って下がって行った。

そして、彼女はグループの女性を集めて話をし、それから全員整列して敬意を示す態度をしてホールを出て行った。

それを見てホルストは深くため息をついた。それは、ここしばらくの間に軍隊式の挨拶が浸透してしまっていたのに頭が痛かった。

そんな様子アビンは、劇でも見るように眺めていた。

「あんなに、牛直面目な女性部隊を始めて見ましたよ」。

「アビンは側に居るヘンツェにそれとなく言った。
するとヘンツェはそれを否定するように言った。
「あれは、生真面目じゃなくはしゃいでるのさ、こうゆうときじゃないと仕事ではしゃぐ機会はないからな。たぶん二週間もすれば元に戻るさ、いや、戻されるかな」。
そう言って彼は笑った。
「そうなんですか」。
「そうなの。まっいいさこれで、俺たちの仕事も終わりだ。お疲れさん」。
そう言ってヘンツェはアビンに握手を求めた。
アビンはそれを受けて
「どういたしまして。助けになりましたか」。
「ああ、助かった」。

会合

イベントホールの設営を終えた頃、デュパルクの部屋では、ランカスターと提督が来ていた。

たぶん、この三人がこの船の実質の三巨頭である。ではその会談とは、他の者達が心配しているような暗殺計画への対処ではなかった。この三人は互いに元々面識があり、ミュラの事件が起ころうが起こるまいが、こうして集まることとなっていた。船長室の前には、なぜか重武装した兵士と制服の提督警護官が二人ずつ立っており、階段とエレベータ前にも二人ずつ重武装の兵士が立っていた。

そしてその内訳は、船長室の前に立っている重武装の兵士と階段の所にいるのは帝国側でエレベータの前にいるのが共和国側と成っていた。

この人員は此処に停泊したときに乗り込む手筈になっていたもので、彼らとしては別段驚くには値しなかったが、他の乗客には恐怖を与えるものになるだろう。それ故に、検閲官が乗り込むときと同時に乗船したのだった。それも、密かにだ。

さて彼らの議題なのだが、次期皇帝の話であった。

そのことはランカスターには関係あるかも知れないが、ファーナビー提督やデュパルク船長には関係ないはずであった。けれど、一年後に控えた次期皇帝の戴冠式に順位列一位の人物の列席を、現皇帝が望んでいる事により集まったのだった。つまり、彼らはその人物をよく知っているのであったが、本人には知らせていなかった。

それは、なくなった母親の遺言があり戴冠式の一ヶ月前に知らせることになっていた。

そこで共和国での身元保証人となっている提督が、話し始めた。

「この話は、一年後の事を考えてしているのだが、どうも気が進まない。あの子にはもう話しては良いのではと儂は考えているのだが、どうだろう」。

するとデュパルクは言った。

「確かに、それはおぬしの考えであろう。今まで、何度も刺客に狙われて保護する我々も気が気ではなかった。それに今すぐに話して聞かせても混乱するだけではないか」。

その言葉に同意するように公爵は言う。

「それは、大切なことで今までの生活が一変することになるのですから、此処は慎重を期さねばならないでしょう」。

すると提督はウンザリしたような顔をして言う。

「そうは言いながら、公爵はやたらとあの子に目を掛けているのではありませんか。この前も、何でしたかあれは」。

公爵は追求される事柄を振り切るように、

「あれは、向こうの公爵夫人が是非とも言うもので、断り切れなかったのだ。分かるだろうあの方の気性を、まったく知らない相手ではないだろうに」

と言葉を返すのだった。

すると提督は手を額に当てて頭を振って項垂れた。

「まあ、仕方がないさ向こうも善意でやってくれたことなんだ」。

そうデュパルクが取りなすと、提督は不満そうに言う。

「善意の押し売りをか」。

するとデュパルクは申し訳なさそうに、

「大変そうだな」

と呟いた。

その話を収めようと公爵は言う。

「分かった。公爵夫人には私から話をしておこう。それからあの者達が来たのは、別の

理由がある。そうだ、なんでも戴冠式の衣装を造る為だそうで、その為にも不充がないようにとの取り計らいだそうだ」。

すると提督は疑うように尋ねた。

「それだけか。他にもあるんじゃないか。あの様子はどう見ても主従関係だぞ」。

それに対して公爵は弁明するように、

「そうは言っても、私の聞いていることはそれだけなのだが、何か他に不都合なことがあったのか」。

その問いに提督は諦めたのか、もう聞きたくないのか、手を振りながら

「それなら、もういい」

と話を区切った。

するとデュパルクはまとめるように、

「では、戴冠式の一ヶ月前に知らせることで、この件はこれでおわりだ」

と言った。

すると公爵が口を開いた。

「では、次のことだが、こっちの方がかなり厄介なのだが、知恵を貸して貰えないだろうか」。

その話はこうだった。その子に戴冠式前に地位が与えられると言うことだった。それはそれで、別段問題ではなかったが、それに付随して領地が与えられるということだった。それも、辺境の星系だとはいえ一つの星系が与えられると言うことだった。なんでも、これは帝国創設時に決められたことで、皇帝でも順位第一位でもその星系を与えられることはなく、その資格の血筋の特徴を表した時にのみ与えられるそうなのだ。そして、その子にはハッキリその特徴を表している。現に彼らもその特徴を目にして知っているのだから、多分ではあるが証人として立つことを求められる可能性もあるのだった。そしてその親が誰であるかの証人もである。

そのおかげで、彼ら三人には、その子の後見人として星系の運営の手助け助言、助力が求められることとなるらしかった。

ここまでの話を聞いて、提督は尋ねた。

「その星系は人が住んでいるのか」。

「ああ、百万程らしいが住んでいるそうだ。鉱山惑星もあり、自活出来る星系らしいが、今此処でその名を明かすことは出来ない」。

そう答えてから公爵は、難しい顔をしている二人を眺めて、この後どう話すべきか迷うのだった。

それから暫く沈黙が流れたが、意を決するよう公爵が口を開く。

「小さな子が一国を預かるのは如何なものか、とお二人は思っておられるでしょう。この私もそう考えていまして、つい最近、この様な申し出がありました。ミレバル公爵夫人からのたつての要請ですが、星系の管理を肩代わりしても良いとのことでした。そして条件は付けられませんでした。どうやら実質的な後継者になろうと目論んでいる節はありますが、領地での評判も悪くありません。如何なものでしょう。この際お願いしてみても如何でしょう。実績もある方ですから」。

すると難しい顔をして提督は言った。

「あの方か、確かに手腕はあるな。それを実績として取り巻きになるつもりではあるまいか」。

その言葉に公爵はデュパルクを見ながら言う。

「それは考えてもしょうがないと思う。すでに、その子の親の時から取り巻きというか後ろ盾になっていましたから、今更どうこう言っても無駄と思います」。

その言葉にデュパルクが申し訳なきように言う。

「すまんが、既に公爵夫人から内々に話が来ている。戴冠式には送り届けるとの約束も取り交わしている。まあ、悪い方では無いが、少し一途であることは確かだ」。

すると提督が不満そうに言う。

「それは初耳だぞ船長。その様なことは直ぐに知らせるとの約束ではなかったか」。

「いや、口止めされていて、申し訳ない」。

そう言うと彼は頭を下げるのだった。

すると公爵は言った。

「なに、それよりも当人がその事を承諾するかどうかだ。なにせ、私や公爵夫人の援助の申し出や各種特権を簡単に足蹴にして断るのだから、あれは母親似だな」。

「そうだな」

と言って提督と船長の二人とも同意した。
その言葉を聞いて公爵は言う。
「では、統治権のことについては、後ほど話して公爵夫人に一任することとしていいかな」。

その言葉に二人は黙諾した。
「では、残る問題として当人にどうやって納得して貰うかだが、まだ時間もあることだし今すぐというわけでもあるまいが、それでも三ヶ月前には招待を足蹴にしないよう説得せねばならないだろう」。

公爵はこれから先の問題に触れて話した。
この課題をこの三人はどうやって果たすかが問題だったが、彼らには非常に強力な解決者がいることにこの時点では気がついていなかったのである。

そして三人は答えが出ることなく暫く黙って考えていたが、突然、提督がランカスター公爵に言った。
「ところで、公爵は命を狙われていたのではなかったか。ここでノンビリしててもいいのか」。

すると公爵は言った。
「それか、そのことなら心配は要らない。成るようになるだけだ。たとえ命を落とすことがあっても、私の教室を継いでくれる者は出来たし、まだ頼りないが実績も少しずつ出てきている。次の教授会で助教授と成ることが決まっている」。

すると提督は少し意地悪そうに言った。
「と言うことは、もう思い残すことはないと」。

その言葉に公爵はきっぱり言った。
「いや、あの子が戴冠式に出たときの晴れ姿が見てみたい」。

「そっちか。まるで親父だな」。

提督は皮肉交じりに言った。
二人の遣り取り見てデュパルクはため息交じりに言う。

「そんなことでは無いだろう。問題は」。

すると提督は考え深げに言った。
「そうだな、戴冠式については時間の猶予があるが、ランカスター、お前さんの命が狙われているんだ。心当たりはどうなんだ」。

その問いに対して公爵は平然とした表情で答えた。
「いやな、多すぎて分からんのだ」。

その言葉を聞いて二人は軽い目眩を覚えた。
「そういえば、ベストランの問題が起きたとき。私は発掘調査で留守していたもので内務省の奴らが、適当に処理したとか報告があったな」、

と如何にも人ごとのように話すのだった。
すると提督は、その事を追求した。
「その問題とは何だったのか」。

「その報告によると、実験の時の事故で彼の子息が亡くなったとか書かれていたな、それで、上と揉めてベストランが軍を辞めたとか、辞めさせられたとか書かれていたな」。

「それで、納得して何もしなかったのか」。

提督のその問いに公爵は真面目な顔をして言った。
「いや、退役が決まっていた何もし出来なかった。そうで無ければ調べられたが、結果は私の名で記録された」。

その言葉にデュパルクは言う。
「それじゃ内務省にとっては、辞める事に決まってる人物に事の次第を押しつけて、自分たちの身と業績の安泰をはかったということか」。

「今、考えればそうだな。その時は結果だけで事故だけしか聞かされなかったからな。最後の仕事とばかりに故人の讃辞とお悔やみを送ってくれるように頼まれた」。

公爵は当時を回想するように言う。
その言葉に提督は尋ねる。
「では、その時のことは今も明確にはされていないのか」。

「ああ」。

公爵は短く答えた。

するとデュパルクはウンザリしたような表情で言う。
「と言うことは、公爵の不徳のいたす所で恨みを買った、と言うことでそのとぼっちりが、我々にまで及んだと言うことになるのかな」。

その言葉に対して公職は答えた。
「それだけとは言えない。恨みを果たすのならここまで、込み入ったことはしないだろう。事故に見せかける理由がわからない。復習ならそれを此方が認識できるようにするのは無いか」。

「では、他に理由が有ると言うことか」。

提督はそれとなく尋ねる。
「たぶん、ある目的があるんだろう。そして恨みを晴らすのは、そのついでくらいかもしれん」。

公爵は少し考えながら答えた。
「目的とは」。

デュパルクは尋ねる。
「今は、分からない」。

公爵は明確な返答を避けた。
すると提督は不審そうな面持ちで言う。
「そうだろうか。よく考えて見ろ。お前さんが消えることによって得するやつは多いが、ベストラン公の場合は何が出来る」。

その言葉に公爵は少し考えてから言った。
「皇帝の次の順位になれる。戴冠式の時に忠誠を誓わされるから、直ぐに事を起こすことは出来ないだろう。と言っても忠誠心が有る場合には喜んでそうするだろうし、何か企む必要も無いだろう。かえって次期皇帝の気質から見て不正を改めることや人道にもとる事の排除を訴えれば、直ぐに了承されるだろう」。

その言葉を聞いて提督は尋ねた。
「それならば、お前だってそうするだろう。違うか」。

すると残念そうに言った。
「いや、それがそういう訳に行かないのだ。なにせ、私は学問を取って政治を捨ててしまったのだ。もう少し言えば、軍を出るとき政治的関係を絶ったのだ」。

するとデュパルクは皮肉っぽく言った。
「つまり、面倒くさくなって投げた」。

その言葉に公爵は面目無さそうに言う。
「早い話、そうなのだ」。

その言葉に二人はあきれかえった。そして、提督は言った。
「すると、君が投げ出した事による弊害は何かね」。

それは詰問だった。
「一部の特権階級による権力の私物化。ただ、全てでは無いが」。

すると提督は深くため息をついて言う。
「それじゃ、ベストラン公でなくても、弊害を取り除くために障害を取り払いたいと思うのは当然だ」。

その言葉に公爵は
「つまり、私に死んでくれと」
と二人に尋ねる。

するとデュパルクは、残念そうに言った。
「悪く思わんでくれそれが、多くの人のためだ。お前の骨は拾ってやるから」。

その言葉に公爵は言う。
「私を見捨てる気なのか、君たちは友人だろう」。

その言葉に二人は沈黙して項垂れた。
すると彼らの横から冷やかな声があった。
「いつまで寸劇をやってるんですか。皆さんが苦勞して汗をかいてるのに」。

その声のする方を三人が見る、とそこにはシヨンが立っていた。
そして彼らは同時に同じ事を思った。あれほどの警備をどうやってすり抜けてこの部屋に入ってきたのかと。

その様子を見て彼女は言った。
「どうしたんですか、有りもしない物が見えたときのような顔をして」。

すると提督が言った。

「どうやって此処に、入ってこれたんだ」。

その問いに彼女は言った。

「セシリアに手伝って貰ったのです。ブリッジに上がろうとすると重武装の兵士が居るではありませんか。まさか、既にテロが始まっているかと思いましたが、尋ねると。ちゃんと通せないと答えてくれたのでもしかしたらと思ひまして、電磁波迷彩をやって貰ったの」。

その言葉を聞いて提督は目眩がした。それはかなり高度な迷彩で、光学迷彩より強力な赤外線や紫外線、放射線も曲げてしまう。うまく使えば空気の動きも制御して殆ど存在を消すことが出来る。ただ欠点もあるエネルギー消費が大きいのと、レーザー掃射では屈折がハッキリ出るので存在が分かってしまうことぐらいだ。

そして提督は言った。

「ところで、何の用なんだ」。

するシオンは用件を言った

「ホルストさんからですが、設営が終わったので下見においでください。とのことでした」。

その話しに提督は直ぐに答えた。

「分かった。後で行くときに連絡すると伝えておいてくれ」。

「分かりました。そうお伝えいたします」。

それから提督は言う。

「いつから聞いていた」。

すると彼女は少し考える素振りをしてから、答えた。

「皆さんが、深刻そうに黙ってたときでした」。

その答えを聞いて公爵は尋ねた。

「シオンはどう思う」。

彼女は少し驚いたように尋ねる。

「どういう事でしょうか」。

公爵は落ち着いた口調で言う。

「一年後に銀河帝国の皇帝が代わる。それで次期皇帝の戴冠式に序列第一位の子に、その式に出て貰いたいのだがどうしたら良いと思う」。

するとシオンは即答した。

「その子に直接話したらどうでしょう。事情も説明してね」。

その言葉に提督はそう来たかと思った。だいたいこの手の話は、直球で返してくるから聞かなくても分かるのだが、あえて聞くのは同年代ということなのか、と考えるのだった。

すると公爵は呟くように言った。

「そうか、その方が良いのか」。

するとシオンは心配そうに言う。

「どうされました。伯父様」。

「いや、何でも無い」。

そう言うと公爵は口を閉じてしまった。

その様子を見てシオンは首を傾げるだけだった。

そして彼女は提督を見た。すると提督は、そうしたものかと考えたが、答えは出そうも無かったので、話題を変えた。

「ところで、シオン。インタビューの場所はどうだった」。

その言葉に彼女は少し考えた。そして、含みがあるような言い方をした。

「そうですね。ご希望の広い場所です。構図としては公園を背景に感じでしょうか。後ろから近づく観葉植物の間に仕掛けられたトラップに引っかかるでしょう。それに照明で眩しく前がよく見えなと思います。これらは伯父様が指示なさったことではありませんか。それとも違うのでしょうか。暴漢が近づくには三秒は掛かりますね。それだけで十分でしょうが、もう若くないのですから無茶はしないでください」。

そう言ってから、何かに気がつき言葉を訂正するのだった。

「申し訳ありません。狙われているのは公爵様でしたね。大丈夫ですか」。

シオンはそれとなく言葉を公爵に振る。

すると公爵は黙したまま身振りでどうって事無い、という風にしめすのだった。それを見てシオンは冷たく言う。

「答えられないのですか。何かあったら私にご子息に。事の次第を書き送らなければな

らないのに。そちらの二人は面識が無いのですから、その仕事が私に回ってくるのですが、知っていました」。

その言葉に公爵は返す言葉が見つからなかった。

このことは、帝国内での暗黙の取り決めとなっていて、それは共和国側もそのしきたりにならっている。それは、故人の死に際してその経緯を親族に知らせるのが、順列として決まっておき親族を知るものが、したためることとなっていた。そしてもし該当する人物が居ない場合は、その国の法務局の報告書が送られることとなっている。それで、この場合は、シオンは公爵の息子に面識があるゆえ彼女が書面を作成することになる。これは十五歳の少女に押しつけるべきものでは無い事を、此処に居る全員は承知していたのである。

よって、このシオンの発言は正直に言って、甚だ迷惑だと言っているのだった。

それからシオンは言った。

「それでは、わたしが此処に来た理由なんです、もう一つあります。この度は、少し提督の名前を勝手に使って、いくつかの調整をさせて頂きました。使用した件は不審人物の調査に、テロリストの仲間と思われる人物に下船の手続きにです。詳しくは後ほどレポートを提出しますので宜しいでしょうか」。

その言葉に提督は黙って肯いて了承するのであった。それは、シオンがこのように話すときには事前に確認されたことに基づくものか、責任を他が取る事が決まっている場合であることを知っていたからだ。

それらの遣り取りを見て取ってから、デュパルクは今日はこの場を取めた方が良くと考えて言った。

「では、お嬢さんの伝言もあることだし、今日はこれでお開きと言うことにしないか。結論は急ぐことは無いはずだ」。

そう言いながら彼は急ぐべき事も有ることを承知していたが、シオンがいては話が進め辛いのも確かだったのでお開きとしたのだった。

その言葉に公爵も提督も了承したのか、席を立ち次の機会のもう一度集まることを告げてそれぞれ船長室を出るのだった。

当然のこととして、公爵は兵士を提督は警護官を連れて去って行った。ただ、重武装の兵士はどうやって一般乗客の目を避けて移動するのか、彼は興味をそそられたが、あえて尋ねることはしなかった。

最後に、シオンがドアの手前でお別れの挨拶をして去って行ったのは、デュパルクには気分が良かった。

当惑

設営が終わり、ホールを後にしていたアビンは、彼の傍らにアンしかいないことに気がついた。何時からションが、ホールを出て行ったのかは分からなかったが、アンがニコニコしながら側に居るので、問題があるわけでは無いのだと思うのだった。

そして二人が公園の近くまで来たときに、後ろからションが呼び止めた。

「ご一緒の所悪いのですが、少し手伝ってくださいますか」。

その言葉にアビンは尋ねる。

「今まで何処に行ってたんだ」。

するとションは答えた。

「少し不機嫌なようですね。少しばかり伯父様達に挨拶をしてきたんです」。

その答えに不満そうにアビンは言った。

「なんか含みが有るような言い方だな。わざわざ提督や公爵に挨拶しに行くほどのこともない、と思うが違つか」。

するとションは言った。

「なかなかどうして、一見頼りなさそうなんだけど洞察力はあるようね。そう、挨拶に行ったのではありません。ホルストさんからの用件を伝えに行ったのですが、これが、行ったら驚きでした。ドアに重装備の兵士が立って居るではありませんか。ビックリしました」。

その言葉はアビンには誇張しているように聞こえたが、二人の地位を考えるとそれもあり得ると思えた。そこで尋ねてみた。

「それで、よく入れて貰えたな」。

するとションは言った。

「わたしは会えたと言ってませんが、どうしてその様に尋ねるのですか」。

「その話し方だ。あつた事が前提となっている」。

そのアビンの答えを聞いて、ションは何かに気がついたような素振りをして言った。

「あつ、その様に話してましたね」。

その言葉にアビンは確信犯的に言っていたのでは、と思えるのだったがその事は口にせず用件を尋ねる。

「ション、俺が手伝って出来る事でも有るのか。君は殆ど自分で出来るような気がするんだが、気のせい無ければ」。

するとションは前を歩きながら言った。

「いえいえ、わたし個人として出来る事は、限られていますから。それに遠隔操作ができないものを取説を読み上げながら操作するには二人はいるでしょう」。

その言葉に嫌な感じを受けてアビンは言う。

「俺は、リモコン操作される何かか」。

「これは失礼。気を悪くされたなら謝ります」。

「いや、いい」。

アビンが答えるとションは立ち止まりくるりと振り返り、少し申し訳なさそうに、「少し表現がよくありませんでした。これからお願いするのはコントロールと設定の場所が離れておりまして二人いないと設定できないのです」

と言うのだった。

そこでアビンもそれなら仕方が無いと同意して、ションの後に付いていくのだった。当然のこととしてアンは彼について行くのだった。

そしてアビン達が着いたのは、格納デッキだった。そして思わずアビンは言った。

「ここは」。

「デッキです」。

さり気なくションは答える。

「それは、分かってる。此処で何をやるのだ」。

すこしいラッとしてアビンは尋ねる。
「お忘れですか、ここに最も脅威となるものが置かれていることを」。
シヨンの言葉にアビンは少し考えて、そして、とんでもないものがあることを思い出した。それは、軍用兵器、それも最新鋭の攻撃型戦闘機で完全武装が施してある。発射ボタン一つで、この船諸共に宇宙の塵に成ってしまう兵器が搭載されたままになっていたのだった。
「どうやら思い出したようですね」。
シヨンはため息交じりに言う。
「申し訳ない。今の今までスッカリ忘れていた」。
アビンは言い訳をする。
「仕方ありませんね。殆どの人は知りませんし、知ってる人も封印したから気にとめていないのかも知れませんが、それでも、誰かが気がつけば大変不利な状況になります。そこで、出来れば使えないようにしておこうと思ひまして、ご協力をお願いします」。
シヨンはアビンの言い訳を気にとめること無く話すのだった。
「協力をとと言われても、俺たちだけで武装解除は出来ないぞ」。
アビンは状況を説明するのだった。
「解除は出来ませんが、使用できなくします。それなら、わたし達だけでも出来ますでしょう」。
シヨンは納得させるように言う。
「いったいどうするんだ」。
アビンは納得できずに尋ねる。
「それは、これから説明しますから、先ずはついてきてください」。
そう答えるシヨンの言葉に何故かアビンとアンは互いに見合ってから、その後について歩くのだった。
暫くすると、大きなコンテナの前に着いた。そのコンテナは以前に、来たときと違って本来の塗装と違う色に塗られており、すでに元の状態へ戻されていた。それ故にアビンは尋ねた。
「これじゃあもう一度開けることになるんだろうな」。
するとシヨンは否定した。
「いえ、開ける必要はありません。点検扉を使えるようにしておきましたので、そこから入ることが出来ます」。
その言葉を聞いて、アビンは少し不安を覚えながら尋ねる。
「それで、もしかして俺が中に入るのか」。
「当然です。女の子に暗い中に入れとも仰るのですか」とシヨンは即答しながらアビンを追い込む。
その様に告げられると彼としても、言い返すことは出来なかった。かといってアビンにはシヨンと言ひ合う度胸も無かったのだった。何せ、この手の事柄では彼女は熟練者で此方が素人なのだから、ここは従うしか無かったからだ。
さて暫く格納デッキの中を歩いているとかなり大きなコンテナの前に出た。目的のコンテナである。アビンは改めて見る、とそれは見上げ様な高さのコンテナだった。最初はそれ程意識していなかったが、今こうして見るとデカイと思うのだった。それは周りのコンテナが、搬出や整理などで移動したためこのコンテナだけが、格納デッキの空いたスペースの真ん中あたりに鎮座しているせいもあった。
その大きさを見上げて、嫌な予感を振りほどこうとして頭を振るアビンにシヨンが追い打ちを掛けるように言う。
「アビンさん。そんな所にボーとしていないで、右側のハッチから中に入ってください。アンは一緒に入っちゃだめだからね」。
最後に言われた言葉に、アンはビクツとして足を止めた。たぶんシヨンが言わなければそのまま入って行ったに違いない。
その様な様子を視界の端に捉えながら、アビンはハッチのロックを外し中に入った。
そして、彼は思わず声を出していった。
「暗いぞ、それに中に入ってどうやって連絡を取る」。
するとシヨンは答えて言った。
「ハッチを閉めずに先ずは、入って右手に内部の照明スイッチがあります。それから、照明が付いたのなら、そのスイッチの横にある操作パネルの所にインカムがあります。それで連絡を取ってください」。

その言葉を聞いてからアビンは、入って直ぐ右に照明スイッチを確認した。それから照明を付けると、シヨンの説明道理に少し奥に操作パネルがあり、そこにインカムのヘッドセットが掛けてあった。そして、彼はそのインカムを掛けてから言った。

「これで良いのか」。
すると直ぐに返事が返ってきた。
「はいそうです。話すと同時に動作します。ただ、頭切れを起こすことがありますから、話す前にインカムのどこかを押さえてから話してください。そうすれば頭切れを起こすことはありませんから」。

アビンは告げられたとおりにしてみても
「これで良いのか」と言った。
「上々ですね。では、先ず行って頂きたいことを説明いたします。だいたいのことを把握する意味で話すので概要を覚えてください」。

そうシヨンはアビンに告げた。
そして、「では説明いたします」と言って彼女は話し始めた。
その内容はこうであった。先ずアビンの行うことは、外された信管の保管庫キーのロックでそれを済ませたら、機体の前脚部の格納部内部に有るキャノピーロック解除のボタンを押してから、タラップを上り前部操縦席の後ろ当たりにあるPANと書かれた小さな点検ハッチを開けてキャノピーを開けるボタンを押す。すると自動でキャノピーは開くそうだ。それから、前部座席に乗り込みシヨンの支持度お降りにコンソールからアクセスプログラムを入力するのだった。

その後のことは、入力後に説明するとシヨンは言った。
さてアビンとしては、シヨンの指示に従いながら事を進めながら幼年学校時代の飛行訓練課程を思い出していた。先ずは教官に言われるがままその通りにするのだが、今やっていることは、まさにその通りだった。そんな今の自分をどこか滑稽に感じていて、口元が笑っているのに暫くは気がつかないでいた。

それに気がつかされたのは、タラップを上ってキャノピーを開けるときに、それに自分のにやけた顔がぼんやり映って、ハツとした時だった。

その時アビンは、この顔は誰にも見られたくないなど思うのだった。それは教官にも言われたときもそうだったが、危険なときや新たなことを始めるとき、事に兵器を扱うときに如何にも嬉しそうに見えるので、危ない奴だと暫くの間思われていたのだった。実際そうでも無い事が分かったと、今度はにやけるんじゃ無いと忠告されたのだった。

アビンは変な形で緊張が顔に出るタイプらしく、そのため時々如何にも機嫌が悪そうに見えるときがあるのは、その事を気にしてなのだが。それが人には、怒ってるように見えるときがあるので注意している。ただ、アンは何故か平気なのだった。

アビンがその様に考えていると、次の指示が有り、前方のコクピットの座席に着いた。それから暫くシヨンの指示に従ってコンソールをアップしてアクセスプログラムをマニュアルで入力し始める。口頭で伝えられる言葉に従って入力するのは幼年学校時代以来だったが、要領は既に飲み込んでいたので当時と比べれば、言葉にそれなりについて行けた。それでもプログラムの入力に一時間を要した。

そして入力を終えてスタートさせた丁度その時、いつの間に上ってきていたのかアンが飲み物を差し出してくれた。これは大変だろうと気遣いからの行動だと思うのだが、入力に集中して彼女が近づいて来るのに、気がつかなかったのは失態だと思うのだった。

それから何を思ったのか、アンはスカートなのに後部座席に潜り込んで座ったのだ。その行為をアビンは止めたのだが、聞く気は無かったようで、計器板から聞こえるシヨンの制止する言葉すら無視していた。

そしてちゃっかり後ろの席に座り込んでから、悪戯っぽく舌を出して微笑むのだった。

この状態のアビンはどうしたものか迷ったが、シヨンの言葉に後ろを見るミラーから目を離した。

「アビンさん。アンのごことはほっといて先を続けましょう。それからアンにも後ろの席にあるインカムを付けるように言ってくださいますか」。

アビンは彼女の言葉に従ってアンに言った。
「シヨンからだ、後ろの席にあるインカムを付けてくれとのことだ」。
すると直ぐに応答があった。

「これですね。宜しいですか」。

「はい。それでいいですよ」。

シヨンの了承する声が響く。

「それで、これからどうするんだ」。

アビンは次の指示を仰ぐ。とは言ってもこの様に言ったのは、後ろにアンが座っているのを意識しての、気恥ずかしさからくる言葉だったことは、本人はそれ程意識してはいなかった。

するとシヨンは注意を述べてから話し始めた。

「分かりました。それでは先ずは、アンは大人しくしてね。それからアビンさん。先程走らせたプログラムですが、全てのコントロールを前席に集約するプログラムもかねていますので、計器板の右の武器管制システムの表示パネルの右上にある赤いボタンを押してください。そうすると後ろのコントロールを一次切り離すことができます」。

その言葉に従ってアビンは赤いボタンを押す。

それからアビンはシヨンの指示に従いながら、火器管制システムの凍結を始めた。始めは発射シークエンスの遅延時間の設定に始まり最終的にはシステムダウンをさせるのだったが、火器管制システムのコードプログラムにロックパスを設定しようとしたときに、突然のエラーが表示された。

「どうゆうことだ」。

アビンが叫ぶように言う、とシヨンの声が緊張感のある答えを放つ。

「今、自爆システムの動作を確認しました。どこかにセキュリティが仕込まれていたようですが、それ自体にバグがあるようで敵に乗っ取られたと判断したようです。自爆シークエンスは十分です。直ちにそこを離れてください。何とか止めます」。

その言葉に対してアビンは言った。

「逃げるが、それでも助かる見込みがあるのか、自爆すればどうなる」。

すると、いかにも残念そうな声が響く。

「たぶん。この船と諸共に宇宙の塵に成ります」。

「では、逃げてダメと言うことだな」。

なぜかアビンは冷静に答えた。どうやら彼は今置かれた状況に、既に判断を下していた。助かりたければ自爆解除しかない。そして、他人には見られたくないが彼の口元は笑っていた。

するとシヨンが答えた。

「今、此方からコントロールシステムにアクセスしています。何とか止めて見せますので、一応降りて、脱出キューブに走ってください」。

その言葉にアビンは具に反応した。

「分かったそうする」。

そう言うと直ぐに後ろにいるアンに「脱出する。直ぐに降りるんだ」と告げてから、コクピットを出るとアンに手貸して引っ張り上げ、そのまま抱えるようにして下に降りた。それから、ハッチを出て直ぐ左を確認する、とシヨンがコンソールを操作しながら此方を振り返り「走って」との言葉にアンの手を引っ張って走り出した。

そして彼が格納デッキの端にたどり着き、脱出キューブの操作パネルに触れた、そのときシヨンの声が、

「停止できました。もう大丈夫です。ごめんなさい」

と言った。その言葉を聞いてアビンはどっと疲れ脱出キューブに両手を突いて息を整えるのだった。その様な彼の背中にアンはそっと身を寄せるのだった。

それから息を整えたアビンはアンとともに、シヨンの元に戻る。その間暫く、彼女はアビンの手をぎゅっと握りしめたままだったので、コンテナの所に戻ったときに、「これは、お暑いこと」と冷やかされるのだった。

とうぜんその言葉で、アンは握っていた手を直ぐに放したのだが、アビンの手には彼女のぬくもりが暫く残る感じがした。

この件の結果はこうだ、信管は全て保管し鍵を掛けた。火器管制システムにはロックを掛けたが解除して武装を発射は可能だが、そうすると自爆する。解除三分後だそうだ。この時、シヨンとアビンの出した結論は、事情をホルストに話してどこかの星域で処分して貰うことだった。

それから三人は格納デッキを出ることにしたが、その出入り口でミュラーとトレッカーに会った。

「こんにちわミュラーさんトレッカーさん」。

アビンが挨拶をするとミユラーがニヤニヤしながら言った。
「若いというのは良いものだ。両手に花かいアビン君」。
その言葉にアビンはこの場は流れに任せようと思い答える。
「そう見えますか。さっきまで二人に発掘の機械を見せていたんです。今度、ノースハイに入るんだから、うちの教室にも来て貰えれば良いなと思ひまして、まあ、今から勧誘というわけです。スタッフが多いとそれだけ、俺の仕事も減るしね」。
そう言って少し大げさに笑って見せた。道化だと自分に言い聞かせながら、今までもこれで、色々ごまかせてきた実績には、ある程度自信が有った。
「それは、今から大変だな」。
そう言ってくれたのは、何故かトレッカーだった。そういえばミユラーの場合は彼の妹の事があるために、この手の話はいい顔をしないようだった。
それからアビンは気になることを少し口にした。
「ところで、お二人はこれからどちらに」。
するとミユラーが答える。
「ああ、これから警備に使える物はないか物色に来たのだが、許可は取ってあるから心配しなくてもいい」。
アビンはその言葉に二人を労い言った。
「ご苦労様です。では、此方はまだすることがあるので失礼します」。
そう言って断りを述べると、アンとシヨンも退散する旨を告げるのだった。
するとトレッカーが答えた。
「君たちも、提督のインタビューの時の立ち会いをするんだらう。その時にはよろしくだ。では気をつけて」。
その言葉にアビンは不審な響きを感じていたが、あまり気にとめなかった。
ただミユラーの言った言葉に妙な引っかかり有ったのが気になっていた。

回答、

回答

アビン達がコンテナを出て暫く経って、公園の下層部横を歩いていたときだった。突然、ピッピーと音がしてションの目の前に二頭身の人形が現れる。その姿はどうやらセシリアをデフォルトしたような容貌だった。そして、彼女に頭を下げた。「ション。エドさんから回答が届きました」。するとションはその人形の頭を軽く指でつついて答える。「分かりました。これからそちらに向かいます」。そう答えてからアビンの方に振り返って言った。「では、アビンさん、行きましようか。どんな答えが出たのか楽しみです」。その言葉にアビンはどことなく薄ら寒い感覚を覚えるのだった。そして、アビン達がセシリアの居るメディカルセンターへ向かう途中、それもエレベーターホールで彼らは、マクレガーに会った。彼女はディレクターと一緒にいたが、アビン達を見るなりディレクターに何かを告げてから彼らの方に近づいてきて言った。「これはこれは提督のお嬢さんとそのお付きの方」。その言葉にアビンはムツとしたが、それは顔に出さずに気持ちだけ伝える。「随分な言われようですね」。するとマクレガーは、如何にも当然とばかりに言う。「あら、違うのかしら。わたしはてっきり提督に言われて、番犬よろしく付いて回っているのかと思ってましたけど」。その言葉にアビンは言葉を返せなかった。なにせ付き添うように言われたのは事実だし、この悪意たっぷりの物言いに、今は言い返せない状況だということも承知していた。それは彼の左袖をアンが不安そうにしっかりと掴んでいては、変な言い訳をしようものなら何と言われるか分からないし、彼女を傷つけたくは無かったので此処は忍耐することにした。その様子を興味深そうにマクレガーは見て取り、それから言った。「まっ、いいわ。いじくるのはこの位にして、これから貴方たち何処に行くの」。その言葉にアビンは直ぐに答えた。「これから、彼女がメディカルセンターに忘れたものを取りに行く所です。先日、具合が悪くなりまして、彼女を抱きかかえて運んだおりに、どうやら大事なものをメディカルセンターに置き忘れてきたらしいのです。先生にも確認をして頂いたら、どうやら有ったようなので、診察がてら取りに来なさいとの招待を受けました。まあ、俺は付き添いですがね」。その話半分は嘘であったが、マクレガーが信じるにたる十分な情報だったのか、残念そうな顔をして言った。「そうなの、それは大変ね。あなたいい先生になりそうね」。アビンには、その言葉に意味をはかりかねたが、あえてその事は口にせず言った。「そうですか。まだ教員課程修了してないのですが、将来そっちが有望かな」。するとマクレガーはクスリと笑って言った。「じゃあ、先生になったら講義を聴かせてもらいに行くわ」。この遣り取りをションは黙って見守っていた。彼女自身答えようと思っていた矢先にアビンがごまかすように答えてくれたのを心うちで感謝するのだった。それは、彼女がマクレガーをどことなく信用できないように感じていたからだった。ただ、マスコミが嫌いというわけではなかった。彼女自身、マスコミに知り合いが居るし、彼女を引き取ってくれた叔父もマスコミの人間だった。それもイエローペーパーの方だったが、だらしのない事を除けば、良い叔父で有ったからだ。そして、アンといえどどうやら自分の身の置き場に少し困っていて、アビンの後ろに隠れるようにしているのだった。それからマクレガーは彼に言った。「あっ、そうそうたぶん後から話が行くかと思いますが、アビン君、貴方も提督のインタビューの時には親族立ち会いの中に入って貰う事になっていますから、覚えておいてね」。

その言葉に面食らってアビンは言う。

「どうして俺が親族に」。

するとマクレガーは疑うような目つきでアビンの後ろのアンを見ながら言った。

「お嬢さんに手だしからじゃない」。

その言葉にアビンは言葉を失い、その背中でアンが嬉しそうにしているのをシオンは確認した。それから深いため息をついて思った。また提督の早とちりとお節介が始まったと、それについては彼女自身にも責任がないわけではないが、それにしても気が早すぎると、そして、これは後で提督とハツキリ話をしておかなければと、心に決めるのだった。

それでもアンの気持ちを考えれば、このまま事が進めば良いとも思っている自分に少し落胆していた。

アビン達が沈黙しているのを見てマクレガーは言った。

「違うの。そう聞いたんだけど」。

するとシオンが答えることにして言った。

「半分はそうですが、半分は違います。確かにアビンさんがアンを抱きかかえた事は事実ですが、それは緊急な事態のためです。それから、まあ、アンがアビンさんに好意を持っているのは事実です。それでもアビンさんは友達から始めようと言ったしだいなのですが、ご覧の通りべったりも事実です。だから親族というのはまだ早いと思いますが、違いますか」。

するとマクレガーは少し考えて言った。

「ということは、提督の早とちりで話が進んだということですね。でも、実際事態は進行中で兩人とも満更な訳ではないと言うことですよ」。

その結論に納得するようにシオンは肯く。そして、言葉を失って沈黙しているうちにアビンは、自分とアンの関係が一步進んだことを二人に認知されたのだった。ただし、この状況にアビンの意志は無視されていたが、それでもどこか嫌ではなかった。

というわけでアビンは、言葉による殴打を受けたのだった。それはそれ程嫌では無かったが、暫くは答える気力を失うことになった。

その様子を察してかマクレガーは、気を利かすようなこと言って慰めるのだった。

「でもいいじゃな、提督のお嬢さんと公認の仲なんて将来が明るいというものじゃない」。

その言葉は当たっていないと思ったのは、当のアビンとシオン、それにアンもであった。シオンとアンは提督をよく知っているゆえに、それにアビンは面識は浅いが、ここ暫くの間に十分すぎるほどの個性を見せつけられてきた故に、マクレガーの言葉に同意できないでいた。

そんな気まずい雰囲気を感じてか、マクレガーは妙な笑顔を作って、これからまだ打ち合わせがあるので失礼する、とか言ってその場を逃げるように去って行った。

そのときアビンは、人の事に散々口を出しておいて收拾せずに去って行ったと思うのだった。そして、正直、もう来るな、と言いたかった。

さて、マクレガーが去って行ってアビンはホッと一息を付きながら、シオンに付き添うようにしてセシリアの待つメディカルセンターに向かうのだった。

丁度その時、ミュラーとトレッカーは格納デッキ内で、さっきまでアビン達が武器の無力化を進めていた、戦闘機の入っているコンテナの前に立っていた。

「これがそうなのか」。

呟くようにトレッカーが言う。

「そうだ、これを使えないようにする必要がある。現在は信管や起動プログラムを変更して使えないようにしてあるらしいが、その手の人間がテロリストのグループに居ると厄介だ。まずは知られないこと大切だ。同じ警備の担当として知っておいて貰うために此処に連れてきた」。

ミュラーは理由を話しながらどこか別の方を見ているようだった。

それから、トレッカーの方に向き直って言った。

「いざとなったら、此処の全ての荷物と一緒に隔壁を解放して全てを捨てる事になっている」。

その言葉を聞いてトレッカーは肯くように言った。

「確かに、それが最善だな。ところでその責任は誰が取る」。

するとミュラーは不敵な笑みを浮かべて言う。

「テロリスト」。

その言葉にトレッカーは何も答えなかった。

その様な遣り取りを、二人は格納デッキ内で話しているときに、ホルスト達は、爆発物となる液体を抜く作業を始めていた。単体では害になる物でないものは船体損傷の為と称して船外にわざと流失させた。そうで無い物はタンカーシャトルを船体に付けて水の補給と称して、補給をしながら液体薬品を抜き取るのだった。

この作業はかなり順調に進んで、これもアビン達の調査報告のたまものだった。おかげで一步先の行動が出来るのだった。だが、まだそれだけでは安心できない、それは科学の知識が深い奴なら、様々な物を流用することを考えるのだから安心は出来ないのだ。それでも、容易に爆発物を製造できなくするには一役買っていることになる事で、この際よしとすることにした。

この様にアビン達が移動している最中にも物事は進んでいた。

そして、アビン達はセシリアに面会した。

まず、話を切り出したのはシヨンだった。

「ありがとうございます。セシリア、それで、エド君からの報告はどれ。たぶんもうひらいたのでしょう」。

するとセシリアは右手の平を挙げて言った。

「いいえ。どうやらお姉様自身でないといけないようになってきているようです」。

その言葉を聞いて、エドが此方の状況を察してプロテクトを掛けてくれたようだとしヨンは理解した。このように手際の良い仕事をしてくれるので、彼女は美緒に内緒で時々頼み事をする事ができ、報酬は出来るだけ彼の要望に應えるようにしている。それで、何時も商談は成立している。この度は、休日のお昼の招待で決まった。たぶんその後には、新しい電波高度計の話で花が咲くのだろうと思っており、彼女自身もそれを楽しみにしているのだった。

そして、シヨンはファイルを開いてみた。

そこには膨大な記録が含まれていた。どうやら記録を厳選する基準が定かでなかったのか、それとも、問題にエドを巻き込むことを避けてシヨンが、伝えた情報が限定されていた為か分からないが、該当する情報ファイルを素のまま抜き出したようだった。

すると後ろで見ていた三人もコンソールの表示を覗き込むのだった。

そして、セシリアは言った。

「さすがエド、重要報告書を的確にピックアップし、後はザックリ抜き取ったのね。機密情報までやっては向こうの面子丸つぶれじゃない。口外は出来ませんね、此方も向こうも」。

その言葉を聞いてアビンは嫌な感じがするのだった。情報のダダ漏れはプライバシーも有った物じゃないからだし、自分のこれまでの記録が全部分かってしまうからだ。

さてアビンはその様に考えているとアンが彼の左腕の袖を引っ張って言った。

「この記録ってアビンさんのお父様のですか」。

その様に言われるままアンの指さす記録を見た。そこには彼の父親であるホーンブロワー提督の艦隊移動記録が記されていた。その記録は二日前の記録だった。その内容は帝国第五艦隊のディードル星域への移動を命じる命令書の発令と受理実行が記されていた。するとアビンは今は父親が艦隊とともに移動中だということが理解できた。

それと同時に、この記録まで漏れては作戦行動は意味を成さないのでは、と思い記録の機密度を見たらAだった。最重要では無いが対外的には内密な行動であることは確かだった。これが戦時なら重大問題だが、今なら担当者の懲罰で終わるだろう。たぶん二週間の謹慎処分ぐらいだ。

ところで肝心な記録はどうなっているのか、とアビンは考えた。当然シヨンもその事を調べるために調査を依頼していたのだった。

アビンが気にしている間にもシヨンは、見ているのだろうかと思えるほどの早さで閲覧しているのだった。

さて暫く周りのことも考えずに閲覧を続けるシヨンの手が止まった。そして言った。

「先ずは、これを見てください」。

そこに指し示されている記録は驚愕の事実だった。

トレッカーの居た部隊は、ベストラン公の息が掛かっている部隊だったようで、一部の強攻派に煙たがれていた。それは大量殺害兵器となる化学兵器の廃棄を主に取り組んでいたからだった。事実、彼らの行動に強硬に反対した武官の名前が挙げられている。事の発端は、事故のようだった。検証は不十分だが記録上に事故となっている。紛争時

の混乱した状況で詳細を調べるのは無理があったのだろう、現状打開のため処理を先に進めたのだ。事故報告との形で集めた毒ガスをその場の機材で、処理することが告げられている。かりに相手国に知れると連邦の格好の批判材料になるからだ。ただ、此処に記されている記録ではどれだけの量を集めたかは記されていなかった。車両五台分と記載されているだけで、これだけでは分からない。当時彼らが使っていた車両については、輸送トラックは一台となっていたのだから、積載量が把握できない。

そして、自己記録の翌日、漏れたガスによる中毒症状が付近の住民の多くに見られるとの報告があった。たぶんこの報告が内容を変えて星系間安全保障機構に伝わったのだろう。

そうして医療機関が動いてビットンブルーが派遣されたのだ。ところが、事態は好転するのではなく悪化したようだった。派遣された医療機関がガレアに到着後二日目に直ぐ近くまで紛争相手国の軍隊が近づく。処理を中断し住民とともに町を離れるとの交信記録があった。その次に記されていた記録は侵攻軍を攻撃をその翌日に決行となっている。範囲はフィゴ南部ガレア周辺一帯に超高温焼却弾による砲撃で一帯を焼き払うというものだった。攻撃方法、衛星軌道上からの艦隊攻撃。その部隊は帝国第二艦隊第四機動強襲戦隊でクルーザー四隻フリゲート六隻コルベット十二隻によるものだった。この時点での艦隊司令は空席でその前はランカスター提督。つまりランカスター公爵、教授だ。

。ということは公爵が退いてなければ止められていた作戦と考えることも出来なくはない。だが強襲戦隊の特色として艦隊とは別の命令で動くこともある。

この事例のように戦隊だけが派遣されている場合独自行動が基本だからである。そしてこの戦隊指揮官は、強攻派の飼犬と噂されるベイクだった。最近中將に昇進したらしい。嫌な奴が上に昇ったなとアビンは思った。

ただこれだけでは公爵を狙うにはまだ不十分だ。考えようによっては十分と言えるが、自分の立場まで掛けて行動するには、まだ物足りない感じが否めなかった。

「ショッキングな情報だが、動機としては十分と思うか」。

アビンはシオンに尋ねてみた。

「そうですね。たぶんもっと他があるのではありませんか」。

そう答えるシオンの言葉にアビンは何となく安堵した。何故そう思えたのかは分からなかったが、この時はそう思えた。

するとシオンが次の記録を開いて示した。

それは、ランカスターに関する記録だった。そこには、彼が国政をないがしろにしているとの報告が記されている。かつての敵国の大学教授に収まり学問に励み、帝国の国政に非協力的だとも記されている。

その記録を見てアビンは言いたい放題だ、関心が無く口出ししないのなら無視するか閉め出せば良いのと思うのだった。

ただし、公爵の立場上、意見を聞かないわけにはゆかないので国政の強硬派に取っては頭が痛いらしい。それが、国への愛国心欠如などと言われて排斥したいらしい。

「随分言われてるな。あの教授」。

アビンは呟くように言う。

するとシオンは、それに答えるように言った。

「それでもありません。自分では退きたいのですが、周りがそれを認めてくれないようです。私の母の時も迷惑を掛けてしまいました。あの方は、困っている人を放っておく無いうで、出来るだけ助けようとするので憎まれることも多いようです」。

「それは、理解している。十分体験させて貰ってるから」。

アビンはシオンの言葉に答えるように、ため息交じりに言った。

早い話が、公爵は頭の固い連中からすれば目の上のたんこぶのような存在なのだ。その誰かが間違った情報でベストラン公を焼き付けたとしても不思議はなかったし、まして、トレッカーとしては自分を殺そうとした司令官となるのだろう、とアビンは考えるのだった。

それから最後にベストラン公の交友関係の記録だ。それはかなり広く、政界、軍、軍需の主立った人物の名前があった。そして以外にもマスコミ関係者の名前もあった。その中にアリス・マクレガーがあった。

それはこの前の記録調べでは該当しなかったはずなのだが、交友関係で名前が出たのだった。記録では、インタビューを受けたことや帝国内での便宜を図った経緯が記されていた。これといって不審な記録ではなく仕事上の接点のようだった。

「ここまで記録を見てからアビンはシヨンに尋ねる。

「これで、全部か」。

「必要と思われる記録としては全部です。さすがに本人達の頭の中までは読めないの
此処までと言うことになります」。

とシヨンは少し残念そうに答えるのだった。

その言葉を聞いてからアビンは尋ねる。

「シヨンはベストラン候が本当の黒幕と思うか」。

「どうでしょう、そう言えるかも知れませんが、他に黒幕がいてもおかしくない状況で
すね」。

その答えはアビンが期待しているものと同じだった。しかし、彼女は続けてこう言
った。

「それでも、現状ではベストラン公の指示で、トレッカーさんが動いているようで
すね」。

その言葉には以前トレッカーに持っていた不信感が、彼の置かれた状況に同情した
のか、敬称を付けるようになっていたことにアビンは気がついた。

アビンが考えているとシヨンは言った。

「これ以上此処に居てもしょうが無いと思います。わたし達の部屋でお茶でもしませ
んか。スターンも目覚めてる頃ですし、そうでなければ部屋はかなり散らかってますか
ら片付けの手伝いとして来てくだされば助かります。お礼はお茶と言うことで、宜しい
ですか」。

その言葉にアビンは渋々同意をして「わかった。お邪魔させて貰う」と答えた。

そうしてアビン達はセシリアに感謝を述べてから、メディカルセンターを後にした
のだった。

お茶会、

お茶会

アビン達はメディカルセンターを後にしてションとアンの部屋に向かっていた。彼らがエレベーターホールで待っていると、偶然に、そこで提督と公爵に遭った。

まず最初に挨拶をしたのはションだった。
「これはこれは、提督と公爵様これからどちらにお出かけですか。その様に取り巻きの方々を連れて歩かれては、他のお客様達が恐れるではありませんか」。

その言葉は丁寧なのだが、言っていることはアビンにはとても言えない批判が含まれていた。

すると提督が言った。
「あいかわらず、手厳しいことを言ってくれるな、だが、これも警備上だと言うことで下の連中が付けてくれた。それで、彼らの顔を立てなければならぬ立場としては、こうして連れ歩くしかないのだ。分かるかなション」。

ションは提督のその言葉に黙って肯く。すると提督は満面の笑みを湛えながらアビンに言った。

「では、若者よ。娘達をよろしく頼む」。
そう言うと公爵と談笑しながら去って行くのだった。
アビンは提督だけでなく公爵からも何か言われるのではと、ビクついていたが不思議と彼には何も話さなかった。その理由は後ほど分かるのだが、この時はまだ、その事を知らなかった。

ションは談笑しながら去って行く提督達を見送ると、アビンに促すように言った。
「さあ、わたしたちも行きましょう。此処に留まっても通行の邪魔になるだけですし、それにわたし達の部屋に入ってから話したいこともありますから」。

その様に告げられてアビン達はエレベーターに乗ってションとアンの部屋がある階に到着した。そして、ドアが開くと目の前にホルストとブルッフが立っていた。この突然の出来事に互いをまじまじと見つめることになったが、それを遮る最初の言葉を放ったのはションであった。

「これは、チーフ。お二人でどちらかにお出かけですか」。
するとホルストはあきれた口調で言う。
「どうもアリスは、俺を軽い男にしたいらしいな」。

その言葉を受けてションは言った。
「皮肉な答え方をする、ということはお仕事でしたか。それにしてもこの階でお仕事とはどのようなものだったんでしょう」。
その言葉は、自分の愛称を平気で言ったホルストへの当てつけが含まれていたが、要らぬ詮索は告げなかった。

するとホルストは意地悪そうに尋ねる。
「ほう、アリスちゃんは気になるのかな。お茶をごちそうしてくれるなら話しても良いぞ、どうかな」。

その言葉を聞いてションの口元が笑った。
「では、ご招待します。これからお茶でもと思っておりましたから。如何ですか」。
この言葉にホルストは驚きの表情を見せて言う。
「まさかと思うが、いいのか」。

「ええ、出来ればチーフにも話を聞いて貰いたいので」。
「そうか、何か重要なことが分かったのか」。
ションは黙って肯いてから、先頭に立って歩き出してから言った。
「ご招待します。ただスターンが暴れていたなら片付けのお手伝いをお願いします」。

ホルストは最後の言葉を聞いてから呟いた。
「どうりで、すんなり招待するわけか、開けてみたらぐちゃぐちゃで、片付けに人の手が多いほどいいと、俺は清掃係か」。
その諦めきったような言葉にブルッフは
「チーフ。わたしもいますから」。

しかし彼女の申し出はホルストには慰めには聞こえず、ただ同情をかつているようだった。

「さして彼女たちの部屋を開けると、期待したような状態ではなくきちんと整理された部屋だった。どうやら何もなかったようだった。そして、案の定スターンは大きなバスケットの中でまだやすやすと寝ていた。後で聞いた話だが、ミュラの幼獣は母親から沢山の乳を貰っては、半日以上眠るという繰り返しを数ヶ月繰り返し大きくなるそうだ、これを過ぎると固形物を食べるようになるという。そして現在はまだ、初期の段階なので眠るのが仕事のような状態なのだった。

その様なわけでホルストの心配は期待通りにはならなかったもので、ほっと胸をなで下ろすのだったが、なぜかブルッフには残念だったようだった。それは、怖いもの見たさ暴れるミュラの幼獣を見てみたかったようなのだった。

一次はこの船を恐怖に陥れた、化け物みみたいな猛獣だが、子供は丸っこくて毛並みがふわふわしていて、寝ている様子は白いぬいぐるみの様に愛らしかった。

「よかった。まだ寝ていたようだな」。

アビンはめっちゃめっちゃになっている部屋を想像していたが、問題ないので片付けを免除された安堵感から、この様に言ったのだった。

「そうですね。それでもその辺の物をひっくり返したり、シーツを引きずり回したりする程度だと思いますから、それ程酷い有様にはならないと思います」。

そういうションの言葉にアビンは何となく言った。

「それって経験済みって響きを感じるんだが、違うか」。

「正解。この前に一回やられましたから」。

シオンは答えながらスターンの頭を撫でるのだった。

その様子を見てホルストが言う。

「やれやれ、こうして寝ていると可愛い物だが、成獣に成ったらどうするつもりだ。農場で飼うつもりか。まあ、良い番犬代わりには成るが、そのたびに死人が出るのは問題があるぞ」。

するとそれに答えるように、シオンは言う。

「一二年は、飼えますが、それ以上は問題ですね。どこかに引き取って貰うか、食物連鎖の頂点としてどこかの自然に帰すしかありませんね」。

「そう考えるなら、今からつてを探す必要があるかも知れんな、一年なんてあっという間に来てしまうからな」。

「そうですね。五月蠅そうな人にあげるのも良いですね」。

その言葉を聞いてホルストは嫌そうな顔をしていった。

「それは、やめてくれ。面倒を押しつけるような物だし、相手が死んでしまう可能性もあるからな」。

その言葉にシオンは残念そうに言う。

「そうですか。黙らせるのに良い方法だと思ったのですが」。

その言葉に透かさず念を押す。

「それは、やめろ。負傷者が出る。たまに、ぞっとすることを言うなお前は」。

「すみませんね。性格に多少難があるので」。

「自分で分かっているのなら、何とかしろ」。

「善処します」。

「やる気が薄い言葉だな」。

ホルストの指摘を受けてシオンは改めて言った。

「努力はしますが、出たときは申し訳ありません」。

その言葉にホルストは、半ば諦めたような素振りで言う。

「分かった。自分で気がついたらやるな、そして、相手に親切にしろ」。

この様に言うのは、彼女の母親が常々シオンに言い含めていた言葉だったからだ。その事をホルストは、彼女の叔父であるスコットから聞かされて知っていた。それに、彼女自身は常に、物事の公平さを重視する傾向があるので今話した事を実際することは無いと分かっているもつい口から出る言葉には、ヒヤリとさせられるものがある。そして、性格に難があるのは幼いときの経験から来る物だろうとホルストは考えている。本人はあまり話そうとしない辛い経験だった、ことはスコットから聞いて知っているぐら이다。

この様にシオンとホルストは話をしている最中、アンはアビンとブルッフに手伝って貰いながらお茶の準備をしていた。

そして、テーブルには暖められたティーカップを人数分セットしポットには紅茶を入れ熱湯をアビンが入れていた。アンとブルッフは大皿にのったパイケーキをカットして

小皿に分けていた。ポットの注がれる熱湯で紅茶の葉は中で踊りながら香りを沸き立たせていた。その香りに気がついたのか、シヨンとホルストは会話を辞めて止めて、テーブルの方に来て座った。

その様子をアンはこう言った。

「お二人とも、相変わらず鼻が利くのですね」。

その言葉にシヨンは少し顔を赤らめるのだったが、ホルストはそれが当然とばかりに平気な素振りを見せ内心は明かさなかった。

その成り行きをアビンは興味深く見ていた。その観察ではさすがに大人であるホルストは表情を隠してはいたが、シヨンはどうやら恥ずかしく思えることには顔に表れやすいようだった。

けれどあまりジロジロと見ていては気分を害するに違いなく、その辺は彼自身も心得るように成っていたので、それとなく話題を振る。

「お茶も入りましたし、込み入った話は後にして、先ずはお茶の好みとか聞かせて貰えれば、アンが用意してくれるようです」。

この話はたぶんシヨンが話すべきものだったに違いないが、アンがそれとなく告げた言葉を含めて言ったのである。そして、言ってしまうから少し不安になってアンを見ると肯いてくれたのでアビンは安心した。

するとホルストが茶化すように、

「すでに主人役を始めるのかね」

と言うのだった。

この言葉は詰まりアビンとアンが夫婦という前提での話である。その言葉にアンは耳まで真っ赤になっていた。それに気付いたのかホルストが申し訳なきように言う。

「これは、失礼。言い過ぎた流してくれ」。

するとシヨンは少し冷ややかに、そして静かに言った。

「たまに空気読まない発言するんですね」。

その言葉は一瞬止まったように感じられた。

そこで場の空気が悪くなるのを避けるようにブルッフは言った。

「この紅茶の葉っぱは何処のもの」。

するとアンは「セイクフェルの茶葉のセカンドリーフです」と気を取り直して言った

。その答えにアビンとホルストは言葉を失った。

それは、セイクフェルのセカンドリーフと言えばテラのダーズリンと同じ扱いがされ、セカンドリーフと言えば高級茶葉だった。ただ香りの広がり少し強いので違いが分かる。

さてシヨンであるが、その答えに平然としているのは、当の本人が日常使っている物だからである。実際には個人的にはブレンドして使うことが多いのだが、気分によってはそのまま使っらしかった。

その事についてシヨンが話したので、ブレンドの方法などをブルッフは尋ねたりした。実際には彼女は、紅茶には詳しくはなく、その場にあるのに紅茶にミルクとかを入れるタイプなのだが、今回のことで興味が湧いたのかしきりに尋ねるのだった。後で話を聞いたところ香りがすてきだったので自分でもブレンドをした紅茶を入れてみたくなったようだ。

暫くの間シヨンがブルッフに説明する様子を、他の皆は納得しながら聞いていたのだが、一通り話が済んだのを見計らってホルストが言葉を切った。

「それで、そちらはどんなことが分かったのか知らせて欲しいのだが、かまわないかい」。

その言葉に答える前にシヨンはアビンの顔を伺った。すると彼は、黙って肯いたので彼女は話し始める。

「先ずは、わたし達が気になったことで、エレナさんの過去の記憶です。彼女自身のマクレガー女史に対する記憶がいまいなことと、過去トレッカーと遭っているのに、それを殆ど忘れていた。いえ、記憶に残っていない点に、少し気になって調べて見ました」。

「そうか、彼女の過去に何があったかはだいたい察しが付くが、スフrint第四次紛争での事だろう。此方では記録が事故で入院と書類上成っている。公式記録だと言っているが事實は、それが違っていたとゆうことだろう」。

話の腰を折らないまでもホルストはすでにある程度のことには知っているようだった。

「ですが、それは嘘の記録のようです。帝国の別のデータから迎るとトレッカーとエレナさん、マクレガー女史が会ったのはフィゴの南部のデビュルではなくガレアなのです。それに彼女の医療メンバーの人数が本来の数より水増しされて記録されています。その水増しされた数がトレッカーのいた部隊の人数を足すと帳尻が合います。ところで、ホルストさんはある程度ご存知だったんですね」。

シヨンは少しむくれるような口調で言った。

それに対してホルストは謝罪するように言った。

「悪かった。コンテナの問題で調べていたらルクレールが見つけたのさ、変な経歴がある奴が幾人かいると、公式記録と申請記録それから、軍のデータと遭わない奴がいるとね。意外にもうちの国の調査機関は暇人なのか上が黙認して気がかりなデータを探ったのかその記録が残っていた。公式記録として。お前の方は帝国のデータベースに潜ったのだろう」。

シヨンは最後の言葉に黙って肯いた。それを確認してからホルストは言葉を続ける。

「ただ、此方の調べられる範囲はやはり限定される。特に宇宙船からではこの船の設備に依存してしまうから、無理な検索を掛けるとシステム障害とか警告を発せられては困るからな。それから、お前みたいに伝手が有るわけでないしな。それで先ず此方で分かっていることで警戒を怠らないようにしていたので、あえて暫く触れないようにしていたのだ。けれど、今は協力をお願いします」。

するとシヨンは言った。

「わたしは、チーフのチームの一人ですので指示さえいただければいくらでも行いますよ。それとも残業手当のことを気にされたのですか」。

「まあ、それもある。休日のを者を使って仕事をしたのでは後で書類が面倒だからな。それに、君たちには少し縛られることなく自由にやって貰いたかったのだ。此方が何か見落としているかもしれんからな」。

その言葉を聞いてシヨンは言った。

「つまり、わたしたちはホルストさんの手の内でじゃれていたということですか」。

「それは、違う。一方での確な計画のもとに行動する。しかし、非常時のため自由行動に任せるグループを置いておく。新しい局面にぶつかったときに目的を果たすための選択肢を多く持つておける。ただし、野放しではなくそれとなく目的を持たせておくこともするがな」。

するとシヨンは嫌そうに言った。

「策士」。

「今は、褒め言葉として受けておこう。それで、此方は記録の外側しか見られなかったが、内側を覗いたのだろう」。

ホルストはシヨンの言葉を受け流して尋ねた。

「そうですね。トレッカーが内面的な傷となったものとして見ることの出来る事柄がありました。彼のいた部隊が軍の黙殺を受けてしまったことです。記録では通信記録まで残っていましたが。毒ガスの証拠隠滅のため派遣された彼らの部隊は、共々証拠隠滅のために町ごと焼き払われたようなのです。その生き残りがトレッカー、エレナさん、マクレガー女史です。公式では彼らは事故に遭遇、他の人たちは移動中に爆撃の犠牲となっていました」。

その話を聞いてホルストは言った。

「握りつぶしたということか。かつての対立したベストラン公の部隊だから特に潰したかったんだろう。まあ、ベストラン公と軍の強硬派いや強攻派と言い換えた方がいいか、その連中との対立は此方まで聞こえてくるほどだったからな。結局はベストラン公が軍から追い出される形で決着したのだが、それでも未だに彼の側の者が多いと言われている」。

その言葉に後シヨンは話を続けた。

「これに到った経緯なんですけど、どうやら彼の息子が関係しているようです」。

「彼の息子が」。

ホルストは尋ねた。

「そうです。これから話すことはアビンさんにも話していませんが、記録は閲覧時間が数十秒と短くプロテクトされていたので、目で追うしかありませんでした。そこにはこうあったのです。化学プラントの事故は以前から安全の問題が指摘されていたのですが、上層部はそれを無視し、いえ返って事故を誘発しそうな無理な命令書を出して、現場責任者をベストラン公の息子に当たらせたようです。当然事故です。その責任を彼の息

子に負わせ、共同責任を彼に迫ったようです。当然弁明は無視され軍を追われたよう
です」。

その話しにアビンはつい口を出し「酷い話だ」と言ってしまった。それに同意するよ
うにシオンも言った。

「酷い話です。それに今回のランカスター公爵の暗殺計画も、その連中が陰で糸を引い
てるような感じです。実行しているのはベストラン公ですが、彼のもといた部隊員達の
黙殺、トレッカーの部隊を壊滅させた命令を実行したのがランカスター公という事にな
っています。伯父様の艦隊が実行したのですからそう思われても仕方が無いです。実際
には艦隊司令を退いてテラリーズに来ていたのですが、司令官不在のため仮名目で名前
だけがおかれていたのです。その部隊にかつての敵が利用して実行、そして責任を伯父
様に押しつけたのです」。

するとホルストが言った。

「弁明できるのではないか、退いていたのだから」。

するとシオンは首を横に振って言った。

「それが、命令書にはランカスター公爵の署名があつたのです。偽造だと思いますが、
本人はその時にはイオの遺跡で穴掘りしてましたから、それでも誰かが内密の話と嘘を
言えばどうなります。証拠は偽物でも疑う人物には立ち止まって調べる気を起こさせる
でしょうか。返って確証を得たとして行動するではありませんか」。

その言葉にホルストは考え込むように言った。

「それは、確かに言える。気が動転しているときにはよく確認しないとが多い。それに
今まで疑っていたのならなおさらだ」。

「それに、ベストラン公が軍を追われる時や、ご子息の事故の時全て、ランカスター公
爵は不在だったのです」。

その言葉を聞いてホルストは言う。

「始めから計画的に、ランカスター公爵の留守を狙っての行動で、責任を彼に押し
ける。いや、首謀者に祭り上げるつもりだったのだろう。あわよくば両方とも消えてく
れば良い、と考えている連中がいるということか。その連中の名前は直ぐに挙がるが
、シッポはそう簡単に出さないだろうな」。

その言葉に同意するようにシオンが言った。

「そうですね。みんな互いにかばい合うでしょうから、でも塊は綻びが生じると崩れる
のも早いですが」。

するとホルストがシオンに忠告する。

「変な考えを起こすんじゃないぞ」。

「分かっています。わたしには何も出来ませんから」。

「それならいい」。

ホルストは短く言葉を切った。

そのあとシオンはこう言った。

「告げ口なら良いでしょう。わたしが手出しするんじゃないから」。

その言葉をかなり嫌そうな素振りでホルストが言う。

「誰にだ。もしかして結果が見えてるようなことを言うのか」。

「公爵夫人に今回の資料を手紙にしたためて、困っている知人を助けてとかよい文句
でしょう」。

シオンが平気な顔をして言うと、ホルストは険しい表情をして言った。

「お前らしくない手紙だ、気味が悪い」。

「あっ、その言い方は傷つきます」。

珍しくねだるような声色をして言う。その言葉を聞いてアビンは面食らったが、側に
いたアンが耳元でこっそりこう言った。

「大丈夫です。からかってるだけですから」。

その言葉を聞いてアビンはその場を見て見ぬ振りをするのだった。

そんなアビンに目をとめたシオンは、それとなく言った。

「このことは、見なかつたことにしてください」。

それから彼女は身を乗り出していた姿勢を止め、座り直すと言った。

「それでも、この件は何かの形で伝える必要があります。だから公爵夫人に伝えてベス
トラン公とランカスター伯父様の潔白を証明して貰います。大変でしょうけど、お願い
したいと思います」。

その言葉を聞いてホルストが言った。

「そんな事を頼むと、彼女の条件を呑まされるぞ、いいのか」。

「このさい、致し方ありません」。

するとホルストは少し考えて言った。

「俺も協力する。出来るだけな」。

二人の会話を聞いてアビンは、すでに条件は知らされているようだと思えた。

そこで興味半分で尋ねようと思った矢先、彼の袖をひっぱってアンが注意をひいたと思おうと再び彼の耳元でささやいた。

「あのですね。アビンさん、シヨンは既に大学の博士号を持っていて、来年度大学の物理学の教授として着任することが決まっています。それで、公爵夫人が二番目のご息子の個人授業をお願いしてるのです」。

その話を聞いてなるほどと思いながら、何処にも頭の良い奴はいるのだなと思うのだった。

ただこの時点で彼は理に合わないことが告げられていることに気がついてはいなかった。

この様に話が進んでいるうちに、スターンが目覚めるのだった。

そして目覚めると同時にシヨンの懐に飛び込みミルクをねだるのだったが、それだけならいい、飛びついた拍子にテーブルの上のケーキは飛び散り、ポットはひっくり返ると言う有様で、お茶会はこれでお開きになってしまった。

その後は皆で、あと片付けをするのだったが、ミルクを飲み終わると今度はクッションを啜えて彼方此方と走り回りながらそれを振り回す。それをまた皆で押さえるのに一騒動となるのだった。このことで、アビン達全員はくたくたに疲れ、それぞれ自分たちの部屋に戻るのだった。ただし、スターンは遊んで貰って大満足のような感じだった。

その様子をアビンは見て思った。もうこいつの起きているときには来ないぞと、そして疲れた体を引きずるようにして部屋に帰ったら、何も考える力が無くなっていたのか、ベッドに倒れ込むように寝てしまっていた。

アビンが起きると次の日の午前八時を少し回っていた。

とはいっても太陽が昇って明るいか言えない宇宙空間で、すでに二日前から此処の星系の太陽に船体はこんがり焼けて表面温度は百五十度を超えているのだった。そのお陰なのかどうかは知らないが、太陽光発電はフル回転稼働し余剰電力があるほど十分にまかなっていた。

昨日の最後はさんざんな目に遭ってしまった。お茶会がお片付け会に成ろうとは誰も想像し得なかった。

そう言えばホルストが片付けながら、こんな事を言っていたと思い出した。

それは、暴力事件で下の警察に引き渡されたイワノビッチは、ティスの部屋で爆発物が発見されたことで、逆にテロリストの逮捕協力に感謝されたそうだ。

それから、自分たちが出した爆発物のリストをみてホルストは、液体爆薬に成る液体をタンカーシャトルで抜き取る手筈をするために、下に降ろされていたイワノビッチをこれ幸いとタンカーの手配に動いて貰って、すでにそれらの液体を抜き取ったそうだ。それで、残りの爆発物は五トンほどに成ったそうだ。

アビンはそれでも多いと思っはいた。

それからアビンが気になっていた、美緒という少女の事をそれとなくアンに聞くと、それについてもホルストが答えてくれた。何でもこんな危ない航海は良くないと副社長が彼女を半ば強制的に船から降ろしたのが今から二日前だったそうだ。それは親の立場からすれば当たり前行動なのだが、彼女はかなり不服そうだったとか。

彼は自分の知らない所で、いろいろなことが進行していたのだと改めて考えさせられたのだった。

そうとはいえ既に八時を回っていては、遅い朝食と成ってしまうのは確実の状況なのである。そしてこの状況で教授に遭おうものなら、「いつまで食事をしてるのかね、後を片づけるものか」を考えてみたまえ、と言われるのが落ちだとの思いが彼の脳裏をよぎった。

けれど、頭を働かせるためには少しでも食事は欠かせない、との思いから彼は教授に発見されないように祈りながら、身支度を調べ食堂に向かった。

さて彼が中に入ると、当然のごとく人はまばらで既に時間的には過ぎているようだった。けれど彼がテーブルに着くとウエイトレスが近づいてきてモーニングサービルはどれを選ぶか聞いてきたので、終了していなかったことに安心して、コーヒーが付くセットを注文した。

その後、注文が届くのを待っていると後ろの方から、聞き覚えのある太い声が彼に話してきた。

「君、一緒しても良いかな」。

その言葉にアビンは「かみません」と答えると、目の前の席にファーナビー提督が座るのだった。

この状況にアビンは一帯何が起きているのか、頭の中であれこれ考えていた。それは、アンの件だろうか、それともシヨンの件かはたまた教授のことか、もしかしてどこかでとんでもないミスをしていたのか、頭の中でぐるぐると思考が回るのだった。

そんなアビンの状態を知ってか知らずかこう言った。

「お早うアビン君。遅い朝食かね」。

「ええ、そうです」。

「夜更かしは行かんぞ、良い仕事の敵だ。かといって君たち学者の研究はそうもいかんかも知れんが、やはり早めの就寝は頭の整理には大切だ」。

その言葉にアビンは提督の口から生活習慣について助言されるとは思っても見なかった。だが此処は何はともあれ感謝を述べるのだった。

「おきずかい感謝します」。

すると提督は感心するように言った。

「君をあいつの助手にしておくのはもったいない。君が良ければ今のわたしの仕事を手伝わないか。別の諜報員を辞めろというのではない。今、星系間安全条約機構の事件調

査委員会の主幹をしてるのだが、有望な調査員を探しているのだがアビン君は興味ないかね。別に犯罪がらみではなく何が起きたのかを調査し今後の対策や問題を提起する機関だ。普通は事故調査と行動を共にする事が多いが、単独でも行動することもあるので有望な若者を求めている。どうかね」。

そう言い寄る提督の素振りには、言葉では優しく勧誘しているように聞こえるが、その実、かなりの圧力を感じるのだった。そこで、アビンはこう言う。

「それを言うのなら、シヨンが適任ではありませんか。あの若さで優秀な娘だと思いませんか」。

その言葉に提督は、椅子の背もたれに寄りかかるようにして座り直してから、首を横に振り残念そうに言う。

「あれはダメだ。素直な反面、少し性格に難があり、相手を自分の思い道理に動かすきらいがある。本人は意識していないが、それに」。

そこで、提督は言葉を切ったので、アビンは受けるように尋ねた。

「それに」。

「それに、あの娘は頭の良さで博士号を取り、今では、事故調査委員会の調査員だ。こっちには見向きもしない。小さい頃はよくゆうことを聞いてくれたが、ほんの少しの間、目を掛けてやらないうちに、大学に行って博士号を取り儂の話すことに論理で否定するように成ったのだ。ああ、もっと目を掛けてやればこんな事にはならなかったのに」。

そう訴える提督の言葉にアビンは、シヨンが既に亡くなってしまっているような印象を受ける話しに、彼女に同情すること大であった。

ここに来て提督の泣き言を聞かされる羽目になったのをアビンは、自身の寝坊を悔やむのだった。しかし、彼はそのまま席の反対側に提督に居座られてはたまったものではないので、あえて突き放すようなことを言ってみた。

「良いじゃないですか。そうそうに巣立って行って、何時までも巣立たないにヤキモキするよりは、喜ばしい限りではありませんか」。

そう彼が言うと提督はキッと睨むようにして言う。

「随分言ってくれるではないかね。アビン君、うちのアンに手を出しておきながらその言い方は何だね。シヨンがいつってしまった今、アンまでもこんな優男に連れて行かれるとは」。

そう言う肩をがっくり落として俯くのであった。

さすがにアビンもこの言われようと仕草には、呆れ果てるのだった。自分を娘をさらう輩として語っておいて本人は如何にも哀れでございませぬ、という風に見せられるのは威厳もなにも有ったものではない。

それ故にシヨンとアンには、大いに同情した。だが、何故わざわざ自分の席に来てこの様にするのだろうかという疑問が湧いた、と同時に彼は周りの様子を覗いた。それは誰かが此方を見ているような妙な気配がしたからだ。当然、その気配は提督の有名さからすれば有って当たり前なのだが、それは注目という感じではなかった。なんと云ったら良いだろう。不安を感じさせる気配だったのだ。そして、それとなく周りに気を配っては見たが、既に気配は消えそれらしき人物も見当たらなかった。

そして問題なのが、この肩を落とした提督の処遇である。どうしたらよいのやらと迷っている、と当の提督が呟いた。

「怪しそうな人物はもういないか」。

「はい」。

アビンは提督の言葉に促されるように答えてしまった。

「ならいい。さてアビン君少し話をいいかな」。

周りの状況を確認してから提督は、さっきとは打って変わって凜とした雰囲気アビンに尋ねた。それに幾分気後れするように、「どうぞ」と答えるのだった。

「まず君に聞きたいのは、うちのアンについてだがどう思う」。

その質問は、付き合いのある彼女の父親から尋ねられる、ごく普通の問いだと思えたアビンは正直に答えるのだった。

「そうですね。かなり辛い経験をしているはずなのにその感じを微塵も示さないのは、芯の強い娘かなと思います。ただ少し思い込みが激しいのか、それとも何かに憧れているのか、そんな素振りを俺に見せることが有ります。その辺は提督の方がよくご存知かと思えます。ただ、彼女を利用して提督に近づこうとは思いませんが、面倒はうちの教授で十分です。ただ由し訳ありませんが、成り行きトうちの考古学教室に誘ってしまっ

たので。事務仕事もかなり出来るようになるので助けて貰えそうとか、助け手になって貰えれば嬉しい、という感じです。アンの気持ちは理解しなければと思いますが、どうも、教授の言葉を借りれば甲斐無しなもので、もっと言い言葉をいえれば良かったのですが、申し訳ありません。決してアンが気に入らないとかというのではないのですが、この様な場合なんと言っただけで良いやら、それに提督もご存知な様に俺は教授に張り付く諜報員ですから、彼女に辛い思いをさせるのでは、と思っただけでハッキリ言えないのです」。

。そうアビンが答えると提督は深くため息をついて言う。「まだまだだな、青二才の君にはうちのアンはまだやれん。もう少し精進してくれないと心配でしょうがない。それに諜報員ならその位は、割り切ることが必要なのだがどうやら君はそれを相手に失礼と考えているようだ、その点は父親としては見込みありと評価しよう。だが諜報員としては及第点はやれんな」。

その言葉はアビンには痛かったが、それ程苦では無かった。そして提督の言葉は続いた。「それで、まだ君たちは十代なのだから監視対象にはなる。道德上のな。この国の法律を知ってるだろう。付き合うのは構わんが責任は取らされる」。

するとアビンは同意して言った。「分かっています。仕事を持たないといけない事は知っています。それに年齢的にまだ結婚は認めて貰えないということですよ。保護観察が付くということです。それは俺としても困ることになるから避けたいです。これでも曲がりなりにも諜報員ですから」。

。その言葉に提督は問いただす。「では、うちのアンとの付き合いは、将来を前提と考えさせて貰って良いのかな」。

その問いにアビンは意を決して答えた。「そう思って頂いて構いません」。

この答えはアビン自身はこの時点で、結婚に何かを期待してはおらず、ただ人生での助け合いのパートナーを決めるくらいにしか考えていなかったからだ。それでも、アンに対してはそれなりの気遣いもあり、悲しませたくないとの感情から、将来そうなっても構わないくらいは思っていたのだった。それは本人次第というかなり不確定な要素ではある。

ところで提督の本当に聞きたいことは他にあったが、まずはアンとの関係を確認しておきたかった。これから計画していることにそれが関わってくるからだ。そしてアビンが出した答えは、その計画を後押しするものであった事に提督は気をよくした。

それで提督はアビンに、その事を前提に話を始めた。「アビン君。明日の儂のインタビューに親族の一人としてギャラリーに入って貰いたい。正確に言えば将来の親族だがアンのフィアンセとして席について貰う。いいかな」。

その言葉にアビンはマクレガーから聞いた話が、今、此処で繋がった。そして、これは逃げられないことと諦めて承諾して肯きながら言った。

「分かりました。仰るとおりにします」。

その答えを聞いてから、提督は話を続ける。「さてここからが肝心なことなのだが、今回のインタビュー会場内には武器の持ち込みは禁止となる警備以外はだが、それは分かるな」。

その言葉にアビンは黙って肯く。「だが、君には麻痺銃を携帯して貰う。これは他のものには内緒だ。けれど君は思うだろうチェックがあるのにどうやって持ち込めるのかと、いくつかの盲点があるそれを明日教えよう。その物は後でアンに届けさせるから使い方を覚えておいてくれ」。

そう言って提督はにやりと笑った。その時、アビンは提督の後ろにウエイトレスがアビンのモーニングセットを持って近づいてくるのが目に止まった。すると提督はアビンの表情を見て「君の遅い朝食が来たようだね」と言って話を区切った。

そして提督はアビンの朝食がテーブルに整えられるのを暫し待ってから話し始める。ウエイトレスが離れて少し立ってからこう言った。

「アビン君、君は朝食を取りながら聞いて貰いたい。ランカスターの暗殺の件については色々聞かされている。どうやら主犯にある程度目星を付けたようだな。向こうが行動するまで、出来るだけ人数を減らしたいものだ、その手筈は順調かね」。

食事の途中のアビンは身振りだけで答えた。それは、今のところはという意味でそれなり

にと任草で見せた。

「そうか、それならいい。どうやら下の方の連中もヤキモキし始めている。自分たちの首が掛かってきそうな雰囲気だからな」。

つまり下の連中とはこの星の警察局だ。彼らは重要人物の乗る船で暗殺が起きようものなら、自分たちの怠慢を指摘されかねなくなるからだ。そして、現状としては船側の要請が無い限りは人員を送れないので、現在も船長と警察局の折衝が続いている。船長の立場では警察の人員が入るのは、土足で家を踏み荒らされるに近いのでいい気はしないのだ。それに、今回は向こうが軍隊のプロだからその辺のテロリストと考えて行動すると犠牲が大きく成りすぎるので、ここは、デュパルク船長に何とか踏みとどまって貰いたいのだった。

けれど、この状況下でこの冷静さは流石とアビンは思うのだった。

「この状況を君ならどうする。アビン君」。

突然、提督の言葉が質問に変わって彼の手が止まる。それから少し考えて答えた。

「踏み止まるのはやはり船長にお任せして、此方はその労力を他のことに向けたいと思います。たとえば向こうの人数を減らす方法。たとえば後四五人逮捕してそれを警察に引き渡すことで、向こうの面子を保たせ。同時に此方の警戒を絞るように出来ます」。

その答えを聞いて提督は首を横に振りながら言った。

「まあ、六十点というところか。教科書道理の採点では先ずは合格と言う所だが、実戦となれば話は違う。死者が出るな、そして、その責任を取って君は更迭だ。先ずその行動には無理がある。相手の武装や人数を完全に把握していて、それから此方も十分の人員があり、かつ作戦の支障を妨げる一般人がないことが条件と挙げられる、それでも向こうの抵抗がある、と考えられる状況下での負傷者発生もあるだろう、よって儂としては却下だ。それに強硬手段に出ると向こうもどんな手を使うか、今のところ把握できていないので不慮の事態が起きる可能性も大きい。また、残った人員が潜ってしまうとさらに厄介になり長期戦、一般人の人質となれば手に負えなくなる。ことに宇宙船内では厄介だ」。

提督はアビンの答えを教官のように厳しく糾弾する。その言葉はアビンにとっては自分の考えの浅さを悔やむのだった。そんな彼を見て提督は続けていった。

「実戦経験の少ない者には、今回の事は酷なのかも知れん。それに君が話したとおりにするのが正解の可能性もある。事態は全て流動的で最良の策を迅速に選ぶことが大切だ、思わぬ所に良い解決策が転がっていたり、落とし穴があったりする物だからな」。

そう言って提督は、ウエイトエスを呼んでコーヒーを注文した。

その間、アビンは自分の答えを検証していた。確かに教科書道理で自分の場合習っているのは自分が生き延びることや、他人の犠牲をあまり考えないで任務を果たすことが優先するものだから、たとえばアンやションを守りながら任務を果たすのは習っていなかった。ただ、この時点で彼は気がついていなかったが、ミュラの事件の時に、他人を庇いながら行動していたのを忘れていたのだった。

提督は注文を終えて、アビンを見ると彼がそれなりに悩んでいるのが分かって口元が笑った。それからこう言った。

「君の場合は、これから学ぶことになるだろう。よかったら儂が鍛えても良いが、それは本来君の上司がするべき事だ。それにそれを教えなかったのは、本来の目的が失敗も加味されていた、ということなのだろう」。

その提督の言葉は、アビンが時々思いを馳せるがさして気にとめないようにしていることを言い当てていた。

「言ってくれますね、提督」。

アビンは背中に冷たいものを感じながら言った。

すると提督は平然と言ったのけるのだった。

「君もそれなりに気がついていたのだろう。まあランカスターも気がついていたんだがね。それで、君を連れ回して楽しんでたのかもしれない。あいつの楽しみって知ってるか」。

提督が意地悪そうに尋ねる言葉にアビンは答える。

「いいえ。知りません」。

すると提督は笑みを湛えながら言う。

「部下を鍛えるために、いじめ抜くことなのだよ」。

その答えにアビンは息が止まる思いがした。その様子を見て提督は、笑い出して言った。

「いや、これは悪い。冗談だよ、冗談。そんなことすれば奴の周りは落ちこぼれで一杯になり誰も付いてこなくなる」。

その言葉にアビンはホッとして胸をなで下ろす、と同時にどこか残念な気分もあった。そして提督の話は続く。

「それでも、やはり見込みのある奴はそれなりに鍛えるらしいが、どういう風にするのかは儂もしらない」。

そう言った提督の言葉にアビンはついさっきまで、自分は提督にからかわれていた事に気がつき黙って落ち込むのだった。

そんな彼を見て提督も、疲れ気味のアビンを自分なりのウイットに富んだジョークで元気づけようとしたのだが逆効果であったことを悟った。

そしてシオンに何時も言われている言葉を思い出す。それは「伯父様のジョークってジョークではなく真実の籠もった皮肉です」との言葉だった。

ここに来て提督は自分の失態に気がつき、取り繕うように言った。「申し訳ない。君が元氣そうでないのでつい励まそうと言ってみたが、迷惑だったようだな、すまない」。

その言葉からアビンは自分がそんなに疲れて見えたのか、と気付かされた。

「ありがとうございます。気を遣っていただいて」。

そうアビンは短く言った。

すると提督は、話を切り替えて言う。

「ところで、君に幾つか聞きたいのだからいいかな」。

「かまいません。どうぞ」。

「なら、先ずはミュラーをどう思う」。

その質問にアビンは少し思い巡らしてから答える。

「ミュラーさんは仕事の出来る方の方ですね。ホルストさんとの旧知の間柄のようです。仲が良いと言っても良いくらい印象を受けました。それに、ご家族、ことに妹さんの事で頭を痛めているらしく、入学する学校のことをわたしに聞くあたりは面倒見の良い肩に見えます。今回の仕事では、調査を迅速に進めるあたりは出来る方の方です。信頼に値するのではないのでしょうか」。

その答えを聞いて提督は少し考えてから尋ねてきた。

「では、トレッカーについてはどうだ」。

その質問に彼は何処まで答えて良いのか一瞬躊躇したが、こう言った。

「トレッカーさんですか、確かに冷たい感じのする人だと思いますが、意外と熱心で、人の良さそうな方だと思います。ですが、どうやら彼が暗殺の実行部隊の指揮官のようです。ですから気の抜けないところが有ります。時々何を考えているのかつかめない感じがします」。

すると提督は肯きさらに質問した。

「その事はランカスターから聞いている。冷たい感じか。ではシオンはどう思う」。

その質問にはアビンは驚いて、表情に表さないようにして言った。

「その問いは、どのような意味ですか」。

「その通りの意味だ。答えてくれ」。

「わかりました。そうですね。びっくり箱のような天真爛漫と言う感じの女の子ですね。静かに話す所は良家のお嬢さんという感じですが、やることは驚かされっぱなしです。静かにしていれば近づきたい雰囲気を持っていますが、行動しているときには、まるで男の子の方ですね」。

その答えながらアビンは全てを語らずに少しぼかして話した。

すると提督は頭を抱えるようにして言った。

「そうか、大人しくはしてないんだな。何かやらかしたが言えそうにもないようだな」。

その言葉に、アビンは先程の言葉だけで、提督はある程度察しが付くのだろうと思っ

た。そして次の問いはアビンには答えずらいものだった。

「最後に、もう一度アンについて聞くがどうなのかな」。

その言葉に圧力は感じられなかったが、彼は既に逃げ腰であった。

「いや、そのう」。

ハッキリ出来ないアビンであったが、提督の睨むような目に、ついこう言った。

「大切にさせて頂きます。関係をご容赦ください」。

すると提督の口元が少し笑って言った。

「では、二人は将来一緒になるということで良いかな。この件は君の父君にも伝えておくが、二人ともまだ若いからくれぐれも互いに間違いが無いようにして貰いたい。そうしなければ君としても不本意なことになるはずだ、君の自由が拘束される事になるからな、五年間」。

その言葉はアビンにとって極刑を言い渡された気分させた。この国の法律で間違いがあった場合二人は強制的に一緒にされるか、十年間の強制労働の刑を言い渡され、良くて五年間、悪くすれば十五年間の公民権停止を言い渡されるのだった。その意味で提督は軽い方に言及したに過ぎない。

けれどこの言葉はアビンに意を決して行動しなければならなくなり、同時に提督には有望な若者を自分の手中に収めたのだった。

結果はどうあれアビンのちょっとした行動がこの結果を招いたのであり、その事を図らずもションが後押しをし、提督がそれを利用した形になったのだ。この件が明らかになったときに、ションは提督と、一週間程口を利かなかった。それは黙りではなく別の星に仕事に出ていたときで、定時連絡を無視して本人は出ず他のものにまかせたのだった。

さてこの成り行きはアビンにとって、せっかくの朝食が殆どのを通らない有様に立ったのは事実で、彼自身何を食べたのか分からない状態で、殆ど残して食堂を出ることになったのだが、提督のあれやこれやの質問から解放されるまで一時間ほど経過したのだった。

食事も殆どのを通らないまま彼は食堂を後にし、少しフラフラしながら自室に戻った。するとロックしたはずの部屋の鍵が、またも外されていた。アビンは警戒しながら中に入るとションとアンの二人が彼のベッドの上に座っていて、テーブルにはサンドイッチとポットとカップが置かれていた。

「これは、どういう事だ」。

アビンがいぶかるように尋ねると、アンが答える。

「提督が、たぶん食事を取れないだろから部屋で準備してあげなさい、と仰ったので言いつけ道理にしたんですが、ご迷惑でしたか」。

その答えにアビンは予めこうなることを見越して、提督は彼女たちに話していたのかと思って答えた。

「ありがとう。助かる」。

そう答えて椅子に腰掛けた。するとションが言った。

「大変だったでしょう。詰問の応酬で食事も出来なかったでしょう。いつもこうなんです。わたし達に近づいてくる人は、大概その犠牲になります。ただ今回は、アビンさんを気に入ったのでしょう。この様にわたし達を送って寄こしたのですから、提督は上機嫌のようです。アビンさんは迷惑でしょうが、諦めてください」。

その言葉を聞いて、自分は励まされたのか、慰められたのかよく分からないが、その言葉で納得するしかない諦めるのだった。

そして、ションはこう言った。

「それから、食事を終えたらホルストさんがブリッジに来て欲しいとのことでした。わたし達も一緒ですが」。

その言葉を聞いて、どんな用件だろうとアビンは思って言った。

「何か聞いている」。

「いいえ」。

ションは即答した。

それで、食事を終えてからブリッジに行くこととした。

ブリッジにて、

ブリッジにて

アビンとシヨンそしてアンはブリッジに上がった。

「お早うございます」。

アビンはブリッジに上がるなり当直員に挨拶をした。

「ああ、お早うアビン君」。

挨拶に答えてくれたのはデュパルク船長だった。

そこでアビンは尋ねた。

「ホルストさんからブリッジに来るように、との話を伺ってきたのですが、どのような用件でしょうか」。

すると操舵席の前に立っていたホルストが、近づいてきて言った。

「明日は提督のインタビューが行われる日だという事は知っているね」。

その言葉に三人は黙って肯く、それを確認してからホルストは話を続けた。

「そこで、君たちは親族として提督から申請のあった者達ということで、インタビュー時にギャラリイとして、つまり親族の立会人として席について貰う。ただし、ビデオには映らないから期待はしないように」。

その言葉にアビンは、そんなものは鼻から期待してなかったのだから、そのように話されるのは心外だった。シヨンとアンも同様だった。

「まあ、これは冗談だが、実際には君たちに話が振られることもあるかも知れないが、出来れば答えなくていい。此方の方としてはその様なことのないように取りはからうが、その件については向こうしだいという感じだ。君たちの身の安全もかねて学生保護規定を盾に諦めて貰うつもりだ。そこで、事前にリハーサルでは振られることが前提として話が進められる。その時、拒否すればそれ以上強いることは出来ない。そこで、此方は規定を持ち出してプレス側に諦めて貰うことにする。そのようにする事により、向こうに圧力を掛けられるし、破った場合は規定違反で罰せられ、公爵のインタビューも白紙になる。俺としては此方の方を望むが、そのようになると君たちが困るだろう」。

その言葉にアビンは、確かにそうだと思う。自分の顔が世間一般に知られるのは、今後の活動にも支障を来すし、シヨンやアンは身の危険を増やすものとなりかねない。それは、提督の親族というだけで誘拐やテロのターゲットにされかねないからだ。

確かに学生保護規定を持ち出されては、プレスも報道できない。この規定は成人になっていない学生が、自身の意志で拒否する事を誰も強制出来ないのだ。

ただし例外事項も当然有る。親権保護者の同意と犯罪に関わった場合は除外されるかもしれないというものだ。状況によって変わるらしいが、それを判断するのは裁判所だ

。 どうやらホルストはこの件に関して頭を悩ませているように見えるのだった。

そこでアビンは言った。

「それでは、此方の意志をハッキリ示せば良いということですか」。

「まあ、そうなんだが」。

そう言ってからホルストは、アビンとシヨンそれにアンをまじまじと眺めながら少し考えるのだった。それからこう言った。

「そうだな、君たちにはリハーサルの時にハッキリ断って貰いたい。それから出来ればだが、何かマクレガー女史に質問をして貰いたい。どうしてかと聞きたいかも知れないが、今は聞かなくていい。此方の思い過ごしかも知れないからな。やってくれるかな」

。 「何でも良いのですか」。

そう尋ねたのはシヨンだった。

「ああ、良いよ。ただし彼女を怒らせるような質問は無しだ」。

ホルストが窘めるように答えると、シヨンは不服そうに口を閉じた。

またアンはアンで、なにやらあたふたしているのが目に止まった。たぶん彼女は、どうしたらよいか考え倦んでいるのだろう、とホルストは思った。

彼自身は彼女の両親と面識があるし、幼い彼女にもあった事がある。その時からの彼女を見ているので、よく分かるがこの様な状況は不得意なのである。何かを考えまとめて尋ねるといことが、それは考えすぎて決断や尋ねることが出来なくなるのだ。これ

でよくアビンに告白できたものだ、と関心こそすれそれ以外はどうやら元のまものようだった。

そこでホルストはアンからの答えは期待せずに、話を進めることにした。

「さて、ここからが本題なのだが、提督のインタビューで何が起こっても席を立たないでくれ。これは何か起きる事が、前提では無いことをあえて言うておく。警備の都合上君たちに動かれては、何かと不都合があるからだ」。

そう話したときシオンが口を挟んだ。

「ということは、わたし達がチョロチョロするのが気に入らない。邪魔だと仰りたいのですか」。

すると透かさずホルストが答えた。

「まさにそうだ。特にシオンお前にはな。こっちが上から怒られるから辞めてくれ」。

その言葉にシオンはまた不服そうに黙り込んだ。

「それに、こう言うてはなんだが提督のインタビューは、ランカスター公爵の時の予行演習だと考えて貰ってかまわない。このインタビューで質問の傾向を把握したい。それは彼女から見て何か気づくことがあったら、質問のに変化が有るかもしれないからな。考えすぎかと思うかも知れんが、普段と違う行動は、それなりの理由が有るものだ」。

そう言うてからホルストは、アビンの目の前に立ってから、彼をまじまじと観察してからこう言った。

「そうだな、アビン君はシオンとアンに挟まれる形で座ってくれたまえ」。

その言葉にアビンは両手に花を持たせるつもりなのか、と考えたが何か理由がありそうなので黙って肯いた。

「それからシオンはアビン君の右にアンは左に座ってくれ。これは必ずというわけでもないのだが、そうしてくれると助かる」。

その言葉にシオンは尋ねる。

「その様に仰ると言うことは、何か計画でもあるのですか」。

すると気乗りしない様な感じでホルストが答える。

「まあ、なんだ提督の希望だ。言うておくが俺の決めた事じゃないぞ、あくまでも提督の希望だ。止めたんだがな」。

その言葉を聞いてシオンはため息交じりに言う。

「そうですか。分かりました。それで撮影は誰がするんですか」。

「今、くじ引き中だ」。

即答するホルストにシオンは不満そうに言った。

「一体何を考えてるんですか。それだけのことでくじ引きなんて」。

「そりゃもう。後で災難に誰も遭いたくないからな」。

「人を襲う猛獣じゃないのに」。

シオンは不服そうに言うてホルストは諭すように言った。

「この前、ルクレールに何が遭ったと思う」。

するとシオンは少し考えてから答えた。

「確か、誰かに呼び出されてました」。

「それは、知ってる」。

「あれは、どういう事だったでしょうか」。

「撮った画像のことで呼び出されたのだ。何か細工しただろう」。

「あっ、デジタルでしたから少し手を加えました」。

そう言うてシオンは舌を出して笑った。

「だろうな。いったいどんな画像にしたんだ。あいつ呼び出されて三時間ほどこっぴどく怒られたそうだ。嫌ならハッキリ断れ」。

するとシオンは答えた。

「わたしに内緒でするんですから」。

「腹いせか」。

ホルストは嫌そうに尋ねる。

「いえ、どうせとるなら仕事中的をお願いしますと言ったのです。それに画像の処理をしたのは、わたしではありません。エド君をお願いしました」。

その言葉にホルストはあいつかと思った。彼ならシオンの言うことなら条件次第で何でもするから、何か別物とすり替えたのだろう。そして、たぶんシオンはすり替わった内容は知らない。

「分かった。提督には俺から断っておくから。大人しくしてくれ」。

するとシヨンは「イエッサー」と答えた。

その答えにホルストは変に染まらなければいいが、と思うのであった。

それからアンに話しかけた。

「体の調子はどうだい。無理そうだったら参加しなくてもいいのだから、言ってくれ。そう提督に俺から話しておく」。

するとアンは丁寧に頭を下げて言った。

「お気遣いありがとうございます。大丈夫ですからそれにアビンさんがいますし」。

その言葉はアビンをかなり縛るものだった。普通、重く思われがち振りだが、彼はどうやらランカスターのせいで慣れているのか、それほど気にとめることは無かった。だがこれで、どうやら逃げ出すことは出来ないと理解した。

ホルストは、アンの言葉を聞いて、少し彼女の様子を観察してから言った。

「分かった。問題があれば直ぐに言ってくれ」。

「はい」。

それからホルストはアビンに言った。

「先ずは、アンをよろしく頼む。シヨンは自分で何とかするだろう」。

その言葉にシヨンは少しむくれているように見えた。

「それからアビン君。君には出来ればなのだが、君の席から見える範囲でかまわないが、周りがどう見えるか見ている欲しい。それと警備の様子も、後で参考にしたい」。

その申し出にアビンは自分で良いのか、と思いつつその言葉に隠された意図があるように感じて仕方が無かった。だが、此処はその言葉を受けることにした。

「はい。分かりました」。

「よろしい。それでは、明日の船内時刻で九時にはイベントホールに入ってくれ。それからこれが、中に入るときの入場パスだ。受け取ってくれ。くれぐれも無くしたり忘れてたりしないように」。

そうホルストは言うのと三人に直接手渡すのだった。

渡された入場パスはキャッシュカード位の大きさで、表面には顔写真とコードナンバーが記されていた。それを受け取ったときアビンは、それが直ぐに出来ないものであることを理解した。つまりこの事態は予め想定されていた事だったのだ。そういえば当初の航海の目的地に到着したときに、インタビューがなされることが知らされていたが、その時のパスを流用したのか、とアビンは思った。

ところでシヨンとアンだが、渡されたパスを黙って見ていた。当然の事ながらシヨンは、何時撮られた画像なのか気になっていたが、アンは別の意味で見てるのだった。

そしてパスが三人に手渡されたのを確認すると、船長であるデュパルクが話し始めた

。「さて、君たちにパスが手渡ったことで、これから少し説明させて貰うことにする。いかな」。

その申し出に三人は黙って肯く。

「そのパスは当初では、本来の到着地に着いたときに行われるインタビューのために用意されたものだ。その会場に入る時に身元確認様に使われるはずだったのだが、今回は特別に、チップの内容を書き換えて他にも使えるようにした。

セキュリティ区画の出入りの許可とシャトルの発着許可認証コードも入れてある。これは万が一の不測の事態に、君たちは単独でも脱出出来るようにするためだ。まあ、そうならないことを祈るが、これも保険だと思ってくれ。たしか三人とも記録ではシャトルの操縦は出来るな。シヨンは当然だし、アビン君は幼年学校で学んだらう。そして、アンは最近提督の付き合いで教わっただらう。だから、役に立つはずだ」。

その言葉には三人を突き放すような響きがあった。それは、非常事態になったら、一人でも自分の身を守るために、パスカードを使って脱出する様に求めているのだった。そして、その故に一人だけ助かっても責任は追及されないことも暗に示していた。

デュパルクは少し間をおいてからこう言った。

「それから注意事項として、覚えて欲しい事がある。そのカードはセキュリティカードとしての役割があり。それを持っている限り君たちがどこにいるのか此方から直ぐに分かる。つまりプライバシーの保障はないのだ。だから、インタビューが終わった時点で返却して貰いたい。そうしてくれないと持っている限り居場所は丸わかりとなる。いかな」。

その言葉にアビンは「では、直ぐに返却させて頂きます」と返事をしたが、シヨンは「猫に鈴とは考えなかつたんですか」と尋ねた。

その言葉に当然この様な答えが返ってきた。

「そうだな、お前にはそうしたいのは山々だが、それでまた遊ばれては此方が疲れるから諦めた」。

ホルストがため息交じりに言うのをシオンは不服そうに黙った。

そして、アンは「分かりました。そうします」と静かに答えた。

するとデュパルクがこの場をお開きにするように言った。

「これで伝えることは全部だ。集まって貰って感謝する。以上だ」。

その言葉にホルストは黙ってアビンの方を見て肯いた。

その様子を見てアビンは、何か感じたがそれが何を意味するのか分からなかった。しかし、今朝、提督が言っていたことを思い出して、引っかかる感じがしたが、この時は気のせいだと思ったが、記憶にはとどめた。

それから三人はブリッジを出て階下に降りるエレベーターを待った。その時だアビンは視界の端にヘンツェを捉えるが、この時はまったく気にも止めなかった。

そのヘンツェだが、彼が向かっていたのは、エレベーターを挟んでブリッジの反対側にある展望デッキだった。このデッキは最上部に近い当たりであるために、殆ど人が立ち寄ることは無い。

彼は此処にある人物から呼び出されていたのである。

そして彼がデッキに入ると、その人物は既にその場で待っていたのだった。

「いったいなんです。俺なんか呼び出して、もう貴方とは関係ないはずですが少佐」。

ヘンツェは不服そうに言った。すると相手もいかにも残念そうに答えるのだった。

「何を言っている少尉。君は俺が止めるのも聞かずに、軍を出て行ったでは無いかね」

するとヘンツェも言い返すのだった。

「これはこれは、どういう風の吹き回しですか。わたしはてっきりミュラー少佐。貴方が除隊願いを受理したのではと思ってましたが、違ったのですか。これでいい厄介払いが出来たと喜んでサインしたのでは、いや、その様に仕向けたのはあんただと思ってましたがね」。

その言葉にミュラーは歩み寄りながら言った。

「そうか、そう思っていたのか。では、正直に話そう実はそうなのだ。君たちの部隊の全員が対象だったからな。知るべきで無いものを見た君たちを抹殺する司令が出ていたが、何とか取り繕って全員不名誉除隊で手を打ったのだ。今、此処にこうしていられるのを感謝して欲しいものだ。不名誉除隊でも生活には困らなかつたはずだ」。

「たしかに、相当の金額が振り込まれていましたよ。警告の手紙付きで。それに生き残ったのは四人だったから、それ程の出費では無かつたはずだ帝国としては、違いませんか」。

その言葉にミュラーの表情は少し強ばったが、それをヘンツェが気づいたかは分からなかった。そして気を取り直すようにして言った。

「まあ、そういうこともあったな。ところで元気してるか」。

「いったい、今更どんな挨拶ですか」。

ヘンツェは訝るように言う。

「そうだな、昔よしみで協力をしてくれ」。

「断ったら」。

「当然、何時ものパターンだ」。

するとヘンツェはカツとなって言った。

「あんたらは何時もそうやって、何も知らない人の家族を人質に俺たちに汚いことをさせる」。

ミュラーは憤るヘンツェをなだめるように言った。

「今回は違う。昔の不名誉の挽回のチャンスをやろうというのだ。どうだ気にならないか」。

するとヘンツェは怒りを抑えながら、気乗りしないような尋ね方をした。

「それで、何をしろというのだ。話だけは聞いてやる」。

するとミュラーは不適な笑みを浮かべながらメモを渡した。それからこう言った。

「目を通しておいてくれ、そして了承するのなら、今日の昼に食堂に来てくれその時に渡したいものがある」。

そう言うとミュラーは直ぐにデッキから出ていった。

残されたヘンツェはメモに目を通してからそれを握りつぶしポケットに入れた。

もうひとりいる、

もうひとりいる

アビンとシヨンとアンは先程のブリッジでの出来事について、互いに話していた。「アビンさんはどう思います。この時に及んでわたし達をわざわざ呼び出して説明すれなんて。既にある程度説明を聞いていましたし、それにチョロチョロするなんて失礼ですよね」。

シヨンは不満を言うのだった。よほどホルストの言ったことが気に入らなかったのだとアビンは思った。

「でもそれだけ君を気遣っての言葉じゃ無いかな」。

アビンはシヨンの言葉を少し否定するように言う。

「そうですか。普段はあんな事を話さないのに、今日は少し変です」。

「俺は、ホルストさんの事をよく知らないから分からないのだが」。

アビンはシヨンの言葉を信じて良いのか分からず率直に言った。

するとその言葉にシヨンは、少し考えるようにしてから答えた。

「そう言えばそうですね。あの人は無駄なことはあまり言わない。特に仕事が絡むときにはそうです。無駄口をするときには休みの時か、気乗りしない仕事の時です。まあ、例外ということもあるかも知れませんが、分かりきったことを話されるので、わたしもついその流れに乗って対応してみたんですが、はらはらしました」。

その言葉にアビンは、自分ばかりかわれていたのかと思えて、それに気がつかずハラハラしていたのが情けなかった。

するとアンがアビンを励ますように言った。

「気になさらないでください。何時ものことですから、慣れるまでは胃に穴が空かないように聞き流してください」。

「そんなものか」。

その言葉に驚くようにアビンが問うと、アンはおだやかに答えた。

「はい。わたしも始めは驚きましたが、今は慣れてこんなものかなと思っています。特に他意はありませんから」。

その言葉を聞くに及んでアビンは、どこから何処までが本当の話か不安になってきたが、アンという言葉はそれを打ち砕く。

「ただし、話してることは全部本当ですから。少し戯けて話をしているだけです」。

しかし、だとしても知らない者にとっては、冷や冷やものの会話である事は確かであるし、知っていても慣れるまでは時間が掛かりそうだった。そして、彼を励ますように話すアンに、それとなく尋ねる。

「アン、君は随分慣れてるようだけど、ホルストさんと働いているのかい」。

その問いにアンはにっこりして答える。

「いいえ。わたしはホルストさんと働いたことはありません。けれど、シヨンのいるプロジェクトナインにはよく遊びに行っていますので、度々お目にかかっています」。

「そうなんだ。でも、仕事の邪魔にはならないのかい」。

アビンはアンの答えが気がかりで言った。すると彼女は、その点について話し始めた。

「そうですね。始めはシヨンがわたしを小型自家用機に乗らないかと誘ってくれたのです。住んでいる町を鳥のように空から眺めるのは楽しいよ、とか言ってね」。

その答えを聞いてどこかの軟派少年かという言葉が頭をよぎるアビンだった。

「その時に、安全のための説明をしてくれたのが、ホルストさんです。その時は、二人の会話にあっけにと取られましたが、飛んでいる最中に、シヨンは何時もあんな会話なんだからと言ってくれました。一緒に仕事をする事も多いので、気心も知れていて、半分保護者見たいのものだから向こうもハッキリものを言うので、初対面の人には、ドギマギさせようという会話らしいと言ったのです。当然、その会話は管制室には筒抜けだったので、皆その事を知っている様子で何も言いませんでした。それは、後で見学として管制室に入れて頂いたときに、皆さんの話から分かりました。でもね、よくよく話を聞くと悪口を言っているのではなく、注意だったり評価だったりするんですよ。でも言い方に問題あるかも知れませんが、その事も聞いてみたんですが、以前に比べれば最近はちゃんと目には敬意を払って話すようになったそうです」。

、その言葉にアビンは、まだ自分にはついて行けそうも無いと思えるのだった。「それに、本人も努力しているみたいです。昔は思いついたことが直ぐに口に出てしまったみたいですが、今は少し考えているそうです。でも提督や公爵様には手厳しいですが」。

そう言うアンの言葉にアビンは黙って同意した。それからこう言った。

「アン、君の話から、二人は一緒に仕事をする事が多い用だね」。

するとアンはこう答えた。

「はい。二人だけで仕事をすることもあります」。

「二人だけで」。

アビンはシヨンが聞いていることも忘れ、驚いて尋ねる。

「ええ、二人とも星系間条約機構の事故調査委員会のメンバーですから、その事を出向くこともあるそうです。以前などは二人だけでテラに調査に行ってますから、その時の名目上の関係が、叔父と姪だったんですよ。面白いでしょう」。

その答えにアビンは、何となく二人の会話がしっくりくると思えるのだった。

アビンがそう思っていると、シヨンが二人の間に割って入るように言った。

「アンその話はそこまでにしてください。それと、アビンさんは彼女の話で疑問は解けましたか」。

その言葉にアビンは押し切られるように「十分よく分かった」と答えるのだった。

するとシヨンはアビンの答えに満足したのか話題を変えて言った。

「どうせ明日のインタビューにはわたし達は写りもしないのだから、服装はそれ程気にせずに見てれば良いのでしょうか。アンはどうするの」。

するとアンは真面目な表情で言った。

「わたしはノースハイの制服で出席します。提督がシヨンにも制服でと言ってくれと仰ってました」。

その言葉を聞いてシヨンは不服そうに答える。

「今の話しは、聞かなかったことにしてくれませんか」。

「ダメです」とアンは聞かなかった。

「どうしても」とシヨンは渋るように訴える。

「わたしが困ります。提督に何とお伝えしたら良いのでしょうか」。

そう言いながら、如何にも困り果てた表情をしてみせるのだった。

するとシヨンは折れて「分かったわ。そうします。だからそんな顔をしないで」と言うのだった。

その言葉にアンは満面の笑みを湛えて言った。

「ありがとうございます。シヨン様」。

するとシヨンは少し恥ずかしそうに横を向いて軽く肯く。その様子を見てアビンは、アンの強かな部分を見て自分の将来に警戒感を覚えるのだった、がしかし既に時遅し、提督の術中にはまり抜け出せなくなっていたのだった。

そこでアビンは諦めて、その時になって考えようと投げってしまった。

三人が話している間に自然公園の入り口に来ていた。

その時、彼ら呼び止める人物がいた。トレッカーだった。

「これはお早うございます。トレッカーさん。何かご用ですか」。

アビンはそう尋ねるのだった。

するとトレッカーは三人を一人一人品定めをするように眺めてから言うのであった。

「これは、お邪魔だったかな」。

直ぐに弁明する様にアビンは言った。

「いえ、そうじゃありません。さつきホルストさんからの話を伺って帰る途中なのです」。

それを真に受けること無くトレッカーは言う。

「両手に花で、途中ね。興味深い事だ。明日は提督のインタビューの日だが、それを前にして親族にお近づきかい」。

その言葉にアンとシヨンは黙っていた。それは此処は、口を出さない方がいいと二人とも思ったからだった。お陰でアビンは説明にとういか言い訳に苦慮するのだった。

「ですから。そうでなくて、トレッカーさんの考えているようなことではありません」。

。するとトレッカーは尋ねた。

「では、どうゆうことかね。このお嬢さん達と一緒に歩いていることをどう説明する」

それは少しきつい印象を与える問いかけであったが、嫌みで言っているようには感じられなかった。けれど、アビンはさっき言ったことは事実だった。「ですから、ホルストさんからの話があって、三人とも親族として座るようにとの話だったです」。

アビンは言葉を付け足して答えた。するとトレッカーは少し表情を変えていった。「それは、どういう事なんだね。まるで、そちらのお嬢さんのどちらかと結婚するみたいな話では無いかね」。

ここに来てアビンは言った。「ええ、今朝ほど提督に詰め寄られて、アンとの将来を約束させられました」。アビンはもうここまで来たなら、どうにでも成れと口走ってしまった。ただ、これでアンの気持ちが傷つくことは無い、と確信していたのだが、自分の身の振り方にはいささか問題が出ることを、言うてから気がつくという失態を犯したのだ。

ここに来てトレッカーは納得したのか、軽く彼の肩を叩いて言った。「これから大変だな、行動の言い訳をする相手が増えて、自由をその若さで犠牲にしたのだからな」。

アビンはこのトレッカーの言葉をよく承知していたので、余計なお世話だと思った。だが、実際に頭の痛い問題として、これから度々、目の前に横たわるのだろうと思うと今から胃が痛くなりそうだった。

さてそこまで言うるとトレッカーは、それまでのことは既に承知していたのかこう言った。

「では、インタビューの時にはちゃんと出席して席を埋めてくれ、そうで無いとマクレガーが五月蠅いし、此方の警備上の人数把握にも誤差が出来るからな。提督に言われて用意した席が空いてると、こちら側は先ずその事の確認に走らされるからな、では、明日は三人ともよろしく願います」。

そう言うてからトレッカーは少し考えてから言葉を付け足した。「そうそう、アビン君、大学には制服はあるのかい。あればそれを着てくれ」。

その言葉にアビンはウンザリするように言った。「ありませんよ。卒業だって単位が終了するまでありませんから、制服も無いのです」。

「それは、どういう意味かね」。

「大学生でも会社の社員や公務員もいますから、みなそれぞれ思い思いの服ですよ。判断できるのは身分証明書のパスくらいですかね」。

トレッカーはアビンの答えに満足したのか、肯きながら言った。「これは、勉強になった。ありがとう。では、明日は君たちよろしく頼む」。

そう言うてトレッカーはアビン達の歩いて来た方に去って行った。それを見送りながらアビンは妙な疲れを覚えた。

そして、トレッカーが視界から消えるとシヨンが話した。「あの方、此方を探るように話してましたね。明日のことは既に承知していたのに、あえてあのような話をアビンさんに振ってました」。

「それは分かっている。けどそうしたとしても何が俺の口から聞いたかったのだろう」。

「分かりません。今のところは」。

アビンとシヨンが話しているとアンが彼の袖を引いて言った。「窓の外、奥の方で誰かが此方を見えています」。

その言葉にアビンは確認するようにアンの身振りで示された、窓越しに奥の方を見たが、誰かいるが此方を観察しているようには見えなかった。そこで、アビンは言った

「俺には此方を見ているようには見えないが、というより俺にはハッキリそう見えない。これでも視力は良いが、七十メートル先の窓の向こう側は反射もあるので肉眼で見るのは難しい」。

するとシヨンがアンについて説明した。「アビンさん。以前にも話しましたが、アンは事故で体の多くがサイバネティック技術で造られているので、視力も普通の人のお十数倍いいのです。だから、ここから向こうの窓の反対側まで見えるのです」。

その説明はアビンをアンの今、置かれている状況を改めて認知させるものとなった。

それに、今この時点でそれをスッパリ忘れていたのも、自身の至らなき痛感するのだった。それにしても誰が、此方を見ていたのだろうか。今すぐ行っても、相手を見つけることは出来ないだろう。

「その人物は、まだ此方を見ているかい」。

アビンはアンに確認するように尋ねる。するとアンは首を振って答えた。

「いいえ。もういません」。

その答えにアビンは、気のせいかとも思ったが、あることに気がつきアンに尋ねた。

「アン。向こうがこっちを見ていたと、どうして分かるんだい。公園を眺めていたのかも知れないじゃないか」。

すると彼女はこう答えた。

「いいえ。確かに此方を見えていました。何か分かりませんが双眼鏡みたいなもので此方を真っ直ぐに見ていたからです」。

その答えにアビンは、それならありうると思えた。そして尋ねた。

「その人物は誰かは分かる」。

「いいえ。女性みたいだということしか分かりません。窓の反射が強くて、それに上半身は影に掛かっていましたので、それで暗くて分かりませんでした。ただ、双眼鏡みたいなのは、レンズが少し離れて光っていたのものですからその様に感じて」。

アンはアビンの問いに少し弱々しく答えるのだった。その様子からして、自身が持てないのだろうとアビンは思った。確かに暗がりでは、物がそれ程ハッキリはしないし、反射もあればそれはなおさらだ。かえってその人物は、それを利用したとも考えられる。けれど女性ということは確かなのだろうか、と考え尋ねた。

「アン。どうして女性だと分かるんだい」。

「それは、女性の服装だったからです。スカートとかバックや上着のボタンの位置とか」。

アビンはその答えに感心して言った。

「よくそこまで、見えたね。ションはどうだった」。

するとションは何故か少し考えてから答えた。

「わたしも女性かなとは思いました。わたしの場合は人の影かたちの雰囲気からそう見たのですが、光って見えたのは双眼鏡だったのですね」。

その答えにアビンはこの中で一番目の悪いのは自分かと思えた。それからションの答えから光っていた物を何と思っていたのか聞きたい気分だったが、それを押し殺して言った。

「ということは、向こうにいる女性が双眼鏡を使って、此方を見ていたということだな。目的は何だろうな」。

そうアビンが言うとションが冷たく言った。

「それは、アビンさんが考える仕事でしょう」。

ごもつともアビンは思うのだった。

そしてこの時、アビンの脳裏には、ブラックの言ったもう一人いる、後ろに気をつけるとの言葉が浮かんでいた。確かに今までそれ程気にならなかった言葉だったが、今の出来事は、それを意識すべき事を示唆する。たとえそれがアンの気のせいだったとしても、気を配る必要があることは確かだと、自身の気を引き締めた。

そこで彼は、二人に彼女たちの部屋の前で、別れを告げてから公園のそれも三人を見ているという女性のいた場所まで行った。そこは公園をぐるりと回る通路で、公園に面している通路がある階層の一番下に位置しており、所々は樹木で視界を遮られてしまっているが、その場所は数少ない、公園全体をある程度見渡せる場所で、窓の前に立てば開けていた。そして、思った。確かに視界に隠れる所が少ないと。

それから周りを見渡してカメラを確認する。予想道理にカメラの視界の影に隠れている場所だった。此処に居た人物はその事を知っていたのだろうか、それとも偶然なのか船長に確認することにした。それはセキュリティー上か、プライバシーの問題があつてそうなっているのか聞きたかったからだ。

もしプライバシー上の問題ならその点について注意事項があるはずだからだ。そう考えてからアビンはブリッジに向かった。

暫くしてブリッジに入ると、デュパルクはおらずマティエリが指揮席に着いていたが、ホルストが彼と話していた。

突然、入ってきたアビンに気がつきホルストが尋ねてきた。

「どうしたんだ。アビン君」。

「あついや、そのう」。

アビンが答えに苦慮しているのを見て、ホルストは続けて言った。

「船長かい。彼なら今は船長室だが、今はお客さんがいるから待たされると思うが、此処で待つかい。それとも、また後で来るかい」。

その言葉を聞いてアビンは、疑問を尋ねることにした。

「少しお訪ねしたいことがあります、宜しいですか」。

するとホルストは、マティエリの方に振り返って尋ねる。

「マティエリ副長。あんたが答えるかい。それとも俺が答えた方が良いか」。

するとマティエリは、こう言った。

「それは内容にもよるな、何せ今回のことでの修理や構造に関してはあんたの方がよく知ってるだろう。だから、何を尋ねたいのかな君は」。

その言葉に促されるようにアビンは言った。

「分かりました。知っておられる方が、答えて頂ければと思いますが、自然公園の外周の一階通路にセキュリティーカメラの死角が存在しますか」。

その問いにマティエリが答えた。

「いや、無いはずだが、ホルストは何か聴いてるか」。

するとホルストは残念そうに言った。

「実は二日前に確認したときに、死角がいくつかあったな。それから二つほど故障のために撤去されていることが、記録にあったが、それがどうした」。

そこでアビンは先程あった出来事を手短かに話した。

その話を聞いてホルストはマティエリに尋ねる。

「何か目的があって死角になってるのか聞いてるか」。

「いや、何も。もしかしたら設置ミスか」。

そう答えてからマティエリは、思い当たることがあり少し考えてから話し始めた。

「そう言えば今回の航行で、気になることがあった。それは監視カメラが幾つか上の指しで取り除かれているのだ。お陰で今回ミユラの事件で、その発見と状況確認が出来ず、多数の犠牲者を出すことになって、うちの船長はカンカンに怒ってる。どれだけのセキュリティーカメラが撤去されたかは、倉庫を見れば分かるが、何処をどれだけやったのかはハッキリしていない。それに併せて移動もなされているようだ。これはベテランの警備員の証言だ。たぶん確かだろう。それが原因かもしれない」。

その話しにアビンは少し納得したが、気になる点を尋ねた。

「では、その事を、つまりその場所を知っている人物は誰でしょうか」。

その問いにホルストが言った。

「それは、外した連中とそれを指示した人物だ。なにせ船長や乗員が知らないのだから、確認できないことで始めてその場所が分かったのだから、そうだろう副長」。

その問いかけに、マティエリは面目無さそうに「ああ」とだけ答えた。

それでアビンは尋ねてみた。

「つまりその情報を持っている人物が、トレッカーと話している俺たちを監視していたということなのでしょうか」。

「そうなるな」。

ホルストはアビンの言葉に同意したが、マティエリは考えたくないのか、自分には分からないという素振りをするだけだった。

そこでアビンはブラックに忠告された言葉を使った。

「つまり、もう一人いるということですね。それも女性です」。

その言葉はホルストには予想外な答えだった。そもそも関係者として上がっているのは全て男性だったし、例外として上がっていたのは、マクレガーとビットンブルーで二人とも白判定だった。

そこでホルストはアビンを誘って言った。

「少し頭を冷やしに、ティールームでも行くか」。

それは、話されていることの内容を理解できずに、首を傾げているマティエリに、余計な心配を掛けまいとの配慮だった。

「ええいいですよ。おごってくださいるのですか」。

如何にも現金な素振りをしてアビンは答えるのだった。

「分かった。おごってやる」。

そうホルストが言うと、ふたりしてブリッジを出て行った。

二人がティールームに入ると、何故かアンとシヨンがいてミュラの幼獣にミルクをやっていたのであった。

そして、入ってきた彼らには気がつかない様だった。それはミュラの幼獣に目が奪われてというか、そのもふもふした愛らしさに数人の乗客と共に戯れていたのだからだ。けれどその乗客をよくよく見れば、プロックフェルとラッセンにブルッフだった。

その様子を見てホルストは、此処はほっとしておこうと思ったのかアビンにこう言った。

「俺たちは奥の席に行こう」。

その言葉に促されるようにアビンは奥に進んだ。その様子をシヨンは視界の端で捉えてはいたが、気が付かない振りをしながらプロックフェルらにミュラの幼獣を抱かせるのだった。その事にホルストは、気が付いていたがシヨンの配慮だと思いそのまま奥に進んだ。

二人は奥の席に着くと直ぐにウエイトレスが近づいてきて言った。

「いらっしゃいませ。注文は如何しますか」。

するとホルストは、彼女に直ぐに退散して欲しかったのか、即答した。

「俺はブレンドコーヒー、そして彼も同じ物で。いいかなアビン君」。

その言葉に釣られるようにアビンは軽く肯く。すると彼女は笑顔でこう言った。

「ブレンド二つですね。では少しお待ちください」。

それからシートを置いて去って行った。

ホルストはウエイトレスが見えなくなったのを確認してからアビンに言った。

「先程の、君の発言についてもう少し詳しく聞きたいものなんだが」。

「どの発言でしょうか」。

アビンは思い当たらずはぐらかしてみた。

するとホルストは至って真面目そうに、もう一度言葉を変えて尋ねた。

「さっきもう一人いる、と言っていたな。その点について聞きたいのだが、いいかな」

。そう言われて、あのことかと思い出して答えた。

「確かに言いました。けれどその事は予め織り込み済みなものではありませんか」。

するとホルストは腕組みしながら言う。

「確かに、もう一人二人いてもおかしくは無い。だが、先程の君の発言は、まったく別のところにもう一人いる、というような発言に聞こえたのだが、違うのか」。

その問いにアビンは、確かに別の誰かが関わっているような気がして、言ってしまったことを反省するも、それについて答えることにした。

「確かにそんな気がしたので、つい口に出てしまったのですが、申し訳ありません。ただ、考えてみてください。乗客で監視カメラの位置を気にする人物って誰でしょう。それに、今回の航行で予め上からの指示と言うことで、カメラの撤去及び移動があったということです。つまり何処が無くて何処に移動したかを指示し知っている人物がいるという事になります。そうですね」。

「確かにそうだな。けれど、整備員とか連絡を受けて作業した関係者なら知っているはずだ」。

「それはそうでしょう。けれどそれらの人たちは、この船に乗る人たちでしょうか」。

アビンは船の整備に関して、よく知らないのであえてホルストに尋ねるのだった。

「確か、この船は今回一度ドックで調整が行われてからスペースポートに係留されている。そして記録ではドックにて取り外しと調整が行われていたはずだ。普通は係留中にはその様なことはなされない」。

ホルストはアビンの問いに持っていた、携帯メモボードを見ながら答える。

「すると、調整した人たちはこの船に乗り込んでいるということはありませんか」。

アビンはあえて尋ねる。
「それは、あり得るが可能性はかなり低い。それに、整備員の誰かが乗っているという記録も無い」。

メモボードを見ながらホルストは答えながら、確かに変だと思えた。それはカメラが無いまたは死角がある様に変更するわざとらしさ、何かを隠したいという意図がありありと分かる。そこでこう言った。

「アビン君、君はどのような状況から誰かが意図的にしていると考えてるのかな」。

その問いにアビンはこう答えるのだった。
「先ず、ミュラの事件時にコンテナのあるデッキとその周りのカメラが撤去されていた。今はホルストさん達が緊急に取り付けてくださいましたが、それから、移動され死角のある状況を現在も知りうる人物がいて、それを利用して此方の動きを監視しています。それはわたし達だけで無く、テログループもです。この理由は分かりませんが、わたし達が話していた相手はトレッカーです。その状況を何故、監視するように見ていたのでしょうか」。

その言葉にホルストは当然と思われる質問をする。
「その人物は、ただ公園を見ていたに過ぎないのでは、と考えないのか」。

その問いにアビンは否定的な返答をする。
「確かに、そう考えることも出来ますが、双眼鏡でそれも影に隠れて此方からわざわざ見えにくくなるような位置に立つでしょうか。バードウォッチングするのならもっと窓によるでしょうし、此方が気が付いた素振りをしたときに直ぐに立ち去るでしょうか。どちらかという怪しまれないように、そのままその場において、此方が側に行ったときに、どんな鳥が見えますかと話しかけられる状況を造っておくのではないのでしょうか。考えすぎかも知れませんが」。

その様に話す、アビンの言葉をホルストは真面目に聞いてから答えた。

「いや、そうとも限らない。相手が見ていた位置までどの位掛かった」。

「三分ほどです」。

アビンが即答すると、ホルストは難しそうな顔をして言った。
「微妙だな。飽きて帰ったのかもしれないし、相手は顔を見られたくなく立ち去ったとも考えられる。その位置をこの図の何処だ」。

そう言ってメモボードに自然公園とその周りの図を出してアビンに見せた。

そこでアビンは図のある部分をさして「此処です」と言った。

「確かなのかい」。

ホルストは確認するように尋ねる。

「確かです。ここは他に抜ける通路はありませんし、片方の通路はカメラの無いですから」。

そう答えてアビンは、はたと気が付いた。カメラに写ること無く立ち去るには、此処の通路から階段を降りるか上るしか無いが、その為には四十メートルの通路を走らなければ、アビンに見咎められてしまう。反対はアビンとはち合わせになる。

その様にアビンが考えているとホルストが言った。

「気が付いたのか。ここの作りは長い通路が特徴でカメラは両端だ、そしてそれは移動されており役目を果たしていない。そこでここから離れるには、君が来る前に直ぐに移動しなければならぬから、どうやら君の考えは当たりのようだ。確かに別のもう一人がいるという事になる」。

そう言ってから、ホルストはウエイトレスが近づいてくるのを見て取り言った。

「すこしコーヒーを味わってから話を進めようじゃないかな」。

そう話すとホルストは、ウエイトレスが置いて行ったコーヒーを一口飲んだ。

その様子を眺めてからアビンもカップを取り、同じように一口飲んだ。

そしてカップを両手で覆うようにして、コーヒーの熱が伝わるのを感じながら尋ねた。

「先程の話しぶりでは、既にその場所が死角になっているのをご存知だったのではありませんか」。

その問いにホルストはコーヒーを飲みながらアビンを見た。その様子は何か自信の無さそうな若者が、先生に相談を持ちかけているようで、からかいたくなかったが、そこは押さえて答えた。

「確かに、その事は知っていた。というよりカメラを元に戻すのを手伝ったときに、設

置函面との食い違いを見つけたのさ。そこで、此処は知らんぷりを決め込んだのさ。任事として請け負ったのは外されたカメラを元に戻す事で、変更されたのを元に戻すでは無かったからな、まあ、正直な話し実際には迷ったのだが、何か意図があるように感じられたので、そのままにして様子を見ることにしたのさ。そして君の話だ。どうやら向こうは気付かれていますと考へて行動したのだろ。どうやらこの件に関しては素人のようだ。普通は警戒してその場所を使用しないし、当然元に戻されたと思うからな。それにしてもこの場所の位置の変更を指示した人物は、かなり熟知した人物のようだ。素人目には変更が分からないようにしてある」。

ホルストの言葉にアビンは言った。

「俺は気が付きましたが」。

ホルストは肯きながら言った。

「そうだろう。君はカメラの何処を見て死角になっていると確信したのかな」。

アビンは少し思ひ出して言った。

「確か、向きは通路を向いていましたが、中のレンズの方向は窓向きでした。そしてカメラの位置が窓方向に少し移動し通路から少し離れていたの、通路と窓の奥は死角でした」。

するとホルストが笑みを湛えながら言った。

「いい観察だ。長生きできるぞ」。

その言葉は褒め言葉であり、危険を予め察知する点での観察眼と洞察力があることを示唆するものだった。それから続けてこう言った。

「素人はそこまで見ない。いや普通の乗客は、そこまで関心を示さないだろう。当然、その不審人物もそうだった可能性があるが、死角であることは確信していた。そうで無ければ易々と逃げ果せなかつただろう」。

アビンはホルストの言葉を聞いてから、もう一つの情報を告げた。

「それから、その人物は女性らしいのです。アンの話す所によると、俺とシオンには人がいるのは見えたのですが、影と光の関係でよく見えませんでした」。

そう言ったアビンの言葉にホルストは、少し戸惑ったが静かに言った。

「アビン君。君はアンからその事を聞いたのだね。彼女の目が人よりもよく見えるということも」。

「はい。ですが人よりもよく見えることはシオンから聞きました」。

そうアビンはホルストの問いに答える。するとホルストは、ため息をついてから言った。

「まあ、しょうが無いが君はアンの体については知っているね」。

「はい」。

アビンは短く答えた。

「分かった。その事はあまり人には口外しないように。それから、彼女がそう言ったのなら確かに女性だったのだろう。この事で君はどのように思う」。

ホルストは確認されたのが女性だ、ということに対するアビンの感想を求めるのだった。

「それは、この状況を作り出した。いえ、様々な手筈を整えた人物がいると思います。その人物は行動力やコネも資金も権力もあると考えられます。ですが、その女性が、その人物とは考えにくいです」。

その答えるアビンにホルストは促すように言う。

「ほう、そう考えられる理由は何かな」。

「たぶんですが、この場にいるのはリスクが大きいのと、トレッカーという信頼できる部下を送っているのですから、自身が此処に居る必要も無いと思います。ただ、万が一失敗したときのためか、事の同行の連絡係として、または、監視役としてか気づかれない人物を送って寄こしたのかも知れません。その人物は此方が調べてもおいそれと関係が露見しない者となります」。

そう答えるアビンの表情を見てホルストは、一応合格かなと思った。それからこう言った。

「確かに、いい推理だ。だが、状況証拠による憶測の域を出ないものでも有る。これは、分かるな。そこで、それを確証できる様にするためには、もう少し調べて見る必要があるな。何が足りないかは自分で考へてくれ。俺としては他にやらなければならないことが沢山ある。部下もいることだし、そちらの事に顔を突っ込むわけにもゆかない。責任があるからな。仕事で此処に居るので無く単独行動だったら手伝ってやれるのだが」。

今は、出来ない。君たちでやってくれ。それと、助けが必要などときには言ってくれ、出来たら助ける」。

アビンはホルストの言いたいことは分かった。それは君の仕事だろ、と遠回しに言っているのだ。彼らは今、成り行き上手を貸してくれている状況になっているだけなのだ。それで、アビンは答えた。

「ありがとうございます。考えてみます」。素っ気ない答えだが、そう言うってからアビンは、ホルストが自分の考えを纏めるのを導くように問いかけていたのに気が付いた。そして、アビンは見上げるようにしてホルストを見たが、それに気が付いたのかホルストは素っ気ない素振りをして、わざと知らんぷりを決め込んでアビンの言葉を遮ったのだった。

そして、コーヒーを一気に飲み干すと、直ぐに立ち上がり言った。「勘定は、俺が持つから君はゆっくりして行けば良い」。

その言葉に答えようとするアビンを無視するように、ホルストは直ぐに立ち去った。後に残されたアビンは、半ば立ち上がろうとしていた状態から、改めて席に座り直して背もたれに寄りかかりながら天井を見上げて考えた。

何が抜けているのか、見落としている物は何か、漠然とした中、ブラックが言っていたもう一人いるとの言葉に背中に気をつけるようにの意味を問いながら今日の出来事を思い返してみた。

流石にぼんやりしたまま考えていたので周りの状況が分からなかったが、どこかで聞き覚えのある声で、ハッと我に返った。

その声はミュラーだった。アビンはその声のする方を見た。どうやら向こうはアビンには気が付いていないようだった。それに、ふと不審に思えるのだった。熱心に話を聞いている人物はホルストの部下のヘンツェだった。なぜという思いが走った。知り合い、それも何かの相談と思えるように、顔を近づけてヒソヒソと話をしているのだった。

その話し合う様子は、真剣そのものの表情が覗え、無いにやら重要な話をしているようだった。どのような内容に話なのか興味はあったが、その様子から察してアビンは近づくと話は止められるだろう、と容易に想像出来た。

さて、どうしたものかと彼が迷っていると、いつの間にかアンが傍らに立っていた。「こんにちわ、アビンさん、此方にいらしてたんですか。声を掛けていただければ、お誘いしましたのに。今、シヨンとプロックフェルさんにラッセンさん、ブルッフさんもいらしてお茶をしてたんですよ。一緒に如何ですか」。

アビンを透かさず誘うように、アンは話すのだった。その言葉に彼は、ミュラーとヘンツェの話している様子が気になっていた、しかし此処は彼女の誘いに乗ることにした。どうせ話しを聞かせて貰えそうも無いのに、近づいても彼らの気を阻害するだけだから、キツパリ諦めることにした。

「それでは、混ぜて貰いましょうか」。そう言って立ち上がった。実際には女性ばかりの中に混じるのは、どうも苦手なのだが、此処は慣れるしかないと意を決したのだった。

それからアビンはアンに手を引っ張られて、シヨン達のテーブルに向かうのだった。彼自身は、半ば断頭台にひかれて行く気分だったが。

けれど諦めの境地というのか、彼女らのテーブルに着くと、どこから持ってきたのか本人にも分からない言葉が口から出た。

「これはこれは、お嬢さん方。おそろいでお茶会ですか。それとも何か面白い話しでもあったのでしょうか」。

すると彼女ら全員目がアビンを見たのであった。アビンは何か不味いことを言ってしまったのだろうか、と考えた。確かに普段使わない様な歯の浮いた、言い回しをしてしまったのは事実だった。

するとブルッフが言った。「アビン君、フィアンセと一緒に登場しておいて、その台詞は無いじゃない」。

追い打ちを掛けるようにラッセンが言う。「そうね。その話し是非聞きたいわ。その若さで既に身を固める覚悟があるなんて勇者ね」。

その言葉に意味は二つあった。それは、その言葉通り若くしてフィアンセを決めて将来を拘束してしまう勇氣と、提督のお嬢さんに手を出したことに対するものだった。

「此処は何とか切り抜けようと考えたが、アンはしっかりアビンの手を大事そうに握っているし、シヨンに何とか助けて貰おうと、彼女を見たのだがまったく関心が無いのか、ミュラの幼獣を巧みにあやしては可愛がっているのだった。

アビンはここに来て諦めて言った。「俺としてはアンとの関係を大事にしたいと思っていた矢先、提督に詰め寄られて娘を拐かしておいて何も責任をとらずに済むと考えるのか、と詰め寄られてしまい。最終的には責任を取れと将来の約束をさせられました。悪い気はしないのですが、提督に押し切られたのは不徳のいたす所です。もう少しゆっくりと互いを知るようにしたかったのですが」。

そう答えながら提督には、悪者になっていただき此処を何とか切り抜けようと取り繕うアビンだった。ただ、アンには辛くなる言葉は、話さないようにしたので結果、提督が悪者になるような話をしたのだった。

すると女性陣は、如何にもつまらないわ。そうにこう言った。「なあんだ。シヨンから聞いたのと同じ内容じゃ無い。本人の口からならもっと熱い告白など聞けるかと思ったに、つまらないわ」。

その言葉にアビンは、いったい自分に何を期待していたのだろうと思ったが、彼の手をしっかりと握るアンの事を考えると、どうやら彼女の様子から妄想が膨らんでいったのだろう事は容易に想像出来た。

「ご期待に添えなくて、申し訳ない。おもしろみの欠ける人物で」。

ある意味自虐的に受け流すアビンだった。

するとブルッフが言った。「まあ、この前からの様子で、何となくそうかなと思っていたの。でもさっきシヨンから聞いてやっぱりと思ったけど、第一印象からして激しく燃え上がっているようには見えなかったのよね。どちらかという互いに好意を抱いている程度」。

その言葉にラッセンが付け足した。「でもシヨンの話を聞いたとき、一番激しい恋の情景を語っていたのは貴方でしょう」

。「まあ、そうだけど。貴方だって提督に談判するなんて情熱的よねと言ってたじゃない」。

と応酬するブルッフだった。

その二人とは別にプロックフェルは言った。

「だから、本人に聞くのが一番だと言ったじゃない」。

彼女の言葉でアビンは、この女性達の中に連れてこられたのだと確信した。それからアビンは暫くの間、女性達からあれやこれや詮索の混じった質問を受け、それをアンを気遣いながら何とか交わすのだった。当然、提督には悪者になって貰ったのだが、都合良く提督には女たらしの噂があったので、それが言い隠れ蓑にはなったのだった。

たぶん今頃は、沢山のくしゃみをしているのではアビンは思っていた。

それにしても、女性達の詰問の最中にアンは一回もアビンの手を反さなかったのが、不思議だった。後で聞いた話だと、自分が連れてきたせいで彼が質問攻めに遭い、彼女自身どうしたものかと気が動転して、手を握ったままになってしまったらしい。

それから彼女らは一通り質問して飽きたのか、別の話に変わっていった。

この様な場合、話はあらぬ方向に飛ぶことは珍しくなく、あらぬ噂に行き着くのだ。アビン自身はじぶんの話しに振られなくなることに安堵し、その場は適当に話を合わせることにしたのだった。

そのあらぬ噂とは、ランカスター公爵つまりオクトーバー大学の考古学教授ランカスターの暗殺に關してだった。実際その話は、既に此処に居る全員は知っているのだが、その話が、変な噂として一人歩きしていることだった。

それはこの船にランカスターの暗殺を目論む人物が乗船し、その機会を狙っているということだった。これは正解とアビンは思った。それにミュラの事件もその人物の仕業で、計画的に為されたということらしい。これは当事者の不手際による事故だが、とアビンは思いの中で結論づけていた。その失敗に業を煮やした暗殺者は、この船諸共に爆発させる計画を始めて、それを知った人物を次々と消していつているらしいが、これも爆発物を押収され手詰まりになり直接手を下すことにしたらしいとの話だった、爆発物と人が消えているのはホルストさん達の仕業で、人は死んではおらず留置されているに過ぎないのだが、よくその様な噂が、いや、ある程度事実に即した噂が広がっている

のが不思議だった。

その事実として各部屋が調査されたのが、何よりの証拠だという。本来の目的は備品集めだったのだが、とんだ勘違いをされたものだ、とアビンは思った。

それで、気になったのでアビンはプロックフェルに尋ねた。

「その噂は誰から聞いたのかい」。

すると彼女を含めて三人がいった。

「誰彼というのでは無く、みんな知ってますよ。だから早く下船しようと手続きを急ぐ方が増えてるんです」。

「わたしなんか、手続きしている関係上。よく聞かされるんです。尋ねるとみんな言ってるということなんです」。

そう言ったのは、手続きの代行を行っているブルッフで、如何にも不満そうに言った。

その言葉を聞いてアビンは思った。こんなに早くそれも、関係者以外知るよしも無い事が噂として船内に広まるだろうか、というものだった。それは考えにくかった。船の運航上、乗客の安全を考えてパニックが起りそうなことは控えるのが常だし、情報の管理も依然しっかりしている。そこで、考えられるのは、誰かが故意に情報を漏らしているということだ。

アビンはホルストさんの部下はあり得ないと思った。乗務員もこの点では除外だろう、爆発物に関する情報は伝えてないはずだ。トレッカーはどうだろう。確かに敵側だしこの手を使えば、障害となる一般人を減らすことが出来るが、そこまで出来るだろうか。人員の減少は偶発的な事故として、まだ彼らは認識しているはずだ。ミュラーはどうだろう。今奥でヘンツェと内密の話をしているが、噂を広めている時間は無いはずだ。では、誰という事になる。

広まってしまった噂の元を辿るのは大変だ。当の本人も話すときには、誰かから聞いた話だけど、この船には既に乗船していない人物の名前を使えばさらに難しくなり、いけないことがかえって強力な証となる。

この状況を作り出した人物は、かなりきれいな人物かも知れず、当然此方がノーマーク人物である可能性が高い。

たぶん、カメラの状態を知っている人物、巧妙に身を潜めている人物が、その噂を広めている人物だろう。この場合、この様に考えると良くは無いが、女性が一番適任でそれも、女性達の会話の中で話される噂として語られるのが効果的だ。

ここに来てアビンは、もう一人いると告げられた人物は、女性だと確信するようになっていた。そう考えたとき、アビンは傍らで話をしているアンを見て胸が痛かった。

「それで、アビンさん」。

その言葉に彼は、思い巡らしていた事柄から引き戻された。

「ごめん。何の話だったっけ」。

アビンは正直に、他のことに思いが向いていたことを認めるように言った。

「だから、噂よ。噂。」

「一人歩きしている噂のことだっけ」。

アビンは気の無い尋ね方をした。

するとラッセンが、呆れた様な素振りをしてして言った。

「違うわよ。ミュラーとうちのヘンツェが、奥で何かヒソヒソと話してるでしょう。何か企んでるんじゃないかって話をしていたのよ」。

どうやら話は既に、別の話題に変わっていたのだった。アビンはついて行けそうも無いと思いながら尋ねるのだった。

「あの二人が、ああして話してるが気になるのかい。意外と同郷で昔話とかしてるんじゃないかな」。

アビンは適当に濁すように言った。すると、何故かそれに食いつくようにブルッフが言った。

「アビン君は勘が鋭い。二人とも帝国の出身だよ。それにヘンツェも元軍の特殊部隊にいたんだから、以外と同じ釜の飯を食べた何とやらかもね」。

その言葉にアビンはそうだったのか、と思いながら、その様な経歴のヘンツェさんが、今はホルストさんの下で働いてるのがが興味があった。

するとションがミュラの幼獣をあやしなながら、静かに言った。

「皆さん。あまり人のことを詮索するのは良くないと思いますよ。それにヘンツェさんは職場の同僚でしょう。よく知ってるんじゃないですか、もし疑いたくなる事があれ

「本人に聞けば良いことです。違いますか」。

そこ言葉に三人は、「それもそうね」と言って静かになった。

その様子を見てアビンは、ションが意外にも他人の上に立つ資質を見たような気がした。つまり今までは、周りを振り回すような娘と見ていたのだった。

そして静かになったところで、アンが言った。

「ところで、皆様の明日の予定はどうなっていますか。提督からこの様に言付かっています。わたしとアビンさんにション様は親族としてインタビューに同席する事になっていきますが、ブルッフさんはメイソンさんと事務局で待機でしたね。それからプロックフェルさんとラッセンさんはホルストさんと立ち会いとして会場に入ってください。他の方々も指示した所で待機となっています。互いの連絡は何時もの手筈だということですよ。以上ですが質問はありますか」。

すると伝えられたことに対して、全員が了承の意思表示として、肩の辺りまで右手を挙げた。アンのこの発言は事務的なもので、予め伝えられていたことの確認を取っただけのようだった。そしてアビンは思った。今は彼女は提督の私設秘書だと。

それから、アビンは奥の方を見ると、二人は既に込み入った話を終えたのだろう、ヘンツェが立ち上がって何かミュラーに話をしているようだった。

そして、話が付いたのか一人その場から立ち去っていった。たぶん、彼は此方に気が付いていたはずと、思ったが、挨拶をして行かなかったを見て、詮索されたくない事だったのかも知れないとアビンは思った。

するとションがアビンの様子に気が付き言った。

「残念ですね。アビンさん。ヘンツェさんは気が付いていたのに此方に来ませんでしたね。誰かに会いたくなかったのかしら」。

「俺は、それ程面識があるわけで無いし、不仲になるほども知り合っていないのだが」。

アビンは気乗りしない言い方をしなながら答えた。

すると、ブルッフが言った。

「それって、わたしかも知れません。今朝の書類の手続きで少し揉めたので、機嫌を悪くしたのかも知れません」。

「どんなトラブルなの」。

ションがそれとなく尋ねるのだった。

「それは、チーフから嚴重に保管するように指示されていた。搜索で発見されていた密輸品の武器です。昔風に言えば探知機に引っかかり難い構造のものです。小火器に属するもので、護身用が主なものと考えられますが、殺傷能力が高いリコックガン（反動緩和銃の総称）です。それを少しの間借用できないかと、警備に使うということなんです。チーフの許可が無かったので書類を受理しませんでした。それで少し言い合いになったんです」。

少し疲れたように答えるブルッフにアビンは、堅い人物なのかなと思うのだった。ところで、ションはその答えにこう言った。

「でも、彼なら書類を出さずに、黙って持ち出すことも可能ではありませんか。後で原状に戻せば、殆ど分からないと思いますが、違います」。

ブルッフはションの最後の問いに、ハツとした表情をして言った。

「確かに、あの人なら可能です。そう言えば、何時も事後承諾が多い方ですが、今回は事前に書類を出すなん何か変な感じがします」。

その答えにアビンは裏で何か起こっているのでは、それにミュラーも関わっているとの思いが過ぎた。

その様に考えているとションがアビンに告げるのだった。

「アビンさん。今日の夕食を伯父様が招待したいそうです」。

「俺をか」。

アビンは何故のとの言葉を発したが、否定は出来なかった。

「是非来て頂きたいとのことです。当然ですが、アンとわたしとビットンブルー女史が同席なさいますが、必ず来てください。場所はこの船のAエリアのレストランです。時間は船内時間で六時ということです」。

ションは既に同席との考えのもとに話しているのだった。それに対してアビンは言った。

「拒否件は認められないのか」。

「はい」。

即答^{すば}だった。それは予想できたが、気の滅入ることだった。彼は堅苦しいと思うと逃げ出したくなるのだ。するとそんなアビンを察してか、シヨンは提案した。

「アンと一緒に迎えに上がりましょうか」。

それはさらに彼の気を重くするのだった。そして、周りが目に入ると彼女たちが、おもしろがっているように見えた。

そこでアビンは意を決して言った。

「分かりました。お招き通りに、ご一緒させていただきます」。

その言葉を聞いて、皆は歓声を上げるのだった。ここに来て、自分は何か良いように玩具にされた気分だった。

それはどうあれアビンは提督の夕食の招待を承諾したのだった。

その後この集まりはお開きとなり、それぞれ席を離れて行った。

最後にアビンはアンから「お待ちしております」、と告げられてからその場を去った

。

提督のインタビュー

ふとアビンは天井を見上げていた。

それはいつもより早く目が覚めてしまった故に、どうしたものかと考えているからだ。それに、昨日の夕食の事を思い出して、ウンザリしていたのだった。提督と向かい合わせで食事をしたものだから、終始質問が自分に回ってきて、その度に冷や汗をかきっぱなしで、何を食べたのか思い出せない始末だ。

たぶん美味しい食事だったのだろ、同席したアンやシヨンなどの顔を見れば分かるが、精神的圧力で味わうどころで無かった。

提督は君は将来は考古学の研究にいそしむのかね、とかアンとの新居は何処にするのか、聞かれたが実際何と答えたことすら覚えていない。

たぶん提督には情けない男と映っていたに違いない。今思い出しても情けなく、自分を殴りたい気分だった。そんな思いが募ってか、目が覚めてから寝ようとしてもかえって寝付けない状態になってしまった。

それに今考えても、あの時に何と答えたのか思い出せない。気まずい答えをしてなければ良いのだが、それにこの事は教授にも伝わるだろう。そうすると今度は発掘中に、どのような愚痴を聞かされるか分かったものでない。

そう考えると今から頭が痛い。胃が痛い。

その時、ふとアビンは思った。このまま消えるか、それは無理だ妙な手配が回りそう。諜報部からは任務放棄として手配されるだろう。

そう考えてから、アビンは諦めてベッドから飛び起きた。

時刻は六時二十分だった。

彼自身、諦めが良いのかこうなると事は早い。ぐだぐだ考えるのは辞めて、着替え始めた。先日、食事の席で大学の学生らしい服装をしてくれと告げられていた。その言葉に内心ホッとした自分が情けなかったが、服装にそれ程に気を遣わなくて良いのが嬉しかった。

ただ、アンやシヨンから駄目出しがでないように願いながら身支度を調えるのだった。

それから彼が部屋を出たのは七時より少し前だったが、部屋から十歩も歩かないうちにアンとシヨンに捕まったのだった。

「アビンさんこれから食事ですか」。

アンが尋ねた。それに答えるようにアビンは言った。

「ああ、そうなんだが、どうかしのか」。

すると今度はシヨンが言った。

「では、わたし達とご一緒して頂けませんか。提督はいませんから大丈夫ですよ」。

その言葉を聞いてアビンは昨日の醜態をスッカリ観察された事を悟った。そして、彼女らなりに、気を遣って、食事の誘いに来てくれたようだった。

「分かった。お伴します」。

そう答えてしまったのは、既に自分が、見透かされていることを認めての発言だった。

アビン達はタバを訪れた同じレストランに入ったが、予約を入れているわけでも無いので特別席ではなく標準のテーブルに案内された。しかし、AエリアのテーブルはBとはやはり違った。それでも昨日よりは気楽に座れた。

席に着くとシヨンがウェイターに手短かに注文をしてから、アビンの方を向いて言った。

「昨晚はお疲れ様でした。伯父様のワガママに付き合ってくださいまして、感謝いたします。なにせ最近、食事の相手は高官や取り巻き達が殆どで、アビンさんの様な若者と話すことが殆ど無くなって嘆いておられました。昨日は結構満足しておられました。かなり不躰な事を度々尋ねてさぞやお疲れだったでしょう。でも満足のゆく答えを頂きましてアンも伯父様も喜んでいきます」。

その言葉を聞いたアビンは、ものすごく嫌な感じがした。まさか変なことを口走って

いたのではと心配でならなかったが、シヨンの話し方からして失礼はなかったようで安心したが、新たな予想で不安がこみ上げてきた。

「俺は、何と言っていた」。

そう口から出た言葉は、その不安を表していた。

「いえ、助教授として経験を積んだらアンとの結婚をしたいと申し出をされたではありませんか」。

シヨンは少し驚きを示すように答えるのだった。その答えにアビンは、愕然とした。何を舞い上がってとんでもない約束をしてしまったのだろう、と彼は思った。そして、その事は確かに、アンと提督を喜ばせたに違いないとの思えた。けれどそれでほんとに良いのか、との思いもあった。

「すまない。正直あまり良く覚えていない」。

アビンは正直に謝罪した。それと同時にアンの寂しそうな顔が浮かんだ。

「そうですね。舞い上がってましたから、見ていてよく分かりました。結構、伯父様にかからかわれていました」。

シヨンはアビンの言葉を受けて、物わかりの良い答えをするのだった。

それは、アビンにとって気を楽にさせるものだったが、かといって話した事が無かったことになるわけでも無い。彼はシヨンの顔色を覗うように言った。

「具体的に俺はどうすれば良い」。

するとシヨンは少しため息をついて言った。

「しょうが無いですね。そんなことでは伯父様にいいように言いくるめられてしまいますよ。でも、先ずは二人とも若いのだから長い目で見た方が良いとのことでした。ただし、よほどのことが無い限りは結婚して貰うとのこと。最初の要望は、アンがノースハイ卒業までに自活するようにとのことでした」。

その言葉でアビンは猶予は最低三年ということかと思った。この話の間、アンはニコニコとアビンを見ているのだった。

「これからは、もう少し上の人と話すのに慣れないとダメですね」。

シヨンは意気消沈しているアビンに告げるのだった。

「気にしないでください。わたしは何時までも待ちますから」。

アンはアビンを元気づける為にそう言ってくれた。それはアビンにも分かったが、やはり気が重い物だった。確かに助教授に抜擢されたとしても、本来は長い時間を掛けて、教授の下で経験を積んで段階的に上がって行くものを、一足飛びに駆け上がるのは周りの目も厳しいだろうし、第一自分につとまるのか不安でもあった。たぶん教授としては何時も自分の自由になる助手が欲しかったのだろう。それも、ある程度学内での自由な行動の権限がある人物をだ。たとえば、大学の図書やサーバーに資料の閲覧届けに関しても、助教授であれば一介の助手に比べて許可は取りやすく、いや、取る必要も無い事も有るので、事は迅速に進むのは確かだ。

そう考えると、教授にもいいように使われてしまう自分が情けなかった。ただ、その分、様々な便宜と優遇をして貰っているのも確かだった。

でも学生から教授になった最初の一年は、無給であることも事実で、それは普通の学生が、研究者として認められるようになるには時間も掛かるので、大概は何らかの仕事に就いている事が殆どなのだから。そう思いながら彼自身も帝国の諜報員としての報酬もあるにはあるが、下のそのまた下なので微々たるものだ。本来の兵士なら部隊に所属しているの、衣食住の心配はないしその分出費もあまりないが、彼は単独行動なのでそれらを全て報酬でまかなわなければならないのだ。早い話が苦学生なのだ。

そう考えると、何か隠れ蓑になりそうな仕事を見つける必要を感じた。

この様にアビンは暫く考えていると、その顔をシヨンとアンは心配そうに覗き込んでいた。それに、気が付きアビンは慌ててその場を取り繕う。

「いや、よく寝られなくて少しぼうとしてしまっただけ」。

するとシヨンは気遣うような表情で言った。

「申し訳ありません。伯父様の悪戯でいじめられてしましまして、それでも、あれで結構上機嫌だったんですよ。娘の父親をやるのが夢だったのですが、生まれたのは男ばかりで、と言っても二人ですが。あれで結構緊張して何度もどんな質問をするのか練習したそうです。そうアンが言っていました、災難でしたねアビンさん」。

その言葉を聞いて、アビンはさらに落胆が大きくなるのだった。それは、それが事実であれば、提督の娘の父シミュレーションの格好の相手として、いや実戦なのだ。と言うことでこれから起きる事柄で、何を言うか叱るか激励するかをどこかのマニュアル通

りに扱われるということになる。対処もマニュアル通りだときっとそのうち怒り出すのは目に見えている。そう考えるとさらに目の前が真っ暗になりそうだった。そこで彼は言った。

「それって何とかならないものだろうか。俺はどうすればいいのだ」。

するとシオンは少し考えて言った。

「そうですね。正直に誠実に対応すればいいのではありませんか」。

その言葉にアビンは言った。

「人ごとだと思っていないか」。

すると平然と「そうです」と言っただけのだった。

けれど追い詰められるアビンに対してアンが助けを出す。

「シオン様、そんな風にアビンさんを邪険にされないでください。わたしからもお願いします。助けてあげてください」。

するとシオンはにっこり笑って言った。

「はい。分かりました。先程のことは冗談ですよ。でも、伯父様には油断しないでください。付け入られますよ。その点は良くお分かりだと思います」。

アビンはシオンの言葉に黙って肯いた。それは此処で何か言おうものならさらに忠告が告げられるだろう、と思ったからだった。

それから、アビン達は朝食を済ませて、約束の時間に間に合わせるようにイベントホールに向かうことにした。ただし、アンとシオンは制服に着替えるため一度部屋に戻るのだった。当然のこととしてアビンは、その間中、部屋の外で待たなければならなかった。それは、昨晚のこと提督に言い渡されていたにほかなったからだ。その間は手持ち無沙汰で、アビンは近くのエレベーターホールで、ソファーに座り天井を見上げて時間を潰した。

その様子は何か思いにふける様に見えるのだったが、実際には何も考えずボーとしていたのだった。

それから暫くして、アンとシオンが制服に着替えて現れた。

シオンはボーとしているアビンを見て、少し情けなく思えて言った。

「もう少しシャキツとしてください。アンも見てるのですから、せっかくわたしは……」。

後ろの言葉が聞き取れなかったが、何か少し恥ずかしそうに口ごもるのをアビンは気が付いたが、あえてそれは聞かないことにした。この様な場合聞き返すととんでも無い目に遭う気がしてならなかったからだ。

そこでアビンは背筋を伸ばして座り直してから言った。

「二人とも制服がよく似合ってるね。これから三年間は、その制服が何時もの服装になるんだね」。

その言葉は御世辞にも取れないことは、本人も承知してはいたが、以外にもアンには高評価だったようで顔を赤らめて俯いていた。

これに驚いたのは彼自身だけで無くシオンも、少し目を丸くして驚きの表情を少しして見せた。それから、ため息を付きながら言うのだった。

「はいはい、分かりました。暫く二人だけの世界にしますか。わたしは先に行っています」。

その言葉にアビンは透かさず言った。

「いや、俺たちも行くから待ってくれ。アンそうだろう」。

その言葉にアンは赤らめた顔のまま黙って肯く。

シオンはそんな二人を見て、内心ほほえましく思えたのだが、言葉は「やれやれ、しようが無いですね。二人とも行きますよ」とゆうものだった。

それから三人は約束の九時より少し早く、イベントホールの中に入った。

その彼らを迎えたのは、ホルストだった。

「まずは、パスを拝見します。宜しいですか」。

アビンは彼の言葉に従ってパスを提示した。

「はい。確かにアビン君、ようこそイベントへ」。

その言葉には歓迎よりも皮肉が含まれていた。ただし、それは彼に対してでは無くこのインタビューを取り決めた連中に対してであった。

するとアビンの後ろからパスを提示しながらシオンが言った。

「相も変わらず。辛辣な発言でね」。

するとホルストはパスを確認しながら言う。

「なあ、シヨンお前もそう思っているんだらう。このような形で人目にさらされるのを一番嫌がっているのはお前だろうが、だが、ようこそお嬢さん席は奥です。気をつけてどうぞ、と言うくらい余裕は俺にはある」。するとシヨンは、彼のそばを通り過ぎながら言った。

「そんな取って付けたような、言い方をされるようでは歓迎しているとは言い難いですね」。

「確かにそうだ、出来れば俺は此処を去りたいからな」。

「正直なことで」。

二人は短く会話した後をアンがパスを提示する。

「はい、確認しました。奥へ気をつけて行ってください。忘れ物はありませんね」。

するとアンは最後の言葉に反応するように、

「はい。ありがとうございます。確かに持っています」

と答えるのだった。

アビンはその会話に妙な違和感を感じたが、アンが駆け寄るように彼の傍らに来て腕に寄りかかる、その感触でそれは消えた。

それから三人は準備された席に着いた。それは当初、予定されていた通りの配置で座るように指示された位置だった。どうやらスタッフには事前に知らせてあったのだろうとアビンは思った。

彼らは席について大人しくするよう告げられたのだが、周りとはいうと準備のために忙しく、様々な指示が飛び交っていた。その中をひとりの女性が近づいてきて言った。

「おや、今日は随分大人しいじゃない」。

そういうのはビットンブルーだった。

「仕方ありません。そうゆう指示を受けてますから、それに伯父様の顔を立てないといけませんから。そしてエレナさんもお分かりでしょう。後のことはホルストさんが全て取り仕切ってますから、わたしがしゃしゃり出る訳にもゆきません」。

そう答えるシヨンは、今まで見た中で一番ゆっくりとした話し方をするのだった。

どうやら提督に言われたのだらう。何時もよおり大人しくしているようだった。

「そう。わたしも、もうやることは終わったの、隣に座って良いかしら」。

そう言って彼女はシヨンの答えを聞くこと無く座るのだった。

するとシヨンは、目を伏せながら言う。

「わたしはまだ、良いですよとは言ってませんが」。

「雰囲気的に良いと言ってますね」。

ビットンブルーは平気な素振りをして答えるのだった。するとシヨンは深くため息を付いて黙ってしまった。

アビンはそんな二人を見ていた。するとアンが彼にすり寄るようにして、彼の肩に寄りかかりながら小さなケースを手渡したのだった。

これは、と問いかけるように彼女の顔を覗き込むと、アンは黙って肯いた。

そこでアビンは、そのケースを開こうとした。するとアンは彼の手を押さえて制止させ、それから周りを警戒するのだった。

その時、隣のシヨンとビットンブルーは何やら込み入った話をしている最中の様だったし、周りの殆どは、リハーサルや打ち合わせで此方を注視している者はいなかった。

その事を確認してからアンは、短く「大丈夫です」と、言って押さえていた手を放した。

そこでアビンは、受け取ったケースを開いてみた。するとそこには、よく女性が護身用に使う小型のショックガンが入っていた。

「これは君のかい」。

アビンは短くアンに尋ねる。

「いいえ、これは提督からです」。

その言葉を聞いてアビンはケースを閉じてからアンに言った。

「どうしてこの様なものを俺に渡すんだ」。

「提督の指示です。アビンさんを信用できると判断して下さったのです。どうかそれを携行してください」。

アンは答えながらアビンに強いて勧めるのだった。

それで仕方なくアビンは、ケースを開けてショックガンを取りだしセーフティーを確認してから、ジャケットの内ポケットにそれを忍ばせた。

それからこう言った。

「これで良いのかい」。

「はい」。

アンはにっこり笑って答える。その表情を見ながらアビンは提督が何を考えているのか、推測するしか無かったが、状況からして何か起こると考えているのかもしれないと思えてしょうが無かった。

その思いは、アビンを周りの騒がしい状況の中、警戒心を持って一人一人の動きに気を配る様にさせるのだった。ただ、内心は取り越し苦労であればいいと。

始めにアビンが注視したのは、ホルストの横で照明の打ち合わせをしているヘンツェだった。彼は照明係と明るさの調整をしているように見えた。高さ三メートル程の照明機器には自然光に近い光を出す光源をミラーで反射するものを使っている様だった。それは光を拡散させるようにすることにより、対象者が眩しく感じないようにする作りとなっている。ただ、この照明の後ろつまり影の部分になる側は、対象者からは白く霞んで見えるので、誰かが立っていてもその人物をハッキリ見ることは、肉眼では難しい。そこは不審者としては格好の隠れ場所となるのだ、だからそこには警備のものが一人着くということになっている。

どうやらその打ち合わせなのだろう、係の者と警察官がヘンツェと話し込んでいる。それからプレスの機材が置かれている所ではルクレールが、ディレクターだろうか。責任者らしき人物と話をしていて、どうやら話はうまくついてないらしく、手に持ったボードの一部分を指しては互いに言い合っているように見えた。

その横ではマクレガーが、呆れたといわんばかりの素振りをして見せてから、椅子に座ってカップにお茶を注いでいた。

その向こうではカメラマンが無人カメラのテストをしていた。そのテストに立ち会うようにブルッフが背景の観葉植物の位置を調整しては、カメラマンの指示を仰いでいた。

アビンは階上の通路を見上げてトレッカーの存在を探した。すると彼が右端のドアの近くで警察官の警備員二人に指示を説明している所だった。その様子には不審な点は何処にも見当たらず、きびきびと説明をしているのが頼もしく見えた。それも当然なのだろう、本来の目的の対象者はランカスターだから提督にはごく自然に警備の仕事に専念しているようだった。

それを見てアビンは思った。確かに出来る人物のようだ。ランカスターの時には対立しなければならないのが残念であり、自分が相手にもならないのでは思えて気も重かった。

その時アビンは、ミュラーの存在が無い事が気になった。たぶん外郭の通路で打ち合わせをしているのだろうと思ったが、姿が見えないと何となく不安になる。暫くアビンは彼の姿を追って周りを見渡す。するとアンが彼のジャケットの袖を引っ張って尋ねてきた。

「あのう。アビンさん、どなたかをお探しですか」。

その言葉にアビンは驚いてアンを見た。

そこには不安そうな表情で彼を見る彼女の姿が目に入った。そこで彼はこう言った。「いや、警備の責任者でもあるミュラーさんが見えないのでこの場から見渡していたんだが、変に見えたのかな」。

その言葉にアンは安心したような表情で答える。

「はい。黙ってしまって、いくら声をおかけしても、ただ周りを見ているだけで、心配になりました」。

アビンはその答えを聞いて、不審な行動は控えようと考えたが、ミュラーの居所が気になった。するとその答えは、続くアンの言葉で分かった。

「それに、ミュラーさんは昨日、提督とお話をされ今日は、外郭の見回りをされるそうです」。

「どうりで姿が見えないのか」。

アビンはそう答えながら、入り口の方に移動するホルストを見ていた。

それはメイソンに何か指示を与えながら、何かを手渡していたからだった。その会話に興味はあったが、彼の座る位置からは遠くて聞き取ることは出来ないが、その場においても話しに混ぜては貰えないだろうと考え早々に諦めることにした。

するとアンが再び言った。

「落ち着かない様子ですね」。

「ああ。周りが忙しくしているのに、大人しくしてはならないのは、こうも落

「着かないものだとは思わなかった」。

アビンは気になることが多くて注視しているとは言わず、如何にも落ち着きの無い学生を装うのだった。

その言葉に先程までビットンブルーと話をしていたシヨンが、割って入るように言った。

「どちらかという、ケージに入れられた子犬ですね」。

「それはどういうことなんだい」。

アビンは無関心を装いながら尋ねる。

「遊びたくても、出して貰えず。キョロキョロ外を眺めてる」。

シヨンは悪戯っぽく答えるのだった。

その答えを聞いて、アビンは尋ねなければ良かったと思うのだった。

そこにアンが二人の注意をひくように言った。

「インタビューの前に何か始めるみたいですが」。

その言葉でアビンとシヨンはステージの方を見た。そこにはマクレガーとファーナビー提督が席について何か話しているようだった。それから提督が肯くとマクレガーはコントロール機材のテーブルに着いているディレクターに手で合図をしてから話し始めた。

。「だいたいの準備が整ったようなので、これからインタビューに入る前の打ち合わせを兼ねたテストタイムを始めます。ギャラリーの方々には幾つかの質問をしますが、正直に答えてくだされば、お訪ねすることに助けになりますので、そのへんよろしくお願ひします」。

その言葉にアビンはいったい何を尋ねられるのだろうと思った。

「では、まずは身近な方達に提督の印象をお訪ねしたいと思います。ではアンさん」。

そう振られてアンはビックリしてアビンの袖を引っ張るのだった。それから少しオドオドしながら答えた。

「ええと、提督は家族思いでいらっしゃいます。わたしに対しても何時も気遣ってくださり、お優しい方です。それに威厳もありますので尊敬しております」。

それから、次の言葉が中々出てこなくなり、マクレガーは直ぐに切り替えてこう言った。

「ありがとうございます。アン。では次はその横の君、アビン君はどうかな」。

その言葉は、完全に子供扱いだと思えたが、アビンは襟を正して答えた。

「優秀な方だと思います。すてきなお嬢さん方をもたれていらっしゃるので、良き父親で家庭を顧みられる方と推察いたします」。

その様に答えながら、自身本当かどうかは知らないが、こう言っておけば波風は起つまいとの考えで言った。だがマクレガーとしては不服だったのだろうか、素っ気なくこう言った。

「はい、ありがとう。では姪のシヨンさんはいかがですか」。

その言葉にシヨンは目を伏せてこう言った。

「伯父様は、外では名提督だとか、家庭思いの良き父親とかもてはやされています。確かに家庭人でいらっしゃいます。ですが、改めて頂きたい所も多々あります。たとえば人に矢鱈と制服を着せたがることや、職業柄仕方が無いという意見もありますが、度が過ぎれば鬱陶しいだけです。また、わたし達に近づいて来る男性に、矢鱈と圧力を掛ける趣味も何とかして頂きたいのです」。

シヨンが話している言葉にマクレガーは、いちいち肯いて関心の高さを示していた。

「まあ。それでもわたしには、好きにさせて頂いているゆえに、お話は聞かなければなりません。ですが、他人を使って物事を了承も無く進める策士的な行為は、是非とも辞めて頂きたいのですが、それなら始めから話して頂ければ善処いたします」。

そう言ってステージのところにいる提督を睨みつけつのがだった。

それに対して提督は、ニコニコ笑って何も答えることは無かった。

この時に始めてアビンはテーブルの上に花束が飾ってあるのに気が付く、それはホルストが、女性陣の意見を取り入れておいたものだが、同時にマイクと緊急時の簡易シールド装置のスイッチが隠されていた。

それは、いくら厚手の頑丈なテーブルを用意しても、側面からの襲撃には功を奏さないからだった。

このことをホルスト自身は取り越し苦労であればいいと考えていたからだ。その当の本人はという一階の側面に位置する。それも直横に位置する入り口で。メイソンとホ

ール内の機材と人員の配置を確認しているのだった。それから彼自身はこんな茶番に、何時までも付き合ってもらえないとの気持ちで一杯だったが、それは言葉に出すまいと決め込んでいた。

何故茶番かという、事前に調べてあるはずなのにあえてそれを掘り返すように、話をギャラリーに振っているためだった。

さて問いかけは一巡したのか、再びアンに質問が為されるのだった。

「次の質問ですが、提督にお願いしたいことはありますか。では再びアンさんいかがですか」。

すると問いかけが、また回って来てアンは落ち着かない様子で、アビンの袖を掴んだままで言葉を選びながら答える。

「はい。そうですね。ええと、これとって無いのですが、あえて申し上げるとすれば口述筆記の時に歩き回られるのは辞めて頂きたいのです。どうも落ち着かないようで気になってしょうが無いのです」。

その答えを聞いてマクレガーはおだやかに言う。

「そうですか。それは気になるでしょうね。提督如何ですか」。

その振りに提督は表情を変えること無く答える。

「そうか。済まない。どうやら昔からの癖で、歩きながら考えを纏める癖があるのだ。

迷惑だったかな、今後注意しよう」。

「ありがとうございます提督。アンさんこう言ってくださいましたから安心してください」。

そう言って纏めるマクレガーの言葉の間にアビンの横でシヨンが呟くように言った。

「癖はそう簡単に直らないと思うけど、守れるのかかしら」。

その言葉を聞かされたアビンは嫌な予感がしたが、思いから振り払った。

そして次はアビンだった。

「では、その横のアビン君はどうですか」。

その言葉にアビンは少し皮肉交じりに、その横扱いかと思いつつ答える。

「はい。わたしとしてはこれとってありません。なにせ立派な方なので、申し上げる事は有りません」。

その答えは完全に取り巻きのような答え方だったが、彼自身は何を言っても先ず嫌みが帰ってくるに違いないと思えたので、此処はそれに徹するように振る舞う。当然、マクレガーにとってはそれが面白くなく、邪険に扱うのだった。

「はい、ありがとう。では姪のシヨンさんは如何ですか」。

するとシヨンは少し考えてからこう言った。

「そうですね。既に調べががついているのではありませんか。それをあえてお尋ねになる理由が分かりません。あえて申し上げれば、自己の行動に噂が立たないように気を遣って頂ければ助かります」。

短い回答ではあったが、マクレガーの作為的なギャラリーの質問に異を唱えるのだった。これにはマクレガーも驚いたのか、それとも予定外だったのか一瞬言葉を失った。だがそこは、多くの場数を踏んだものとしてその場をやり過ごすのだった。

「意見ありがとうございます。これは確認の意味もあつての質問です。新たな情報があれば、それを元に話を発展しやすくなるのでこうやっているのよ」。

それからマクレガーは、気を取り直してビットンブルーに話を振るのだった。

「では、提督の秘書であるビットンブルーさんは如何ですか」。

この様にギャラリーに対する質問が、最終チェックの最中に為された。

最終チェックが終わると少し休憩が入った。

するとブルッフがアビン達のところに飲み物を持ってきて言った。

「ごめんなさいね。コーヒーとか持ってこられれば良かったのだけれど、果物のフレッシュジュースしかなくて、これで我慢してくれる」。

三人はそれを受け取ると、緊張していたのかそれを直ぐに飲み始めた。その味はアビンには何の味なのか分からなかった。ただ、ミックスジュースで酸味が強かったが、頭がすっきりするのだった。

ところで、何やらシヨンはブルッフの顔を覗いているような素振りをしていた。アビンは何故だろうと考えていると、シヨンはブルッフに尋ねるのだった。

「付かぬ事をお尋ねいたしますが、ブルッフさんはホルストさん達が企んでいることをご存知でしょうか」。

「その問いに彼女は驚くも、その事に関して知らされてはおらず尋ねられていることに答えられないまでも、その問いで自分が彼女らに飲み物を持って行くように指示された訳と、何かが起こりそうと言うことは分かった。

そこで彼女はこう答えるのだった。

「シオンちゃん、わたしには尋ねられている意味がよく分からないのだけど」。

するとシオンは直ぐに状況を判断したのか、こう言った。

「分かりました。ブルッフさんもわたし達と同じく蚊帳の外なのですね」。

その言葉は他意は無かったのだが、ブルッフの心を痛めた。

「蚊帳の外ですか」。

そう呟く、彼女の思いには、まだ新米の自分には混ぜて貰えない事柄があることの寂しさがあつた。

その後はブルッフは黙ってしまい。その事に気が付いたアンはシオンの耳元でささやくように言う。

「シオン様。少し言い過ぎです。ブルッフさんが落ち込んでしまってます」。

するとシオンはブルッフに近づき、彼女の手を手を添えてから言う。

「落ち込まないでください。わたしも知らされていないのですから、認められるように努力しましょう」。

その言葉を聞いて彼女の表情は少し和らいだ。それを見ていたアビンはシオンの立場が、どのようなものか計りかねるのだった。

そうしているうちに、休憩が終わったのかディレクターが合図をしながら言った。

「では、これから本番に入ります。マクレガー。いいかな」。

その問いにマクレガーは、黙って肯いた。

すると合図の後、本番が始まった。

彼女の第一声はこうだった。

「お早うございます。ファーナビー提督。今日はわざわざ時間を取って頂きましてありがとうございます」。

提督の答えは、「たいしたことありません。お尋ねになりたいことが、皆さんには多々あるでしょうから、この場にて伝えることが許されることならお話しいたしましょう」であった。

そこでマクレガーは話を進めるのだった。

「では、提督。先ずは数日前に為された帝国艦隊との合同演習についてお尋ねしたいと思います。一部の議員から連邦との間に緊張関係を起こしかねない、との意見がある中行われましたが、どのような趣旨からでしょうか」。

どうやら政治的な話を進めるらしいとアビンは思った。

その言葉に提督は、少し残念そうな表情をして答える。

「確かにその様な意見もありました。ですが、本来の演習の意味は、依然紛争の絶えない星域で、お互いどのように展開すれば紛争を収められるか、またはその地域から互いの国民を安全に脱出させることが出来るか検証するもので、連邦と事を構えるつもりで行われたものではありません。それに、その演習には民間の救助組織にも参加して頂いて、緊急時の手順を確認したのです」。

するとマクレガーは少し疑うように言った。

「といいますと、紛争地域からの救助演習だったということですか」。

「そのとおりです。確かに連邦の覇権主義的な傾向は、近隣の諸国の警戒感を強めるものとなっています。かといって直ぐに侵攻するとは限りません。近隣諸国も互いに同盟しているのですから、それに星間安全保障機構の監視もあります。その裁定が下れば行動する事には成りますが、現時点では起こらないでしょう。かえって紛争地域の安全の方が注目すべきだと我々は考えているのです。今回の演習はその為なのです」。

提督は即答するのだった。アビンはその言葉に既に準備されていたのではとの思いが過ぎるのだったが、マクレガーはその言葉を受けて別の角度から話し始める。

「分かりました。ところで現在の紛争星域で起きている戦闘で、各国の新型兵器が使われているとの噂が絶えません。紛争が格好の実験場になっているのではとの指摘がありますが、これについて如何でしょうか」。

その質問は提督に対しては痛い所を突いている、とアビンは思ったが提督は表情を変えること無くこう答えるのだった。

「確かに、その様な意見もありますし、事実、最新の兵器が投入されているのも確認されています。ですが、わが共和国軍としては関与していません。ですが、企業や商人が

武器供与は重罪ですから、その辺はわきまを置かれています。貿易は自由なものですから、ただ、紛争地域への武器供与は重罪ですから、その辺はわきまを置かれています。たしかにその言葉は正しいとアビンは思った。国の行っている規制は武器供与や密輸だ。そしてこの船も多分に漏れず、それらしき密輸品が多く摘発されている。どうのこうのというより多数の抜け穴が何処にも散在するのだし、それを軍の一声では止まらないのだ。だからマクレガーもそれ以上は問わなかった。

それから、話を戻してこう尋ねた。「では、提督。今回どのような演習があったか具体的に話してはいただけませんか」。そう尋ね終わったその時だった。左の入り口の方でバチッと大きな音がして、何か倒れるゴンという音がした。

アビンは音のする方を見ると、そこには銃を構えるミュラーが立っていた。次の瞬間、その銃から二射、提督に向けて発射された。提督はとっさに簡易シールドのスイッチを入れてそれを防ぐ、するとそのシールドに弾かれるバキッとの音が二度した。そのさなか女性の悲鳴と警備員の走る音や照明の倒れる音、プランターが割れる音など様々な音で騒然とした。

その時にアビンはとっさにアンを床に伏せさせ、ジャケットに隠しておいたショックガンを取りだしミュラーに向けて撃った。

とっさのことで当たらなかったが、ミュラーをひるませることに成功した。その行為は自分も標的になる可能性が多分に含まれていたが、何もしないとしても標的にされないとの保証も無かった。ただ、アンを伏せさせたのは彼女の身の危険を出来るだけ無くしたかったからだ。それで当然の行為としてアビンは自分の体を盾にしてミュラーとアンとの間に身を置いた。

けれどミュラーはアビンに目もくれず近づく警備の数人を撃ってその場に倒れ込ませたが、次第に集まる警備と自分の背後にも警備の者達が迫るのを恐れたのか、すぐに入ってきた入り口から出ていった。

その後を数人の警備員が追いかける。その様子を見てアビンはホッとしてアンの手を取り立ち上がらせて言った。

「大丈夫かい、怪我はないかな。それととっさのことで君を床に伏せさせて痛くは無かったかい」。

「はい。大丈夫です」。

アンは少しほほを染めて答える。その様子に気が付いたのかホルストが言った。

「その二人の世界に浸ってる君たち、すぐに移動してくれ。此処では安全が確保できませんから部屋に移動してくれ、シヨンお前もだ」。

そう言ってから彼は周りを見渡してから、ブルッフを見つけて言った。

「ブルッフ。君も彼らと移動してくれ。安全な通路は今朝教えたとおりだ」。

その言葉を聞くとブルッフは復唱してからアビン達の方に来てこう言った。

「では、お三方、案内をしますので一緒に来て頂けますか」。

アビン達はあまりの手際の良さにあっけにとられながら、無言でブルッフの後に従った。

もう一つの計画

アビン達がブルッフに連れられてイベントホールを後にしたのを確認してからホルストは提督に近づいて言った。

「お怪我はありませんか」。

その言葉に提督は大丈夫だと答えながら、マクレガーに手を差し伸べて言った。

「立てますかな。事が落ち着くまで場所を変えましょう」。

「ええ、分かりました」。

マクレガーはそう答えながら突然の出来事にすぐには立ち上がれない様子だった。そこで彼は手を差し出して彼女が立ち上がるのを促すと、マクレガーはその手を取り少し蹠踉けるように立ち上がるのだった。

「大丈夫ですか」。

そう彼が尋ねると黙って肯くのだった。そこでホルストはヘンツェを呼んで、提督とマクレガーを案内するよう指示をした。

丁度その時だった。トレッカーが彼らのところに駆け寄ってきて安否を尋ねながらミユラーについて触れた。

「大丈夫でしたか。ファーナビー提督、それにアリス。それにしてもとんだ盲点だった。公爵の警備の名目で来ていて提督を襲うとは一杯食わされました。でもこの船の中には警察や警備員もいますから、すぐにでも捕まるでしょう。お怪我が無ければ彼の指示で移動をお願いします」。

その言葉は今までの彼からしては饒舌だった。

その反応をホルストや提督達は見過ごさなかった。

そこでホルストはトレッカーに提案した。

「此方は、提督やプレスの方達の安全を確保しますから、トレッカーさんはミユラーを追ってください」。

するとトレッカーは、その気は無かったのか思い出したような素振りを一瞬見せてからホルストの申し出に感謝して、「分かりました。わたしも警備と一緒に彼を探します」と言って、提督に敬意を捧げてから足早にその場を立ち去るのだった。

その様子を見守ってから、提督は目でホルストに合図する。それを黙って肯き彼はルクレールを呼んだ。

ヘンツェに案内されてホールを後にしようとする提督達を背にしてホルストに近づき言った。

「何でしょうチーフ」。

「プロックフェルと一緒に船長のところに行ってくれ、話は既に付けてあるから協力して貰え」。

「分かりました。至急、行って来ます」。

「よろしく頼む」。

その言葉を聞くとルクレールはプロックフェルを呼んで、手短な説明後ホールを出て行った。それを眺めながら、事がうまく運べば良いと思っていた。

彼らが出て行くのと同時に、怪我人の手当に船医が入ってきて彼らを見ていた。その様子は撃たれたとはいえそれ程重傷ではなく、命に関わるほどでは無いらしいようだったが、その船医の容貌を見てホルストは、またかと思った。

そうその船医こそシヨンの妹のセシリアだった。

彼はそれが分かって何も言わなかった。腕は確かだからだ。けれどいつの間にか紛れ込んでいるのは、頭の痛い問題でもあった。

ホルストは暫く様子を見ていたが、応急処置がすぐに終わったのかセシリアが立ち上がると同時に、撃たれた二人は搬送されていった。彼は首を振りながら、プロなら余計な怪我人を出して欲しくないなど、人事のように考えた。

そこへセシリアが近づいてきて言った。

「ホルストチーフ。此処の責任者は何方ですか。ご報告したいことがあります」。

その言葉にホルストは、ため息を付きながら答える。

「責任者か。彼なら犯人を追って出て行ったきりだ。ところで何を報告するのだ。今

更に」。

すると平然とこう言っただけのけりだった。

「船医として怪我人の様態を知らせる義務があるのです」。

「たいした怪我じゃ無いんだろう。それに他に言うことが有るんじゃないかな」。

ホルストは冷ややかに答える。

すると、セシリアは少し考えたような素振りをしてから言った。

「ご存知だと思っただけですが、お姉様から聞いてませんか」。

「いや、なにも」。

ホルストは素っ気なく答える。

「まあいいです。気づいておられたはずですよ。通信に妙なノイズが混じってるのをご存知のはずです。ああ、それからあの二人は一月ほど歩けないと思います。足の骨が折れてます。小口径のリコックガン（反動緩和銃）ですからこの程度で済みました」。

その語られる言葉は、ホルストが知らないふりをして見抜かれていた。そこでこう言った。

「ああ知っていた。だがちゃっかり船医になっているとは思わなかった」。

その言葉に、何故か満面の笑顔で誇らしげに胸を張って彼の横に立っているのは、どうやらもっと褒めて貰いたいみたいだった。けれどホルストとしてはこのマッドドクターに関わってられないので、あえてこうも言った。

「確かに、素晴らしお手並みだった。ついでで悪いが、その腕で彼らを何とかしても会えれば助ける。出来れば五日間大人しくさせてくれば、提督もシヨンも喜ぶだろう」。

するとその言葉に気をよくしたのかセシリアは、まかせてとばかりこう言った。

「それならまかせて、静かに寝かせるから」。

その言葉を聞いてホルストは彼らに同情を禁じ得なかった。なにせ話す彼女の口元が笑っていたのだから、ただでは済まないだろうと思えたのだ。

そこへ警官の一人が近づいてきて言った。

「すみませんドクター。怪我人を運びますがメディカルセンターで宜しいでしょうか」

。「ええ、お願いします」。

セシリアは少し勿体を付けるような素振りをしながら言った。これは彼女が幼く見えるため、相手に自分の威厳を示そうとしての行為ではあったが、実際に幼いのだしその辺は、頼るような素振りの方が、受けは良いと思うのだがどうも、そうはしたくないらしい。その事を知っているホルストとしては、ひと言助言したい気持ちになったが辞めることにした。今のところ彼には関係ないことと一笑に付されるのが落ちだからだ。

さてそんな救護班の様子を見送り、周りの様子を確認してからホルストはインカムに手を伸ばした。

「ルクレール。今どこだ」。

「はいチーフ。ブリッジに向かうメインシャフトの前です」。

「分かった。到着したら連絡をくれ」。

「連絡します」。

そしてインカムを離してから、作業をしている数人を呼んで照明の電源を落とさせた。

ホルストがまだイベントホールで用事を済ませている最中にアビン達はブルッフに連れられてシヨン達の部屋に到着した。

「この中で待機しててください」。

そう言うと彼女はアビン達を部屋の中に入れた。

それから後ろ手にドアが閉じられると、シyonはブルッフに言った。

「どうしてわたし達を此処に連れてきたのですか。非難ならもつと的確な場所があったのではありませんか」。

この質問にブルッフは答えた。

「わたしは指示された通りにお連れしたのです。ご質問の答えを持っていません」。

その答えはアビンに、この事態をホルストは察知していたのかもしれないと思わせた。それ故に彼女には、此方が抗議しても詰め寄っても答えを得られないように何も知らせてはいないのだ。それは信頼関係の為せる業でもあると判断させた。

さて望む答えの得られなかったシyonは、諦めたのか部屋で大人しくしていたミュラ

の幼獣とスターンは彼女のそばに寄り足下に深めの皿を持ってきてミルクを注ぐのだった。そしてミルクが注ぎ終わり皿が床に置かれるのを確認すると一生懸命飲み始める。その行動を見ているとスターンはションの行動である程度何をして貰えるのか分かっているようだった。

この状況で皆は何かすることも無く、ただスターンの様子を見守っている。

確かにこの毛玉のような何も危害を加えそうも無く見えるミュラの幼獣は、愛らしく見えるのだが、その親の獰猛さを知るものとしては薄ら寒い感覚がまだ消えていない。アビン自身それを感じたとき背筋が寒くなるのだった。

「ところで、ブルッフさん。ホルストさんに何と指示されたんですか」。

アビンは沈黙を破るように尋ねた。

すると彼女は少し戸惑うような素振りをしてから答える。

「ごめんなさい。何か問題が起きたときには、此処に連れて行くようにとの打ち合わせでした。必要な指示はチーフが後で連絡するとのことでした」。

その答えにアビンは慎重だと思った。彼女に知らせないことによって不要に動けないようにしたのかも知れない。ただ、ション達の部屋から教授の部屋は二部屋を挟んだ向かい側の上の階だったことを、つい今さっき思い出していたのだった。

そこへアンはお茶の用意をしてアビン達のいるところに戻ってきた。

「何もしないで待つのも何ですかからお茶でも如何ですか」。

そう言いながらテーブルにカップをそろえてポットでお茶を注ぎ始める。

その様子を見ながらアビンは、ホルストが此処に待機させる理由を考えていたが、これといった答えは出せなかった。

そこで彼は唐突に「何故此処で待機なのだろう」と言ってみた。

それに対してションが少し辛辣に言った。

「邪魔だと思ったじゃないの」。

「それはありますね」と同意するブルッフ。

けれどアンは違った答えをするのだった。

「そうですね。あの方が非難とか邪魔だからといって、わざわざ此処にわたし達を置くのでしょうか。それなら近くの適当な場所を用意するでしょう。違いますかション様、実際には気が付かれていますのではありませんか」。

するとションは少しため息を付いて答える。

「確かに彼なら考えそうなことだけど、少し的外しておいて的確に動けるように布陣させる手口は流石と思います。たぶんこの混乱で公爵暗殺の人員が動くかも知れないとの考えも捨てきれません。向こうとしては格好に機械ですから。それならすぐ隣に置くのが上策と言えますが、女子供も一緒ではそうもいきませんし、かといって離れすぎるとすぐに動けません。そこで一つ下の階に置いて非難と布陣の両方を取ったと考えられます。此処なら直ぐ上の階にいけますし、たぶん通路での人の動きは全て把握しているはずですから、ランカスター伯父様の部屋に近づくだろうと思える動きがあればすぐに連絡が来るでしょう。それを待つようにブルッフさんは告げられていたのだと思います。そこまでは知らせてないかも知れませんが、如何ですか」。

ブルッフはションの説明にあっけにと取られていて、ただ口をぽかんと開けるだけだった。それは彼女には思いにもよらない説明だったからだ。

実際に、彼女よりションの方がホルストとは長い付き合いだから、その辺はよく承知しているのだった。

だがこの先はどうかは誰も知らない。ただ逃げ回っているミュラーが捉えられて事が終わるかも知れない。けれどアビンには、あのミュラーがこの様なことを起こしたことが信じられなかった。

するとブルッフの持っているインカムが鳴った。

「はい。ブルッフです」と彼女は答える。それはホルストからの連絡が入ったことを意味する。

「はい。分かりました。では彼と替わります」。

そう言うとインカムをアビンに渡してブルッフは「チーフからです」と言葉を添えた。

アビンはそれを受け取ってから答えた。

「替わりました。アビンです」。

するとホルストが言った。

「アビン君か、では状況を説明する。ミュラーの行動は此方の方でモニタリングをしている。現在どうやら公爵の部屋に向かっているらしい。警備の者達も追っているが、間に合いそうもない。これまでに警備員二人に乗客三人が負傷させられたため下手に追跡が出来ない状況だ。君はこちらの指示で先回りをして今いる階のエレベーターホール横の階段で待機してくれ、確か君はショックガンを持っていたと思うが、今も所持しているか」。

その言葉にジャケットの内ポケット確認して答える。

「はい。持っています」。

「ならそれで彼を止めてくれ。公爵に手を出す前にだ。そのインカムは引き続き君が持っていてくれ。状況とタイミングを知らせる」。

そう通信を終えると通話は切れた。そこでアビンは彼女らに言った。

「ミュラーさんを止めるために階段下で待機する。アン、シヨン、ブルッフさんはこの部屋で待っていてください。くれぐれも外には出ないように、事が終われば帰ってきますから」。

するとアンが心配そうに彼に近づいてきて彼の右手を両手で包んで言った。

「ご無事のお帰りをお待ちしております」。

その言葉にどこか言い古された響きを感じたが、悪い気はしなかった。

「ありがとう。アン」と自然に口から出た言葉がその事を表していた。

そしてアビンは彼女たちに別れを告げて部屋を出た。

静寂。

アビンは後ろでドアが閉じられる同時にその様にした。

通路の向こうに広がるホールの更に向こうには、人工の自然公園の情景が広がる。

ミュラーが騒動を起こしているのに、此処は妙に静かだった。人通りもなくどこか寂しさを感じながら彼は、エレベーターホールの階段へと急いだ。

彼がエレベーターホールに着く前にホルストから連絡が入る。

「アビン君、聞こえるか」。

「はい。アビンです」。

直ぐさま応答する。すると直ちに指示はくる。

「今いる場所は告げなくてもいい。此方で確認できている。急いで階段に行ってくれ。そして此方の合図と共に直ぐに駆け上ってミュラーの動きを止めてくれ」。

「分かりました」。

アビンは答えると階段へ駆け寄ってから上方を見上げた。その時、誰かが走り過ぎる音がして、直ぐに叫び声が幾つか聞こえた。その内の一つはミュラーだったが、その直ぐ後に、鈍い破裂音が四回した。

その直後に、ホルストからの連絡が入り直ちに階段を駆け上る。

アビンが上方の階に着いて、エレベーターホールから通路に向かって最初に見たのは知らない乗客が倒れている様子だった。その直ぐ向こうにも一人は壁により掛かり、もう一人は通路で仰向けになっていた。そして客室のドアの前に立っているのはミュラーだった。彼の手には銃が握られていた。

それを見たのと同時に彼は、反射的にショックガンを構えて言った。

「動くな」。

しかし、ミュラーは彼の方を向くと銃を向ける、と同時にアビンは引き金を引いて二発発射した。

その後、ミュラーはまるでスローモーションで倒れるように見えた。実際には膝から崩れ落ちるように倒れたのだが、それが長い時間を掛けて起きたような錯覚をアビンにさせた。

それは今までもあったように、反射的に躊躇うことなく行った。遺跡発掘のトラブルで命の危険に曝された時に、教授と自分を守るために取る何時もの行動。味方や部外者を直ぐに判断して対処するように教え込まれたせいもあり、この行動が体が覚えているのだった。

そしてアビンは安全を確認しながら、ゆっくりと倒れたミュラーの元に歩いて行った。そのときアビンは妙なことに気が付いた。ミュラー以外の人物は一般乗客のようだったが、何故か彼らも銃を持っていた。いや小銃だった。

そしてアビンがミュラーの処に来て彼の体を確認すると、死んではいなかった。そこで彼は自分のショックガンを確認すると、エネルギーレベルが低く抑えられているのだ

った。そこで改めて操作するとレベルを上げても直ぐに下がるように細工がしてあるのだった。

それからアビンはインカムを使ってホルストに連絡を取る。

「此方アビンです。ミュラーさんを止めました。それから三人ほど負傷者がいますので救護班をお願いします」。

そう連絡しながら倒れている乗客の様態を確認する。

「そうか、分かった。救護班と共に警備員を其方に送る。アビン君。ご苦労様」。

ホルストが労うように答えた。

アビンはやはり事務的だなど思いながら、何かに乗せられているように気がするのだった。それは、ミュラーのような人物が、こうもあっさり自分のようなものにやられるとは信じがたかったからだ。

そして彼が自分のジャケットの内側にショックガンを取めると、直ぐに警備員と救護班が到着した。その事は更に彼に、事の起こりが何かに計画されているのではとの疑念を持たせるものとなった。

「大丈夫ですか。怪我はありませんか」。

彼に駆け寄ってきた警備員が尋ねた。だがその顔をよく似るとイワノビッチだった。

彼が答えようとすると、喋らないように彼の唇に指を当ててから、続けてこう言った

。「本当に大丈夫ですか。巻き込まれたんですね。もう大丈夫ですから此方に来てください」。

そう言いながらアビンに適当に相づちを撃つように指示してから、彼をエレベーターホールに連れて行く素振りをしながら彼女は警備員の隊長らしき人物に、「この一般の方を介抱する必要があります。起きたことで放心状態です」と言った。

すると隊長は言った「ドクター、彼を少し見てください」と船医に言う。

「分かりました」。

そう言って近づいて来た医者はセシリアだった。

アビンがあっけに取られながら何か言おうとすると、話さないように指示しながら言った。

「どうやら少し休ませる必要があるみたいね。あなた、彼にこの鎮静剤を飲ませて、どこか空いている部屋で少し休ませてください」。

「分かりましたドクター」。

そう言うときイワノビッチは彼を肩に掛けて、励ましながら改めてエレベーターホールに向かった。

この状況はアビンには、情けないものだったが、有無を言わず状況を進める彼女らに従うことにした。

そして結局のことアビンは、良いように使われてイワノビッチに連れられシヨンの部屋に戻ったのだった。

この状況でアビンが確信したことは、ホルストの計画にまんまと乗せられたと言うことだった。だが本当の計画の立案者は、別の人物であることをこの時点では知らなかった。

そして部屋に迎え入れられたとき、アンはアビンに飛びついて抱きついたのは、その場にいた者に冷やかされる原因になった。それからブルッフは、突然現れたイワノビッチに驚き泣き出してしまおうと、なだめるのに暫く時間を要するのだった。その様な状況の中でアビンはシヨンの浮かない顔を見た。

それについてアビンが尋ねると、この計画はリスクの多い計画だと所見を述べるのだった。それはアビンにも分かる。たぶんミュラーが自らを犠牲にしたあぶり出し計画ではとの考えは、シヨンとアビンの一致したところだった。

そしてその事を二人は、ホルストに尋ねることにしたのだった。

転換点

数時間後、ミュラーのファーナビー提督暗殺未遂事件が終息した頃に、アビンとシオンはホルストを訪ねた。彼は船長室にてデュパルク船長と話をしていた。

アビン達がドアを開けて中に入ると、船長が歓迎した。

「これはこれは英雄君とお嬢さん方」。

その言葉通りアンもアビン達について来たのだった。

けれどホルストは如何にも気難しそうな表情でアビン達を迎えて言った。

「お前さん達が来たということはミュラーの件だろう。まったく鼻が利くというか勘にいい奴らだ。船長が良ければだが、中に入るかい」。

その言葉は如何にも自身には責任が無いといわんばかりの口ぶりだったが、デュパルクは快くアビン達を迎える。

「まあ、入りなさい」。

そこでアビン達は、船長の言葉に甘えて中に入ってビックリした。なぜなら当のミュラーがテーブルの向こう側で椅子に腰掛けているのだ。

「これはどういう事ですか。今まさに尋問中ということでしょうか」。

アビンは不信感をあらわにして尋ねた。

すると如何にも嫌そうな仕草をしながらホルストが言う。

「そうさ、この二重スパイに誰の命令で動いたのか。本当の目的は何かとか聞いていたのさ。だが口を割ろうとしない」。

アビンは同情するように言った。

「それは大変ですね。どの様に尋問されているんですか」。

「口外は出来ん」。

如何にも勿体を付けるように、ホルストは渋る。

するとシオンが口を挟んで批判した。

「寸劇はそこまでにしてください。まったく大人しく聞いていれば勝手に話を進めて、何人怪我人を出せば気が済むのですか」。

その言葉にあっけにと取られているアビンを横目に、ホルストはため息交じりに言う。

「お前には隠しきれないか。気が付いたのは何時からだ」。

「わたし達をブルッフさんに案内させて、わざわざわたしの部屋に案内するものですから何か変だと勘ぐるのは当然でしょう。あの場合は、ホールの直ぐ横の控え室に一時退避させるのが最初の判断だと思いますが違いますか」。

シオンが詰め寄るようにホルストに話すと、彼は残念そうに言った。

「お前が一緒にいたことが、俺の失策だ」。

「いいえ、良い線行っていましたよ。ブルッフさんにはこの詳細を告げることなく動かしてましたし、アンもアビンさんもそれ程不自然に思うことなく移動しました。でも、アビンさんは不審には思っていたようですが、いかがでした」。

話は突然にアビンに振られた。

「えっ、まあ、何となく理に合わないと感じたんですが」。

彼は突然に振られて戸惑い少し口ごもったが、何とかその時に受けた印象を手短に答えた。

するとホルストは「まあ合格だな」と短く言った。その言葉にシオンは「いつまで策士的な振る舞いしているのですか」と彼を非難した。

この様な遣り取りを見ていたミュラーが口を開く。

「申し訳ないが、わたしをほっといてそちらだけで、話を進めないでくれるかな」。

するとホルストとシオンが彼の方に振り向き同時に同じことを言った。

「貴方は黙っててください。原因は貴方なんですから」。

その気迫に押されてミュラーは椅子から立ち上がりかけていたが、もう一度座り直して、どうぞ続けてと身振り以示した。

それからシオンが言った。

「ホルストさんは、よく内緒で事を進めることが多いですが、それは貴方の方針ですか」。

ホルストは真面目な表情をして答える。

「いや違う。知らせない方が良い場合もあるが、上の方針で知らせないこともある。今回はその例だ」。

その言葉を聞いてシヨンは目を丸くして尋ねる。

「誰の。ここまで来て答えられないと言うことはないでしょう」。

するとホルストは深いため息を付いて答えた。

「提督だ。俺とミュラーが状況を伝えたときに、提督の方から提案があって今回の事が行われた」。

「当人が体を張ったブラフということですか。リスクが大きすぎませんでしたか。関係者以外の負傷者をだしてませんか」。

シヨンはホルストに詰め寄るように尋ねる。

「俺は止めたんだが、本人が妙に乗り気で話を聞いてくれなかった。それに今回の負傷者は、全員トレッカーの部下としてリストに昇った人物だ。それにしても走り回りながらよくも的確に仕留めていったな。最初の二人は良いとして、途中の三人は偶然か、公爵の部屋の前の三人は予想はしていたがまさか出てくるとは思わなかった」。

ホルストは言い訳と、ミュラーの行動の評価を他人事のように述べて責任回避をする。だがそれは聞き入れられず、シヨンの追求は続く。

「それで、良かったんですか。彼の残りの部下を全員病院送りにして事が済んだと判断されているのですか。もしそうだとしたら軽蔑します。わたしはホルストさんならもっと穏便に事を運んでくださると思っていましたが、どうなんですか」。

すると後ろの方からミュラーが申し訳なさそうに言った。

「すまん。俺と提督で決めた事で、ホルストは彼の部下が様子の変なのを見て、俺のとの関係に気が付いて手を貸してくれたのだ」。

その言葉を聞いてシヨンはキッとミュラーを睨み付けて答えた。

「だとしても手を貸したのは事実ですね。元凶は貴方だとしてもそれは変わりません」

。ミュラーはシヨンの表情に臆することなくホルストを弁護する。

「いや、彼には詳しくは話してはいなかった。ただ提督の暗殺計画をでっち上げるので協力してくれただけ話したのだ」。

するとシヨンは冷たい眼差しでホルストを見ながら言った。

「それだけで、ミュラーさんとアビンさんの銃を手配して、アンにその運び役をして貰ったんですね」。

その言葉にホルストは訂正をした。

「アンに銃を運ばせたのは提督だ。用意をしたのは俺だが、ミュラーの銃を手配したのはヘンツェで、その様子がおかしくて問い詰めたところ今回の話を聞かされたと言うのが正確な話だ」。

するとシヨンはミュラーの方を見ながら言う。

「つまり今回の元凶は彼ということですか」。

「そうなるな」。

そうホルストは同意する。

「どうしましょうか。セシリアに少し預けましょうか」。

シヨンは悪戯っぽく言う。

「どうする気だ」。

ホルストは心配そうに言う。アビンはその言葉に意味が何となく理解できて同情を覚える。ミュラーはその言葉の意味を計りかねていたが、アビンの心配そうな表情でよからぬ事であることは理解したようだった。

「俺には裁判を受ける権利があるし、弁護士を求める権利もあるはずだ」。

そう言いながら彼の声は何故か緊張しているように聞こえるのだった。

するとシヨンは冷たく言い放つ。

「はい。確かにその権利は認めます。ですが、伯父様に手を掛けようとしたのですから、それ相応の罰は覚悟されていたはずでしょう。それに此処に居る方々が口を閉ざせば、何があっても闇の中で処理されます。如何ですか、いっぺん闇を経験してみれば、あっ、でも記憶を消すからあの子。起きたことは覚えていないかもね」。

その言葉を聞いてミュラーは背筋の寒くなる思いがした。それからこう言った。

「悪かった。事前に相談しなかったことは、だが欺くのは先ず味方からと言うではないか」。

けれどアビンはシオンには説得力のない話だなどと思ってこう言った。

「ミュラーさん、彼女にはそんな話は通じませんよ。騙されるのはきらいなようですから」。

するとミュラーは開き直って言った。

「なら、好きにするがいいさ。ただ、妹への遺言を言付かってもらえないか」。

その言葉を聞いてシオンはクスクス笑い出した。

その様子を見てホルストはため息を付いてから言う。

「ミュラーよ、お前はからかわれたただけだ。お前が俺たちを騙した事へのしっぺ返しとしてな。本当にするつもりなら既に今どこかのベッドの上か箱の中だ」。

そう言われてミュラーは、更に寒気を覚えるのだった。

さて、この様な遣り取りの後ホルストは改めて言った。

「今回の件で、トレッカーは部下の殆どを失った。殆どと言ったのは、現在把握している人数に達しているが、此方がまったく把握していない第三者がいるということだ。その事はアビン君とシオンは既に知っている」。

するとミュラーが尋ねた。

「第三者とはどういう事なんだ」。

その問いに答える前にホルストはアビンに確認するように彼を見た。それに対してアビンは肯いて答えるとホルストは説明しだした。

「それは、最近確認されたことなのだが、この船の警備用のカメラの位置が微妙にずらされており、それを知るものは誰もいなかった。ところが我々を監視する人物がいることが分かった時に、アビンはその人物を追ったのだがうまく逃げられた。そしてカメラを確認したが映っていなかった。それで詳しく調べて見ると、カメラの位置がずらされ死角が造られていたのだった。そして、その人物の行動はトレッカーをも監視しているようなのだ。理由は不明だが、彼も自己の判断で、全てを行っているわけではないようだ」。

そこまで説明の話を聞くとミュラーは言った。

「ということは、我々が把握していない奴がまだいて、そいつがトレッカーを動かしているということなのか」。

ホルストは肯きながら「そうなるな」と言った。

それから続けて言う。

「その人物は、この船が出航する前に警備カメラの移動を指示した人物か、またはその手のものかは分からないが、公爵暗殺計画の黒幕に近い人物だと言える。ベストラン公の名前は出てこない事を考えると、彼の身近な人物となるだろう。それも一般には知られていない隠れた立場のものがあると思われる。ただ、この船に乗っている誰かは確かだ。その人物が最後まで姿を出さないか、それとも最後に手を下す役割を持っているかは知らないが、俺たちは常に周りに気を配り、この第三者に警戒しなければならないことになる」。

ミュラーはホルストの語る言葉を聞いて、眉間にしわを寄せて言った。

「つまり俺の努力は、徒労と言うことなのか」。

「そうではない。向こうの選択肢を一つ潰したことは確かだ。今までの行動からもう一人の人物は最後の時になるまで姿を見せないだろう。現れるとしたらトレッカーが失敗したときだ。彼が失敗したとすると俺たちは、どの様に判断するだろうアビン君」。

突然に質問が回ってきたアビンは、言葉を詰まらせながら答える。

「そ、それは、暗殺計画を阻止できたと考えます。その人物の事を考えに入れなければですが」。

ホルストはアビンの言葉に肯きながら言った。

「そうだね、未確認の人物がいると考えなければだ。そこで、我々に隙が出来るその時に密かに事を行うかも知れないし、大胆に確実な方法で事に及ぶかも知れない。そして、これこそがトレッカー達の役目かも知れない。それから肝心なことは、向こうは此方がその事に気が付いているとは知らないだろう。このことについて知っているのは、今此処に居る者だけだ」。

するとミュラーは言った。

「だとするとトレッカー達は、捨て駒か。それを知ってはいないかも知れないな。というのは彼らの今までの行動は、ベストランへの忠誠で成り立っている様に思える。テロ

リストにしては計画的で無駄な事はしていない。部外者への被害も最小限にとどめるように気を配っているふしが、多く見られるからだ。だが、捨て駒だと知っていても忠誠心から喜んでそうするだろう」。

その言葉を聞いてアビンは言った。

「何か遣りきれない気持ちにさせる内容ですね」。

「全くだ、そこまでする意味があるのか疑問だ」。

ホルストは同意するように言ってからミュラーに尋ねた。

「お前の国では、そんな慣習があるのか」。

するとミュラーは肩を竦めて答えた。

「わたしにも分からんね。国に対する忠誠でその様にするのなら分かるが、個人崇拜の極みかも知れん」。

その言葉を聞いてシヨンが、静かだが非常な憤りの籠もった言葉を言った。

「人やものを崇拜したところで、何も解決できたり助けたりできません。愚の極みです。今日までの歴史はその殉教者で埋め尽くされているというのに」。

するとアンが、シヨンの腕を掴んで悲しそうな表情で訴えるように言う。

「シヨン様。落ち着いてください」。

その訴えでシヨンの表情は直ぐに和らぎ、

「申し訳ありません。取り乱してしまいまして、お詫びいたします」、と丁寧に謝罪した。

そこでホルストが改めて状況を手短かに言った。

「現在だが、トレッカーの部下と思われる人物は、全員この船から下りることとなった。あるものは留置場、や別の部署に回され、病院送りになった者もいる。これで良いのかな少佐。そして今は彼自身と謎の人物だ、これは俺の勤だが一人だな。以上が今回までの結果だ」。

そのまとめ方にミュラーは、不機嫌そうに言った。

「この状況はわたしの本意ではない。ところで未確認の人物が一人だという根拠はなんなんだ」。

するとホルストは素っ気なく答える。

「だから勤さ。状況からして二人以上なら、ここまで周到に工作する必要はない。監視カメラの指示にしても、不審な動きをしても見つけられる確率が少ないのは、人数が多くなれば無理があり、単独行動ほど動きやすい。それと状況を把握しやすい立場にいるならそれが最も最良だという事になる。反論はあるかな」。

その答えを聞いてミュラーは、「それもあるが、複数も捨てきれない。もしそうだったら」と言い返すのだった。

けれどホルストは自信たっぷりに言った。

「いままで色々調べたが、他の該当者がいなかったのは、単独の可能性の方が高くなる、人数が増えるほど検索に引っかかる確率が高くなるからな、それにトレッカーが完全に捨て駒と考えれば、なおさら一人の方が事も無げに公爵に近づけるからな」。

この答えでミュラーは折れたのか、それとも言っても無駄と思ったのかは分からないが、それ以上口を挟まなかった。

それでホルストは彼に言った。

「暫くは此方が用意した部屋、つまり留置室に入って貰うことになる。そこで寝るなりわめくなり好きにしてくれ。そうでないとお前さんが立てた今回の計画が台無しだからな」。

そう言うホルストの口元がにやついていたのをアビンは見逃さなかった。その意味する所は悪戯心がさせるものなのか、それとも何か別のことを考えてなのかは分からなかったが、何かあると彼は思った。

それから今度はアビンに向かってホルストは言った。

「先ずは、変な考えを起こすなど言っておこう。それからお嬢さん達をよろしく、これは提督の言うことかな。とにかく君には色々英雄の役割を担って貰ったが、暫くはそれを我慢してくれ。君は公爵の側に居る限り人の目は否応なく注がれるから、向こうも下手に動けないだろう。此方もそれなりの準備はするつもりだが、それは後で知らせる。ここからはトレッカーのいや第三者のお手並み拝見ということになる。あと二日がんばってくれ」。

そう言うホルストはアビンの肩をぽんと叩いて、それからミュラーを立たせると船長室のデスクのボタンを押して言った。

「ヘンツェ、イワノビッチ入ってくれ」。

その言葉が告げられると直ぐに、警備員の格好をしたイワノビッチと、何故か帝国の軍服を着たヘンツェ入ってきてホルストに敬礼した。

すると如何にも勿体を付けるように、「彼を連れて行ってくれ」とホルストは言う。彼らは、その言葉に「イエツサー」と言っテミュラーを連れて船長室から出て行った。その様子にアビン達があっけにと取られているとホルストが恥ずかしそうに言った。「まったく奴のお陰で、臨時招集が掛かって今は共和国軍の大佐だ。あの親父が招集命令を出しやがった。すまんがそういうことで数日鬱陶しいことに付き合っテ貰うことになる」。

その言葉にアビンは妙な高揚感を覚えるのだった。

「それから、これは提督からの言付けだが、娘をよろしくだそうだ。いい気なものだ、自分の立てた計画で騒ぎを起こしておいて、その責任をミュラーに実質的に押しつけたのだからな」。

続けるホルストの言葉には、少し苛立ち混じっていたがアビンは気に止めなかった。それは提督の言付けを聞いて、自分の立場の危うさに戸惑っていたからだった。

そんな彼を見てアンは彼の手を取り「ご心配はいりません。何時もの嫌みですから」と言葉をそえて、シヨンの顔を覗っテからこう言った。

「では、大佐。わたし達はこれからどうすれば良いのでしょうか。もう退散しても宜しいのでしょうか」。

するとホルストは気を取り直して答えた。

「ああ、帰っテもかまわないよ、というより君たちがわたしを訪ねてきたのではないかな、用が済んだらう。帰っテくれ、もうすぐ提督も此方へ来られる。これから話し合わなければならないことがあるんだ。是非とも席を外して欲しい。特にシヨン、お前にはな。今後のことについては後でまた連絡する。たぶん今日中に出来るだらう。それまでは自由にしてくれ」。

その言葉にシヨンは何か言いたそうにしていたが、アンが早々と退室の挨拶をしてアビンとシヨンの手を引いて船長室をでた。

その行動力といったら普段の彼女とは違っテた。

その事についてアビンが尋ねると「あのままずるずると部屋にいとホルストさんとシヨン様の言い合いに発展し出すので、早々に退散する事にしました」、答えが返っテきた。

その言葉の後に、シヨンの顔を見ると少しほほを赤らめていたのをアビンは気が付いた。

もう一人は誰か

アビン達はシヨンの部屋に戻っていた。
彼らが部屋を開けている間、ブルッフがスターンの面倒を見てくれた。
彼女に迷惑をかけてしまったとアビンは思ったが、ブルッフとしては、このモフモフの毛玉のようなスターンが可愛くてしょうがない様子で、そのまま何時間も過ごしていられたような様子だった、それにスターンも遊んで貰えて喜んでいて、ただ、スターンが遊んでいたであろう辺りの絨毯は、一目で分かるほど痛んでる。
それを見たアビンは修繕費が気になっていたが、シヨンやアンは、それ程気に止めている様子はなくブルッフと一緒にスターンと戯れ始めているのだった。こういった事を気にするのは自分だけなんだな、と半ば諦めがちにソファに腰掛け彼女たちを眺めていた。
暫くして、浮かない顔をしているアビンの側にシヨンが近づいてきて言った。「お疲れですか。アビンさん」。
「いや、そうでもない」。
そう答えてから、彼は考え直したように「そうかもしれない」と答えた。
すると彼の目の前にコーヒーの入ったカップが差し出される。アンが持ってきていたのだった。どうやら彼は、ボンヤリとしていたようだった。気が付くと既にスターンは遊び疲れたのか、バスケットの中でスヤスヤと寝入っていた。
彼はアンからカップを受け取ると感謝を述べてから、一口啜った。
そうしている間にアンは彼の横に座り、シヨンが向かいのソファに座った。ブルッフはシヨンの隣に席を取る。それからおもむろにシヨンが言った。「先程、ブリッジに行ったときに気が付きましたか。船内の位置モニターがあったのを」。
その質問にアビンは見た記憶がなく首を横に振る。「そうですか。では何かコンソールの表示を見ましたか」。
するとアビンはその様なものを見た気がしたので「その様なものがあったような気がする」と、答えた。
シヨンは何か得心したのかこう言った。「アビンさん、あの部屋には最新の位置モニターが置かれていました。どうやらそれを使って、わたし達の移動や位置、それだけでなくミユラーさんの位置も把握していたのでしょ。たぶんあの時に渡されたパスカードがそれだったのでしょ」。
「最初から周到な準備が成されていたということか。つまりホルストさんも始めから加わっていた、ということかな」。
と疑問をアビンはシヨンに問いかけてみる。「それは違うと思います。あの方は策士ですが、無関係な人に無用な危害が及ぶことは避けますから、今回のように多少の危険を冒しても、それに踊る輩をあぶり出そうとの考えをするのは伯父様です。たぶんそれを知って無用な損害を出さないように、手を貸したのが正解でしょう」。
とアビンの疑問にシヨンは言った。
するとアビンは疲れたように言う。「だとしても、またもや俺は、君の伯父さんやホルストさんの手の上で踊らされたということか」。
その言葉にシヨンは笑みを浮かべながら言う。「そうかも知れません。でも先見の明はあると思います。これでアビンさんはかなり注目される方となりました。この船内においてですが、それはホルストさんも仰っていましたが、影に隠れて機会を覗いている人物への牽制には確実になります。なにせ注目されていますから、公爵の側に居れば自然と人目を引くかたちになりますから、次のインタビューまでは行動を起こさないでしょ。でもやはり相手が分かりませんから、その点は頭の痛いことには変わりありません」。

その言葉を聞いてアビンは、道化だなど思うのであった。けれど、その考えには賛同した。人の目を利用することにより、相手の動きを牽制するのは良い考えだと思えたのだが、その旗振り役が自分だということが気に入らなかった。

「ところで」とアビンは尋ねた「俺が公爵の側を離れて、此処でお茶をしても良いのか」。

するとシヨンは素っ気なく「いいじゃない」と答えるのだった。

その回答は期待外れだったが、彼自身何を期待していたのだろうかと思えるふしもないではなかった。

しかしシヨンは飲んでいたカップをアンに返しながらか言った。

「アビンさんはならこれからどうしますか。この度の騒ぎで自分の手駒はトレッカーだけです。このまま彼に任せますか。それとも自分が行動を起こしますか」。

その問いにアビンは思うところを言った。

「手駒は多い方が良いに越したことはない。俺だったら今回は諦める」。

シヨンは少し残念そうに言った。

「随分諦めが良いですね。でも、調べた記録からしても早々に諦めくれそうに無い事はアビンさんもお分かりでしょう。ではどうします」。

アビンには、その言葉は後退を否定する上官の言葉に聞こえた。

「意地悪だな。そうなるとトレッカー自身が、単独で行動できる器量があるならそれにまかせる。それと連絡手段があるのなら行動指針を与えて、彼が行動するときに影で動くようにして、気が付かれないようにして公爵に近づくというのもありかな。でもそれだと少し疑問が残るんだが」。

「どういう事です」。

「今までの経緯からして、トレッカー達が行動を起こして公爵を狙うことになっていた。当の人物はそのときどんな役割をする事になっていたか、そもそも役割は無かったのかもしれない。失敗したときの保険だったのか、それとも他の何か。いずれにしてもトレッカー達が成功すれば、傍観者だったはずの立場で、役割としては連絡係だったのかもしれない。ただそれは姿を見せない、いや、見せているけどその様な素振りを微塵も見せない。意外と既に接触して面識のある人物だと考えた方が妥当かもしれない。いざというときの保険なら身近にいることができる人物だ。この場合は誰でもかまわない。子供でもいい。たとえば毒針を刺せば良いのならそう言える。ここまで言うと極端かも知れないが、考えようによってはそういえる」。

このアビンの言葉にシヨンが指摘するように言う。

「たぶん子供ではないと思います。理由はベストラン公の信頼を得、トレッカーに存在を気付かれずに連絡をし、船内のモニターの変更手続きを知り利用できる事を考えれば、ある程度の大人と考えた方が良いでしょう」。

その答えにアビンは無言で肯き同意した。

それを確認してからシヨンは続ける。

「わたし達の身近にその人物がいるのは確かかも知れません。保険をかけているのならなおさらでしょう。ですが、確証となるものは何も有りません。状況で判断して可能性の有る無しを言っているにすぎません。そもそももう一人いると言える証拠もありません。アビンさん勘ですか」。

その問いにアビンは少し迷ったが、ブラックの事を切り出した。

「ミュラの事件後、ある人物に呼び出された。その人物はベリアルと名乗ったのだ。ベリアエンジェルの片割れだと。彼は俺に仕事の話を持ってきた」。

そう言ったところでシヨンが口を挟んだ。

「ベリアエンジェルですって、あの謎の暗殺者がなぜアビンさんに仕事の話」。

その問いに答えるようにアビンは言葉を続けた。

「彼の話では、俺の英雄的行為に敬意を表し、内密に取引を申し出てきたのだ。それは、彼自身の純粋な仕事上の取引で、俺が発掘で立ち寄る星系の情報を欲していると言うことなのだ。たとえば流行とか噂など、実際に彼が指定した情報を集めることなども提案してきた。それと交換条件で俺の欲している情報を彼がくれるという話だった。俺としては悪い話で無かったので了承すると、商談成立の見返りと言うことで、こんな事を教えてくれた、後ろに気をつけなさい。もう一人いますからということだった。どうやら彼はトレッカー達のことを知っていて、それ以外にもう一人隠れた人物がいることを示唆した。その話した事を信じられるかどうかは、俺たち次第だが、これまで起きたことを知っている事から信頼できる情報と思っている」。

「語られた話にシヨンはこう尋ねた。
「その話は他の誰かにしましたか」。
「いや、誰にも、今此処で話すまでは言っていない」。
アビンは問いに直ぐに答える。その事を聞いてシヨンは少し考えてから言った。
「たぶん、アビンさんにはもっと他のことも話しているでしょうね。それはわたし達に話せない裏の情報が含まれているのかもしれない。それが信用度を上げたのでしょうか。その話は伺いたくはありませんが、それが根拠ではありませんか」。
アビンはシヨンの質問に、彼女の鋭い洞察力に感心しながら、黙って肯き肯定した。
「そうですか、分かりました。この件については他の方には話しません。アンも口が堅いですしブルッフさんは、そうですねわたしが黙らせておきます」。
アビンは最後の言葉が気になったが、口外されないことに安堵した。
「さて、アビンさん。そうと分かればやっておかなければならないことがあります。この件については、ブルッフさんにも協力を願います」。
続けてシヨンが話す事にアビンは尋ねた。
「どういう事なんだ。それに彼女も加えて」。
その問いに答える前にシヨンはアンに言う。
「アンは、この前インタビューの打ち合わせの時のメモを持ってきて欲しいのだけれどいいでしょうか」。
「はい、分かりました。シヨン様」。
そう答えるとアンは奥の部屋に入っていった。
アビンはアンを見送ってからシヨンに尋ねた。
「いったい何を始めるんだ」。
シヨンは少し難しそうな表情をして言う。
「これは、予想なのだけれどインタビューの前後で近づける人物を特定できれば、もう一人を絞れるのではないかと思えたのですが、いかがでしょうか」。
確かにそうだとアビンは同意して肯いた。
暫くして、アンが奥から戻ってきてアビンの横に座った。それからメモを見ながら言った。
「どの様なことを知りたいのでしょうか」。
「では、公爵に近づける、いえ何か起きたときに側に居る可能性のある人物は誰でしょうか」。
シヨンは即座に尋ねる。
するとアンは暫く予定と手続きを見てから答える。
「それですと、かなりの人数になりますが、何か絞る指針をいただけませんか」。
シヨンは少し考えてからアビンに尋ねた。
「アビンさんですと、トレッカーの立場なら何時襲撃しますか」。
その質問にアビンは驚いたが、経験が無いので可能性で答えた。
「目的第一で自分を犠牲を顧みないのなら、インタビューの直前か直後で人の移動とかで警備に動きがあるときでだ。だれか外れても不審には思わないだろうから、配置につくための移動とか判断されることもあるからね」。
シヨンはアビンの答えを聞いてアンに言う。
「ということです。絞ってみてください」。
「分かりました。少しお待ちください」。
そう答えるとアンは、メモを調べ始めた。そして暫くすると終わったのかこう答えた

。「直前後で最も公爵のそばにいるのは、アリス・マクレガーです。その次が帝国の警護官のデビット・カーにロイ・リーベンスそれと付き添いとなるジョン・ホルスト、その次がこの船の副長のマティエリ」。
そう言ったところでシヨンが遮って言った。
「もう良いわアン。どうやら一人しかいないみたいですね。警護官はミュラの事件後に乗り込んできましたから除外ですね。突発事故までは予想してはいなかったはずですが。そこまで仕組んでいるには損失が大きすぎますから、それとホルストさんも除外ですね、彼ならもっと的確に行動するでしょう。ミュラの事件中に事を行って、今はこの船には残っていません。それで残りはマクレガー女史ですね。今のところ手懸かりは依然の取材の便宜ぐらいますが、少し調べて見る必要がありますね。どうですかアビンさん」

。質問を振られたアビンは、予想外の人物に内心驚いていたが、表情を殺して尋ねる。「それは、確かと言えるのか」。

シヨンは平静に言う。

「それは高確率でという意味です。確証はこれから調べて動機があれば確信になるでしょう。証拠はありませんが、出たときには手遅れだと思います」。

アビンは焦る気を押さえて尋ねる。

「どうやって調べる」。

その問いにシヨンは少し考えてから言った。

「そうですね。まずは端末を使って調べます。それを元にエド君に助け手もらいます。その次に彼女への探りです。これはアビンさんの仕事です」。

「俺が」。

あっけにと取られて尋ねるアビンにシヨンは、不敵な笑みを湛えて言う。

「そうです。何を尋ねるかは調べてから決まりますが、結果によってはアビンさんに一任という事になります。がんばってください」。

「丸投げかよう」。

そう言ってアビンは凹んだ。それをアンは慰めるように励ますのだった。

さてここまで話が進むと、それまでこの一部始終を聞いていたブルッフの処遇が気になる所だった。そこでシヨンが彼女に言った言葉はこうだった。

「ブルッフさん、今まで聞いたことをホルストさんや他の方に話しますか」。

その質問は直球だった。アビンはそんな質問に正直に答えるだろうかと疑問視した。そして当然の答えが返ってきた。

「誰にも話さないわよ。シヨン」。

するとシヨンは言った。

「誰にも話さないということは、物には喋る可能性はあるという事ね」。

アビンは屁理屈だと思った。けれどシヨンは大まじめに話を進める。

「さて、ブルッフさん。わたしからお願いがあるんですが、叶えて頂けませんか」。

ブルッフは少し震えるように答える。

「どういうことなのかな」。

するとシヨンは不適な笑みを湛えて言う。

「わたしの口づけを受けますか、それともメディカルセンターで体調不良で暫く寝るとどちらが良いですか」。

その問いをアビンは不思議に思ったが、ブルッフは理解していたのか、こう答える。

「体調不良で寝ます」。

するとシヨンは満面の笑みで言った。

「はい。交渉成立です」。

アビンはその言葉と裏腹に、かなりの脅しがあったのでは、と推測するのだった。実際そうだったのだが、彼はホルストから聞いた話を、この時点では忘れていたので真の意味を理解していなかった。

「では、行きましょうか」。

シヨンが言う。

「何処へ」。

アビンは尋ねる。

「メディカルセンターです」。

答えが返ってきた。

その言葉にアンが言う。

「既に十七時を回っています。先に食事を済ませては如何でしょうか」。

その提案にアビンは賛成だったが、事を進めるシヨンはどうなのかと気になったが、彼女の言葉はあっさりしたものだった。

「じゃ、食事に行きましようか。ブルッフさんもどうぞ。連絡はわたしから済ませておきますから。それとビットンブルーにスターンの面倒を見て貰うように連絡をしなければなりませんね」。

その言葉にアンが提案する。

「それはわたしが連絡しておきます」。

「では、お任せします」。

シヨンは笑みを湛えながら答えた。

アビン達は、部屋の留守をビットンブルー女中に頼んで食事に出かけた。

このことはアビンには心配だった、つまりそれは女史がその様な退屈な、そして数時間にわたって束縛されるようなことを、許すはずは無いと思えたからだった。けれどその心配を余所に快く承諾してくれたのだ。その理由は面倒を見ることになるスターン自身だった。このミュラの幼獣は何処でそれを覚えたのかは知らないが、人に上手くこびを売るこつをわきまえていた。それに加えてぬいぐるみの様なモフモフの毛並みは人を虜にして止まなかった。特にその肌触りと愛らしさは、というわけで女史は二つ返事で承諾してくれた。

これからアビン達が、何を始めるかを知るよしもなくに。

その後アビン達は夕食を済ませて、メディカルセンターに向かった。当然のこととしてブルッフも一緒だった。彼女を連れ立ったのは、まずホルストに対しての言い訳で、彼女が具合が悪くなりメディカルセンターに連れて行くと言うことと、暫く大人しくして貰うために連れて行くのだった。それからアビン達が向かう理由は、負傷者の見舞いという理由だった。けれど負傷者は既に船外に搬送されており、誰もいないことはホルストも承知していた。

けれど彼は、ションの話しに承諾を与えたのだった。このことはアビンに既に気付かれているのではと思わせた。事実、そうであった。ホルストはションが何か企んでいることを察知して、それでも承諾したのだった。たぶん後で色々と尋ねられることは、覚悟しなければならなかった。

だが今はそれでも良かった。調べたいことがあったからで、一番セキュリティの高いメディカルセンターの端末を使うには、この手が一番自然に思えたからだった。

それで今のところは、後で尋ねられることへの心配を忘れて受付でこう言った。「ゴールドベルク先生はいらっしゃいますか。知人が食後に体調を崩したのですが何かの食あたりかと思ひまして、見て頂けませんか」。

如何にも切実な表情でションが訴えた。

すると受付の看護師は、直ぐに先生の処に案内してくれた。その間アビンとアンは診療室の入り口にある席で待つことになった。

「毎回思うのだが、よく此処に来るなって。普通に考えれば医者の方に度々顔を見せに行くなんて、誰も歓迎しないんじゃないかな」。

アビンは座席にもたれて天井を見ながら独り言のように言う。

「そうですね。でもアビンさんこうしてると、なんだか嬉しくなるんです」。

アンは少しはにかみながら言った。

その言葉が、アビンは何を意味するのか分からなかった。疎いとも言えるのだが、それを自覚してか彼自身何も答えなかった。

その後、二人は互いに何も話す事無く、ただ肩を寄せ合って座っていた。それから暫くして奥から声があった。

「アン、アビンさん。中に入って」。

ションの声である。

二人はその言葉に、従って診察室の中に入った。

すると、それを待っていたとばかりにセシリアが言った。

「よくまあ、わたしの診察室をたまり場にしてくれちゃって、今度は何なの端末なら自由に使って良いのよ。どうせ断つても脅されるだけだし、誰かさんに」。

そう言いながらションの方をちらりと見てから、咳払いして言葉を続けた。

「それで、何かクスリが欲しいの、胃薬かしらそれとも鎮静剤なのかな、ただし此処には恋の鎮静剤はないけどね。ブルッフさん。貴方は疲れているようだから少し奥で休んで行きなさい。責任者の方には此方から連絡しておきます。ご心配は、いりません」。

そう言うのとクルリと背を向けて、手振りであっちに行けと指示するのだった。

「ありがとうございます」とションが声だけの感謝を述べて、アビン達に合図をして奥の治療室に入った。また此処の端末を使うのかとアビンは、半ば諦めがちに思うのだった。

さてこの度の検索は、以外と早い物だった。というのも調べる対象者が限定されていたこと、つまりマクレガーとベストラン公の二人だった。そしてその接触した時の状況は公式記録が多かったので検索は楽だった。けれどその記録にはションは目もくれず、それぞれの移動記録を調べるのだった。

そしてションはこう言った。

「あ、からさ、ま、な、記、録、で、は、そ、れ、ぞ、れ、の、し、じ、な、ど、が、主、な、の、で、す、が、移、動、時、の、立、ち、寄、っ、た、所、の、ど、は、ベ、ス、ト、ラ、ン、公、は、そ、の、立、場、故、に、記、録、が、残、り、ま、す。マ、ク、レ、ガ、ー、は、彼、女、が、シ、ョ、ッ、ピ、ン、グ、や、食、事、を、し、た、と、き、に、使、う、支、払、い、の、カ、ー、ド、が、彼、女、の、移、動、記、録、と、な、り、ま、す。そ、の、時、間、的、交、わ、り、を、見、つ、け、る、こ、と、に、よ、り、二、人、の、会、合、点、を、探、し、て、み、ま、し、た。ざ、っ、と、四、十、三、回、あ、り、ま、す、ね。こ、の、二、年、で、は、三、十、一、回、多、い、で、す、ね。あ、と、は、こ、れ、か、ら、実、際、に、会、っ、て、い、る、場、所、と、そ、の、時、の、記、録、が、分、か、れ、ば、言、う、こ、と、無、し、だ、け、れ、ど、そ、れ、は、無、い、物、ね、だ、り、か、も、知、れ、ま、せ、ん。こ、の、記、録、か、ら、本、当、に、会、っ、て、い、く、事、の、確、認、を、取、っ、て、み、ま、す。ま、あ、後、は、エ、ド、君、に、お、願、い、す、の、だ、け、ど、他、に、興、味、を、引、く、物、が、あ、れ、ば、何、で、も、調、べ、て、と、付、け、加、え、て、か、な」。

アビンは少し心配そうに言った。

「それで、向こうの見返りはどうするんだ。食事では済まないだろう」。

するとシオンは少し考えてからこう言った。

「そうですね。彼が欲しがっていた最新の高速コンパスをプレゼントということで折り合いを付けてみます」。

「それって、宇宙船に常備されている物ではないか、それにかなり高価だぞ」。

アビンが驚きながら言うと、シオンは平気な顔で答えるのだった。

「大丈夫です。わたしのところのプロジェクトで、使わなくなった物がありますからそれを許可を取って差し上げます」。

「しかし、それでいいのかい」。

アビンが心配そうに尋ねると、シオンはにっこり答えた。

「うちのプロジェクトではたいしたことありません。それに高速コンパスが高価なのは機体固有情報のバッチとアプリが高いだけで、それを除けば意外に安いのです。それでエド君なら自分で組めますから、本体だけで大丈夫というわけなんです」。

その言葉を聞いてアビンは、自分の無知を知らされたが、実際に複雑なプログラムと知識がいる事など一般の人は知らないし、ましてその手の仕事に関係していなければ知るよしも無いことではあった。

つまり高速コンパスは機材と、そのプログラム代金を合わせた料金で、売られているということなのである。だから腕に自信があり宇宙船の知識があり労を惜しまなければ、機材の代金で手に入るということなのだ。

さて話は高速コンパスのことで脱線してしまったが、アビンとしては少し為になる情報を得たことにはなった。

それからシオンは、メールでエドに調査依頼を添付ファイル付きで送った。

「では、明日の午後には回答をいただけるようお願いしましたので、明日の昼食後ここに来ましょう。それまで、ブルッフさんには此処で大人しくして貰う事になっていきます」。

そう言うシオンの言葉を聞いて、アビンは何処まで物事を先々まで考えているのだろうと感心した。それと同時に、犠牲者に祭り上げられたブルッフには同情を禁じ得なかった。

それからシオンは付け足すように言った。

「明日は、彼女の好きな物でもご馳走して労をねぎらうことにします。そうでないと可哀想でしょう」。

その言葉にアビンは、「だったら、犠牲を強いるなよ」と言いたかったが、どうも言わずらかった。

そしてアビン達は、ブルッフに別れを告げてメディカルセンターを後にした。

その時にセシリアは、今度来るときには、何か差し入れを持ってきて欲しいとかシオンに言っていたが、その何かはよく聞き取れなかった。それというのも彼は、アンに手を引かれて振り回されるようにして外に出たからだった。

それからアビンは二人を部屋に送ってから自室に戻ったが、すでに二十二時を回っていたのを見た彼は、妙な疲れを覚えた。

隠された関係、

隠された関係

昨日の約束でアビンは、シヨンとアンの部屋に昼食の誘いに向かっていた。実際、これからどうしたものかと考えていたのだった。昼食後にメディカルセンターに行き、ブルッフを引き取りに行く、という口実でマクレガーの情報をエドから受け取るのだ。そしてその情報を元に、彼がマクレガーに尋ねることになるのだ。実際何を、と考えるとその時決まるのだし、全て一任と言いそうで頭が痛かった。

アビンは約束に時間に、二人の部屋の前に来てチャイムを押した。すると返事がありドアが開いた。それと同時にアンが彼に飛びついて言った。「本当に来てくれたんだ」。

どうやら当てにはされていないなかったらしい、とアビンは思ったが、「君のために約束は守るよ」と歯の浮いた、自分には相応しくない台詞を言っただけだった。

それはアンの後ろで見ていた、シヨンにはお見通しだったようで、あきれ顔でこう言った。

「三文芝居な台詞を言っていないで、アンをエスコートしてください」。その言葉に従うように、アビンはアンの手を取って迎えに上がった旨を告げて、二人を連れ立って昼食に向かった。

この昼食は三人だけで取ることになっていた。というのも提督は既に今朝下船していて、アンだけが残ったのだった。当然の事として秘書のビットンブルーも提督と一緒に降りたのだ。それをアビンは、今朝早くデッキで見送ったのだった。そう言えば聞こえは良いのだが、早朝に呼び出され二人の安全を確約させられ、それと共にアンとの交際は認めるが、くれぐれも間違いの無いようにと念を押されたのだった。その時間、一時間強で別れの挨拶と言うより、脅し、いやパワハラと言った方が、正解かも知れないとアビンには思えた。よって話半分で聞いていた。ようするに要点が分かれば後は聞き流し、間に合わせて返事をして事なきを得た。これは、幼年学校時代に身につけた特技である。

ところで気になることがあった。それはスターンの処遇だ。今は部屋のバスケットで静かに寝ているのだが、離れている時間が長ければ長いほど、起きて彼方此方とかき回し悪戯し放題になるのは目に見えている。それをほっといて食事に出かけるのは、気が咎める、そこでアビンはシヨンに尋ねた。

「スターンはほっといて良いのか」。

するとシヨンが、乗り気が無さそうに答える。

「先程、出る前に相手をしてくれそうな人に頼んでおきました。帰ってくれば誰か分かりますよ」。

「俺と面識のある人物か、初対面だと挨拶に苦慮するんだが」。

アビンは正直に言った。なにせ提督の娘達の部屋に若い男が、一緒に入るものならどんな誤解をされるか分かったものでは無いからだ。けれど彼のそんな心配は、無駄であることが直ぐに分かった。

「ホルストさんの部下の方ですから、面識はもう十分あります」。

シヨンのその答えに、アビンはホッとすると同時に嫌な予感がするのだった。

その安堵とも取れる彼の表情を見てシヨンは、クスツと笑うのだった。

その事は何かおかしな事をしたのだろうかアビンを戸惑わせるのだったが、シヨンはそれ以上話さなかった。

そんな二人に対してアンが少し焦れったようにアビンの腕を強く締め付けるのだった。それに気付いてアビンは言う。

「アン。君は誰だか知っているんだろう」。

すると彼女は「楽しみにしてください」と答えるだけだった。

アビンは気が重いなと感じるのだった。

食事を済ませてから、アビン達はそのままメディカルセンターに向かった。

それというのも時間が惜しいことと、ブルッフを長く縛り付けるのも可哀想であったからだ。ただ後のことの方は、わざわざ出向くことも無くホルストさんに一報すれば事足りたのだが、それでは無責任ということらしかった。

正直に言えばついでなのだ。

センターについてする事は、昨晚行ったことの繰り返しの様なことで、用件を伝えてドクターに会い、ブルッフを見舞い、いや引き取りだろうとアビンには思えたが、様子を見てドクターに感謝、その間にシオンは奥でエドからのデータを受け取っていた。

アビン達がブルッフの身柄を引き取るために、アンと一緒に形ばかりの手續きと、ドクターからの経過報告を受けている間に、事が済んだのかセシリアが「ではお大事に」と言った所でシオンが奥から出てきた。

するとセシリアが皮肉たっぷりに言った。

「あら、もう一人重病の方がいらっしやったのでね。お加減はいかが」。

その言葉にシオンは平然と答える。

「御陰で助かりました。ドクター」。

この時、アビンとアンの二人は重い、と思ったのだった。

それから受付の看護師に挨拶をしてから、メディカルセンターをでて、喫茶室に向かった。

この時アビンは、向かうなら部屋かそれともブルッフのために食堂だろうと思った。

しかし、シオンは先ずは軽いものをと考えたようだった。

そして、彼女のためにシオンが注文したのはパンケーキだった。

そのパンケーキにはかなりのカットフルーツが盛られており、ウエイトレス曰く「疲れも吹っ飛ぶフルーツメガ盛りです」と言って去って行ったが、アビンには驚異としか目に映らなかった。

それもそのはず、その量はパンケーキの厚さより五倍以上も高く積み上げられており、さらに彼には昼食後直ぐに食事をするような行為は考えられなかったのである。当然のこととして彼はコーヒーを飲んだだけだった。

このパンケーキでブルッフの機嫌が取れたのかは、興味が無かったが彼女たちの談笑から、あながちそうでも無いかも知れないと思えた。実際はどうだったかは本人には聞くことは無かったし、たぶん自己満足なのかも知れないとの考えも否定できない。要するに彼には理解できない行為であったのだった。

それでも一時の間、そこで過ごしてからシオン達の部屋に戻った。

そしてドアを開けると、そこにはホルストとラッセンがいた。

「やあ、お帰り」。

ホルストが出迎えるように言うと、ラッセンがスターンを抱えながら「お帰りなさい」と言いながら奥から出てきた。

すると駆け寄るようにアンが「大人しくしてましたか」、とスターンに話しかける。それと同時にブルッフはホルストに今回の件で謝罪していたのだが、ホルストは攻めることなく無事なことを喜んでいた。

それから、ホルストはシオンに尋ねた。

「それで、今回の事について詳しく聞かせて貰えるんだろうなシオン」。

「ええ、それを信じるかどうかはホルストさんの問題ですが、入り口での立ち話もなんですから、ソファーに着いて話しましょう。それからアン、奥からノート端末を持ってきてください」。

そうシオンが言うとアンは奥の方に向かった。

アビンはアンを見送ってから尋ねた。

「俺もまだ聞いてなかったが、何か収穫があったのかい。シオン」。

するとシオンは手の平を軽く彼に向けて、制止するように言う。

「それは少し待ってください。先ずはホルストさんに事の次第を伝えてからです。それに何か仰りたいこともある様ですから」。

その言葉にホルストは、やれやれというような素振りを見せてから言った。

「先ずは、そちらの話を聞かせてくれ」。

そこでシオンは事のあらましを話し出した。

「先ずは、このことつまりもう一人いるということに確信が持てたのは、一つにはホルストさんもお存知なように、わたし達を監視するような人物をトレッカー氏と話しているときに認識したこと、とアビンさんが昨日話して下さった興味深い人物からもたらされた、もう一人いると言う情報です。そのもたらした人物の言葉を借りれば、自分はベリアエンジェルのベリアルだということです。アビンさんとの何らかの商談があったようで、そのお礼に受け取った情報のようなのです。詳しくは企業秘密なので、ようアド

ンさん」。

突然に話を振られてアビンは、慌てて肯く。

「それで、少し考えてみたのですが、今回のミユラーさんの寸劇で、怪我人を多く出したようですが、トレッカー氏の手駒はほぼ尽きたかんがえられます。そこで次にどう出るかと言うことにはないと思いますが、一番確実なのは自分の身を顧みず行動することです。さてこれが成功する確率は如何な者でしょう」。

シヨンはあえて尋ねるのだった。

「かなり低いな、警備の隙を見て近づくとしても何人かに止められる。既にマークされているのだから確実に止められるな、よほど意表を突いた行動をしない限りは失敗だろう」。

ホルストは評価するように答えた。するとシヨンは続けて話し出す。

「そうですね。それで終わってしまいます。けれど、先程も話しましたようにもう一人いるとしたらどうでしょう。その人物は彼の失敗を既に予見しているのではないのでしょうか。そうすると、今度はその人物が密かに公爵に近づいて事を行うことになるのではありませんか」。

するとホルストは言った。

「向こうが諦めるとは考えなかったのか」。

それに答えてシヨンが言った。

「それはないと思います。これまでの準備された計画の周到さと、実行部隊以外にも連絡員兼実行犯として、密かに人員を潜り込ませている辺りはこの計画を絶対に成功させる意志が感じられます。それに加えて損害が多くても実行し続けていることから、その点が明白では無いでしょうか。そう考えますと、実際にトレッカー氏が行動を起こしたときの対処で警備が付くのは当たり前ですがそれ以外に誰が側に居るかと考えてみました。すると打ち合わせの時のメモからマクレガー女史が警備以外で側に居ることが分かりました。それで、少し確証が欲しくて調べさせて頂きました」。

シヨンの語る最後の言葉にホルストの表情は険しくなって言った。

「またやったのか」。

「いえ、この船からは表面的のことしか調べられません。エド君にデータを送って調べて貰いました」。

シヨンは事も無げな表情で答えるが、ホルストは首を傾げながら言った。

「あのハッカーか、足の着くようなことはしてないだろうな。後の火消しはゴメンだからな」。

「その点は、ぬかりないと思います」。

ホルストの問いにシヨンは即答した。

その時、奥からアンがシヨンの端末を持って戻ってきた。

「ありがとう」と言ってシヨンは端末を受け取るとテーブルに置き三次元ホログラフィックを展開させた。

それからシヨンは幾つかのブロックを浮き上がらせてから説明しだした。

「先ずはこれを見てください。これはマクレガー女史の渡航記録と宿泊記録に購入記録の時系列グラフです。そして、此方がベストラン公の公式渡航記録に公式会合及び宿泊記録にプライベートの移動記録です。同じく時系列グラフにしてみました」。

そこまで話したときにホルストが言う。

「プライバシーの侵害で訴えられるぞそこまで調べると」。

「いえ、大丈夫です。ベストラン公は公式の記録ですから公になっていますし、プライベートと言っても覗き見したわけではありません。報道記録に載っています。それにビットンブルの記録も何を買ったのか何をしたのかの記録では無く、移動確認された記録を、そうですね会社に提出する業務記録くらいのレベルです。ただ、ぎりぎりの線もあります」。

そのシヨンの言葉にホルストはため息を付いた。その理由をアビンは尋ねる気にはなれなかった。

「興味深い事に、両者の記録をこの様に重ねるとかなりの回数交わる所があります。

これは偶然なのでしょう。そこでエド君に調べて貰いました」。

そう語るシヨンの言葉にホルストは複雑な表情をするのだった。

続く言葉はこうだった。

「先ず重なる回数は四十八回です。わたしが調べた回数より多く。この結果はエド君が

わたしの検索を元に、改めて調べた結果です。そのほぼ全てで二人は会っていることが確認されました。ただこれだけでマクレガー女史が、もう一人の人物との確証を得るものとはなりません。ただのプライベートと言ってしまえばそれで終わりです。けれど十分に調べて見る価値はあります。それで、調べて貰いました。過去にさかのぼりベストラン公が事を構える動機を得る三年前までの間で、公の家族の近辺事柄を調べてもらいました」。

するとホルストが呆れた表情で言った。

「そこまでの記録は膨大だぞ、日がな一日で終わる量では無いはずだ」。

シオンは即答する。

「確かにそうです。ですが此処は勤なのですが、公の亡くなったご子息に焦点を当ててみました」。

「過去の人物を、掘り返すのか」。

ホルストは少し嫌みな言い方をする。

「本意ではありませんが、動機を起こす原因として一番考えられる事として普通考えられますから、間違っていればそれでもかまいません」。

シオンの謝意が少し込められた言葉にホルストは、浮かない表情で言う。

「分かった続けてくれ」。

するとシオンはキーを操作して別のグラフ出して言った。

「これはベストラン公の長男のリチャードの行動記録です。殆どが軍関係で機密扱いですが、それを除いた記録で表示してみました。これから部隊が何処に移動したかが分かってしまうのですから、機密は体裁だけともいえなくはないですね。これをマクレガーの記録と重ねてみましょう。どうでしょう」。

グラフを見てアビンは言った。

「なんだこの重なり具合は」。

そこには殆どの記録が重なり合っているのだった。するとシオンは言った。

「どうやらエド君が気を利かせてくれたようで、いくつかの記録画像を添付してくれました。見ます？」。

「じらさず見せたらどうなんだ」。

ホルストは楽しむように話すシオンを窺める。

「わかりました。先ずこの画像を見てください」。

そう言って一つの画像を紹介した。そこに映ってるのはどこかの町の市場の様だった。別に決定的な場面というわけで無いようだったが、シオンはこう言った。

「これだけではよく分かりません。そこで此処のテントの横を拡大してみましょう」。

するとそこに現れたのは、テーブルに向かい合わせで座るカップルの姿だった。一人は軍服の若者。将校の様だった。そして女性は、マクレガーだ。

アビンは気付いていった。

「マクレガーは誰と話をしているんだ」。

それにシオンが答えた。

「ベストラン公の長男のリチャード氏です」。

「よく見つけたな。でも他の全部もそうなのか」。

今度はホルストが尋ねる。

「はい。画像は全部ふたりの会合の様子を写しています」。

シオンはホルストに答える。けれどホルストは言った。

「それだけで、マクレガーとリチャード氏が親密だったとは言えないぞ」。

するとシオンはキーを操作しながら言った。

「確かにそうだと言えます。他人のプライバシーをのぞき見る趣味はありませんが、エド君は何か気になったのかこの様なものを見つけ出しました」。

するとそこに映し出されたのは、帝国軍の身辺上申書でリチャード氏が亡くなる前に提出したものだ。そこには、近々結婚する旨の報告と相手について記載されており、軍の調査機関のチェックの印と許可の文字が記されていた。

その相手はアリス・マクレガーとなっていた。

この記録はプライベートとはいえ機密事項や個人情報のレベルが低く、正規に手続きをすれば誰でも見れるものだった。だが此処に行き着くには相当の調査が必要とも言える。

ホルストは腕を組みながら尋ねた。

「何時から調べていたシオン」。

するとシヨンは答えた。「エレナさんが、マクレガーさんについて話された時からです。あの方の記憶があいまいだ、と言う話が気になりエド君にそれとなく調べて貰いました。ホルストさんもご存知でしょう。エレナさんの記憶の良さ、嫌がってましたでしょう。でも、マクレガーとの事は忘れていたんです。彼女から話を振られるまでは、変でしょう。だから調べて貰ったんです。何か有ると思ひまして」。

その答えを聞いてホルストが言った。「相変わらず勘が鋭いな。今回は褒めておこう」。

「ありがとうございます」。

シヨンは素直に受ける。それからこう言った。「以上の記録からマクレガー女史には、ランカスター公爵に対する私情が存在する可能性が有ります。純然たる動機が存在すると言い換えることが出来ますが、残念ながら証拠は有りません」。

そう言って、シヨンはいかにも残念そうに口を閉じる。

するとホルストが、肯きながら言った。「可能性だけだな、でも状況証拠としては十分疑う余地もある。白では無いけど黒として断定するには証拠も無い。そういうことだな。そしてベストラン公と度々会っている可能性があるということで、どう判断するかねアビン君」。

突然、言葉を振られたアビンはどう答えて良いか分からなかった。そこで思いつきで言ってみた。

「マクレガー女史がもう一人と考へて対策を考へてみては如何ですか」。

するとホルストは首を振っていった。「トレッカーがどう行動するか分からないのに、その上にマクレガーについて対策を考へるのは無理があるのではないかと不確定要素が多すぎる。そうだなそれについては君が発端だから考へてくれ、そして後でどうするか報告を、そうだな今日の夕方までだ、無ければ無いといってくれ」。

アビンは自分に問題が押しつけられたと感じた。当のホルストとしては各人の臨機応変に期待してのことであつたが、それはアビンには分からなかった。

要点は、各自が常に不測の事態に備えておいてくれ、と言いたかつたのだが、この若者に少し宿題を出してみたくなり彼に任せてみる様な事を言つたのだつた。

さてここまで話しが為されて分かつた事は、残り二人の行動を警戒する必要があるということを決まりだつた。トレッカーについてはマークはしやすいが、マクレガーについては、そうとも行かない。それは確たる証拠がないわけで警戒対象とするには他を説得するには、根拠に乏しいが動機は怨恨のせんでいける。しかし、それでは他のものは納得しないだろう。なにせ相手は報道機関の人間で、その点の理性はあると見られている人物だからだ。

「この話はこれで終わりかな」。

ホルストが冷たく言い放つ。

するとシヨンは結論が出せない苛立ちを紛らわすように、こう言った。「仕方がありませんね。証拠が無いのですから、事が起きてからでは遅いのですが、これ以上は無理なのでしょうね」。

その言葉を受けるようにホルストは、あっさり言つた。

「そうだ、そして今の話は誰にもするな。分かつたかな君たち」。

するとその場にいた者は全員が黙って肯いた。それは反論しようも無かつたからだ。

これでこの集まりは終わることになった。アビンがシヨンの部屋を出ようとしたときに、ホルストは彼の耳元で囁いた。

「何か、必要な物があれば言ってくれ。ある程度はそろえてやれる」。

その言葉にアビンはただ「ありがとうございます」と答へただけだつた。

そう言うとアビンはそのまま部屋を出て、教授の部屋に向かつた。

彼自身何か思うところが有つた訳ではなかつたが、考えをまとめようと歩きながら考えあぐねていった先が、偶然、教授の部屋だつたにすぎなかつたのだ。

そして、アビンはドアの前にいた警備の者に制止させられた。

そこで彼はようやく自分が何処に着たのかを理解したのだつた。アビンが返答に迷っているとドアが開きランカスターが出てきて言つた。

「アビン君、そこに立っていないで中に入りなさい」。

アビンは告げられるまま中に入った。

当日、

当日

翌日、つまり公爵、ランカスター教授のインタビューの日になった。
昨日はあれから教授の部屋で事の経緯を話さねばならなくなって、その後、夕食も一緒に取る羽目に陥り散々だった事を、アビンは思い出していた。
そう言えばホルストに対処方法を連絡すると言うことで、教授のいいなりに面制圧の出来る携行火器と携帯銃を用意してくれるように頼んだ。その理由を問われて不測の事態の対処と言うことにして、最後に公爵からの伝言で「二人は必ず動くから、わたしの背後を守ってくれ」と伝えた。
どうやらそれだけでホルストは事の次第を理解したようで、短く「了解した」と答えるだけだった。
それはそれで彼にとっては拍子抜けした回答だったが、ある意味、既に誰かの計画の想定内のことだのかも知れなかった。
そのように、アビンは昨日のことを思い出しながらイベントホールに一人向かうのだった。
アビンがホール入り口に着くとヘンツェに静止を告げられパスカードの提示を求められた。その時彼はこう言った。
「悪いな、これも取り決めだ。だがこっちも厄介ごとになり出されている意味では同類ってことだがな」。
ヘンツェはそういてから、アビンにバイオリンケースと厚手の本を手渡ししながら言った。
「君はバイオリンが弾けるかい」。
「いいえ。触ったこともありません」。
そうアビンが答えるとヘンツェは、残念そうに頭をかきながら言った。
「じゃあ、それアンに渡してくれ。それから暇だったらその本に目を通してくれと教授からだ」。
そう言うアビンにケースと本を手渡してから、肩を軽く叩いて「はい。大丈夫だ、中に入れてくれ」と言ってホール内に入れられた。
そこに入ってアビンが最初に見たのは、前回とあまり変わらないステージの様子だった。それから辺りを見渡すと変わってるものが有ることに幾つか気付く。それはギャラリーの席がプレスの機材の置かれたテーブルを挟んで左右に分かれていたこと、と照明の位置がこの前より前に配置されていることだった。
これはアビンは入り口の直ぐ側で気が付いたことだが、他にも変化はありそうだった。そう考えながらアビンがギャラリーの席に向かって少し歩いたところ、照明の影からアンとションが現れて言った。
「少し遅くはありませんか」。
こう言ったのはションだったがアンは彼を労うように言った。
「少しお疲れではありませんか。まだ時間もありますからゆっくりされれば宜しかったのでは」。
こうも言葉のかけ方が違ふとかえってすがすがしかった。ただ、どちらも内容はどうあれ丁寧な言葉だったのはかえって居心地が悪い。
二人に会ったアビンは、直ぐさま先程のヘンツェの言葉を思い出してアンにバイオリンケースを手渡すのだった。
「これを君にとってヘンツェさんから手渡されたんだが、弾けるんだね。でもバイオリンって重いんだね」。
そう言いながらアビンはアンに手渡す。
するとアンは怪訝そうな面持ちで答える。
「アビンさんこれはバイオリンにしては重すぎます」。
その言葉にションがとっさにアンの持つ手からケースを取り上げて覗き込むように開けた。それからそっと締めて言った。
「いったい何を注文されたのですか」。
「どういう事だ」。
するとションはアビンに耳打ちするように言った。

「中身はインパグシヨシニアサルトライフルです。」

その言葉にアビンは驚きながらアンに分からないように言った。

「俺は教授の提案通りに面制圧の出来る火器を頼んだだけなんだが」。

するとシヨンは、如何にも嫌そうにため息を付いて言った。

「それは、如何にもあの人たちの考えそうなことです。アビンさんは乗ってんですか」

。「俺に選択権があるとでも思うか」。

そのアビンの言葉にシヨンはキツパリ言った。

「いいえ。ないと思います」。

今度はアビンがため息を付きながら言う。

「なら聞くなよ。俺だって昨日、教授に事の次第を話したときに此処は何時ものピンチの時の打開策だ、とか言って丸め込まれたんだ。ということはこの厚手の本は」。

そう言いながらアビンは本のページをめくって行くと、お約束通りショックガンが収められていた。これでいったい何をしろというのだ、まさか何時ものトラブルの時のように騒動を起こして逃げろということなのか、とアビンは思ったが、その時何か頭の隅で引っかかるものを感じたが、それが何かはこの時は分からなかった。

アビンが本を開いて固まっているのを見てシヨンが言った。

「内容はショッキングなものなのですか」。

「いや、あからさますぎてあっけにと取られていた」。

そう答えるアビンの手元をシヨンは覗き込んでから言う。

「どうやらその様ですね。あの手の方々は、これが解決策だと思ったりするのでしょうか」。

「どうだろう。教授にはそうあってほしくは無いのだが、なにせ今は学者なんだから」

。アビンが確認するように答えると、シヨンは少し離れてから言った。

「手にするものが何かによって人は変わることがあります。アビンさんはどうでしょうか。自身に確信がありますか」。

その言葉は彼に語られていたのだが、何か別のものに話しているような感覚をアビンは覚えた。

それでも彼はこう答えるのだった。

「力が人を変えたいのか、シヨン」。

すると彼女は少し微笑みながら言う。

「どうでしょう。本当に強い人は持たないのではありませんか」。

「言っている意味が分からないのだが」。

アビンが尋ねるとシヨンは、身を翻して背中を向けて言った。

「言葉通りです」。

そう言うとシヨンはアンとアビンを残してギャラリーの席に向かって歩き始めるのだった。その後ろ姿を見ながら彼は自信の中で「訳の分からんことを」と、言ってからアンの手を取ってシヨンの後を追った。

それからアビン達はステージに向かって右側の席に座るようブルッフに指示され、周りの様子を見ながら一番外側にアビンそしてアンにシヨンという順番で席に着いた。

アビンは本を読む振りをしながらシヨンに尋ねた。

「この備品は、誰の差し金だと思う」。

するとシヨンは素っ気なく答えた。

「そうですね。伯父様達の考えでは無いでしょうか」。

「ヘンツェさんに持たされたんだが」。

「それは、ホルストさんが手配したんでしょう。伯父様に頼まれて」。

「そうなのか。てっきりホルストさんが気を回してくれたのでは、と思ったのだが」。

そう言いながらアビンは上を見上げて見た。その時、彼は三階の入り口にトレッカーが立っているのが目に入った。その位置を慌てて探そうとしたが、既にその場を離れたのを見つけることは出来なかった。

アビンはその時、既にトレッカーは行動の準備をしているのだと思えた。

「どうかいたしましたか」。

アンはアビンの様子に気が付いて尋ねる。

「いやなんでも無い」。

アビンは「ごまかすように答える。するとシヨンが口を挟むように言う。「アビンさん。落ち着きが無いですよ」。その言葉にアビンは事の次第を知ってるくせに、如何にも関係無いとばかりに話す彼女の言葉に、言い返したかったがその言葉を飲み込みあえてこう言った。

「以前とは、配置が換わってるなってね」。するとシヨンはそれに同意して言う。「ミュラーさんの件も有りましたからセキュリティを強化する配置にしたんでしよう」。

「ということは、この前には緩かったということなのか」。「それを言っちゃ悪いでしょうが、まあ、そういうことでしょうね」。

アビンはシヨンがそれとなく同意するの妙に心地よかった。ハッキリ言っていたわいの無い話である。「本当ですね。この前より人が多いです」。

アンはアビンとシヨンの話しに合わせるように言った。その時、三人のもとにホルストが現れた。「やあ、三人とも、おはようさん。今日は大人しく見学してくれるかな」。その言葉は、如何にも彼らが邪魔な存在であることを臭わす発言ではあったが、警戒心がある話し方では無かった。

そこでアビンはこう答えた。「お言葉ですが、此方は見学組なんですけどどうやってお邪魔できるんですか。それに俺に物騒なものを持たせたのは其方でしょう」。

「俺はリクエストに応えただけなんだが、それと出来れば使ってほしくない。後片付けはもうゴメンだからな」。

アビンの言葉にホルストは鼻で笑って答える。それからこうも言った。「そうだ提督からの伝言だ。娘は無事に帰せだ」と。

アビンはその言葉を聞いて、この件を言い出したのはそちらの方ではないかと思っただが、あえてその言葉は飲み込んだ。それを察したのかホルストはこう言った。

「今は、年寄りの話は聞いとくものだ。後でご褒美が出るかもな」。そう言って笑いながら去って行った。「いったい何しに来たんでしょか」。

シヨンは去って行くホルストの背中を見ながら不満そうに言った。アビンは複雑な気持ちで「それを俺に聞くのか」と呟いた。それは当然のことで、彼より面識の長いシヨンの方がホルストの性格は知っているはずだからだ。

そう考えながらアビンは、この前の提督の時と違いステージの配置が様変わりしていることに妙な感じを受けていた。何故だろうと端から目視し始めた。

すると妙なことに気が付く、この前の背景の観葉植物のプランターの間隔が狭くなっているのと丈が前から次第に高くなっている。そして最後は人の丈よりも高くなっている。これでは警備上どうなのか、と思ってよく見ると何かの線が張り巡らされているのが分かった。これだと撮影の時に後ろの照明を落とせば分からなくなる。よく考えたものだ、とアビンが思っているとまだ気になる所があった。それはステージが以前より幾分高く設定されている。それは前回が階段の高さの二段目位だとすると今回は三段位になっていた。この違いは微妙だが、インタビュー席を囲むように配置された観葉植物の鉢が、障害物となり接近し辛くなっていた。

それから何か他にありそうな気がしてアビンは周りをそれとなく見渡した。その目に映るのは、今盛んに準備をしているスタッフに警備の者達だった。この時アビンは気が付いていなかったが、ホルスト達が緊急の防護設備を床に据えていた。

この様に皆がまだ動いているときにはトレッカーも行動を起こさないだろうとアビンは思った。なにせ関係の無い動きをするものは直ぐに分かるからだし、まだ公爵はホールに入ってきてはいなかった。それに、いつ入場するのかは誰にも知らされていなかった。

そう考えているとき誰かが、彼の服の袖を引っ張るのだった。アビンは袖を引っ張る手を確認してから目を上げた。そこにはアンが不安そうな表情が浮かんでいた。

「どうしたんだい」。

アビンは何事の無いように静かに尋ねる。

するとアンは少し泣き出しそうな表情で答えた。

「いくら声をかけても、聞こえないものだから不安になって・・・」。

その後の言葉は声に出なかった。どうやら彼女はアビンがどうかしてしまったのか心配したようだった。

そこでアビンは両肩を抱くようにして優しく言い聞かせるように言った。

「大丈夫さ、少し考え事をしてたんだ。それで君の声に気が付かなかった。ゴメンよ」

そう言ったところで隣に座っていたシヨンが咳払いをしてから告げた。

「二人の世界に入るのはいいですが、人の目は気にしてください」。

その言葉に二人は周りを見渡すと、どうやら注目を集めてしまっているようで多くの視線を感じた。それと同時にアンは耳まで真っ赤になって俯いてしまった。

そこへブルッフが来て、少し含み笑いをしながら言う。

「貴方たち注目されているわよ。三人とも可愛いから。確かアビン君とアンちゃんが公認の仲なのよね。シヨンは不満じゃ無いの。それとも気にならないのかな」。

アビンは何と何を話し始めるんだと思っていたが、アンの手前反論することが出来なかった。それにシヨンがどう思っているのか、と何を彼女の言葉で始めて気にした。

そこでアビンはシヨンに目をやった。すると彼女は如何にも、つまらなそうな表情をして辞め息をついた。それからこう言った。

「相も変わらず下世話な考えをするのですね。二人には失礼ですが、アビンさんとアンはお似合いだ、とわたしは思ったので少しお節介をただけなんです、伯父様はその事がどうやらお気に召したようで上機嫌でした。どうやら娘の父親を演じるのに憧れていたようでこのことにご満悦のようです」。

その言葉は丁寧だがかなりの皮肉が込められたいるのが分かった。それと自分とアンとを結び合わせた張本人は、彼女だと言うこともこの時分かった。

ただそれと同時に何故そうしたのかという疑問も湧いた。ただのお節介だけという感じがしなかったからだ。

ところでシヨンの発言を聞いたブルッフは真面目な表情で「そうなんだ」、と言って感心していた。いったい何に感心したのかはアビンにも分からなかった。後で聞いたがアンもシヨンも彼女が何故感心しているのか分からなかったし、シヨン自身も自分の発言の何処に感心するところが合ったのか不思議がっていた。

それはともかくブルッフは感心しながら彼女が来た理由を述べた。

「あっ、そうそう今、公爵が入ってこられるそうよ入り口で手順の確認をしてるけどすぐに入ってくるわ。それで貴方たちには、ギャラリーとして公爵が入ってくる時に拍手をしてほしいの、質問は無し合図したらお願い。以上ではよろしく」。

そう言うと彼女はアビン達の前から五歩ほど離れて立った。

そしてこの事を待っていたかのようにホールにランカスター公爵が入ってきた。と同時にブルッフの合図でアビン達は歓迎の拍手をするのだった。この行為に関してアビンはどことなく気恥ずかしさを覚えたのだが、周りを見渡して皆が同じ事がなされているのを確認すると成り行きに任せることにした。

ところで当の公爵本人は、というこの歓迎にご満悦なのか片手を上げて応える仕草をするのだった。

歓迎の拍手が終わる頃に、マクレガーが歓迎の意味を込めた挨拶をする。

その言葉は、まだ完全に終息していない拍手にかき消されて聞き取れなかったが、昨日すでに公爵には一連の調査結果を報告してあるので、彼女の事も承知しているのか握手をしなかった。この場合は、公爵に彼女が握手を求めるのは、非礼に当たるのでまずあり得ないので、公爵自身が求めない限りは接触はない。やはり何かの事件が起きなければ、彼女に接触する事は起きないだろう、とアビンは思った。

そしてここからだアビンは身構えた。それは、ここから公爵がインタビューの席に着くまでに、各人員はその場に着く為に移動する。既に配置を終えている者もいるはずだが、それでもスタッフや各入り口の人員には移動がある。

すると公爵が席に着こうとした矢先、ステージの右袖から駆け寄ってくる人物がいた。トレッカーである。

。彼は、警備の隙を突き最短で、障害の一番少ない三つの進路の一つから突進してきた。

。その間、数秒、アビンは彼の動きを目で追っていたが、突然動きが止まりそしてステージに倒れ込んだ。その距離、公爵まで四メートルほどだった。どうして倒れ込んだのか、とアビンがトレッカーの足下を見ると何かが絡みついていた。どうやらホルストたちが何か仕掛けていたようだった。

そうしているうちに警備員がトレッカーを取り押さえるために集まってきた。こうなるとその目的を果たせなくなったトレッカーは、もがくこともなく大人しく取り押さえられるのだった。諦めが早いのでは、と見て見ているとどうやら彼は軽いショック状態だった。取り押さえられるまで動けなかったらしい。

それを見てアビンはホルストの仕掛けたトラップは麻痺機能付きの物のようだった。それも短時間の。

トレッカーは警備員の二人に抱えられるようにして起き上がると、公爵を睨み付けるような表情をして何か呟いたが、アビンのいる位置からは聞き取れなかった。

そのときアビンは昨日の公爵との会話が脳裏をかすめた。そのときこう言われたのだった。

「アビン君、君は諜報機関から私を監視するようにいわれて来たんだ。君は私を監視するだけが仕事なのか。他にも有るんだろう、それは何だい。いつ果たすつもりなのか。その顔だと言うつもりは無いみたいだね。それとも命令待ちかな」。

確かにアビンにはその問いに答えられなかった。

そのときすでにアビンの目には妙な動きをするマクレガーを捕らえていた。

突然、アビンはアンの持っているバイオリンケース取り上げて開け、中からインパクトアサルトライフルを取り出し安全装置を解除すると天井に向けて引き金を引いた。

そのけたたましい発射音はその場にいる全員を一瞬停止させる。

不審な動きをしていたマクレガーも当然動きを止めた。

この不意に起きた出来事は、一同の注目をアビンに集めた。

「全員、その場にとどまれ。動くな。マクレガー、あんたは公爵から離れろ撃ちはしない。公爵、あんたはその場を動くな」。

アビンはいかにも荒っぽく聞こえるように言うのだった。

その声に従うようにマクレガーは、公爵のそばを離れてステージから降りる。

「よしいだろう。トレッカー、あんたには失望したよ目的を果たせずに最後はみっともなくこけやがって。あんたの出番はもう終わりだ。警備員、そいつを解放しろ。さて公爵、あのときの問いをここで答えてやろう。その命令はあんたを処分しろというものだ、いままでいろいろとこき使ってくれたがこれで終わりだ、ここであんたは死ぬんだ」。

アビンは引き続き荒っぽく言いながらアンの腕を片手でつかんで自分に引き寄せる。

するとホルストが言った。

「こんなことをして無事に逃げられるものか」。

それにたいしてアビンは言った。

「ここに人質も有るし、逃げるための最新鋭の戦闘機がこの船にはのっている。それを使うさ、悪いがホルストさん、あれを使わせてもらう。飛ぶ前にはシオンに調整してもらってから帝国には無事に帰らせてもらう」。

ホルストはいらだちながら言った。

「あれを使うのか。やめてくれあれはお客さんに渡さにやならんものだ」。

その言葉にアビンは口元に笑みをたたえながら答える。

「何だったら後で帝国にでも請求してくれ。帰ってくる保証はできないが」。

するとヘンツェが何かしようと身構えたが、ホルストはそれを制して小声で何かを告げた。その様子を見てもアビンは気にとめなかった。

それから警備員に言った。

「不甲斐ないとはいえ同士の拘束は見てられんな。せつかく取り押さえたのに悪いが彼を離してもらおう」。

アビンはインパクトアサルトライフル動かして離すように合図した。

このことで解放されたトレッカーは、それがいかにも不服で有るかのように体を振ってアビンの元に近づいてきた。

するとアビンはインパクトアサルトライフルを彼に向けて言い放った。

「おっと、仲間と思っているのは困る。俺は敗者が嫌いだ。今のうちにこの場を去って船を下りる算段を始めな。でないとまた捕まるだろう」。

その言葉にトレッカーは逃げるようにホールを出て行った。

それを見届けるとアビンはマクレガーに言った。

「あんたの右手に隠し持っている物は何だ」。

その言葉に彼女は慌てて手を背中に回した。そのときいつの間にか近づいていたイワノビッチが、彼女の腕を押さえ込んでねじ伏せた。

すると彼女の足下にコトンと小さな金属の棒みたいな物が落ちた。その棒をブルッフが拾ってホルストに見せると彼は言った。

「毒針が仕込んで有る棒のようだ。どんな物かは後で詳しく調べるとして、この寸劇を演出したのは公爵ですか」。

その言葉にランカスター公爵は眉一つ動かさず答える。

「いかにも私だ。アビン君とは危ない橋を何度も渡ってきたからな、このようなことは心得ているのだ」。

その言葉にホルストはため息交じりに言った。

「そうですか。こちらは半信半疑でしたが、信用しろの一言でここまでやるんですか、こっちは寿命が縮む思いでしたよ」。

だが公爵とアビンは、その言葉は嘘だなどと思った。すでにこちらの動きを予測したうえで演じたのだろうと。

ここに来てアビンはもう悪役を演じる必要の無いことを確信してインパクションアサルトライフルをおろしアンを解放した。けれどアンはそのまま彼のそばに付いて離れようとはしなかった。

公爵は取り押さえられているマクレガーに近づいて言った。

「それほど私が憎いのかな。けれどあなたが自分の手を汚すべきで無い」。

その言葉に彼女は唇をかんで答えなかった。

「この件に関して、経緯は幾らか聞いたが、私としても調べてみることにする。その後どうするかは決まるだろう。それなりの責任が私にはありそうだからな」。

そう言ってからアビンとションの方を向いてこう言った。

「君たちが調べた資料を後で提出してくれ」。

その言葉にアビンは「わかりました教授」、と答えた。ションはというと「おじさまの望むとおりにしますが、耳の痛い報告もしなければなりませんがいいですか」、というものだった。

すると公爵は短く答えた。

「かまわんさ」。

その言葉が語られたと同時にマクレガーは身柄を拘束されて警察に引き渡された。

それから、逃がしたトレッカーの後を追って警備員とホルストたちはホールを後にするのだった。

逃走の果て

トレッカーは格納デッキに急いでいた。それはアビンの語っていた、そしてミュラーから教えられた最終手段として使える戦闘機がそこにあるからだった。けれど当然のこととしてホルストたちもそのことを予測して、同じく格納デッキに急いでいた。

アビンたちは、それに遅れて後を追うことになった。というのも借りたインパクションアサルトライフルをバイオリンケースに戻しヘンツェに渡すのに時間が掛かったからだ。結局の事だが、もう一つ渡されていた本に仕込まれた銃も当然返却した。彼自身は扱いに慣れてはいたが、持ち歩くのは嫌いだったので、事が終わり次第に返却したのだった。

トレッカーは最短の経路で格納デッキに急いだつもりだったが、この船のことを熟知しているわけでは無かったので、いささか遠回りをして到着した。

そのおかげで、あらかじめ配置されていた警備員に捕まることを避けることができなくなったのだ。警察は最短経路を想定して配置を行っていたからだった。これは逃走経路を考えて搭載艇を使って逃走するのではとの判断からだった。当然だがトレッカーもそのことを承知していたから、搭載艇格納庫では無く格納デッキに急いだ。

余談だが搭載艇格納庫と格納デッキはセンターブロックを挟んでそれぞれ反対側となるので、当然途中から経路が変わる。

トレッカーが格納デッキのドアに到着したころ、ホルストたちはまだ上部ブロックを駆けていた。

アビンはというとアンとションが付いてきていたのでそれほど急ぐわけにもいかず、トレッカーが拘束されて出てくるのを迎える状況になるのではと思っていた。

格納デッキのドアを開けてトレッカーはすぐに周りを見渡した。それから中からドアをロックすると、まだ置き去りにしてあった密輸品箱をこじ開けて、中の品物を確認するやそれを倒す。するとぶちまけられた密輸品に混じってブラスターライフルが数丁現れた。それをすぐさま手にすると、状態を確認するやドアめがけて数発撃った。

この行為によりドアのロックが壊れて引っかけり稼働しなくなった。

トレッカーはドアに近づき開かなくなったのを確認すると、もう一つのドアに向かって行き、同じようにドアを動かなくした。

それから彼は用済みとなったブラスターライフルを床に投げ、あの戦闘機の入っているコンテナに向かって歩き出す。

そのとき格納デッキのドアの前に着いたホルストたちは、ドアが壊れていることを確認した。そこですぐさまドアを焼き切る手はずをするようにと部下に命令した。

このときアビンはションに呼び止められた。

「少し待ってくださいいアビンさん」。

「どうかしたのか」。

アビンが尋ねるとションは答えた。

「どうやら格納デッキの入り口のドアが全て壊されたようで、中には入れません。今、船長室でのモニタリングをしているルクレーンさんから連絡がありました」。

その言葉からホルストは部下の一人に、関係者の動向をモニタリングさせるためか船長室に配置していたようだった。

「わかった。だがどうしたらいい」。

アビンは立ち往生の状態を何とかしたくて、つい尋ねてしまう。

「そうですね。ホルストさんからも連絡がありました。来ても無駄とのことでした。状況を確認できるブリッジに行くのはどうでしょう」。

「入れるのか」。

ションの答えにアビンは聞き返す。

「たぶん大丈夫だと思います。デュパルク船長がブリッジにいますから状況を話せば了承してくださるはずですよ」。

ションの言葉は憶測の意味合いを含んでいたが、確信が込められていた。そこでアビンは、格納デッキに向かうのをやめブリッジに向かうことにした。

するとションは持ち歩いてきた携帯端末を操作してからアビンを促した。

「許可が取りました。急ぎましょう。アビンさん」。

その言葉にアビンたちは力付けられて向かった。

その頃、ホルストたちは厚いドアを焼き切る準備をしていた。

「あとどのくらい掛かりそうだ」。

ホルストがうんざりしたように言う。

「準備に後五分はかかりますよ」。

メシアンが額の汗をぬぐいながら答える。

「そうか。プロックフェル、そっちはどうだ」。

数人が固まってる方にホルストは声をかける。

「中のモニタリングまで少しお待ちください。今、回線にカップラーを取り付けましたから周波数を合わせれば見られます。あっ、映像、出ます」。

その答えにホルストは簡易モニターを覗き込む。

そこには少し暗がりの格納デッキ内部が映し出されていた。ただその映像は通路を映しているに過ぎなかった。

「方向を変えられるか」。

「たぶん大丈夫です。制御信号は分かっていますから動かせるはずですよ」。

ホルストの問いにプロックフェルは答えながらキーを操作してみせる。するとキーの操作に合わせてモニターに映し出される映像が動くのだった。けれど接続が悪かったのか思ったような動きはしなかった。右に操作するとその反対に動いたのだった。どうやら接続が反対だったようだったが、今は時間が惜しいのでそのまま続けることをホルストは告げて、トレッカーを探そうと言った。

メシアンの準備が完了するまでの間トレッカーの行方を探った。すると戦闘機が格納されているコンテナの横に立っている彼を確認した。

するとすぐにホルストは言う。

「プロックフェル、ズームできるか」。

「はいチーフ」、と答えて彼女は操作する。

するとトレッカーの上半身が画面いっぱいに表示された。

「奴は何をしている、と思う」。

「コンソールを開いて操作しているみたいです」。

そうプロックフェルが答えた直後に画面の中にある像の上方から照らす光が黄色みを帯びて点滅するように見えた。

「奴はセキュリティを解除してコンテナを開けたな」。

ホルストは怒鳴るように言う。

するとメシアンがそれに答えるように言った。

「チーフ。準備できました」。

その言葉にホルストは素っ気なく言う。

「もう遅そうだ。奴はコンテナを開けてしまった。ステイングレーに乗り込んでしまえば、後は遠隔操作で外部ハッチを開けられる。そうなればこのドアを開けると我々は吸い出されてしまうことになる。さてどうしたらいいと思う」。

問題を出すように言うホルストの言葉にプロックフェルが答える。

「ハッキングブロックを掛けてはいかがですか」。

ホルストは諦めがちに言う。

「そのこのコンソールで何とかやるかやってみてくれ、無駄かもしれないが」。すると彼女はキーボードを引き出し対処を始めた。

その様子を見ながらホルストは無駄だとしか思えなかった。それというのもステイングレーに搭載されているコンピューターは多次元処理型の高性能で、素人が扱ってもその辺の端末を使った腕利きのハッカーでも太刀打ちできる代物だからだ。

けれどこの場合は二人に任せて、次のことを処理しようと言った。

「では、あとのことはメシアンが指揮を執ってくれ、プロックフェルは申し訳ないがそのまま時間稼ぎをしてもらおう。おれはブリッジに行って下の基地に連絡して対処してもらおうように話してみる」。

そう言い終わると二人は了承して復唱した。そこでホルストは二人と作業班を残してブリッジに向かった。

その頃、トレッカーは戦闘機ステイングレーの前部操縦席に着いてキャノピーとその上にシールドを被せる操作をしていた。

それは十数秒のうちに完了し、気密完了のランプが点灯するのを確認してからエンジ

ンを稼働させた。初めは高い音でうなっていたエンジンが安定すると低く静かになった。それを確認すると彼は外部ハッチを開けるように指示をした。しかし、それは開かなかった。なぜか、と彼が思っているとコンソールディスプレイにアクセスが拒否されていることが表示されていた。

そこでトレッカーは対処方法として強制アクセスの許可を選択する。

ここからはプロックフェルとの戦いだったが、すでに処理能力で差が付けられている状況の中、先行してガードを作っていた彼女の方に初めは優勢だったが、次第に押され数分後には敗色濃厚だった。

それでもプロックフェルは時間稼ぎをするために賢明に努力するのだった。その頃には、アビンたちはブリッジに来ていた。

ブリッジに入って最初に挨拶をしたデュパルクは、当然のごとく険しい表情だった。

「すみません。お邪魔します」。

「ああ、状況は芳しくないようだな」。

デュパルクの冷たい対応に、アビンは気後れしながらも言葉を続けた。

「格納デッキの状況はどうなってます」。

するとデュパルクは手を蓄えた顎髭に添えながら答える。

「中で好き勝手にやってるようだ」。

けれどその言葉に動じること無くシオンは、改めて用件を伝える。

「申し訳ありません。現在の時点で公爵の暗殺未遂犯が、格納デッキにある戦闘機を持ち出して逃げようとしていますので協力をお願いします」。

すると先ほどまでの表情は消えこう言った。

「なにがして欲しいのかなお嬢さん」。

アビンはその手のひらを返したような対応に、むっときたがここはシオンに任せることに決めて彼女に身振りで合図した。

それを確認したのかシオンは続けて言った。

「格納デッキ近くの船外モニターは見られますか。それと格納デッキ内も」。

するとデュパルクはくるりと向きを変えると、副長のマティエリに言った。

「今、お嬢さんが言った絵を出してくれ」。

その言葉にマティエリは正面の上部のモニターに船外モニターを二つ、格納デッキ内のモニターを三つ出した。そのうちスティングレーの様子が見られるのは二つだった。

それからマティエリが緊張した面持ちで言う。

「もうすぐプロテクトが破られそうです。誰かが必死に妨害してますが、持ちそうもありません」。

デュパルクは「逃げられるか」、と人ごとのように言った。

けれどシオンは、不審そうに言う。

「あの戦闘機はアビンさんも知っているように自爆寸前だったのですが、誰かがそれを全て解除して飛べるようにしたようです。あのままですと現時点で格納デッキを含めた周囲の三ブロックは吹き飛んでるはずですよ」。

ということは誰かが自爆装置を完全に解除したのだらう。アビンはそう思ったが誰かは分からない。そこで思い当たる事は無いかとシオンに身振りで尋ねた。けれど彼女も思い当たる節が無く、首を横に振るのだった。

そうしているうちに外部ハッチのロックが解除になり、気密が破れた警告音とそれを示すランプと場所を示す文字が点滅した。

するとデュパルクは、苛立ちを隠そうとせずに言う。

「副長、警告音は切ってくれ」。

マティエリはその指示に従って音を切って言った。

「このまま見てるだけか」。

そのころホルストはブリッジに急いでいた。

彼がブリッジに続くエレベーターに到着したとき妙な感覚を覚えて立ち止まる。そしてルクレールに連絡した。

「なにかあったか」。

「チーフ、格納デッキの外部ハッチが開きました。それも減圧せずにです。おかげで船の姿勢と軌道が変わってしまいました。軌道に関しては現在修正中のようですが、姿勢はまだのようです」。

その答えを受け取りながらホルストは、エレベータードアの前に立っている人物を見

て驚いた。ミュラーである。
ホルストは連絡を切ってからミュラーに言った。
「どうして、あんたがここにいるんだ。客室に拘禁されていたのでは」。
すると彼は静かに答える。
「客室から出てきたのさ」。
「どうやって」。
ホルストの問いにミュラーは不敵な笑みをたたえながら言った。
「だいたい俺が一人でこの船に乗ると思っていたのか」。
「ああ、お前けちだからな」。
ホルストはやり返すように言う。
「信頼されていると言ってもらいたいな」。
ミュラーははぐらかすように言う。
「だれに、お偉いさんか」。
ホルストは煽るように言った。
「そうだな、俺を信用してくれた人物にだ」。
ミュラーの言葉にホルストはさらに言った。
「答えになってないな。どうせ今回の件を闇に葬ろうとする連中だろう。どちらが転んでも喜ぶ連中だ。だが証拠は残したくないってところか」。
その答えにミュラーは言う。
「いいところまで合ってるが、喜ぶ連中とは言いがたい。かえってこのトラブルを無かったことにしたい連中さ。内紛を公にしたいくない、連邦に弱みを見せたくないと言うのが正解だろう」。
ホルストはその答えには真実みがあると思えたが、その裏には醜悪な目論見があるように感じた。そこで話題を変えて尋ねた。
「では、お前がここにいる理由は何か」。
この問いにはミュラー以外に誰が乗り込んできたかは、重要では無かった事を暗示していた。すでにその人物が誰かは、ホルストには見当が付いていたからだ。
「そうだな、証人の隠滅ということだ。すでにその仕掛けはしてある。ただその通りに行くかはこちらも分からない。けれどトレッカーの性格からしても、ベストラン公の命令にしても、その行動を取るのが確実だからそこに仕掛けた」。
不敵な笑みをしながら答えるミュラーにホルストは苛立ちを覚える。
そこにプロックフェルからの連絡が入った。
「おれだ」。
そう答えるホルストの言葉が終わるか否かに彼女は言った。
「申し訳ありません。ステイングレーは船外に出てしまいました」。
「わかった」。
そう答えてからミュラーに尋ねる。
「自爆装置を全て解除したんだな。いや仕掛けていたのはそちらか」。
「察しがいいな。その通りだ。こうも予定道理に進むとは思わなかったがな」。
ミュラーは少し驚いた表情で言った。それを見逃さずホルストは尋ねる。
「その表情からすると当初の予定していたのとは多少違いそうだな」。
「鋭いな、確かにあの戦闘機をこの船に乗せるまでは、計画道理だったがあの子がいじったのは計画外だった。本来は離船してから五分後に自爆するようになっていたのだが、どうやら帰路の途中で行方不明というシナリオを作る羽目になったのさ」。
ミュラーは少しくんざりしたように言う。
「相変わらずいやな仕事をしてるな」。
「そうもなるさ、戦争が終わって戻れば特殊部隊の行き先なんてそんなものだろう。民間に入って生き生きしているお前が羨ましい」。
最後の言葉はどうやら本心のようなのだ、とホルストは思えた。
そして、ここでこれ以上話していても、何か変化があるわけでは無いのでこう提案した。
「俺はこれからブリッジに行くそこを通してくれないか」。
するとミュラーはあっさりこう言った。
「ならどうぞ、俺も行くところだった」。
その言葉にホルストはいやな感じを受けたが、「かまわんさ」と答えて一緒にブリッ

ジに向かった。

そのときすでに船から離れていたトレッカーは火器管制装置のスイッチを入れて現在使用できる火器を確認していた。それは自分を追ってきた者達がいたことから、自分に威勢のいいことを言った、アビンが失敗したと思っただけの行動だった。

そこにはレールガンの弾数と、腹に抱えた対艦ミサイル二発の表示がなされていた。彼は対艦ミサイルの表示を選択して射撃モードに移行させる。それから距離を取るためにゆっくりとノルマンディーから離れるのだった。

トレッカーはアビンに言われた言葉に、プライドを傷つけられ焦りがあったのだろう、逃げるのではなくここで船ごとランカスターを葬ろうと考えたのだった。その様子は当然のごとくノルマンディーの側にも分かった。

「様子が変ですね」。

モニターを眺めていたションが言う。

「どうゆうことなんだ」とアビンが尋ねると彼女は答えた。

「もしこのまま逃げるのでしたら、すでに加速してモニターに捕らえることができない距離まで行っているはずですよ。でもゆっくりしてます。何かする気でしょうか」。

その言葉にアビンは一抹の不安を感じて尋ねる。

「ション、あの戦闘機の外してない武装には何が残っていた」。

「レールガンと対艦ミサイルです」。

その答えにアビンは言った。

「まさか、この船を沈める気なのか」。

「そうかもしれない。自爆は解除されていますから」。

そう話しているところへホルストとミュラーがブリッジに入ってきた。そしてモニターを見るやいなやミュラーは叫んだ。

「逃げる気は無いのか」。

その言葉にホルストはミュラーに言う。

「これは一体どうゆうことなのだ」。

「俺にも分からん」。

その二人にデュパルクは静かに言う。

「こうなってはもうおしまいだ、停船している船でミサイルを避けるのは無理だ。覚悟をしとくんのだな」。

その威厳のある静かな言葉にアビンは賛辞を送りたい気分だった。

そのときトレッカーは爆発時の飛散を避けるに十分な距離にきていた。そしてゆっくりと回頭して機首をノルマンディーに向ける。すると照準ロックが働き目標が固定されたのを確認した。

それから彼はゆっくりと発射スイッチを押した。

その瞬間、まばゆい閃光がモニター画面をいっぱいにした。

閃光は瞬く間に消え破片は高速で四散する。

数秒後その破片はノルマンディーの船体に打ち付ける。

アビンは一体何が起きたのか直ぐには分からなかった。

だが助かったのは確かだった。何かの理由でステイングレーは自爆してしまったのだ。

彼の後ろの方でホルストがミュラーに言った。

「これが、お前の目論見か」。

「いやこれは予定外だ。武器は使用できないはずだったが」。

「じゃあ、誰が」。

そう言ってからホルストは少し考えてからションに言った。

「お前か」。

するとションは驚きながら言う。

「わたしでは、ありません。使えない設定にしてあるのは確認しましたが、取り外す操作以外は何もしていません」。

その答えを聞いてホルストは合点がいかなかった。当初の予定外の物が運び込まれ、それが画策したのがミュラーたちだとしても、今回のことは知らないようだし、もっと裏に何かあるとしか思えなかった。

アビンとしては命拾いしたこと感謝しながらも、しっかり抱きついているアンをこの時初めて重いと感じた。

事の終わり、

事の終わり

ステイングレーに乗ったトレッカーが、爆散で亡くなったことを拘束されているマクレガーに、告げる役を教授からアビンは押し付けられた。そのことを告げられた彼女は、それまで気丈に振る舞っていたが、その場に崩れ落ちるように泣き出したのだった。アビンには詳しい関係は分からなかったが、どうやら気の許せる友人として、また同士として彼を見ていたのかも知れないと思えたのだった。

ただアビンは短く事の次第を告げるだけで、その場を去りたかったが、崩れ落ち彼の手をつかんで離さないマクレガーに小一時間つきあう羽目になった。

けれどこの状況で彼女と二人っきりでは無く、アンとシヨンも同席していたのは良かったのか悪かったのかは分からない。事実、同席したのだからしょうが無いとしても、その後のアンの態度はアビンには少し辛いものがあった。何かにつけて少しとげのある返事をしているのもだから、アビンは機嫌を損ねてしまったのは理解できたが、如何したものかと迷っているとシヨンがあからさまにいやそうな表情をして言った。

「お分かりなら、アンを慰めるかご自身の愛情を表現なさっては如何ですか」。
その言葉はアビンには辛かった、愛情と言われても好意はあったが成り行きでフィアンセに仕立てられたのだが、この場合逃げることも対処策も知らないため如何したらいいのか分からなかった。

すると業を煮やしたのか改めて言った。
「この際ですね、陳腐な台詞でもかまいません。愛の言葉を囁いては如何ですか」。

その言葉にアビンは促されて何とかしようと意気込みアンの不機嫌な顔を自分に向けてため両肩を掴んで振り向かせた。すると突然に彼女はアビンに飛びつき口づけをしたのだった。

これにはアビンもシヨンも驚いたのだが、これ以降アンの機嫌は直ったのだった。ただアビンは何が何だか訳も分からず、どっと疲れを感じその後のことはあまり覚えていなかった。

この件でのマクレガーの処遇は数日後には決まった。当然だがジャーナリストとしてはやっていけなくなったが、ランカスターの計らいでベストラン公の秘書に収まることになった。同時にベストラン公の今回起こした事件に関しては、咎められることはなく帝国の公務に復帰することになった。どうやら影ではいろいろな動きがあったがそれは表には出てこなかった。ただ、軍務大臣とその取り巻きの何人かは汚職の罪で更迭されたことが、一時期ニュースにはなった。

それ以降、ランカスターとベストランの関係は良好になり、御陰でアビンの嫌いな貴族との茶会などが増えたのは頭が痛かった。彼はランカスター教授の助手であり付き人としての立場は変わらなかった。ただ、肩書きだけは助教授としてだった。

アビン自身はこの件についてランカスターからは何も聞かされず、というよりも興味があるなら自分で調べろというものだったようだ。

そして、彼自身は変に面倒な事には、首を突っ込みたくなかったので未だに調べてもいない。報告書は彼の机の上に野積みされているのだが。

結局のこと、戦闘機の爆散でアビンは下船が二日遅れることになった。
その間は、ランカスターの助手として書類整理と機材の調整に時間を忙殺されたのだった。そしてその合間はアンとシヨンの相手をさせられ気の休まらない時間を過ごすのだった。

ホルストたちは事後処理にかり出され、不満を述べながらも超過手当に慰みを見いだしてノルマンディーの出航に尽力したのだった。

ミュラーは今回の件がそれなりに落ち着いて、任務完了となった事をアビン達に告げると共に別れを言いに来た。それにしてもどこまで関わっていたのかは未だに分からないが、それでもアビンは彼が始め見せた態度や話題は芝居だろうと思えた。

「アビン君、世話になった。君はいい捜査官になれるよ」。
「それはどうも。それで、どれが本当の顔なんですかミュラーさん」。

するとミュラーは笑いながら答えず、シャトルへの通路に消えていった。

このあとアビンはホルストからミュラーの協力者の名前を聞かされた。それは彼の部

下のヘンツェと副長のマティエリだと言うことだ。ホルストはヘンツェの挙動が何時もと違うことに気が付き、女性陣からの情報に基づき詰問したところ何故かあっさり白状したのだそうだ。どうやら彼は今回の件に無理矢理引き込まれたようなのだ。何でも以前の失態の帳消しを条件に話を持ちかけられたらしい。このことでホルストはもう少し部下の事情に通じなくては、と嘆いていた。

それからマティエリは以前から諜報活動で潜り混んでいた、のはいいのんだけど今は客船の航宇士としての仕事が板に付きすぎて、諜報活動が副職になってしまっていてたいしては期待できないが抜擢されたいらしいのだ。

それを聞いてアビンはミュラーも今回は苦労したんだろうと思った。

それにしても分からないのは自爆の絡線りだった。その件に関してホルストに尋ねても分からないとの回答だった。それでもその御陰でこうして無事にいられるのだから感謝した。しかし、純粹にはトレッカーが気の毒だった。結局首謀者に仕立て上げられ、後は闇に葬られてしまったのだった。

この件に関してベストラン公はどう思っているのかは分からないが、彼の親族の保護を公が行っているらしい。

アンに関しては、提督公認の関係にされてしまい、船に残っている間いつも側にベツタリ付いてきていたのだった。御陰で書類整理を手伝って貰い、流石は私設秘書という腕前を見せられ感嘆すること度々だった。

シオンは時々そんな二人の前にスターンを連れて現れては、書類を散乱させては去っていった。どうやらアビン達の関係が面白くないらしい様子だ、とアンが小さな声で彼に耳打ちしてくれた。

ようやく船を下船できる日に、アビンは最後にシャトルへ続く通路でシオンに会った。その時は彼女は少し年齢より大人びて見えた。それはたぶん彼女が白いドレスに身を包んでいたせいもあったかも知れない。

このとき彼女には二人の女性が付き添っていた。どうやら提督家の召使いのようだった。それを見たアビンは良家のお嬢さんは違うのかなと思っていると、シオンが彼に話しかけてきた。

「アビンさんは、この後は発掘に行かれるのですか」。

「ああ、そういうことになってる。予定をかなり超過してるから発掘が送れるのは確実なのだが、教授が絶対行くと言うのでね」。

「そうですか。気をつけて行って来てください。あっ、そうそうたぶん帰ったらアパートを出なければいけなくなりますね。次が決まったらわたしに相談してください。いい所ご紹介しますから」。

アビンはその申し出に、少しどういう事か分からなかったが、直ぐに思い出した。教授の話では助教授に推薦される、つまり学生援助の打ち切りとなるのだ。そうなると今のアパートにはいられない出なければならぬ。

その事を思い出して彼は落胆した。発掘調査を終えて戻ったら次は家探しかと。

それは夏休みが終わるまでに、探さないといけないという事になる。そこで、アビンは心許なく答えた。

「見つからなかったら、よろしく願います」。

「ええ、いいですよ」。

シオンは満面の笑みで答える。そして二人の召使いを従えて通路に消えていった。それを見送るアビンの後ろからアンが言った。

「あのドレスはこの船内では白く見えるけどね。あれってアリスブルーという色なんですよ」。

「えっ、そうなんだ」。

「アビンさんは白にしか見えなかったんですか」。

「ああ」。

その返事は情けなかった。

その言葉を聞いてからアンは、彼の前に進み出て挨拶した。

「では、アビンさん。わたしもこれで失礼します。シオンと一緒に帰るので、またお会いしましょう。次は学校かなそれとも提督の家でかな」。

そういうとあっけに取られたアビンの目の前を過ぎていった。

この後、アビンもランカスター教授と一緒に次のシャトルに乗って船を後にした。

ようやく厄介者が去って行ったかと、デュパルク船長は胸をなで下ろした。

そこへ修理報告を持ってホルストがブルッフを伴って現れた。

「まだ、厄介者が残っていたか」。

そう呟くデュパルクにホルストは言った。

「そういいなさんな親父さん、何時もの太っ腹の処を見せてくださいよ」。

「何を言う。今回は散々だ。船はボロボロになるし、帰港すれば査問委員会に出頭せにゃならん」。

そう呟くデュパルクに彼はブルッフに指示して、ボードを見せた。するとデュパルクは呟くように言う。

「これは本当なのか。不問というのは」。

するとホルストは確約するように言った。

「ええ、確かです。どうやら提督が証言してくださったのと、今回の件で帝国としても事を大きくしたくないようで、好条件で話を持ちかけてきたんです」。

「と云うことは」。

「そうです。修理費は全て帝国の側から支払われますし、ミュラの事件で亡くなられた方や、怪我をされた方の保証も持つようです。船会社としては願ってもない好条件です。但し書きはありますが」。

ホルストは最後の言葉を少し濁した。その言葉を聞いてデュパルクは書類の最後の条件を見て驚いた。そして言った。

「黙っていればいいのだな」。

「その様です」。

ホルストは残念そうに言う。

「君としては話したいのかな。それとも全部知ってるのかな」。

デュパルクは興味深げに尋ねる。

「それは、推測にまかせます。今この時点までは共和国軍の提督着きの次官と言う肩書きですから」。

ホルストは少し苛立ちながら答える。彼自身は心の中でファーナビー提督の小間使いにされて苛立っていた。それは提督と同類扱いされるのを嫌ってのことだった。

だがその言葉を聞いてデュパルクは姿勢を正して敬礼していった。

「ご厚意、痛み入ります」。

それに応えてホルストとブルッフも敬礼して、別れの言葉を述べその場を去った。

少ししてホルストの後を歩くブルッフが彼に尋ねた。

「結局、わたし達は何のためにこの船に乗ったのでしょうか。あのハイパードライブシステムの話しも嘘だったようですし、これからプロジェクトナインに戻るのでしょうか」。

するとホルストは暑苦しそうにエリの帯を解きながら答える。

「そうだな、誰の差し金か知らないが、随分な手間を取らせてくれたものだ。案外あの自爆を仕組んだのもそいつらなんだろうな。まあいいさ、御陰で臨時収入と特別休暇を貰ったのだから文句は言えないだろう」。

そう言うとホルストは自分の後ろで、ブルッフがこれからの計画で頭がいっぱいになって妄想し始めているのを背中で感じた。そして、彼自身もホッとしたのだろう口元が緩んでいた。

この事件の報道はそれ程大きくなく、アビンが発掘調査の現場でも聞く言葉は労いの話くらいにしか出てこなかった。どうやら徹底的な情報統制がしかれたようだった。嘘はださない。知りたい真実はある程度出す。それも此方に都合のいい情報だけ、そして十二分な保証をすることで事件の関係者の口を上手く塞ぐ。アビンは大したものだと感心させられた。

そして発掘も終え。懐かしい自分のアパートに戻ると管理人の平井から手紙を貰った。どうやら留守の時に届いたものらしい。何か重要な知らせなのだろうか、と相手の名前を見た時いやな感じがした。ブラックだった。

アビンは平井に感謝を述べてから自室のドアを開け、代わり栄えのしない部屋の床に荷物を置き封を切った。

中にあったのは一枚のカードだった。こう記されたいた。

「親愛なるアビン君。この手紙を読んでいる頃は既に全てが終わっていることだろう。姫君のナイトとして申し分の無い活躍をしたことだろうと思い。此処に讃辞を送る。トレッカー君の犠牲は仕方が無かった。これは依頼人の要望だったので致し方が無い。君には合点がいかんかったと思うが、あれには仕掛けがしてあってね取り外しはいいのだが、撃ってはダメなんだ。そう言う仕掛けを頼まれたのだ。彼には一時的な悪役で終わって貰うことになっていたのだ。さて余談だが今度、一度食事の招待をしたい。日

時は追って連絡する。良きパートナーとしてブラック」。

アビンは薄ら寒い間隔を覚え、それを振り捨てるように部屋を飛び出すように出て、食事に出かけてしまった。

だが結局出かけていったのは、時々利用するムーキャロットというレストランだった。

そこでアビンは何故かシヨンに会いこう尋ねられた。

「もう時間ありませんが、新しい部屋は見つかりましたか」。

アビンは申し訳なさそうに答える。

「さっき帰ってきたんだ。発掘から」。

するとシヨンは満面の笑みで言う。

「では、わたしが紹介する処にきなさい」。

それはアビンには非常な高圧的に言われているような印象を受けた。

即日、アビンの新しい部屋が決まった。下宿だった。大家はシヨンだった。

そして驚くことに、ランカスター公爵邸の近くで、彼の新たな部屋の窓からよく見えるのだった。この時彼は思った。いったい誰の差し金なのかと。

・
・
・

アリスブルーⅡ

終わり。

オクトーバーレイン アリスブルー II

<http://p.booklog.jp/book/70087>

著者：にしのまさみ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/aqualeef/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/70087>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/70087>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ